

# 城 二 号 墳

—宇土市上網田町字城所在城二号墳調査報告—

宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集

1981

城二号墳発掘調査団  
熊本県宇土市教育委員会



# 城 二 号 墳

—宇土市上網田町字城所在城<sup>U14</sup>二号墳調查報告—

宇土市埋藏文化財調查報告書第3集

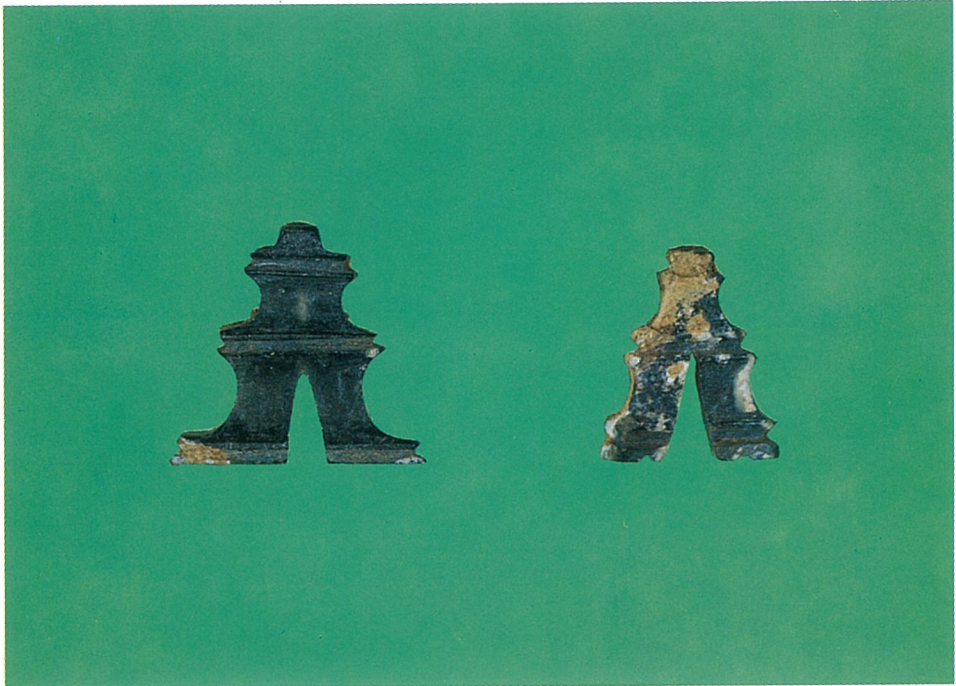
1981

城二号墳発掘調査団  
熊本県宇土市教育委員会









琴柱形石製品(左No.1, 右No.2): 実物大

# 序 文

近年、埋蔵文化財の発掘が全国的にも増加の一途を辿っていますが、これらは土木工事等に伴い事前に行なわれるものがその大半を占めています。その中において城2号墳は、発掘調査本来のあり方であります学術調査による点、その意義は大きいものがあると思います。

調査の結果、城2号墳は熊本県の古墳文化を考える上におきまして重要な位置を占める古墳であることが明らかになりました。

今後、本報告書が文化財の保護・活用ならびに学術研究のため、一助ともなれば望外の喜びとするものであります。

最後に、調査に当たられた団長の三島格先生をはじめ、各調査員の御努力ならびに地元・関係各位の御協力に対し衷心より感謝の意を表します。

昭和56年3月

宇土市教育委員会

教育長 船 田 至

# 序

宇土市は宇土半島基部に位置する文化都市であり、その名にふさわしく先史・古代遺跡の多い地域で、研究者にとりまして垂涎の地でもあります。戦後の開発は、この地にも押し寄せ、その結果は県・市による緊急調査となりました。その後、考古学的な成果は公刊され、郷土の人文を知る貴重な財産となっています。

しかしながら、幸か不幸かその存在は知られていても破壊の対象とならない遺跡の中には、重要な価値をもつものがあることも事実です。わたしたちが、宇土市上網田町所在の城2号墳を研究の対象としましたのも、後者の理由によるものです。調査は宇土市当局関係各位・地主堀保氏および村崎ミスエ氏その他地元の方々の手厚い配慮と御厚意の下に遂行され、多大の成果を収めることができました。さらに今回、本報告書の出版にあたって、その費用の援助をうけましたことは、慶びに耐えません。調査関係者諸氏を代表して、深甚なる謝意を表します。

昭和 56 年 3 月

城二号墳発掘調査団

団 長 三 島 格



## 例 言

1. 本書は、熊本県宇土市上網田町字城25番に所在する城二号墳（旧称・塩屋二号墳）の、文化財保護法第57条の1による学術調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は城二号墳発掘調査団が行い、執筆者名は目次・文末に明記した。
3. 本文所収の実測図で用いたレベルは海拔標高である。
4. 調査に関連する項目は、付論のかたちで各執筆者から玉稿をいただいた。
5. 出土人骨の鑑定は永井昌文九州大学教授に依頼したが、時間の都合等で本書に収録できなかった。機会を改めて「宇土市史研究 第3号」に発表の予定である。
6. 図版で用いた空中写真は宇土市役所、巻頭カラー写真は熊本日日新聞社写真部坂本徹氏による。
7. 出土遺物については、宇土市教育委員会が保管し、宇土市立図書館内の郷土資料室に展示している。
8. 下田印刷の協力のおかげで、本書作成の作業を円滑にすすめることができた。

# 目 次

第1章 調査の目的と経過	
1 なぜ調査したか	三島 1
2 問題の所在	高木 1
3 調査の組織	高木 2
4 調査の経過	高木 3
第2章 古墳の立地と環境	木下 5
第3章 調 査	
1 墳 丘	松本 15
2 石 室	野田 18
①玄室 ②横口部 ③閉塞施設 ④横口前面側壁 ⑤墓道	
3 遺 物	平山・高木 23
①副葬品（石製品・鉄製品） ②その他	
4 人 骨	高木 28
第4章 考 察	
1 石室の構築法	野田 29
2 城二号墳石室の系譜	野田 30
3 琴柱形石製品について	平山 38
4 圭頭斧箭式鉄鏃について	高木 44
5 貝・石灰藻使用の屍床地名表	三島・木下 72
第5章 総 括	三島 76

## 付 論

1 城1号墳の発掘概要	富樫卯三郎 83
2 石灰藻ヒライポについて	菊池 泰二 89
3 文献から見た網田平野	板橋 和子 93
4 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室	亀田 修一 113
5 竪穴系横口式石室地名表	池田 栄史 139

# 挿 図 目 次

第1図	位置図	11
第2図	地形図	12
第3図	宇土半島古墳時代遺跡分布図(木下作成)	13・14
第4図	墳丘測量図(宇土高校社会部実測、松本製図)	16
第5図	墳丘南側トレンチ実測図(松本・高木実測、松本製図)	17
第6図	石室実測図(松本・野田・平山・木下・勢田実測、野田製図)	19・20
第7図	石障石材(輝石安山岩)実測図(三島・島津・高木実測、野田製図)	21
第8図	石室内遺物出土状態・屍床配置想定図(野田作成)	21
第9図	石製品実測図(木下実測、平山製図)	24
第10図	鉄製品実測図(高木実測、製図)	26
第11図	石室構築想定図(野田作成)	29
第12図	琴柱形石製品(恵解山型)分布図(平山作成)	40
第13図	形式別圭頭斧箭式鉄鏃(高木作成)	46
第14図	A <sub>1</sub> ・B <sub>1</sub> ・C <sub>1</sub> ・D <sub>1</sub> ・E <sub>1</sub> 形式鉄鏃の各県別密度(高木作成)	48
第15図	A <sub>2</sub> ・B <sub>2</sub> ・C <sub>2</sub> ・D <sub>2</sub> ・E <sub>2</sub> 形式鉄鏃の各県別密度(高木作成)	49
第16図	鉄鏃の長さ別、出土本数(高木作成)	50
付論 1		
	城1号墳石室平面図	86
付論 4		
第1図	竪穴系横口式石室古墳分布図(亀田作成)	114
第2図	安東造塔洞古墳東櫛(1)、西櫛(2)、中佳邱洞古墳(3)石室実測図	115
第3図	義城塔里古墳第1墓櫛(1)、漆谷若木古墳(2)、同仁同面黄桑洞1号墳(3)石室実測図	117
第4図	星州星山洞1号墳(1)、同6号墳(2)石室実測図	118
第5図	大邱達西37号墳第1石室(1)、第2石室(2)、同55号墳石室(3)実測図	119
第6図	昌寧校洞31号墳(1)、同桂城C地区15号墳(2)石室実測図	121
第7図	昌寧桂城A地区1号墳石室実測図	122
第8図	梁山夫婦塚(1)、慶州151号墳(2)石室実測図	124
第9図	大徳注山里1号墳(1)、10号墳(2)、12号墳(3)石室実測図	125
第10図	論山表井里A区1号墳(1)、3号墳(2)石室実測図	126



## 表 目 次

第1表	宇土半島古墳時代遺跡一覧表（木下作成）	7
第2表	琴柱形石製品計測表（平山作成）	24
第3表	管玉計測表（平山作成）	25
第4表	小玉計測表（平山作成）	25
第5表	琴柱形石製品（恵解山型）出土地名表（平山作成）	41
第6表	圭頭斧箭式鉄鏃各県形式別出土一覧表（高木作成）	47
第7表	圭頭斧箭式鉄鏃地名表（高木作成）	53
第8表	貝・石灰藻使用の屍床地名表（三島・木下作成）	74
<b>付論 3</b>		
額田部分布表		96
<b>付論 4</b>		
朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室古墳集成表（亀田作成）		135
<b>付論 5</b>		
竪穴系横口式石室地名表（池田作成）		142

## 図 版 目 次

### 本 文

PL. 1	古墳周囲の空中写真（網田平野）
PL. 2	古墳遠景 上 南東より、下 南西より
PL. 3	上 古墳近景（南西より）、下 墳丘東側崖面露出の石室裏込め石
PL. 4	左 南側トレンチ検出の石室裏込め石、右 南側トレンチ検出の中世墓墳
PL. 5	上 天井石露出状況、下 石室床面状況（奥壁側）
PL. 6	石室 右 奥壁、左 石室内より横口部を見る
PL. 7	石室 右 奥壁南隅部、左 奥壁北隅部
PL. 8	石室 右 玄室より横口部を見る（北隅部）、左 玄室より横口部を見る（南隅部）
PL. 9	上 横口閉塞状況、下 閉塞石除去後
PL. 10	横口前面側壁 上 右壁、下 左壁
PL. 11	上 墓道土層断面、下 横口前面（上から）
PL. 12	遺 物 1・2 琴柱形石製品、3-12 滑石製管玉、13-22 滑石製小玉、23・24 鉄剣、 25-28 鉄鏃、29・30 刀子、31 鉄斧、32 鉄鎌

### 付論 1

PL. 1	上 城1号墳玄室内直前、下 同石障左右のコーナー
PL. 2	上 玄室内奥壁辺 下 玄室内羨門直前辺

### 付論 2

PL 1	ヒライボ生体	2	剝落ヒライボ	3	破砕ヒライボ	4	城2号墳石灰藻（ヒライボ）
------	--------	---	--------	---	--------	---	---------------

## 第1章 調査の目的と経過

### 1. なぜ調査したか

本古墳が富樫卯三郎・坂本経堯・松本雅明・乙益重隆氏らの研究者の目にふれたのは、おおむね昭和30年代のことであり、それぞれ所見を持っておられる。われわれが、城2号墳の調査にとりかかった経緯については、下文の経過にのべるごとくであるが、一つの反省をもって実行したことを記しておく必要がある。

方今の行政機関による発掘調査は、その多くは破壊を前提とする遺跡の記録保存であり、かつその結果は学術的有効性を併有している。けれども、破壊を受けない遺跡は、その重要性を認められつつも、閑却されているのが現況である。ただしこれについては、むしろ研究者側の姿勢として、問題視される要素を含んでいる。われわれは過去において、八代郡大野窟古墳・宇土郡桂原古墳・同郡塚原古墳第1号墳など、後者に属する遺跡を調査した経験をもっている。今回の城2号墳はその延長上にあると考える。

予算・人員・期間を考慮して、調査の重点を石室構造・内室部におき、発掘も開口部と墳頂部に限定した。後次の調査を切望する。

(三島 格)

### 2. 問題の所在

城2号墳は、従来、塩屋<sup>(註1)</sup>2号墳あるいは塩屋1号墳と呼称されていた。しかし行政区画上は熊本県宇土市上綱田町城25番にあたり、旧称の原因となった“塩屋”なる地名は、隣接する下綱田町字塩屋の地番にこの古墳が包括されるものと錯誤されてきたことによる。そのため昭和50年以降は、この名称を用いることで統一されることになり、昭和42年5月20日付けで指定されていた市史跡の名称も変更されている。

城2号墳は上述したように塩屋1・2号墳の名でかなり以前から知られ、石室内部を、開口した天井部から覗みることは容易で、やや窮屈ではあるが、そこから大人も中に入ることが可能であった。にもかかわらず、この古墳の石室構造などについては、特に取りあげて注目されることはなかったようである。

昭和41年の福岡市老司古墳の発掘以来、北部九州を中心として俄に豎穴系横口式石室・初期横穴式石室についての関心が高まり、点々とではあるが九州各県で類例が知られ、系譜が論じられるようになった。

そして、それは熊本県下の古墳についても再認識をせまられることになる。

ながく、南海島嶼の考古学研究にかかわってきた調査者の一人、三島は、その地方で時折みかける“サンゴを伴った埋葬遺構”を集成する機会を得、それが、一部ではあるが九州本土の熊本県下にまで及ぶことを明らかにした。<sup>(註3)</sup>折しもその直後、宇土半島にサンゴを伴う古墳が存在し、それが、最近北部九州で注目されはじめている竪穴系横口式石室をもつものであるという情報を得た。

それが城2号墳であり、石室は床面から天井まで安山岩の割石を小口積みにした丁寧なつくりで、保存状態も良好であった。

その後、情報で得たものがサンゴではなく、“石灰藻”という物体であることは、菊池泰二・古川博恭氏の書簡によって明らかとなり、その分布など興味ある知見が得られた(付論2参照)。

以上、二つの要素(竪穴系横口式石室・石灰藻)の究明に加え、この古墳が網田地域ひいては宇土半島全体の古墳文化での位置づけが必要とされた。そこで、これに共鳴するものが集い、以下のような調査団構成で、学術調査を実施することとなった。

#### 註

- (1) 富樫卯三郎「網田古墳群」宇土市の文化財第3集 1977 宇土。(追記。本文献中の塩屋2号は城2号一編者)
- (2) 富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」宇土半島 自然と文化 1975 宇土。
- (3) 三島 格「サンゴと貝」南島考古第5号 1977 沖縄。

### 3. 調査の組織

調査主体(城2号墳発掘調査団)

三島 格(調査責任者)・松本健郎・島津義昭・野田拓治・平山修一・高木恭二・木下洋介  
顧問

富樫卯三郎・古川博恭・菊池泰二・永井昌文

調査参加・協力者

柳沢一男・勢田廣行・廣瀬正照・鶴島俊彦・古森政次・高野信子・亀田修一・松村道博・豊崎晃一・浜口俊夫・森山栄一・清田純一・浦田信智・古荘浩明・小林行雄・岡崎 敬・乙益重隆・白木原和美・松本幡郎・亀井正道・山崎純男・板楠和子・池田栄史・大田幸博・高木正文・江本 直・一 宗雄・伊津野拓也・坂本 徹・枝森久一・西原昭明・中村 愿・安達武敏・根本ナツメ・熊本大学文学部考古学研究室学生・熊本商科大学文化財研究会学生・宇土高校社会部



地元協力者

堀 保（地主）・村崎 学・村崎ミスエ・山本健一（順不同・敬称略）

なお、調査の実施にあたっては、地権者の堀保氏をはじめとして、村崎ミスエ氏・熊本県教育委員会文化課・宇土市教育委員会の高配を得た。なお、地形測量図は宇土高校社会部（顧問卯野木盈二教諭）・同OBが、宇土市教育委員会の依頼によって作成。巻頭カラー図版は、熊本日日新聞社写真部坂本徹氏の撮影。石材の鑑定は熊本大学理学部松本幡郎教授による。記して深甚の謝意を表するものである。

#### 4. 調査の経過

既に述べたように、調査は学術的目的をもって行なったもので、行政発掘とは根本的に異なる。そのため、調査は個人の資格で参加し、各人が調査に従事可能な休日・連休を利用して、有効に作業をすすめることができた。5次にわたった実質調査日数は12日間。昭和53年12月28日から、翌昭和54年12月16日までの1年間にわたっている。

##### 1次調査 12月28日（昭和53年）

機材搬入。土地所有者堀氏を訪ね、調査開始の挨拶と協力依頼を行う。現況写真撮影を行なったのち、石室蓋石の全面露出。石室内部に落ちこんだ土砂の除去に取りかかり、鉄剣片・刀子片・土師器片・人骨片などが出土。

12月29日

前日にひきつづき、石室内部混入土の除去と床面検出。鉄斧1・鉄剣片・人骨片・獣骨片（以上、第2屍床）、土師器片出土。

12月30日

石室内部の清掃を行い写真撮影。壁面実測のための割付け。床面検出により、第1屍床から滑石製琴柱形石製品出土（県内初出土）。周辺地域から城2号墳の俯瞰写真を撮る。

##### 2次調査 1月13日（昭和54年）

石室蓋石実測・横口部実測・奥壁実測。

1月14日

琴柱形石製品が再び出土し、石室内部の土を全て水洗することとする。水洗によって滑石製管玉を検出。石室実測を継続し、側壁実測にも着手。

1月15日

石室実測を続行し、床面清掃と写真撮影。

##### 3次調査 9月22日（昭和54年）

除草。横口部分の発掘開始。

9月23日

床面の第1屍床より滑石製管玉検出。第1屍床より鉄鏃茎片出土。横口前面に石積み墓道を確認。石室南側に、裏ごめ石と石室掘りこみの探索のためのトレンチを設定。そのトレンチより中世土壌墓2基を検出し、そのひとつには内部に右側臥屈葬人骨の遺存あり。

9月24日

墓道部分の発掘。南側トレンチ実測と、人骨とりあげを行う。他の1基の土壌墓は、時間の都合で埋めもどす。

4次調査 11月4日(昭和54年)<sup>(註2)</sup>

墓道部分の実測。石室内部土の水洗によって滑石製管玉7、滑石製小玉10を検出。

5次調査 12月15日(昭和54年)

墓道部分の実測。石室内部土の水洗。

12月16日

墓道部分の実測。埋めもどし。

5次に及ぶ調査期間中や調査後も数度にわたって打ちあわせ・検討会を開き、報告書作成準備にとりかかる。昭和55年11月16日、城2号墳に類似の石室構造をもつ鹿本郡鹿本町朱塚古墳見学会を実施。なお、経過報告として註1・2のごとく、報告を行なった。

(高木)

註

- (1) 三島 格「城2号古墳(旧称塩屋2号)」『日本考古学年報』31 1978年度版 日本考古学協会 東京。
- (2) 平山・高木「熊本県宇土市上綱田・城二号墳の調査」九州史学会大会研究発表要旨 昭和54年度 福岡。

## 第2章 古墳の立地と環境

城2号墳は、熊本県宇土市上網田町字城25番に所在している。この地点を国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「網津」に求めれば、北西隅より40.7cm南西隅より21.5cmの交点にあたる。

本古墳の位置する宇土半島は、熊本県の中部から西南西の方向へ突き出た東西約20km、最大幅約9kmを測る半島である。これを行政区でいえば、宇土市、宇土郡三角町・不知火町に該当する。半島は、大岳（標高478m）を主峰とする山塊とその谷間の小規模な平野で成っている。南側は不知火海に面していて、比較的ゆるやかな傾斜の舌状丘陵が数多く派生し、それら間に形成された狭小な平野とによって、入江の多い複雑な海岸線をなしている。北側は急な傾斜で有明海に面しており、平野部も少なく、海岸線も単調である。

ところで、古墳時代の宇土半島は、その基部地域に12基におよぶ前方後円墳が存在している。4世紀代に遡るとされる弁天山古墳<sup>(註1)</sup>・迫ノ上古墳<sup>(註2)</sup>、4世紀末から5世紀前半に比定される向野田古墳<sup>(註3)</sup>、さらに6世紀中頃の国越古墳など<sup>(註4)</sup>、古墳時代のほぼ全時期を通じて築かれている。しかし、半島域においては、前方後円墳は現在のところ発見されておらず、時期的にもほとんどが中期以降の所産である。この現象は、宇土半島における古墳時代の地理的・歴史的な背景の特異性を示唆するものであると考えられよう。

網田平野は、大岳山塊に源を発し有明海に注ぐ網田川の沖積作用によって形成された東西約1.3km、南北約1.2kmほどの範囲を占める半島最大クラスの平野である。また、この平野の南縁から、標高100mの間には、なだらかで広大な斜面が等高線に並行して広がっていて、現在の集落は、この斜面に営まれている。ところで、この地域は、網田川の河口域のみが海に面している程度で、そのほとんどを山陵で囲まれ盆地状をなしており、これがこの地域に多量の降水量<sup>(註5)</sup>をもたらす一因とされている。

本墳は、網田平野の北縁、南西方向に延びる帯状の丘陵に立地する。丘陵は標高約20m、幅約120mを測る。本墳をはじめ、肥後タイプの石室を有する城1号墳<sup>(註6)</sup>、マブシ古墳群が存在し、石室・石棺材なども散在しており、この地域の墓域を形成していたものと考えられる。しかし、中世における田平城築城の際、多少の改変を受けており、現在は、中世城の様相を示す。さらに道路（明治20年開通、現在の国道57号線）及び鉄道（明治32年開通、現在の国鉄三角線）で開削されたり、近年の蜜柑園造成により旧形を著しく変えている。丘陵北側に広がる平野は浦新地<sup>(註9)</sup>（文化年間）、網田新地<sup>(註10)</sup>（安政年間）それぞれの干拓によるものであり、また、南側鉄道敷付近は現在でも低湿地である。これらから、当時丘陵の北側は直接有明海に面し、南側も現



在よりかなり深部まで潮入りであったと推定でき、古くからこの地域の主な交通の手段である海上交通の起点は、地理的、地形的にも適した地点に位置していたと考えられる。

網田地区においては、城1・2号墳、マブシ古墳群のほか、ほとんど遺跡等の確認がなされていないが、昭和55年に宇土市教育委員会が行なった水田の調査では、旧石器時代から近世に至る各時期の遺物が認められており、<sup>(註11)</sup> 今後は、それらの遺構等の発見が十分考えられ、城2号墳をめぐる歴史的背景も明らかにされるであろう。

(木下)

#### 註

- (1) 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室墳」『熊本史学第30号』1965 熊本。
- (2) 富樫卯三郎「迫ノ上古墳」『宇土市の文化財第3集』1977 宇土。
- (3) 富樫卯三郎『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 1978 宇土。
- (4) 乙益重隆「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』熊本県教育委員会 1967 熊本。
- (5) 松橋高校地学部「宇土半島の雨量分布について」『宇土半島自然と文化』1975 宇土。
- (6) 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財第3集』1977 宇土。
- (7) 富樫・卯野木「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島自然と文化』1975 宇土。
- (8) 熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 1978 熊本。
- (9) 中島亀喜『網田村郷土誌』1958 宇土。
- (10) 註9に同じ
- (11) 宇土市教育委員会『田平遺跡』宇土市埋蔵文化財調査報告書第5集 1981 宇土。

第1表 宇土半島古墳時代遺跡一覧表 (木下, 1981年)

No	遺 跡 名	概 要	文 献	No	遺 跡 名	概 要	文 献
1	城2号墳	竪穴系横口式石室	本書	31	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	⑱
2	城1号墳	横穴式石室	①	32	柏原古墳	円 墳	⑱
3	マブシ古墳群	箱式石棺	②	33	御領東原古墳群	横穴式石室3基	⑱
4	ヤンボン塚	円 墳	③	34	宇賀岳古墳	横穴式石室(装飾)	⑲
5	小松古墳		④	35	向野田古墳	前方後円墳・竪穴式石室(埴輪)	⑳
6	長浜箱式石棺群			36	向野田石蓋土壙	石蓋土壙	⑳
7	小池平古墳	横穴式石室		37	御手水2号墳	円 墳	
8	小部田横穴群	12基	⑤	38	御手水古墳	前方後円墳	
9	御殿山古墳	横穴式石室		39	南山内箱式石棺群	3 基	㉑
10	梅崎古墳	横穴式石室(装飾)	⑥	40	南山内古墳	円 墳	
11	梅崎箱式石棺群			41	チャン山(茶臼山)古墳	円墳(?)	㉒
12	城塚古墳	横穴式石室(装飾)		42	桶底古墳	横穴式石室	
13	尾ノ上横穴群	14基	⑦	43	畑中遺跡	包蔵地	
14	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	⑧	44	境目遺跡	包蔵地	㉓
15	天神山古墳	前方後円墳	⑨	45	上松山石棺	箱式石棺	
16	経塚古墳	横穴式石室		46	神ノ山古墳群	円墳3基・家形石棺	㉔
17	東畑古墳	横穴式石室(装飾)	⑩	47	古保里石棺群	箱式石棺5基	㉕
18	金獄山古墳	横穴式石室		48	二枝古墳	円 墳	
19	椿原石蓋土壙	石蓋土壙	⑪	49	西潤野古墳	石蓋土壙(家形)	㉖
20	仮又古墳	横穴式石室(装飾)	⑫	50	潤野古墳	円 墳・家形石棺	㉗
21	西岡台遺跡	V字溝・箱式石棺	⑬	51	晚免古墳	円 墳・家形石棺	㉗
22	宇土城遺跡	包蔵地		52	檜崎古墳	前方後円墳・家形石棺	㉘
23	猫城古墳	円 墳		53	女夫塚古墳(男塚)	前方後円墳	㉙
24	城ノ越古墳	前方後円墳	⑭	54	女夫塚古墳(女塚)	円 墳	㉚
25	神合古墳	円 墳(埴輪)		55	三日鬼の窟古墳	横穴式石室	
26	スリバチ山古墳	前方後円墳(埴輪)	⑮	56	池尾古墳		㉛
27	迫ノ上古墳	前方後円墳・竪穴式石室(埴輪)	⑯	57	畑中古墳		
28	久保古墳	円 墳		58	琵琶田窯跡	須恵器窯跡	㉜
29	大平横穴群	2 基	⑰	59	当尾小学校東窯跡	須恵器窯跡	㉝
30	仁王塚古墳	前方後円墳	⑱	60	ガローバル古墳	円 墳	

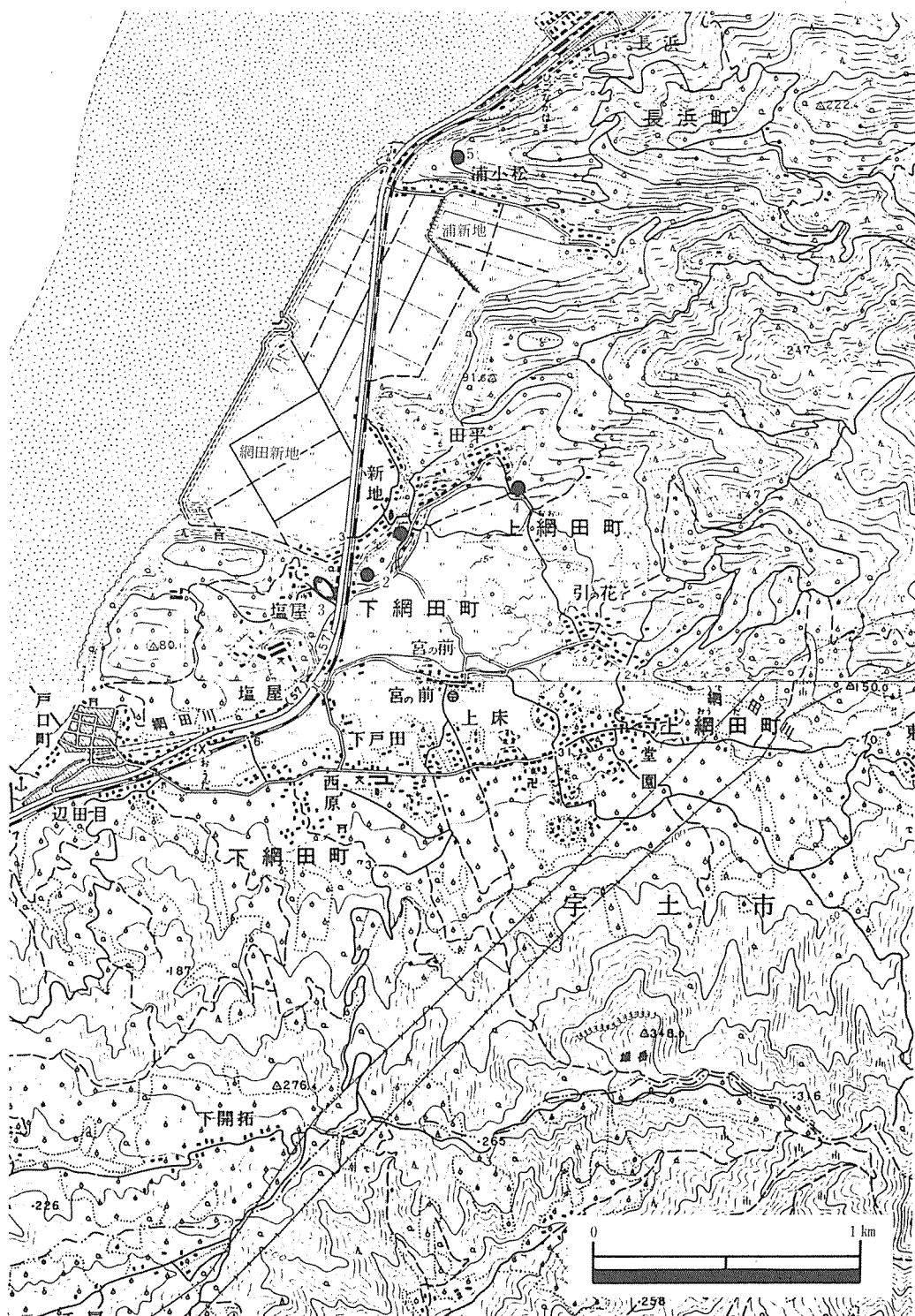
No	遺跡名	概要	文献	No	遺跡名	概要	文献
61	上ノ原遺跡	包蔵地		91	城山横穴群	2基	
62	松橋大塚古墳	前方後円墳(埴輪)	②⑨	92	矢崎の地下式土壙		④②
63	前田遺跡	朝顔形埴輪	③③	93	打越中原遺跡		
64	狐塚古墳		③①	94	上本庄古墳1・2号墳		
65	十五社石棺群	箱式石棺3基		95	本庄地下式土壙群		
66	大迫2号墳	横穴式石室	①⑧	96	竹和田古墳		
67	大迫1号墳	横穴式石室	①⑧	97	西木の浦古墳群	10基	
68	栗崎2号墳	横穴式石室	①⑧	98	西木の浦横穴群	4基	
69	栗崎1号墳	横穴式石室(装飾)	③④	99	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	
70	鴨籠2号墳	横穴式石室(埴輪)	①⑧	100	金桁古墳群	箱式石棺	④③
71	鴨籠古墳	円墳・家形石棺(直弧文)	③⑤	101	平松古墳群	箱式石棺14基 円墳4基	④④
72	朱斗窯跡	須恵器窯跡	③⑥	102	オサキ古墳群	巨石墳	④①
73	元米の山窯跡	須恵器窯跡	③⑦	103	重盛山古墳群	円墳2基	④①
74	八久保古墳	円墳・箱式石棺	①⑧	104	島崎古墳群	消滅	④①
75	国越古墳	前方後円墳・横穴式石室(埴輪)	③⑧	105	越路古墳	箱式石棺・積石塚	④①
76	道免古墳	円墳(埴輪)	①⑧	106	際崎古墳群		
77	東塩屋浦古墳	箱式石棺	①⑧	107	磯山古墳群	筒形銅器	④⑤
78	弁天山石棺群	箱式石棺2基	①⑧	108	太田尾横穴群	5基	
79	弁天山古墳	前方後円墳・壱穴式石室(埴輪)	③⑨	109	太田尾製塩遺跡	製塩土器	④⑥
80	塩屋浦鬼の岩屋2号墳			110	矢筈古墳	箱式石棺	
81	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室		111	小田良古墳	横穴式石室(装飾)	④⑦
82	桂原2号墳	横穴式石室		112	田井の浦古墳		
83	桂原古墳	円墳・横穴式石室(装飾)	④⑩	113	鬼塚古墳(田井浦)		④①
84	黒田製塩遺跡	製塩炉	③⑥	114	鬼塚古墳		④①
85	永尾於呂口古墳	箱式石棺	①⑧	115	辺田古墳群	横穴式石室	④①
86	狐塚古墳	箱式石棺	①⑧	116	大崎古墳群	箱式石棺3基	④①
87	河添の鬼の岩屋古墳	円墳・横穴式石室	①⑧	117	寺島古墳群		
88	大見観音岬古墳	箱式石棺	①⑧				
89	要古墳群	箱式石棺5基	④①				
90	御船古墳群	横穴	④①				

<文 献>

- ① 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財第3集』P11 1977 宇土。
- ② 富樫・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』P 107～118 1975 宇土。
- ③ 大田幸博「宇土周辺の中世城跡について」『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 1977 宇土。
- ④ 富樫「小松古墳」『宇土市の文化財第3集』P10 1977 宇土。
- ⑤ 富樫「小部田横穴古墳群」『宇土市の文化財第1集』P11 1972 宇土。
- ⑥ 富樫「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル20号』1969 東京。
- ⑦ 富樫「城塚尾上横穴古墳群」『宇土市の文化財第3集』P14 1977 宇土。
- ⑧ 富樫「神ノ木山遺跡」『宇土市の文化財第3集』P13 1977 宇土。
- ⑨ 富樫「天神山古墳」『宇土市の文化財第3集』P10 1977 宇土。
- ⑩ 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」『宇土ところどころ』P26 1978 宇土。
- ⑪ 三島格「宇土市轟椿原における石蓋土城の一例」『熊本史学15・16号』1959 熊本。
- ⑫ 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊 1919 京都。
- ⑬ 富樫・他『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 1977 宇土。
- ⑭ 富樫「熊本県宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡」『熊本史学33号』1970 熊本。
- ⑮ 富樫「揺鉢山古墳」『宇土市の文化財第3集』P6 1977 宇土。
- ⑯ 富樫「迫ノ上古墳」『宇土市の文化財第3集』P6 1977 宇土。
- ⑰ 平山修一「大平横穴古墳」『宇土市の文化財第3集』P14 1977 宇土。
- ⑱ 坂本経堯「古墳時代」『不知火町史』1972 不知火。
- ⑲ 濱田・島田・梅原「肥後国下益城郡松橋町の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊 1919 京都。
- ⑳ 富樫・他『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 1978 宇土。
- ㉑ 北條暉幸・平山・木下「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究創刊号』1980 宇土。
- ㉒ 富樫「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」『石人No 106』1968 熊本。
- ㉓ 富樫『境目西原遺跡』宇土市教育委員会 1969 宇土。
- ㉔ 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」『宇土高校社会部部報第2号』1968 宇土。
- ㉕ 富樫「古保里石棺群」『宇土市の文化財第3集』P4 1977 宇土。
- ㉖ 富樫「宇土市大字立岡西潤野古墳」『ともしび第5号』1960 宇土。
- ㉗ 濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊 1919 京都。
- ㉘ 梅原・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊 1925 熊本。
- ㉙ 三島「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」『古代文化第17巻第3号』1966 京都。
- ㉚ 富樫「古代から近代までの遺跡について」『花園小学校創立百周年記念誌』1975 宇土。
- ㉛ 林田憲義「記念物」『松橋町史』1979 松橋。

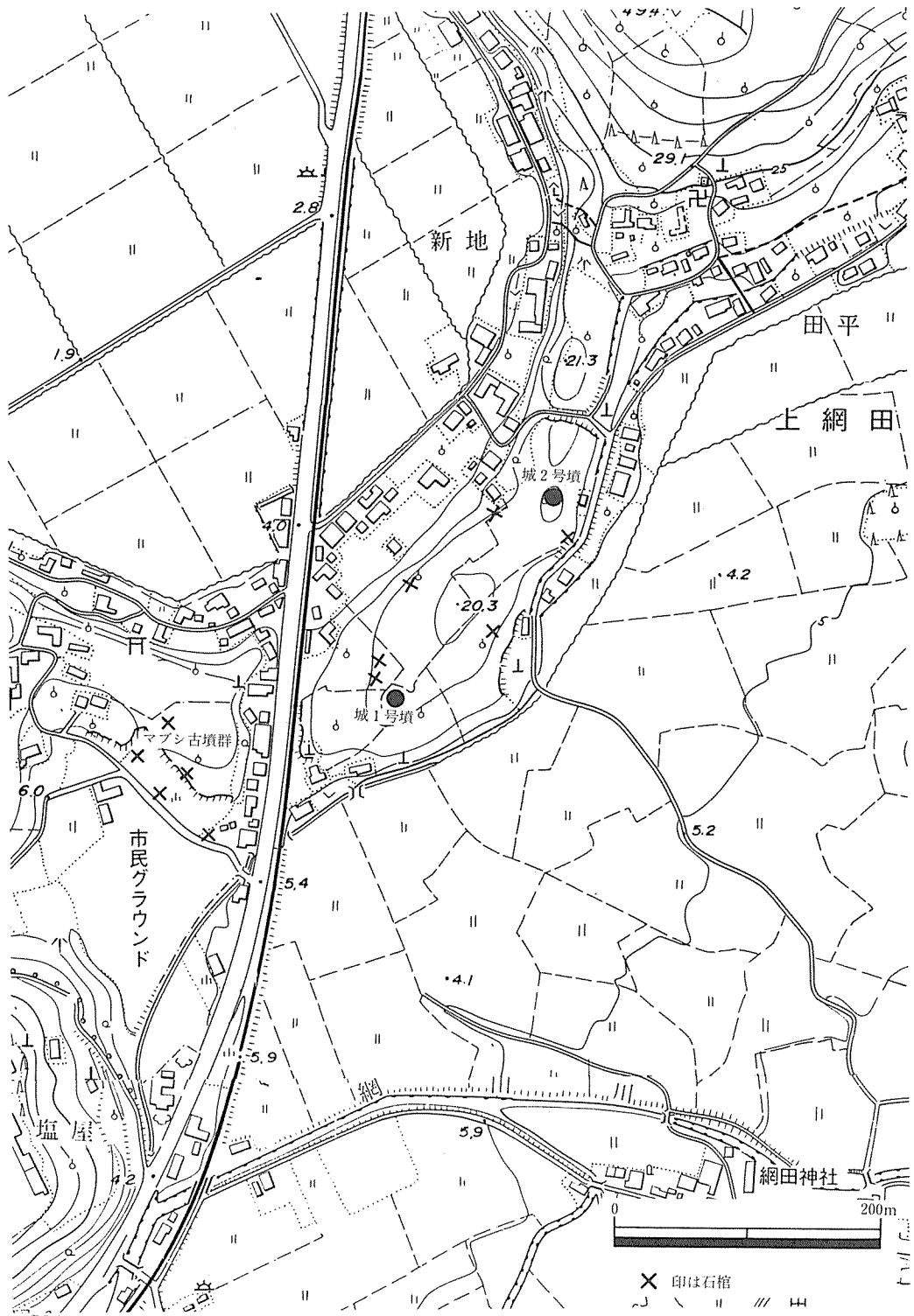
- ③② 宇土高校社会部『古城』宇土高校社会部部報第8号 1978 宇土。
- ③③ 佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」『法文論叢第26号』1970 熊本。
- ③④ 三島「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報14』1966 東京。
- ③⑤ 濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村古墳」『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊 1917 京都。
- ③⑥ 坂本「古代の生産」『不知火町史』1972 不知火。
- ③⑦ 宇土高校社会部『宇土高校社会部部報第1号』1967 宇土。
- ③⑧ 乙益重隆「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』1967 熊本。
- ③⑨ 富樫「弁天山古墳調査概報一新発見の肥後最古の竪穴式石室墳」『熊本史学第30号』1965 熊本。
- ④⑩ 三島「桂原古墳」『不知火町史』P72 1972 不知火。
- ④⑪ 坂本「遺跡の環境・古墳文化」『平松箱式石棺群』三角町平松古墳調査報告 1957 三角。
- ④⑫ 宇土高校社会部『古城』宇土高校社会部部報第4号 1972 宇土。
- ④⑬ 清野謙次「肥後国宇土郡浦村大字中村小字前田，金桁古墳」『日本原人之研究』1943 東京。
- ④⑭ 坂本『平松箱式石棺群』三角町平松古墳調査報告 1957 三角。
- ④⑮ 角田政治「三角町の古墳」熊本県史蹟調査報告第壹回 1918 熊本。
- ④⑯ 松本健郎『生産遺跡基本調査報告書』熊本県文化財調査報告第38集 1979 熊本。
- ④⑰ 江本直・隈昭志・上野辰男・松本雅明・他『小田良古墳』三角町文化財調査報告 1979 三角。





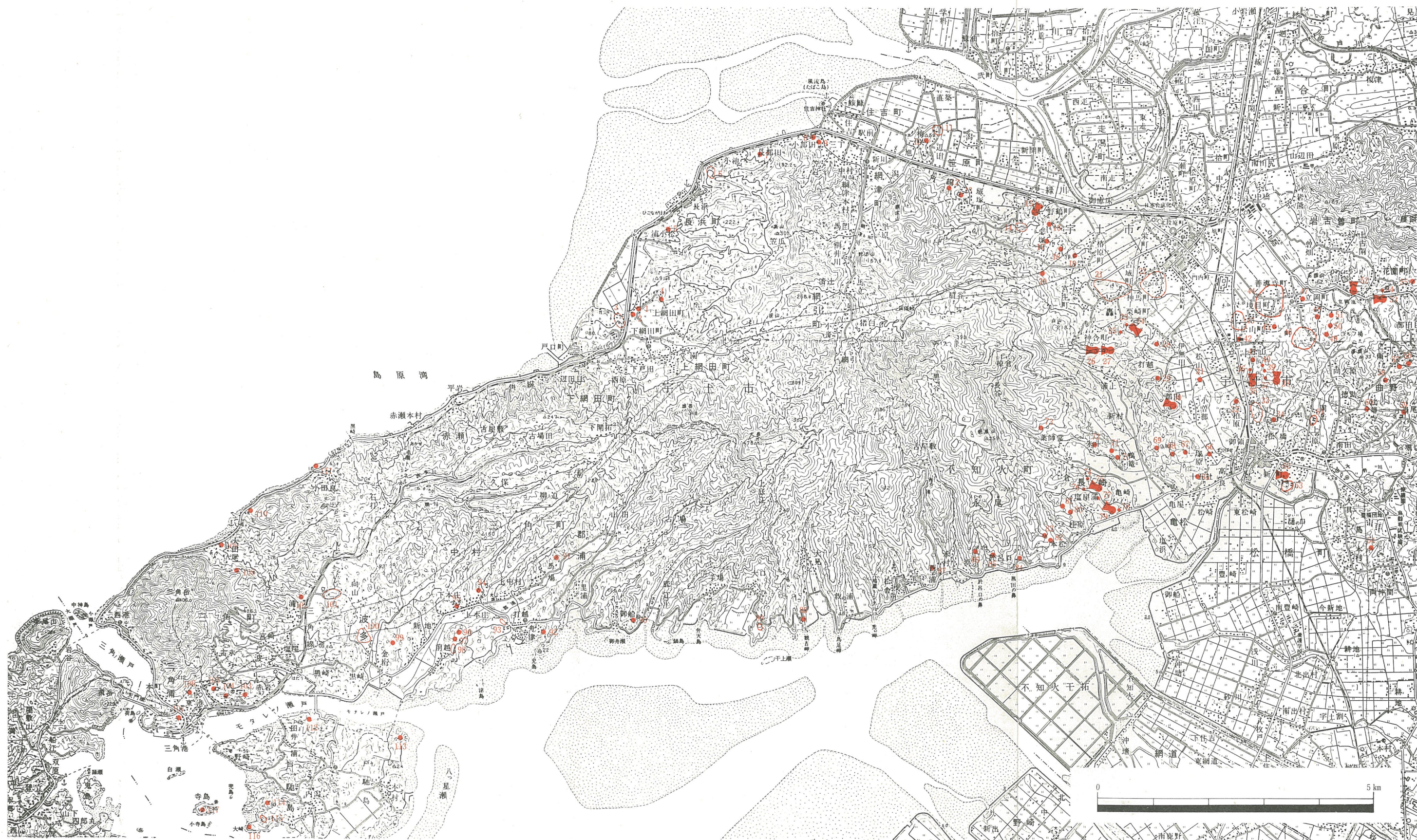
第1図 位置図 (1/25,000)

- 1、城2号墳    3、マブシ古墳群    5、小松古墳
- 2、城1号墳    4、ヤンボシ塚



第2図 地形図 (1/5,000)





第3図 宇土半島古墳時代遺跡分布図



### 第3章 調 査

#### 1. 墳 丘 (第4・5図)

城2号墳の立地する田平丘陵は、古墳築造以降、数次にわたって地形が改変されている。田平丘陵の地理的環境やその変遷については第2章に詳述しているが、地形改変は田平城<sup>(註1)</sup>の築城、国鉄三角線・国道57号線の開削、ミカン園造成などに起因するものである。

これらのうち、田平城築城、ミカン園の造成は、城2号墳をはじめとする城古墳群に大きな影響を与えている。

城2号墳の墳丘は、周辺をかなり削平され、とくに北側では控積みの一部が崖面に露出している程である。頂部もかなり平坦化され、天井石の一部が地表に露出している状態であった。遺存する墳丘は北西-東南に細長く、長径約18m、短径約10.5mの不整な楕円形を呈している。

墳丘の高さは、周辺地形に高低があるため一定ではなく、南側では約1.5m、北側では約3.2mである。

墳丘については十分な調査を行なっておらず、石室の南側にトレンチを1本設定しただけである。そのトレンチも、後述する中世墳墓が検出されたため地山面まで掘開しなかった。したがって、墳丘についての詳細は知ることができないが、表面観察・トレンチによる所見を次に記す。

現況では、周溝・埴輪・葺石は確認されなかった。

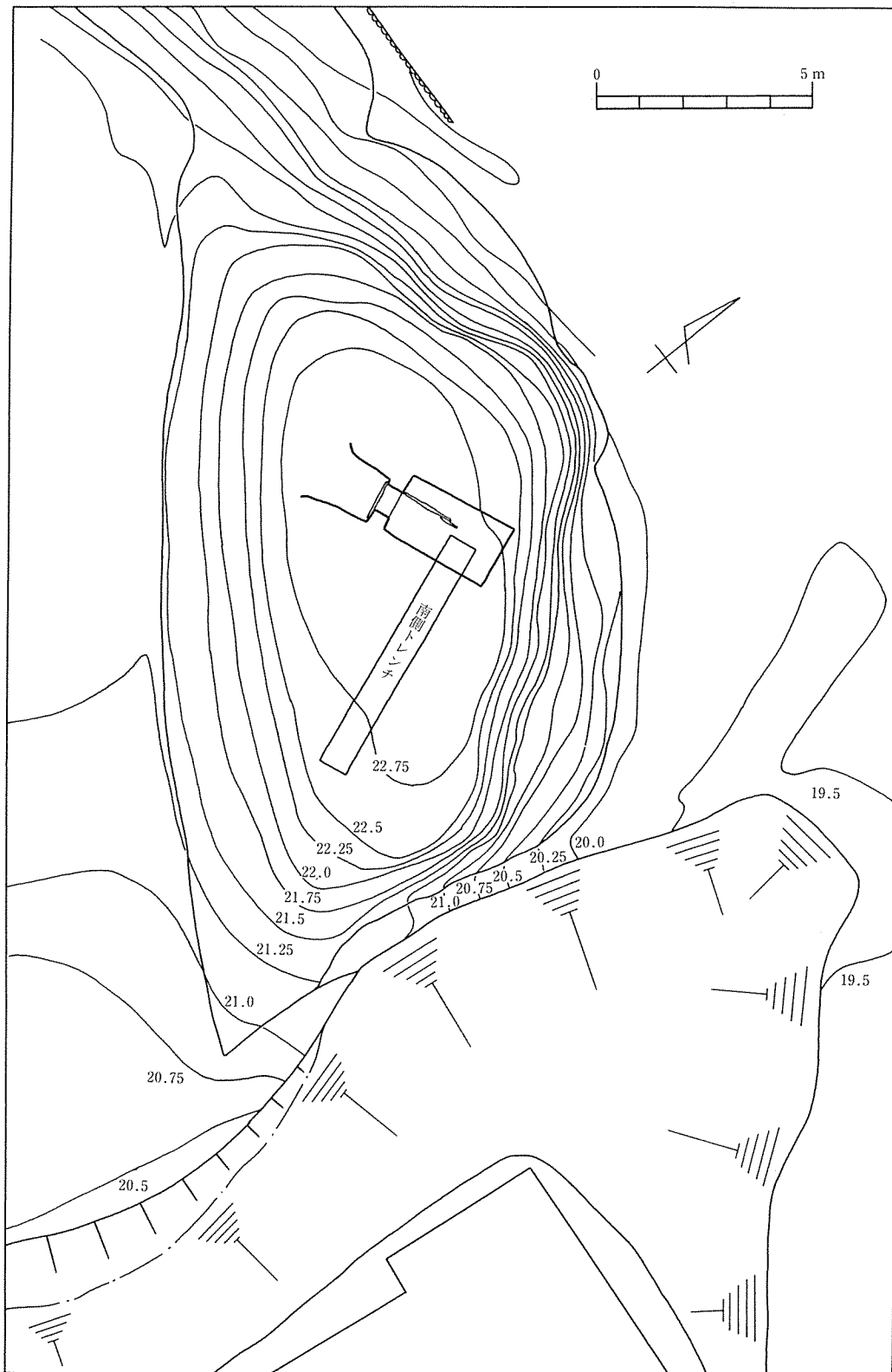
墳丘と石室の関係についても、十分な資料を得ていないが、墳丘に設けたトレンチ、石室内部・羨道部の部分的な掘開によって推察することは可能である。

石室を納めるためには、地山を掘り込んだ掘り方が設けられている。これは、羨道部と玄室床面下の地山面の比較で明らかであるが、その形状や規模は不明である。墳丘は盛土によっているが、その築成過程は不明である。

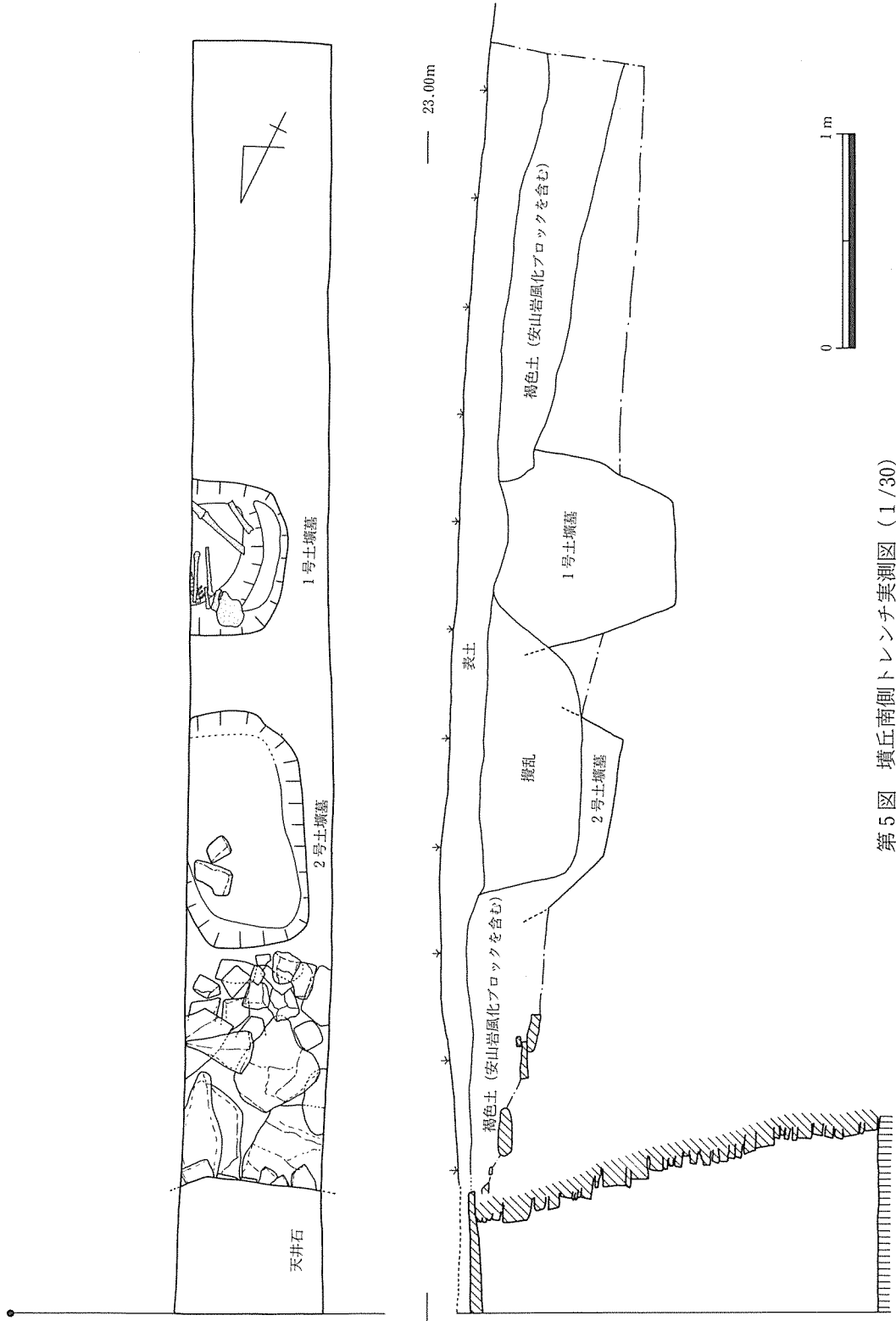
墳丘の原形や規模についても不明であるが、残丘の状態や周辺地形から考えて円墳とみられる。墳丘の規模についても推測の域を出ないが、石室の位置及び墳丘南東部の遺存状態から直径20~25m程度の比較的大型であったと考えられる。墳丘の高さも、現在より50~100cmは高かったであろう。

石室の南東部に設けたトレンチに2基の中世墳墓が検出された。石室に近いものを2号土壙墓、他方を1号土壙墓とした。

2基の土壙墓は、いずれも隅丸長方形を呈している。1号土壙墓の上端は幅90cm前後で、



第4図 墳丘測量図



第5図 墳丘南側トレンチ実測図 (1/30)

一部がトレンチにかかっている。深さは約65 cm を測り、右側臥屈葬の人骨が検出された。人骨の遺存状態は比較的良好であった。人骨は土壙底辺から約15 cm 上で出土し、ほぼ同レベルで土師器坏の口縁部細片が出土した。

2号土壙墓の上部は攪乱を受けているが、確認面での長さ1.1m、幅60~70 cm を測る。土壙の中に石が2個と頭骨の一部が確認されたが、下底面まで掘開せず、そのまま埋め戻した。

これらの土壙墓は、1号土壙墓から出土した土師器、1号土壙墓の上に堆積した土中から瓦質土器の火舎が出土したことから室町期と考えられ、田平城と関係深いものと考えられる。

(松本)

#### 註

- (1) 大田幸博・森山恒雄・森下 功・阿蘇品保夫・中村一紀『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 1978 熊本。

## 2. 石 室 (第6図)

埋葬施設は主軸方位をS-65°-Wにとり、南西方向に開口する竪穴系横口式石室である。調査前、石室を覆う2枚の天井石はほとんど露出した状態で、前壁側の天井石の一部が壊され、この開口部は大人一人が十分出入り出来る大きさであった。石室奥壁には、安山岩板石(第7図)が放置されていた。横口部を閉塞した板石の上部が欠損し、横口部側壁はせり出して、部分的に欠落するなど、石室は盗掘あるいは自然的要因により変形を受けていたが、全体的な保存状態は良好で、旧状に近い状態が保たれていた。

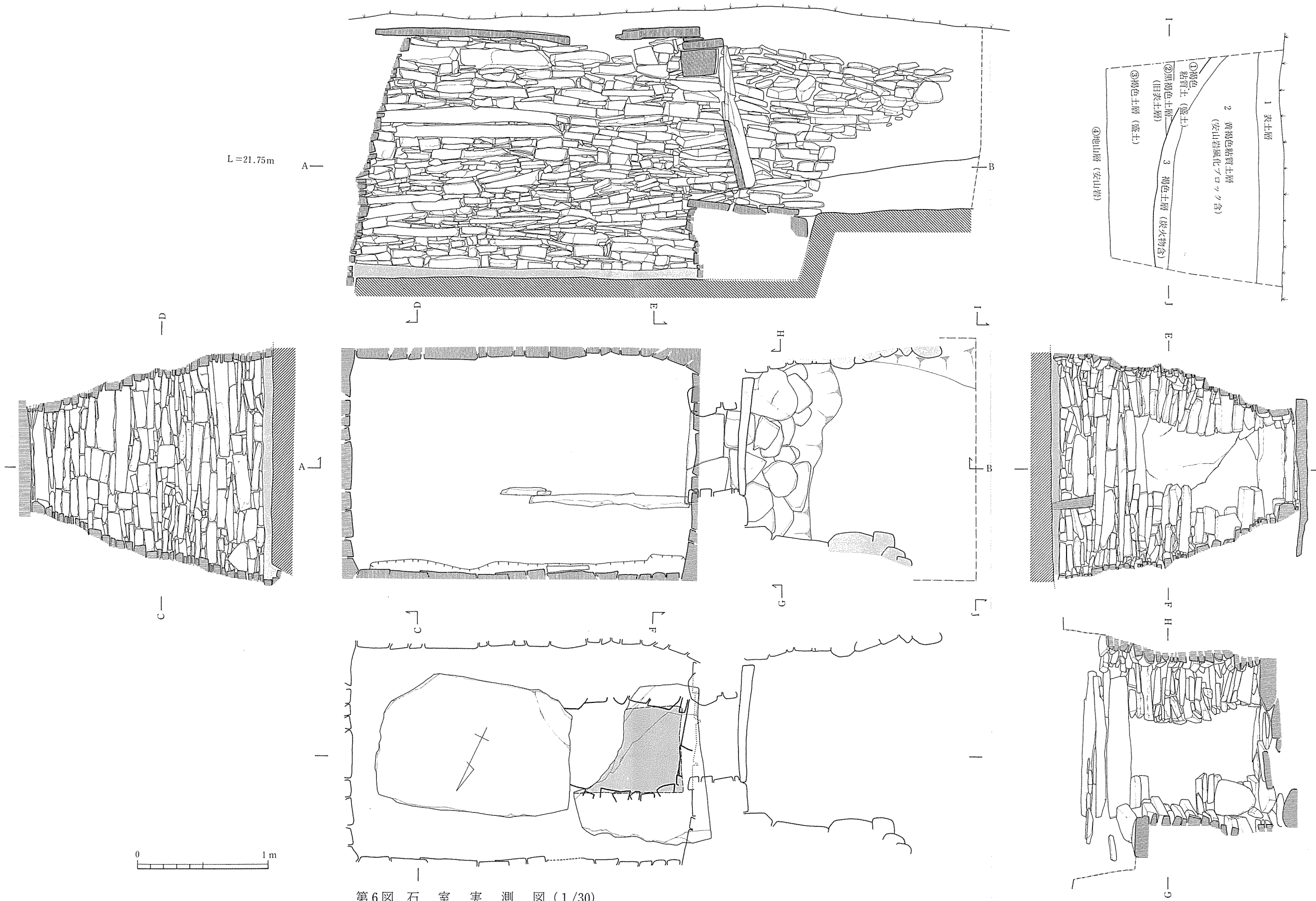
石室は長方形の玄室をもち、玄室前壁の中央部より右壁側に片寄った位置に横口を設け、さらに、前面にラップ状に開く短かい石積を附している。石室全長は右壁で447cm、左壁で428cmを計った。石積端から約2mまで墓道を確認したが、これより先は墳丘の周囲が開墾により切り取られ、消滅したものと思われる。

石室を構成する石材は、主に輝石安山岩(大岳熔岩<sup>おおたけ(註1)</sup>)割石であるが、部分的には安山岩の転石や凝灰岩も使用されている。とくに玄室四壁および横口部側壁は大部分、安山岩割石を使用して、丁寧に積み上げているが、横口前面側壁は安山岩割石に転石を加え、比較的乱雑に積み上げられている。すなわち玄室と横口前面側壁部とは、壁体を構成する石材の種類と積み方において明確な差異が認められる。以下石室各部について説明を加える。

### ① 玄 室

玄室の法量は主軸の長さ261 cm、右壁長258 cm、左壁長247 cm、奥壁幅161 cm、前壁幅155 cmを計った。玄室のプランは概ね、1:1.6の比率の長方形となる。

床面は地山整形のち、厚さ10 cm前後の砂礫を敷いている。この礫床下の地山面から天井石



L=21.75m

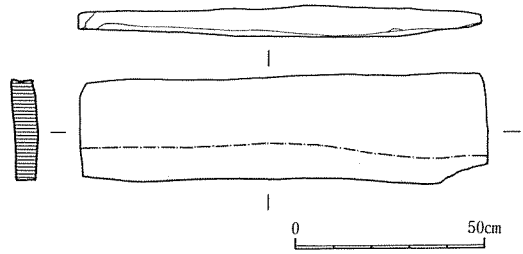
第6図 石室実測図 (1/30)



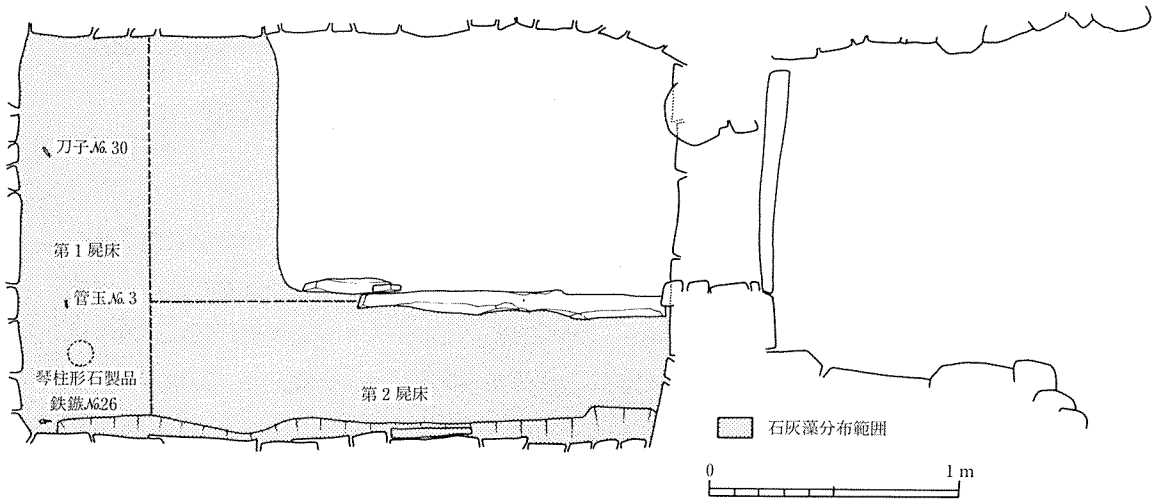
までの高さは、奥壁で183 cm、前壁で184 cmを計った。

玄室左壁に沿って、大小2枚の板石による石障<sup>(註2)</sup>を設けている。石障の現存長は1.45 cmを測るので、さらにもう1石立てられていた可能性がある。前述した奥壁側に放置されていた安山岩板石(第7図。幅29 cm、長さ108 cm、厚さ8 cm)

は、両側面の一方に約10 cmの幅で、帯状に朱が強く付着した部分が認められ、この朱帯の幅と磔床の厚さが、ほぼ一致していることから、この板石は磔床中に立てられ、石障として用いられたものであることは明らかである。磔床下の地山面で、石障の掘形は認められず、この石障の原位置を確認することが出来なかった。しかしながら以下の諸点によって、この石障は奥壁に併行して立てられていた可能性が強いことを提示しておく。①横口部は中央部より右壁に片寄った位置に設けられているため、屍床空間の点で、右壁に沿って石障を設けたとは考えられない。むしろ右壁に沿った空間は通路の機能をもっていたと考えられる。②床面はかなり攪乱を受けていたが、人骨および琴柱形石製品・



第7図 石障石材(輝石安山岩)実測図



第8図 石室内遺物出土状態・屍床配置想定図

玉類・鉄製品などの副葬品の出土位置が、奥壁に並行した一定の範囲の中に集中的に出土したことなどをあげることができる。しかし、奥壁に沿った屍床がどのような規模・構造で区画されたかについては明らかにすることは出来なかった。

したがって以上の諸点を考慮して、奥壁に沿う屍床を第1屍床、左壁に沿う屍床を第2屍床とし、さらに右壁に沿う空間を通路と呼ぶことにした。

## ② 横口部

横口部は中央部より右壁に片寄った位置に設け、床面からの高さ60 cm、奥行95 cm にわたって板石を持ち送りながら積み上げた、いわゆる棚状の段を底面とし、上面は羨門に構築した天井石の下面としている。羨門部両側壁は板石をわずかな傾斜で持ち送りながら積み上げている。羨門部（横口部）の幅は、基底面で54 cm、上面で44 cm、高さ93 cm、奥行約40 cm を計った。右壁の中位は内方に強くせり出し、左壁の上半部は上下の中約40 cm にわたって石材が欠落している。羨門の天井部には、大小2石を重ねて架構し、さらに玄室側の天井石の一部を重ね、この間隙に板石をつめて調整している。

## ③ 閉塞施設

閉塞には一枚の板石が使用され、羨門の外側から上端部を天井石にもたせかけるように、やや斜めに立てかけられ、さらに外側は厚い黄白色の粘土で覆われ、粘土の範囲は側壁の下半部の高さまでおよんでいた。また下端部と棚状構造の石積みとの間にも、褐色粘質土が厚く敷かれていた。この粘質土は石室築造時に版築されたもので、埋葬時の床面と推定される。なお、この床面は横口前面、さらに墓道に向かって上昇し、傾斜角度は約20°を計る。

## ④ 横口前面側壁

側壁部前面にラップ状に短く開く側壁を設けている。側壁の右壁は、玄室右壁の延長線上から、左壁は玄室左壁より約20cm内方から始まるが、横口部の中軸線に対してはほぼ対称になる位置に設けられている。側壁右壁の長さは155cm、左壁は125cmを計った。左右側壁は棚状の段の部分までは基底面から安山岩割石を積み上げ、この部分から先端に移るに従って、石積みの高さは減少し、ほとんど安山岩転石を使用している。石積みの下方は土壁のままとなっている。また側壁石積みは安山岩割石・転石を貼石状に小口積みしていて、上方はやや開き気味となっている。

## ⑤ 墓道

墓道は断面U字状をなし、墓道床面には厚さ約15 cm にわたって炭化物を少量含む腐蝕土の

堆積が認められた。さらに上層には軟質安山岩ブロックを多く含む褐色土が約60 cmの厚さに堆積していた。この土層は短期間に埋没したか、あるいは築造直後に人為的に埋め戻されたものと思われる。

(野田)

#### 註

- (1) 石材の鑑定は熊本大学理学部松本幡郎教授による。
- (2) 乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『國學院大學大學院紀要11輯』國學院大學大學院 1979 東京。

### 3. 遺物

発掘によって出土した遺物はつぎのとおりであり、以下、順をおって列記する。なお、石室内の出土地点については第3章2の屍床区分に依拠して表示しているが、人骨片の散乱状態からかなりの移動が考えられる。出土位置が本来の埋葬位置かどうか決しがたい。

石室内	石製品(滑石製琴柱形石製品2・滑石製管玉10・滑石製小玉10)、鉄製品(鉄剣2・鉄鏃4・刀子2・鉄斧1・鉄鎌片?1)、土師器片3、鉄釘4、獣骨片若干
墓道下裏込め内	弥生式土器片
墳丘	中世人骨、瓦器(火鉢)

(高木)

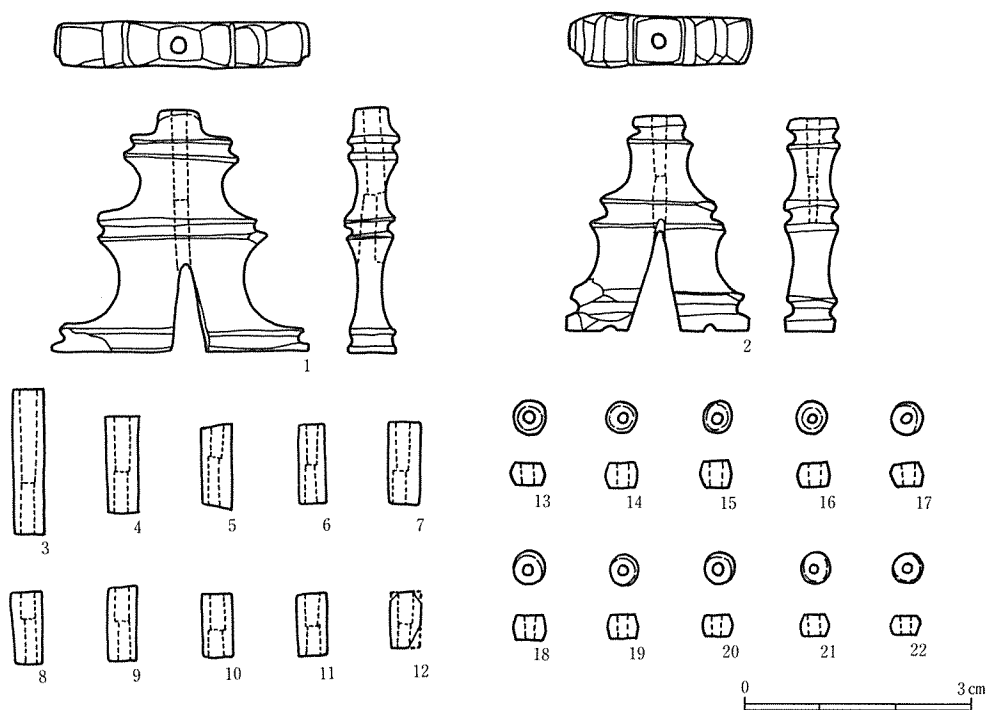
#### ① 副葬品

##### 石製品

##### 琴柱形石製品(第9図1・2)

ともに玄室内の奥壁に向って左側部分、つまり第1屍床北隅からの一括出土であるが、石室の開口が古いため石室内は荒らされ、その出土位置は原位置をとどめているか定かではない。

2点とも石材は灰緑色を呈する良質の滑石片岩であるが、2には白い不純物<sup>(註1)</sup>を含み石質は劣る。頭部から開脚中央部に開けられた小孔は、2点とも両側から穿孔され、1の頭部から開孔されたものは一部体部を貫いている。なお2点ともこの小孔には紐ズレなどによる磨滅はみられない。2の両脚底部には一条の溝がみられるが、1にはこの条線はない。2は1に比べ開脚部の幅も小さく、各突帯間の挟りも小さいため全体的にみて細長い感じを受ける。また、Na2のほうは頭部が平坦であるが、Na1はこの部分が突出している。これらの表面には屍床内に敷かれた石灰藻か、人骨の石灰質が溶解し沈着したと思われる石灰分が一部に付着しラフな面を呈する。なおこれら2点の琴柱形石製品の法量は別表(第2表)に掲げるとおりである。



第9図 石製品実測図

第2表 琴柱形石製品計測表

単位 cm・g							
No	高さ	脚部幅	頭部幅	頭部厚	脚部厚	孔径	重量
1	3.16	3.38	0.55	0.50	0.56	0.22	5.50
2	2.79	2.37	0.62	0.58	0.64	0.20	4.48

管 玉 (第9図3~12)

総数で10個の出土をみるが、これらもすべて琴柱形石製品と同じ奥壁に向って左側部分からの出土で、石質も琴柱形石製品と同様の灰緑色を呈する滑石片岩である。形態的にみれば長さは、最長1.9 cm から最小0.78 cm とバラエティーに富んでいるが、径はほぼ同一で0.4 cm 前後を測る。穿孔はすべて両側から行なっている。

滑石製小玉 (第9図13~22)

これらもすべて琴柱形石製品・管玉と出土箇所も石質も同じで、総数10個を数える。上下端は平面に仕上げ、中央部分にわずかな稜をもつ。長さは0.3 cm ほどと画一性をもっており、穿孔は片側からなされている。管玉・小玉を連続すれば、全長13.88 cm、重量3.57 gを測る。

(平山)

第3表 管玉計測表

単位 mm			
No	長さ	径	孔径
3	19.0	4.1	2.2
4	12.3	4.4	2.0
5	10.8	4.4	1.7
6	10.5	3.9	1.7
7	11.0	4.0	1.5
8	10.0	4.5	1.7
9	9.7	4.0	1.5
10	8.6	4.0	1.4
11	8.0	4.1	1.6
12	7.8	3.9	1.5

第4表 小玉計測表

単位 mm			
No	高さ(厚)	径	孔径
13	4.3	3.2	1.5
14	4.0	3.4	1.5
15	3.9	3.6	1.5
16	4.0	3.2	1.5
17	4.0	3.0	1.4
18	3.9	3.2	1.4
19	3.7	3.3	1.5
20	3.9	2.9	1.5
21	3.7	2.9	1.4
22	3.8	2.4	1.4

## 鉄製品

## 鉄剣 (第10図23・24)

9個の小片であったが、接合の結果刃幅の異なる2本分であることが明らかとなった。共に短剣であるが切先がなく、茎も完存しない。

23、第2 屍床出土。刃部幅2.2 cmで現存長11.1 cm、関の部分と茎をわずかではあるが残す。それによると茎の幅1.6 cm・同厚さ0.3 cm・同長さ1.1 cm、関は両削関で0.8 cm、<sup>こしらえ</sup> 柁が直線式であるか呑口式になるのか明らかではない。残りの9.2 cmが両刃になるのであるが切先はない。刃部厚さ0.3 cm。

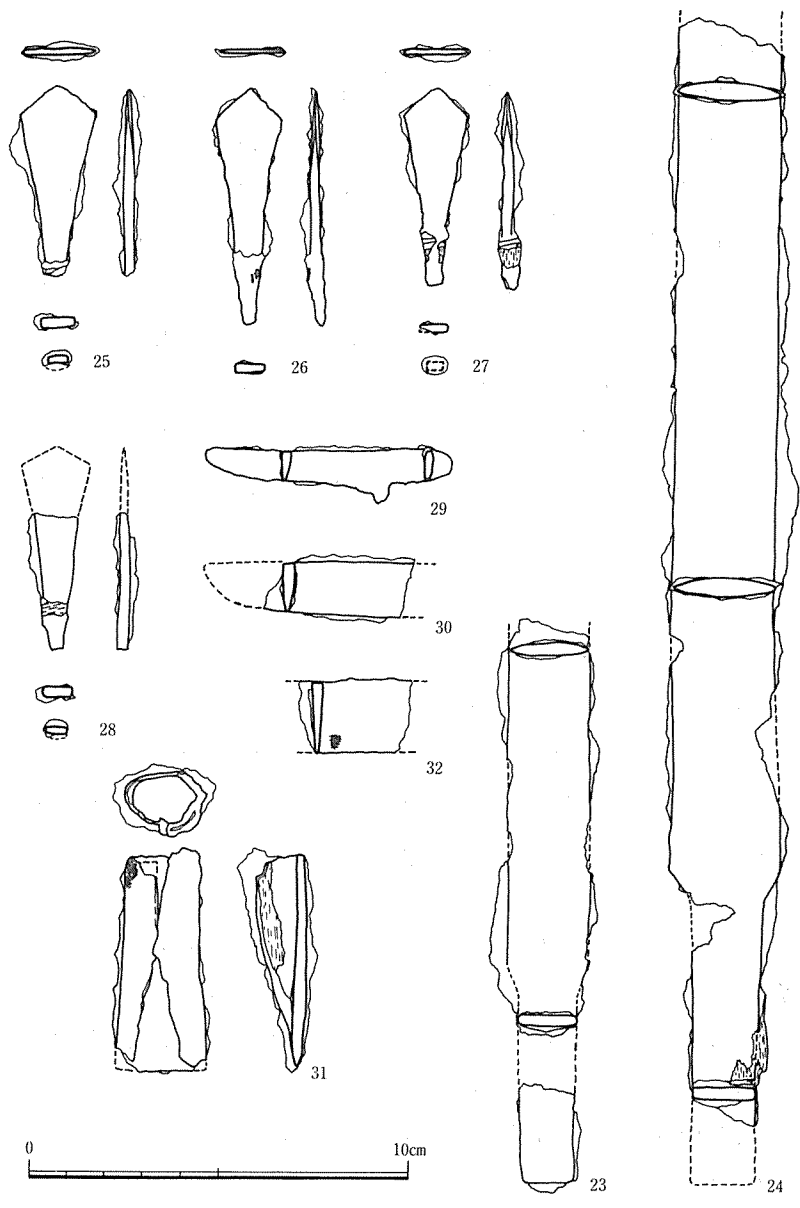
この剣の茎の端部と思われる幅1.5 cm・厚さ0.35 cm・長さ2.6 cmの鉄片がある。この小片を加えれば茎は、3.7 cm以上あったことになり、現存長も13.7 cmと訂正される。木質遺存。

24、第1 屍床(3片)・通路(1片)出土の破片が接合できた。刃部幅2.75 cmで、23よりやや幅広となる。現存長29.3 cm・刃部残存長22.5 cm・関部長0.8 cm・茎部残存長6.0 cm、刃部厚さ0.5 cm・茎部厚さ0.3 cm・茎部幅1.65 cm、関は両削関。柁は明確ではないが直線式とみられ、茎部に木質が遺存する。

## 鉄鏃 (第10図25~28)

25、第1 屍床内で北側寄りに出土。現存長5.0 cm・身幅1.95 cm・厚さ0.2 cm・重量6.3 g。わずかではあるが茎に木質を残す。

26、第1 屍床内で北側コーナーより、刃部を奥壁にむけて出土。現存長6.3 cm・身幅1.73 cm・厚さ0.2 cm・重量4.5 g。茎は木質の形跡から2.12 cmをはかる。



第10図 鉄製品実測図

27、現存長5.23 cm・身幅1.7 cm・厚さ0.2 cm・重量5.5 g。1.35 cm残存する茎には幅0.18 cmの木皮が、繁巻される。その部分の直径は0.7 cm。

28、通路出土。茎の小片ではあるが上記3例と同形態をなす鉄鏃とみてよかろう。現存長3.6 cm・茎長1.3 cm・厚さ0.2 cm・重量3.1 g。

いずれも同一の形態をなす平根式鉄鏃<sup>(註2)</sup>で、後藤守一氏の分類<sup>(註3)</sup>に従えば圭頭斧箭式に属す。先端の刃部が通常のものよりやや短かく、このタイプの鉄鏃のうちでは小型である。その意味では仮器とみられないこともないが、断定はさける。詳細は第4章4に譲るが、同種の鉄鏃は九州地方に偏在し、時期的に中期の古墳に多い。

#### 刀子（第10図29・30）

29、第2 屍床から出土。砥ぎ減りによってかなり変形しているが、刀子とみてよかろう。長6.6 cm、関を境にして刃部は内反りぎみに彎曲。刃部長4.6 cm。関部が垂直になるか斜めになるか明らかではないが、茎は2.0 cmを残す。

30、切先や茎を欠失し、確実ではない。幅1.5～1.8 cmの刃部が3.9 cmある。鋒幅0.4 cm。

#### 鉄斧（第10図31）

31、第2 屍床出土。小形の有袋式無肩揆形鉄斧で内部に木質が残る。折り返し部分の外側に、僅かではあるが布帛が付着する。長さ5.9 cm・刃部推定幅2.4 cm・同厚さ0.3 cm。袋部は外径1.3 cm×2.0 cm・内径1.1 cm×1.5 cmの楕円形をなし、折り返しは刃部にまで及び、しっかりしている。重量23.7 g。

大きさの点からいえば仮器とすべきであろうが、通常のミニチュアに比して折り返しもしっかりし、厚みもあるので、そうすることに若干の躊躇<sup>(註4)</sup>を感じる。今後に保留しておこう。形態的には前期から中期にかけての古墳によくみられるタイプである。

#### 鎌？（第10図32）

32、第2 屍床出土。小片であるため確実性にかけるが、鎌と理解したほうが最も妥当であろう。長さ3.0 cm・幅1.9 cmの刃部で、鋒幅0.2 cm。刀子にしては鋒幅がせまく、刀にしては刃幅が小さい。

出土破片の検討から、上記の鉄製品の本래の埋葬位置を推測すれば以下のごとくである。<sup>(註5)</sup>

第1 屍床 剣No24、鏃No25、No26、No27、(No28)

第2 屍床 剣No23、刀子No29、斧No31、鎌？No32

## ② そ の 他

### 土 器

石室内混入土より、土師器片3点が検出されている。いずれも細片であるが、そのうちの1

点には外面に明瞭な叩きを有する。二次的流れこみである。

墓道床面の下部で、横口部分石敷の裏ごめ石の間から、弥生時代中期の土器片（鋤先口縁部分）が検出されている。

墳丘上に設定したトレンチ内より中世土壙墓が2基検出され、内部に人骨の遺存がある。その土壙墓の脇から、中世の火鉢片と思われる瓦器質土器が出土している。

#### 鉄 釘

石室内混入土のかなり上層から鉄釘4点が出土。角釘3・丸釘1がみられ、二次的流れこみである。

#### 獣骨片

石室内混入土から若干の獣骨片が出土。後世の混入である。

#### 註

- (1) 石材の鑑定は熊本大学理学部松本幡郎教授による。
- (2) 末永雅雄『日本上代の武器』弘文堂書房 1941 東京。
- (3) 後藤守一「上古時代鐵鏃の年代研究」人類學雜誌第54巻第4号 1939 東京。
- (4) 柳田康雄ほか「三雲遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第58集 109頁 1980 福岡。
- (5) 発掘によるものではないが、30年ほど前にこの古墳から「カタナ」が出土したことがあるという。浜口俊夫氏談。

#### 4. 人 骨

石室内の各所に破片となった状態で検出されたが、そのうちの通路部分検出の下顎骨は、成年男性のもので、さらに他の人骨片は、明らかに前記の人骨と異なる1体（性別・年齢不明）<sup>(註1)</sup>である（永井昌文教授による）。

(高木)

#### 註

- (1) 人骨についての医学的所見は、時間的都合により収載できなかった。しかし、『宇土市史研究 第3号』寄稿の了解を永井教授より得た。詳細はそれによらるたい。



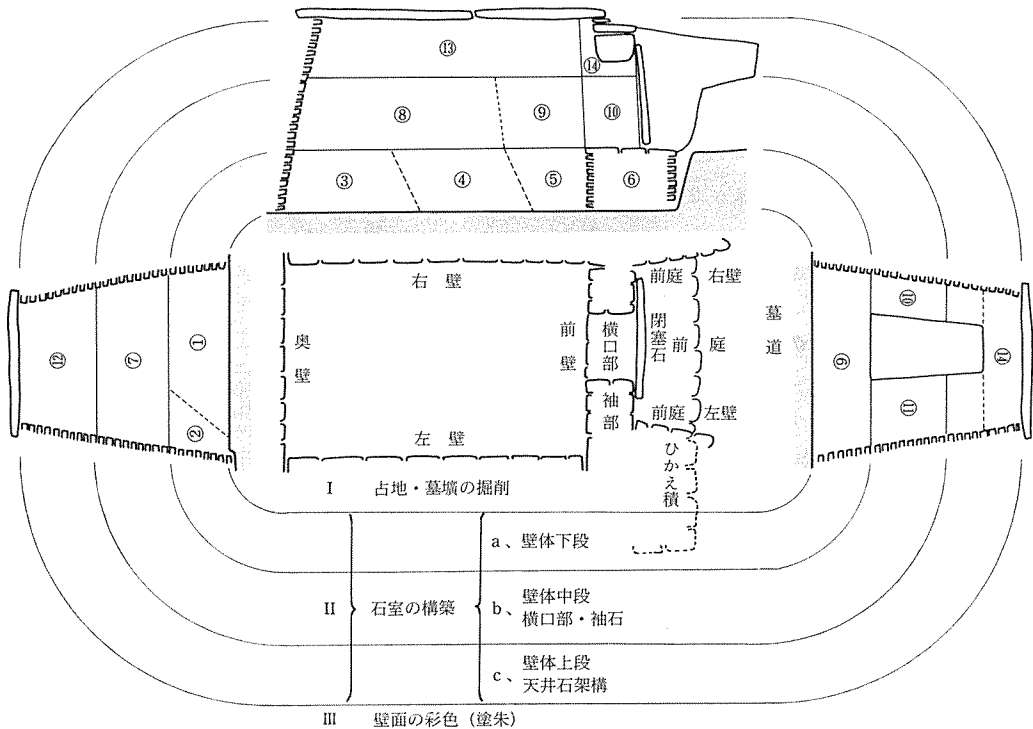
## 第4章 考察

### 1. 石室の構築法（第11図）

石室は地山面を約50 cm 掘り下げた掘形に構築されている。奥壁・右壁・前壁は掘り形床面から直接石積みされるが、左壁は床面をさらに掘り下げた位置から積み上げられている。玄室四壁は大小の割石でいずれも持ち送りを持たせて積み上げられ、天井部は2枚の板石により玄室から横口部の一部まで架構されている。

四壁隅角の基底部では、奥壁は左右両側壁を挟み込み、前壁は左壁を挟み込むが、反対に右壁によって挟まれている。したがって四壁は概ね奥壁→(左壁・右壁)→前壁の順序で構築されたことが推察される。

次に各壁ごとに石積みの特色とその順序について観察し、その結果を模式図（第11図）に表わし、整理してみた。四壁はいずれも水平方向に走る目路によって上・中・下の三つのブロックに分けられる。すなわち、下段は横口部の下底面のレベルを基準としたもので、上・中段は玄室・横口部を構築する際の石積作業の反復による結果と思われる。



第11図 石室構築想定図

奥壁では下段の石積みの中に斜め方向（左下り）に走る目路によって①・②の小ブロックに分かれ、まず右壁寄りの①から積み始め②に移行する。②は左壁下段へ移行する過程で、隅角を調整するための石積みである。中・上段では下段の目路の延長線上にタテ方向およびナナメ方向の目路が認められるので、下段と同様の石積み作業が反復されたことを物語っている。次に左壁下段および右壁下段に移るが、その際左右両壁は一部石積みが併行して行われたことも推察される。右壁下段はナナメ方向（右下り）に走る2本の目路によってほぼ3等分され、奥壁側から前壁側の方向に③→④→⑤の順で積み、さらに⑥の前壁下段および横口部の下底面まで石積みが行われる。また、右壁中段は下段前壁側の目路の延長線上に近いナナメ方向（右下り）の目路が1本走り2つのブロックに分かれ、⑦→⑧→⑨（前壁・横口部）の順序で石積みが行われている。上段⑩では顕著な目路は認められず、天井部近くまで一気に積み上げられたものであろう。すなわち下段から上段に移行するに従ってのブロック化は段階的に減少する傾向にあり、このことは四壁に共通して認めることができた。以上のように玄室の構築は、奥壁→（左壁・右壁）→前壁の順序の石積み作業を三段階に分けてくり返し、中段以上は前壁と同時に横口部も構築され、さらに横口部の構築は天井石の架構の後、すなわち石室構築の最後の段階に行われたものであろう。

また、いわゆる石積み技法には、目路が水平方向に走るもの、上下の目路がジグザグになるもの（煉瓦積み技法）、目路が垂直に通るもの（重箱積み技法）、目路が斜めに通るもの（斜め積み技法）などがあり、それぞれの技法には年代的推移が認められるとされている。本石室の場合、これら四つの技法がすべて認められ、基本的には水平方向に目路が通るように積み上げられる過程で、以上四つの技法が随所に駆使されている点に大きな特色が認められる。

（野田）

註

小田富士雄「八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ」八女市教育委員会 1969～1972年 八女。

## 2. 城2号墳石室の系譜

{ 1 }

本古墳は有明海に突出した宇土半島中部にあり、島原湾に面した網田平野を見おろす丘陵上に位置している。墳丘は数次の改変を受けているが、復原すれば直径20～25m前後の円墳であったと推定される。主体部は割石を小口積みにしたいわゆる「<sup>(註1)</sup> 豎穴系横口式石室」と呼ばれるものであり、本県では初例となる琴柱型石製品の副葬、さらに屍床に持ち込まれた石灰藻の存在などにみられるように、本地域では特異な古墳として注目される。このことは、宇土半島および天草・有明湾岸地域の古墳文化を考える上で、新たな視点での疑問を投げかける結果ともなった。本項では特に石室構造の特色とその系譜について若干の考察を試みる。

〔2〕

いわゆる竪穴系横口式石室については、年々調査例が増加し、その数は北部九州地方を中心として、一部は中国・四国さらに近畿地方にかけて計120基余りにのぼっている<sup>(註4)</sup>。しかし、この種の石室の概念については、必ずしも研究者間に共通の認識が確立されておらず、類例が増加する一方で、その位置づけを行なう場合も少なからず混乱が生じているのではないかと思われる。

竪穴系横口式石室なる名称を提唱された小田富士雄氏は、古新羅・任那に分布するこの種の石室構造を有する古墳と楽浪・高句麗・百済にある古墳との間の構造上のちがいに注目して、「南鮮各地にみられる支石墓の下部構造のごとき伝統的な土着の墓制が、横穴式石室の伝播に対応したあらわれかた」とし、「南鮮と北九州で時を同じくしてあらわれた同性質の文化現象」<sup>(註5)</sup>であり、「竪穴式石室のがわから横穴式石室の導入に対応しようとするあらわれ」とする卓越した解釈を述べられた。それは日本における横穴式石室の成立とその系譜を考える上で、基本的な認識と方向づけを明示した点で、研究史上重要な見解であった。ところがこうした問題に対し、重要な指針を与える発見があった<sup>(註6)</sup>。福岡市大谷老司古墳の調査がそれである。この古墳は全長90mの前方後円墳で、後円部に3基、前方部に1基の石室を持っている。後円部の3号石室は主体をなすが、割石小口積みにした竪穴式石室に横口と墓道を設けたもので、すでに追葬も行なわれていた。他の3基も同様の構造をもつものであった。特に3号石室はこの種の石室の中で最も古式の様相を示し、その祖型はあきらかに畿内系の竪穴式石室に求められ、同時に畿内系の前方後円墳と結びついたものであり、前述した小田富士雄氏の見解を裏付けるものであった。

またこの種の石室について論及された石山勲氏は、「竪穴系横口式石室は横口を設け、前庭部、墓道を付加するという構造上の新しい要素と横口未使用例、追葬を行なわない例の存在等から知られる葬法の新旧の要素が、相互に関連しあった過渡期的な様相を呈するもの」と規定し、さらに構造および技術上の差異による分類と変遷とを想定されたのである<sup>(註7)</sup>。佐田茂氏は、この種の石室に対し、石室構造上にあらわれた形態が、その基本にある思想、すなわち「より横から入る」という葬法上の変化に対応するものと解し、「斜め上方」から「横方向」への形式的移行と石積みの方法さらに羨道部およびこれに直接する墓道の有無等の要素を重視し、分類と変遷とを試みた<sup>(註8)</sup>。

柳沢一男氏は、竪穴系横口式石室の基本的要素を、その横口部の構造にあるとし、さらに石室の平面図形・壁体と平井石の構架法・閉塞の方法・横口部前面の構造の4点について細かな分析を行ない分類を試みられた<sup>(註9)</sup>。

しかしながら竪穴系横口式石室を論ずる場合、この種の石室構造が、まさに小田氏の見解のとおり「竪穴式石室が横穴式石室に対応しようとするあらわれ」であり、その母体に畿内系の

竪穴式石室が存在したことは確実である。そうした横穴式石室の初現的形態が老司古墳各石室にみられるような「竪穴式石室に追葬を目的とした入口を設ける」といった構造として成立したものとされ、それらの石室構築技術は従来の竪穴式石室の技術がそのまま受けつがれるとともに、単に横穴式石室の追葬を目的とした横口を設けるという要素が付加されたにすぎないと考えるからである。したがって竪穴系横口式石室を規定する場合、竪穴式石室の構築技法を重視し、特に石室壁体の基部から割石小口積みにするという技法に基本的要素を求めるべきだと考える。このことは、後に北部九州を中心として普遍化した両袖形の横穴式石室の石室構築技法にみるように、その基本には、腰石の使用と塊石の併用という共通した特色が見い出せる点を重視し、いわば割石小口積み技法に変わって腰石や塊石さらに袖石を使用する技法の出現をもって一つの画期を想定すれば、その変化は竪穴系横口式石室と横穴式石室とを概念上区分する場合の最も基本的な要因の一つとなりえるのではないかと考えるからである。現在120例余りにのぼるこの種の石室について、上述した視点で再度類別を試みるなら、わずかに握りのグループがふるい残されるにすぎない。そこに竪穴系横口式石室のもつ葬法上の一つの側面をあらわしているものと考えられる。<sup>(註10)</sup>

### { 3 }

本古墳石室については、前項「石室構築法」で述べたように、まず地山を約50cm程掘り下げた掘形に、基底面から輝石安山岩割石を小口積みにして玄室を構築する。その際上・中・下三段階に分け、各段とも奥壁→左・右壁→前壁の順に積み上げられている。下段では掘形の上面、すなわち框（横口部下底面）の位置まで竪穴式石室と同様に控え積みを行ないながら積みあげている。中・上段では、下段と同様の小口積みを反復しながら、新たに横口部の構築という新しい工程を加え、天井石を横口部まで構築する。玄室を構築ののち横口前面の側壁に貼石状の石積みが行なわれ、玄室は割石をていねいに小口積みにするのに対し、前面の側壁割石・塊石を併用したやや乱雑な石積みとなっている。この石積みのある横口前面部はさらに浅いU字状の墓道に接続している。墓道は玄室に向かうにしたがい急に下降し、框石を覆う粘土層の上面に達している。すなわち石室の構築法のうち玄室および横口部までは割石小口積みが行なわれ、腰石の使用は認められない。特に玄室内の壁体構築法は老司古墳各石室や丸隈山古墳石室等に共通してみられる特色であり、その系譜に何らかの関連があったことが想定されるのである。しかし横口前面の石積み側壁とこれにつづく墓道の存在は、より横穴式石室的であり、横から入ろうとする強い思想のあらわれと解することができる。この点では、老司古墳各石室などに比較して構造的に後出する要素を有している。<sup>(註11)</sup>

玄室平面のプランは、概ね1：1.6の比率の長方形で前壁側がわずかに狭くなっている。そこで本古墳石室と主要な竪穴系横口式石室・初期横穴式石室との間の玄室平面形について玄室比（＝長さ÷幅）を求めて比較を行なった。老司3号石室は1.52で、他の3石室は2.21以上の<sup>(註12)</sup>

数値を示し、3号石室および他の3石室との間には、大きな格差が認められた。黄金山古墳石室<sup>(註18)</sup>は1.83、横田下古墳石室は1.52で老司3号石室と全く一致した。丸隈山古墳石室は1.62、小田茶臼塚古墳石室は1.61でほぼ近似した数値を示した。特に丸隈山・小田茶臼塚古墳石室と本古墳石室の間には相似に近い平面形を呈している。一方、従来縦穴系横口式石室とされてきた大多数の石室については、2.0以上の数値を示した。以上のようにいわゆる縦穴系横口式石室は概ね狭長な玄室平面形を呈するものが多く、老司3号石室および本古墳石室の場合は、例外的に一連の初期横穴式石室に近い平面を呈していることが明らかとなった。すなわち、玄室比による比較結果にみるかぎり、縦穴系横口式石室の一部と初期横穴式石室との間に何らかの関連があったことが想定でき、同時に老司古墳3号石室とその他縦穴系横口式石室との間には大きな差異が認められた。

玄室の屍床配置については、前章において、奥壁に平行する第1屍床と、左壁に沿った第2屍床、さらに右壁に沿った通路からなる「Γ」字状の屍床配置を想定した。また左壁中央に立てかけられた板石<sup>(註20)</sup>は床面の左壁側にのみ認められる溝状の掘り込みの中であって、築造当時から原位置を保っていたと考えられる。したがって、左壁の掘り込みに沿ってさらに数石の板石が立てられ、いわゆる組み合せ式の箱式石棺が設けられていた可能性がある。以上のような観点で見れば、北部九州型石障系石室の一類型<sup>(註21)</sup>としてとらえることができるのではなかろうか。

いわゆる石障系石室について、乙益重隆氏は、北部九州型・肥後型・縦穴系肥後型・半地下系肥後型の4つに大別し、さらにこれらを16に細分されて論及された。特に北部九州型は第一類(丸隈山古墳系)と第二類(横田下古墳系)を基準として四つに細分されている。丸隈山古墳は石室内に中央部の板石を共有する箱式石棺2基を並列させ、古くは板石で被覆されていたと伝えられる<sup>(註23)</sup>。横田下古墳は、いわゆる「はご板状」を呈する石室に奥壁に沿った部分と左壁に沿った部分に箱式石棺を設け、奥の石棺には蓋石をのせ、その前面には石障を立てている。横口部は中央よりやや右側に片寄った位置に設けられている。関行丸古墳は左壁に沿って1つ、奥壁に沿って2つの屍床を並列させ、真浄寺2号墳<sup>(註24)</sup>は石室の中央に縦方向とその前面に板石を立て、左右2つの屍床とその前面に副床ないし通路状の空間を設けている。以上のように丸隈山古墳および横田下古墳を初現として、石室内に在地的な箱式石棺を持ち込むという葬法は、関行丸古墳・真浄寺2号墳のように単に石障によって屍床を区画する方法へと変遷したとされる。本古墳石室は前述したように、「Γ」字状の石障を配するもので、しかも箱式石棺であった可能性もある。こうした特徴は北部九州型の石障系石室の系譜上に位置付けられるものであり、石室自体の構造との組み合わせから、いわば丸隈山古墳系・横田下古墳系とは別個に「城2号古墳系」(仮称)として1類型を追加設定すべきものであろう。

一方肥後型の石障系石室は、最古例とされる小坂大塚古墳の場合にみるように、割石小口積みした石室に「コ」字状の石障を配し、同様の石障配置をもつものに千金甲1号墳・塚坊主古

墳等があり、その成立の初期の段階から定形化されていて、構造的特徴はその後も永く継承され、肥後独特の古墳文化を形成した。その源流は「中国の漢代に行なわれた磚室墓の構築技術が何らかの形で反映しているのではなかろうか」とし、また「地下式板石積石室墓との関係があるのかも知れない」とする説もある<sup>(註25)</sup>。しかしいずれにしても、北部九州型とは別個の系譜の中で成立したことはほぼ確実である。また乙益氏により「竪穴系肥後型」第二類とされた別当塚古墳<sup>(註26)</sup>がある。この古墳は、正方形に近い長方形プランの竪穴式石室で、奥壁と右壁に沿って2つの屍床を設けている。石室の上部は破壊されていて詳細は不明である。屍床配置は横田下古墳のそれに対し、側壁に沿う屍床が左右反対の「r」字形となるが、基本的には同一類型内に収まる石障配置を示している。石室平面形は肥後形に近いものの、割石小口積みによる壁体の構築法は竪穴系石室の系譜上にあるものであり、また石障の配置と構造は北部九州型の石障系石室との関連がうかがえる。すなわち竪穴式石室の拡散によって、すでにその初期の段階から定形化されていた肥後型石室に接触した結果成立しえたものであろう。

横口前面の構造は、いわゆる竪穴系横口式石室の中で、最も多くみられるもので、ややラップ状に開く石積みのある側壁とそれにつづく墓道からなっている。この部分の床面にはわずかな腐蝕土層を認めたが、埋葬後おそらく一気に埋めもどされていて、おそらくこの部分からの追葬は行なわれなかったものと考えられる。しかし構造的に明らかに追葬を目的として構築されたもので、より横から入ろうとする意識が強く働いたものと思われる。ところが、前項で述べたように、玄室壁体と横口前面の側壁との間の石材およびこれらの石積み技法には明瞭な差が認められる。これらが同時に構築されたものか、あるいは横口前面の側壁が後に付け加えられたものかは明らかにすることはできないが、いずれにしても留意すべき点であろう。

#### [ 4 ]

以上のように、本古墳石室にみられる形態的・技法的特色について簡単にふれ、それらが初期横穴式石室の中でどのように位置づけられるかを検討しようとした。

老司古墳とくに3号石室を契機として成立した竪穴系横口式石室は、その成立母体に畿内系の竪穴式石室が介在した。しかしその後この種の石室は北部九州の極めて限られた地域で継承され消滅したものと思われる。一方丸隈山・横田下古墳のように、石室内に在地的な箱式石棺を組み合わせる方法が行なわれ、これらは北部九州型の石障形石室として一定の系譜が認められる。これらの初期横穴式石室は竪穴系横口式石室の特定要素を継承しながらも、別個の系譜をたどったが、定形化することなく在地的な葬法の中に吸収されたものと思われる。城2号古墳石室の成立は前述した丸隈山・横田下古墳石室に代表される初期横穴式石室の、周辺部への系譜の拡散現象の一つとしてとらえることができる。そして本古墳石室の成立後は上ノ鼻古墳群各石室<sup>(註27)</sup>にみるように、天草群島を中心とする地域への影響が想定されるが、直接的に系譜上後続する古墳の発見はみえていない。

また肥後型の石障系石室は、小坂大塚古墳をはじめとして、その出現の段階から定形化して、北部九州型の石室とは別個の系譜で成立したもので、その基本形態は大陸の墓制に求められるものと思われる。肥後型石室はまず有明海沿岸地域に出現し各地に広まったが、本古墳と同じ丘陵に存在する城1号墳は、まさしく肥後型石室であり、両者をして一つの古墳群を形成するといった現象を生じた。ところが一方では、<sup>(註28)</sup> 竪穴系横口式石室とも北部九州型石室とも異なった竪穴式石室に石障を設けた古墳の成立をみている。別当塚東古墳・小鼠蔵1号墳などがそれで、これらは北部九州型石室の伝播に前後して成立したもので、その後の肥後型石障系石室の初現的構造をなすものであろう。

ちなみに本古墳の成立年代は、石室構造上は、概ね横田下古墳との平行関係が指摘できるが、丸隈山古墳との前後関係が問題となるだろう。現況では丸隈山古墳にやや後出し、横田下古墳に平行する時期に位置付けられる。一方別当塚古墳・小鼠蔵1号墳石室との前後関係とが問題となろうが、おそらくこれらの古墳に平行するかやや後出するものであろう。したがって5世紀中葉よりやや降る時期に位置付けられるのではなかろうか。このことは出土遺物の年代観とは必ずしも一致していない。この点については今後の問題として残さざるを得ない。

このように有明海灣沿岸地域では、北部九州に発生した竪穴系横口式石室の成立後、異なった系譜上にある石室構造の古墳が相前後して伝播して、それぞれの地域で採用された。それらが肥後型石室として定形化する過程は極めて複雑で、一概には論じえない。本古墳石室の場合、類似した石室の調査例がなくまた類例にも乏しい、疑問点の多くは今後の課題としなければならない。

(野田)

#### 註

- (1) 古墳のある通称田平丘陵は、ほとんど蜜柑山として開墾され、墳丘の周囲も開墾によってかなり変形している。特に墳丘の東側は後の田平城の掘り切りによって大きく削り取られ石室控積みの一部が露出している。
  - (2) 小田富士雄「古墳文化の地域的特色—九州」『日本の考古学IV』1966年 東京。
  - (3) 本報告付論2 菊池泰二「石灰藻ヒライボについて」による。
  - (4) 本報告付論5 池田栄史「竪穴系横口式石室地名表」による。
  - (5) 註2に同じ。
  - (6) 岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄・下條信行・亀井明德・佐田茂『老司古墳調査概報』福岡市教育委員会 1969年 福岡。
  - (7) 石山勲「片山古墳群」『福岡県文化財調査報告第32集』福岡県教育委員会 1970年 福岡。
- 氏は同書の中で、従来の研究史を踏まえて、竪穴系横口式石室について概念規定を試みると共に、その前壁構造に就いて、A～Cの3つに分類している。

- A・前庭部側壁が構築されず、横口前面に直接墓道が付設される。
- B・前庭側壁が構築される。
- C・前庭側壁に続いて墓道が付加される。

尚、筆者は分類に用いられた前庭・乃至前庭部なる名称とその位置に就いて、通常横穴式石室或は横穴等の開口部前面にあって、通路的機能を持つと共に墓前祭祀行為に使用された一定の空間を指すものと理解している。従って竪穴系横穴式石室の横口前面に接続される石積みのある空間に就いては、墓道すなわち通路の一部であって、墓道の左右の壁面に石積みを施したものにすぎない。仮にこの石積みの上部に天井石の構架があれば羨道乃至羨道部と呼ばなければならないし、又この種の石室に前庭部というべき空間があるとすれば、それは墓道の前面、或は石積みのある墓道前面であると考えている。

- (8) 佐田茂「竪穴系横穴式石室の一側面」『史淵』第112号 九州大学文学部 1975年 福岡。  
氏は竪穴系横穴式石室の横口を下記のように分類している。
- I類 斜め上方からはいるという形をとり、老司古墳3号石室の構造を基本形とする。
  - II類 横口部に段を設け、斜め上方から入る形式であるが、その先は板石を立てて閉塞する形をとり、黄金山古墳があてられる。
  - III類 横口部の構造はII類と変わらないが石積みの方法が粗雑で、側壁に腰石を使用し、転石等を使用する。  
(関行丸古墳、片山9号墳)
  - IV類 羨道部側壁が明確につくりだされ、その前に墓道部がつく形式。(勇猛山3号墳、七双子2号墳)  
本古墳石室を同氏の分類に従えば第II類にあたり、また横口前面の構造については、すでにIV類の機能を兼ねそなえている。
- (9) 柳沢一男「北部九州に於ける初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会 1975年東京。  
氏は同書の中で次のように分類されている。
- I・横口部は小口壁の中位に下底面を置き、所謂棚状構造をとる。
  - II・横口部に袖石を配置せず無袖型プランの石室を示す。
    - a・框施設を有する。
    - b・框施設を持たない。
  - III・横口部に袖石を配置する石室
    - a・框施設を有する。
    - b・框施設を持たない。
- (10) 筆者は竪穴系横穴式石室の概念に就いては、狭義に理解すべきだと考えている。すなわち壁体構築に際し、基部に腰石を使用する一群の石室に就いては、竪穴系横穴式石室と呼ぶには少なからず疑問を抱いている。所謂竪穴式石室の割石を小口積みにする最も基本的特徴の中に、腰石を使用するという技法の導入は、石室構築技法に於ける一つの画期と考えるからである。
- 尚、長崎県大村市黄金山古墳に見られるように石室の四壁に板石を立て、その上部を割石で小口積みにする例が問題となろうが、この板石に就いては、機能的には腰石ではなく石障と考えるべきである。この板石に就いて乙益重隆氏は、「腰壁状の板石」と表現されている。(乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『国学院大学大学院紀要』国学院大学大学院 1979年 東京。)
- (11) ここでいう画期とは、あくまで技法上の変化をさしている。壁体の基部から割石を小口積みにするという技法と基部に腰石を使用し、また羨門部に袖石を用いる技法とは系譜的に異なるものと考えられる。
- (12) 竪穴系横穴式石室の概念は各研究者間で意見が異なり、この種の石室もいくつかの要素のうち一つの要素のみ取りあげて「竪穴系横穴式石室」と呼ぶとすれば、今後もさらに増え続けるにちがいない。しかし、南



鮮各地にみられるこの種の石室のうち年代的に老司古墳3号石室をさかのぼるものがない現段階では、日本で独自に成立したものと考えべきであり、こうした点から「竪穴系横口式石室」と呼ぶにふさわしい石室は、老司古墳各石室を中心とする一握の数に限定されることになる。

(13) 註6

(14) 三島格・下條信行・小田富士雄・永井昌文『丸隈山古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 福岡市教育委員会 1970年 福岡。

(15) 本古墳石室の場合、玄室床面と框部分との段差は明瞭であるが、框上面はゆるやかな傾斜で墓道へと接続していて、すでに「横穴式石室」にふさわしい構造となっている。また玄室と框部分との段差を有する石室は、各地の古墳にみとめられるもので、必ずしも竪穴系横口式石室のみにもみられる特色とは言いきれない。

(16) 竪穴系横口式石室、及び初期横穴式石室のすべてについて玄室比を算出したものではなく、その点で恣意的の感を免れないが、竪穴系横口式石室を狭義に解釈する立場から、これ以上の論及は行なわない。

(17) 註9

(18) 小田富士雄「長崎県大村市黄金山古墳調査報告」九州考古学37・40号 1970年 福岡。

(19) 両者の玄室比に共通性があることは必ずしも偶然的なものとは考えられない。老司古墳3号石室を初期とする竪穴系横口式石室が初期横穴式石室への推移の過程で、構造・技法的には段階的変化があったが、玄室比にみられる石室平面のプランは、より強く踏襲された可能性がある。

(20) こうした構造は横田下古墳石室などにも系譜的に関連するものと考えられる。

(21) 乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『国学院大学大学院紀要』国学院大学大学院 1979年 東京。

(22) 註21

(23) 「丸隈山古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯P68～P70 福岡県 1925年 福岡。

(24) 岩崎光「八女地方の古墳終末期と副葬」九州考古学10 1960年 福岡。

(25) 註21

(26) 三島格「別当塚・塚山古墳」『荒尾市文化財解説』第1集 1975年 荒尾。

またこの古墳の詳細については三島格氏の御教示を得た。

(27) 上ノ鼻古墳群は永浦島にある。1956年坂本経堯（主任）・村崎盛之・松岡史・志佐禪彦・三島格氏が調査。その後熊本県文化課・熊本大学らが調査。坂本氏らの資料は泗水町坂本記念館に収蔵。

①坂本経堯「天草の古代—松島地区調査概報」熊本史学 10 1976年 熊本。

②坂本経堯・経昌『天草の古代』P76～78 1971年 熊本。但し①の要約。

天草郡松島町永浦島にあり、計9基の円墳からなる古墳群である。玄室は長方形で四壁に一枚石を用いた石障を配し、壁体は割石・転石を小口積みにする。羨門部は両裾形に裾石を立て、框石を置き、さらに短かい羨道を付している。羨道部は玄室に向って急に下降し、框上面と玄室床面はわずかな段をなしている。成立年代はおそらく5世紀後半以降であろう。

(28) 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財』第3集 1977年 宇土。

### 3. 琴柱形石製品について

#### ① はじめに

今回、城2号墳の発掘調査で注目された点に、石室の構造と屍床に敷かれた石灰藻、それに九州では稀有な遺物である琴柱形石製品の出土がある。

琴柱形石製品については古くから先学の優れた論考があるが、特に昭和48年に発表された亀井正道氏の「琴柱形石製品考」<sup>(註1)</sup>は今までの琴柱形石製品を集大成したものといえる。

そもそも琴柱形石製品という名称自体、いうまでもなく、その使用法に対し付けられたものではない。琴柱形石製品の名称で包括されるこの石製品も型態的にはバラエティーに富み、琴柱という名称からはほど遠いような形のものにまで及んでいる。そこでここでは城2号墳と同じ形態で、亀井氏のいう恵解山型の琴柱形石製品を主に取り上げ、言及してみたい。

#### ② 九州出土の琴柱形石製品

城2号墳からの琴柱形石製品の出土は、熊本県では初例であるが、地域的（九州）なとらえ方をすれば、従来までに北部九州の3古墳から計7個の出土がある。そこでこれらの琴柱形石製品の出土状態等について概述する。

##### <sup>(註2)</sup> 七夕池古墳 福岡県粕屋郡志免町田富字七夕谷

宇美川右岸丘陵上に立地する径29mの円墳で、回りに幅3.5mの周濠を巡らす。主体部の竪穴式石室は葺石と同様の塊石（川原石）を用い、その内部に木棺を納める。石室内には40代から50代の女性人骨が一体遺存し、副葬品はこの被葬者の頭部付近、それに左大腿骨と側壁間の2箇所から集中して出土した。左大腿骨付近の副葬品は、被葬者に刃部を向けた鉄刀1と、蕨手刀子2である。頭部の周囲には10数本の竹櫛と径12.1cmの内行花文鏡が、さらにその下から3、300個あまりの滑石製白玉と小算盤玉が整然と箱か何かに入れたような状態で出土した。琴柱形石製品は被葬者の右耳下と右後頭部からの2個出土し、これらは管玉5個と、白玉数十個を連続したようだったという。七夕池古墳出土の琴柱形石製品は亀井氏のいう恵解山型で、2個とも暗緑色を呈する滑石製である。<sup>(註3)</sup> 法量は2個ともほぼ同じで高さ3.4cm、脚部幅3.9cm、厚さ0.5cmを測る。本古墳の報告者は、この琴柱形石製品を装身品の一種と報告している。

##### <sup>(註4)</sup> 森上古墳 佐賀県佐賀郡大和町久地井

古く昭和18年4月農作業中に発見された古墳で、墳丘は明らかではないが、方10間あまりが4尺ほど高かったという。埋葬施設は長さ7.5尺、幅1.8尺ほどの、板状安山岩を組み合わせた箱式石棺である。棺内からは頭部を違えた2体の人骨が検出され、南に向けた人骨の頭部付

近に、素文縁変形文鏡と鉄剣・刀子・鉋・鉄先が出土した。琴柱形石製品は北側に頭部を向けた被葬者の枕石あたりから竹櫛2本とともに1個出土した。森の上古墳出土の琴柱形石製品も恵解山型で、高さ3.25cm、脚部幅2.8cm、厚さは頭部で1.5cm<sup>(註5)</sup>ほどを測るもので、石質は蛇紋岩製である。報告にあたられた松尾禎作氏は、髪飾の一種ではなかろうかと推定している。

丸山2号墳<sup>(註6)</sup> 佐賀市久保泉町大字川久保

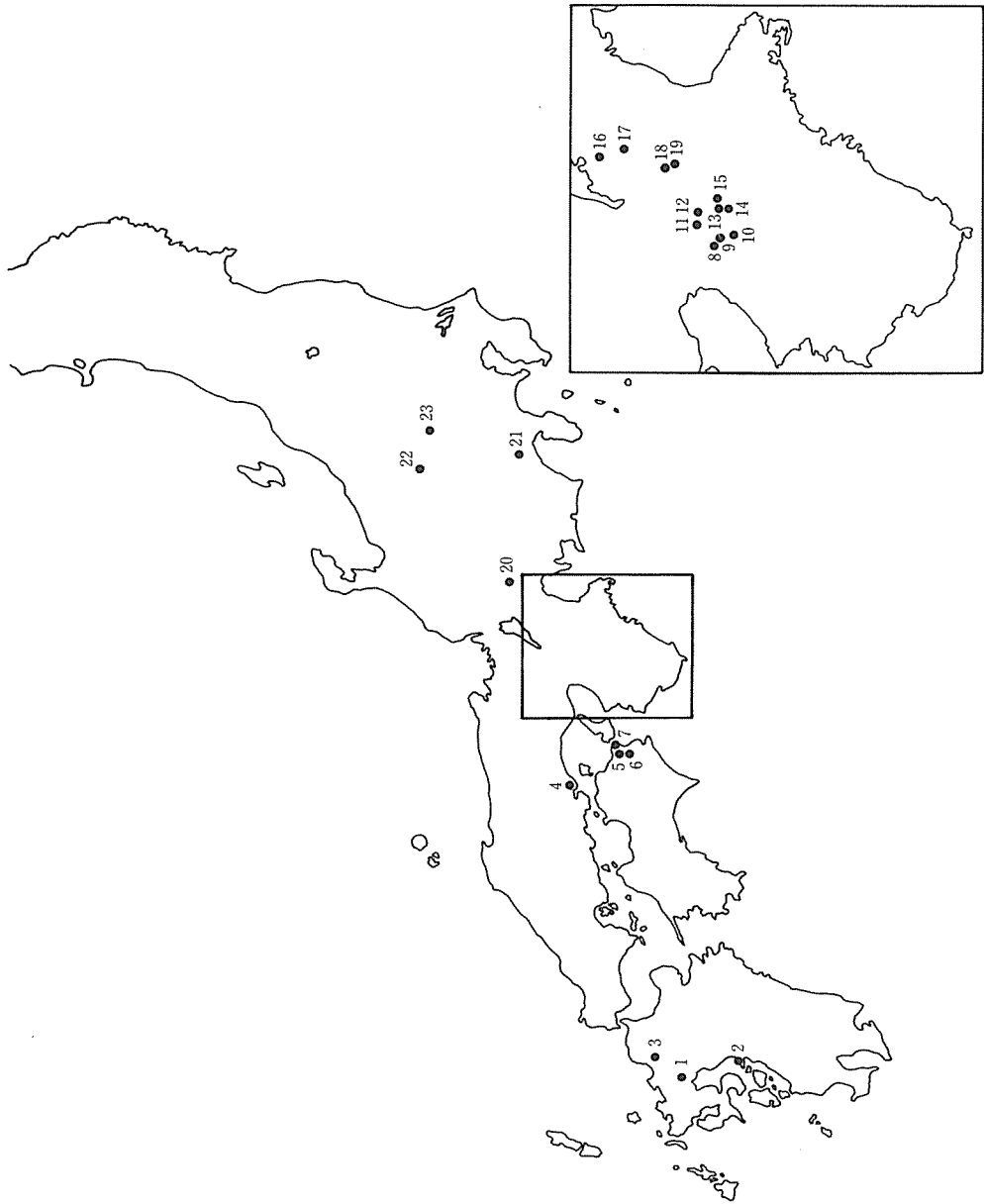
丸山遺跡は九州横断自動車道の建設にあたり事前に調査された遺跡であるが、その中で10基の円墳が調査され、2号墳から4個の琴柱形石製品が出土した。本墳は二段築成で、墳丘は径12.6m、高さ2.1mで周囲に幅2.4mの周溝を巡ぐらす。主体部は南側に開口する長さ2.05m、幅2.02m、高さ1.6mを測る単室の横穴式石室である。石室の回りには石障を設け、屍床には石枕を有する。副葬品は遺存度の良い鉄器類で、これらは鉄剣3・鉄鉋1・刀子1・鉄剣2・鉋子形鉄製品1・鉄斧2・鉄鎌1・鉋1と数多くの種類にわたっている。その他、勾玉・管玉・小玉などの装身具類や、砥石が出土した。ところで丸山2号墳から出土した琴柱形石製品は、玉類・鉄釧と一緒に出土したことから、首飾りか腕飾りではなかったろうかと推定している。なお本墳出土の琴柱形石製品は、前述した2古墳及び、城2号墳から出土した型式とは異なり、宮山型とよばれるものである。

### ③ 恵解山型の琴柱形石製品

城2号墳出土の琴柱形石製品は、前述したように亀井氏の分類に従えば、恵解山型と呼ばれるもので、徳島市の恵解山2号墳出土の琴柱形石製品を標式にして付けられた型式名である。このタイプは琴柱形石製品の中でも最も琴柱に似かより、その名称からも頷ける形態をなしている。しかも現在までに出土している琴柱形石製品の中でも最も多い型式でもある。(第5表参照)

ところで城2号墳出土の琴柱形石製品は、体部各箇所には各1本の条線を有し、また体部側面には抉りを入れるタイプである。このような城2号墳出土の琴柱形石製品は恵解山型の中でも、通例みられる形を呈し、特にNo.1などは形態的にも均正がとれ、仕上げも入念で、恵解山型の典型といえる。つぎに城2号墳出土の琴柱形石製品で類例を求むれば、No.2については寡聞にしてその例を知らないが、No.1については、奈良県佐味田宝塚古墳<sup>(註8)</sup>、同讃岐神社内古墳、三重県石山古墳<sup>(註9)</sup>、岐阜県坊の塚古墳のものを上げることができる。

ところで恵解山型の琴柱形石製品を2点以上出土した遺跡でその組み合わせをみれば、恵解山型を細分してみた場合、同じタイプであり、他のタイプとの伴出が極めて少ない。たとえば奈良県古市古墳<sup>(註10)</sup>からは4点の出土をみるが、恵解山型でも通例みられるものに比べ簡略化したような同じ形のもの<sup>(註11)</sup>の組み合わせである。またこれは三陵墓西古墳<sup>(註12)</sup>のものもそうであり、恵解山2号墳<sup>(註13)</sup>・鳥羽山洞穴<sup>(註14)</sup>・讃岐神社内古墳<sup>(註15)</sup>・七夕池古墳<sup>(註16)</sup>・久米山6号墳<sup>(註17)</sup>・東坂古墳<sup>(註18)</sup>・伝富雄丸山古墳<sup>(註19)</sup>



第12図 琴柱形石製品（恵解山型）分布図

第5表 琴柱形石製品（恵解山型）出土地名表（亀井，1973年。平山，1981年加筆）

遺跡名	所在地	遺跡の種類	出土個数	伴出遺物	時期	文献
1 森上古墳	佐賀県佐賀郡大和町久地井	円墳・箱式石棺	1	変形文鏡，櫛，劍，鉄先，刀子，鏃	5 c 後半	1
2 城2号墳	熊本県宇土市上綱田町字城	円墳・竪穴系横口式石室	2	管玉，小玉，鉄劍，鉄斧，鉄鏃，刀子，鉄鏃？	5 c 中葉	本書
3 七夕池古墳	福岡県粕屋郡志免町田富字七夕谷	円墳・竪穴式石室	2	内行花文鏡，管玉，白玉，櫛，銅環，鉄輪，小算盤玉，鉄釘片，鉄刀，藤手刀子	5 c 前半	2
4 東福寺山上古墳	岡山県久野郡久野町山田庄	円墳・竪穴式石室	1	管玉，白玉，ガラス小玉	5 c 中葉～後半	3
5 谷口山上古墳	徳島県鳴門市大麻町松	古墳・不明	1	珠文鏡，勾玉，管玉	5 c 後半～6 c 初頭	
6 恵解山2号墳	徳島県徳島市八万町下福万	円墳・箱式石棺2，副室1	4	管玉，櫛，刀子，劍，短甲殘欠，衝角付冑，肩甲殘欠，頸甲，刀，劍，鏃，鏃，斧	5 c 前半	4
7 小林古墳	徳島県板野郡大麻町姫田字小森	古墳	1			5
8 佐味田宝塚古墳	奈良県北葛城郡河合村佐味田	前方後円墳・竪穴式石室	1	各種鏡，勾玉，管玉，石劍，鉄形石，石製合子，石製劍，鏃，刀子，鏃，巴形銅器，銅鏃等	4 c 末	6
9 譚岐神社内	奈良県北葛城郡広陵町三吉	古墳？	7	鏡，勾玉，管玉，裏玉，白玉，管形石製品，石製埴，有孔石製品，鉄刀	5 c 中葉	
10 鐘子塚	奈良県御所市柏原字鐘子塚	前方後円墳 竪穴式石室内に長持型石棺	5？	金銅製帶金具，同垂飾金具，鉄製垂飾金具	5 c 前半	7
11 伝富雄丸山古墳	奈良県奈良市大和田町丸山	円墳・粘土櫛？	6	各種鏡，管玉，銅製有鉤劍，銅薄板，鉄形石，石製合子，同斧，同鈍，同刀子，同のみ	4 c 後半	8
12 古市古墳	奈良県奈良市古市町	方墳？ 粘土櫛2	4	二神二獸鏡，内行花文鏡，画文帯神獸鏡，盤龍鏡，勾玉，管玉，裏玉，ガラス小玉，白玉，斧，鏃，刀子，鏃，劍	5 c 前半	9
13 三輪山遺跡	奈良県桜井市三輪町馬場山ノ神	祭祀遺跡	4	滑石製模造品，土製模造品，玉類	5 c～6 c	10
14 池ノ内5号墳 第3棺	奈良県桜井市池之内字馬場	円墳・木板か？	4	滑石製勾玉，管玉，垂飾品，紡錘車，櫛，筒形銅製品，鉄刀，鉄劍	5 c 初頭	11

遺跡名	所在地	遺跡の種類	出土個数	伴出遺物	時期	文献
15 三陵墓西古墳	奈良県山辺郡都祁村南之庄	円墳・粘土槨	7	勾玉, 管玉, 白玉, 櫛, 鉞, 斧, 鎌, 劍, 鏃, 刀, 鏃	5 c前半	12
16 八重谷古墳	滋賀県蒲生郡竜王町	古墳・不明	1	鏡, 管玉		
17 水口	滋賀県甲賀郡水口町	古墳・不明	1	管玉		
18 久米山6号墳	三重県上野市久米町	円墳・粘土槨	2	方格規矩鏡, 菱形神獸鏡, 白玉, 玉類, 鉄釧, 劍, 直刀, 刀子, 鏃, 斧, 鉞, 有孔円板	5 c中葉	
19 石山古墳	三重県上野市才良	前方後円墳・粘土槨	各タイプ 25	各種鏡, 装身具, 鉄製・銅製武器類, 農具, 碧玉製品, 石製模造品等	4 c末~ 5 c初頭	13
20 坊の塚古墳	岐阜県各務原市鷺沼町羽場	前方後円墳	1	勾玉, 管玉, 白玉, 石製斧, 同刀子	5 c前半	
21 東坂古墳	静岡県富士市鶴無大阪上	前方後円墳・粘土床	2	内行花文鏡, 菱形四獸鏡, 勾玉, 管玉, 小玉, 白玉, 石釧, 劍, 刀, 鉞等	4 c末~ 5 c初頭	14
22 鳥羽山洞穴	長野県小県郡丸山町腰越	岩陰埋葬遺跡	2	管玉, ガラス玉, 白玉, 石釧, 紡錘車, 劍, 鏃, 彎鏡板, 銜, 斧, 鉞, きさげ, 鏃, 鹿角製鳴鏑, 土師器, 須恵器		15
23 茶臼山古墳	群馬県高崎市下佐野戸崎	円墳・不明	2			

註 この表は亀井正道氏の『琴柱形石製品考』を基に作成した。なお地名表作成にあたっては次の方々から御教示を得ることができた。記して謝意を表します。(敬称略) 亀井正道・上田秀夫・大野左千男・古森政次・麻柄幸子

#### 文献

- (1) 松尾禎作「森上古墳」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第8輯 1949 佐賀 東京。
- (2) 上野精志『七夕池遺跡群』志免町文化財調査報告書第1集 1974 福岡。
- (3) 鎌木義昌『岡山県重要文化財図録』1957 岡山。
- (4) 末永雅雄他「眉山周辺の古墳一恵解山古墳群・鉾山古墳群一」徳島県文化財調査報告第9集 1966 徳島。
- (5) (4)に同じ
- (6) 梅原未治『佐味田及新山古墳研究』岩波書店 1921 東京。
- (7) 末永雅雄『大和の古墳』河原書店 1950 東京。
- (8) (7)に同じ
- (9) 『奈良市史』考古篇 1968 東京。
- (10) 樋口清之「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」考古学雑誌18巻10・12号, 1928 東京。
- (11) 久野邦雄他『馨余・池ノ内古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第28冊 1973 奈良。
- (12) 中村春寿・小島俊次「三陵墓西古墳調査概報」奈良県綜合文化調査報告部田野地区 1952 奈良。
- (13) 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」日本考古学協会第8回総会研究発表要旨 1951 東京。
- (14) 吉原市教育委員会『吉原市の古墳』1968 静岡。
- (15) 関孝一「東信濃鳥羽山洞穴における古代祭祀遺跡」考古学雑誌52巻3号 1967 東京。

と、恵解山型の琴柱形石製品を2点以上出土した遺跡のほとんどがそうである。しかし城2号墳の琴柱形石製品2点は、石材は同じであるが、形態的に異なる形であることから、これは明らかに製作工人の違いを反映していると言える。本墳から出土した人骨の鑑定に当たられた、九州大学医学部教授永井昌文氏は、被葬者は複数埋葬であり、一体は成年男子、もう一体は不明とのことである。したがって被葬者の違いによって琴柱形石製品の形態が異なるのではないかとの疑問も生じてくる。

恵解山型の琴柱形石製品を出土した古墳で、三角縁神獣鏡を併出した古墳、それに前方後円墳が少ないことが上げられる。これは碧玉製品などと異なり、恵解山型の琴柱形石製品に直接的には畿内との政治力を認められないことと言えよう。ところが、恵解山型の琴柱形石製品の分布をみれば、畿内中心であり、関東、九州に広がるにつれ、少なくなってくる。しかしながら先述したように恵解山型の琴柱形石製品が各遺跡ごとに独自の形を示し、均一性がないことには、製作地（供給地）の問題が大きく絡んでいるように思われる。そこで今後、各遺跡出土の琴柱形石製品の石質同定を行ない、その需給関係を究明する必要があるだろう。

#### ④ まとめ

琴柱形石製品は、古墳時代の遺物の中でも問題が多いものの一つであり、とりわけその出土状態については興味もてる。しかしながら城2号墳の場合、遺物出土のところでも述べているように、石室の開口が古いため、原位置での出土かどうか不明である点措まれる。

さて石室内の屍床配置については、別項の石室構造の中で述べられているとおりである。これによれば、琴柱形石製品は奥壁に平行する第1屍床からの出土となり、第1屍床内に被葬者が1人であったとすれば、琴柱形石製品は頭部または足元からの出土となる。しかし琴柱形石製品の足元への副葬というのも例はあるが考えがたく、当然頭部または頸部周辺への副葬の可能性が高い。けれどもこれは、あくまで原位置からの出土という想定であり、石室内が攪乱を受けている点では想像の域は脱しえない。しかしながら2点とも出土位置は距離的にも近接しており、両者が2次的に移動しているとしてもさほど矛盾は感じられない。

このように城2号墳では琴柱形石製品が、被葬者の頭部または頸部周辺に、しかも同じ滑石製の管玉・小玉とセットで副葬されていたことから、装身具として使用されていた可能性が濃い。ここで琴柱形石製品が他からの移入品だとすれば、同じ石質である管玉・小玉、も当然セットでもたらされたであろう。恵解山型の琴柱形石製品のほとんどに見られる中央部に穿たれた小孔をみれば、ほとんどの例、その孔には紐ズレなどが認められないこと、それにほとんどが埋葬に伴う遺物であり生活跡からの出土がないことを考え合わせれば、亀井氏の指摘されているように葬送に伴う一種の儀器であると思われる。

つぎに、恵解山型の琴柱形石製品を出土した遺跡の年代について触れれば、最も古い例で

は4世紀後半まで遡るものがあり、一部6世紀まで残存する。が概ね5世紀前半から中頃に集中する。このようにみれば、城2号墳出土の琴柱形石製品は、年代的に石室等の年代ともほぼ一致するといえる。

ところで、城2号墳は有明海を臨む丘陵上に位置し、屍床には石灰藻が敷かれているなど慣海的性格を備悉していることから、本墳被葬者の経済的基盤の一つを有明海に求めることができよう。このような背景で活動していた集団の長が、城2号墳の被葬者であるとするれば、琴柱形石製品は有明海を媒体とした対外的交易の中でもたらされた遺物であると解することもできよう。

(平山)

#### 註

- (1) 亀井正道「琴柱形石製品考」東京国立博物館紀要第8号 1973 東京。
- (2) 上野精志『七夕池遺跡群』志免町文化財調査報告書第1集 1974 福岡。
- (3) 九州歴史資料館亀井明德氏の御教示による。
- (4) 松尾禎作「森上古墳」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第8集 1949 佐賀。
- (5) 佐賀県教育委員会文化課田平徳栄氏の御教示による。
- (6) 佐賀県教育委員会『丸山遺跡一発掘調査概報一』1979 佐賀。
- (7) 末永雅雄他『眉山周辺の古墳一恵解山古墳群・節句山古墳群一』徳島県文化財調査報告第9集 1966 徳島。
- (8) 梅原末治『佐味田及新山古墳研究』岩波書店 1921 東京。
- (9) 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」日本考古学協会第8回総会研究発表要旨 1951 東京。
- (10) 『奈良市史』考古篇 奈良市、1968 東京。
- (11) 中村春寿・小島俊次「三陵墓西古墳調査概報」奈良県総合文化調査報告部介野地区 1952 奈良。
- (12) 関 孝一「東信濃鳥羽山洞穴における古代祭祀遺跡」考古学雑誌52巻3号 1967 東京。
- (13) (2)に同じ
- (14) 吉原市教育委員会『吉原市の古墳』1968 静岡。
- (15) 末永雅雄『大和の古墳』河原書店、1950 東京。

## 4. 圭頭斧箭式鉄鏃について

### ① はじめに

1939年に後藤守一氏が<sup>(註1)</sup>「上古時代鉄鏃の年代研究」を著わしてから、既に40有余年を経過し、その間の出土鉄鏃数は、数倍から数十倍に達していると考えられる。

にもかかわらず鉄鏃に関する体系的研究はほとんどなされておらず、僅かに末永雅雄氏の武器・<sup>(註2)</sup> 器具に関する一連の研究が高い評価を得ているのみである。

後藤・末永氏の分類が、今日なお歴然と生きていることは、昨今の大量発行されている報告書をもみても明らかで、各鉄鏃の各称・分類の全てがそのいずれかに依っているといても過言



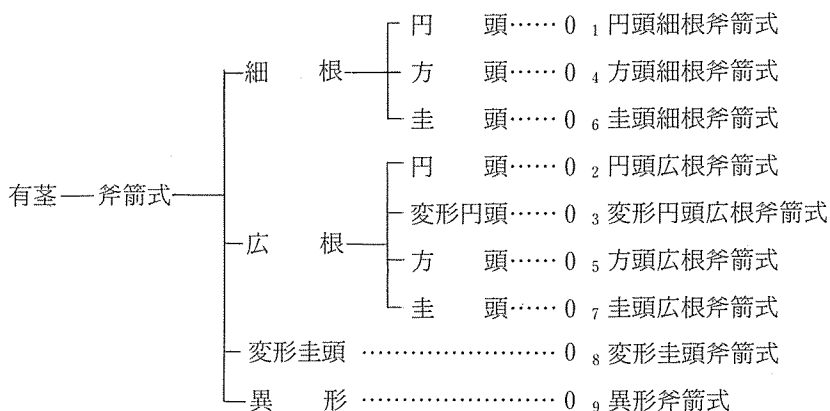
ではなかろう。

特に、後藤氏の分類は精緻をきわめ、多種にわたる鉄鏃を完璧なまでに細分することに成功している。小文では、氏が圭頭斧箭式として分類した鉄鏃について若干の考察を行い、城2号墳出土鉄鏃の位置づけを試みようとするものである。

## ② 形式分類

圭頭斧箭式鉄鏃の名称は、天平勝宝8(756)年の東大寺献物帳に“斧箭”とみえることに由来する。さらにこれは、近世の『鏃鋒図景』の“鳥舌式”<sup>(註3)</sup>とされているものにも含まれる。

後藤氏はこの斧箭式を円頭・方頭・圭頭に分け、さらに身幅の広狭によって細分化<sup>(註4)</sup>している。氏の、鉄鏃形式分類2種21類別187目のうち、斧箭式関連部分を抄出すると次のごとくである。

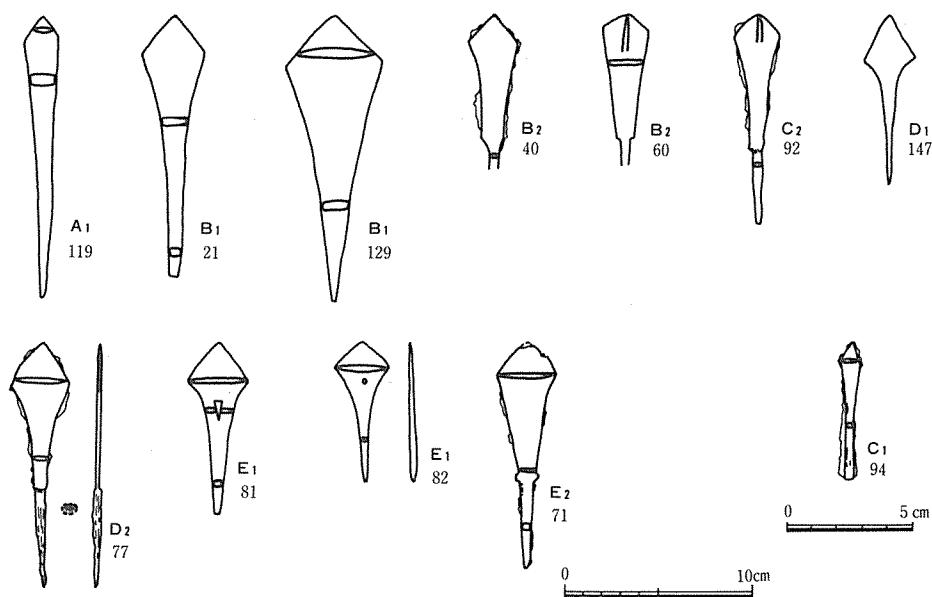


さらに、O<sub>2</sub>には透根円頭広根斧箭式が、O<sub>6</sub>には有孔圭頭細根斧箭式が付属様式として追加される。

このうち、圭頭斧箭式に限定すれば O<sub>6</sub>・O<sub>6</sub>・O<sub>7</sub>・O<sub>8</sub>の4形式が得られ、氏はそれぞれに1例ずつの参考例を図示している。

ところがこの4例は、篋被ぎ部分の関のさかい目に段のあるものについては区別がなされておらず、後述のごとくそれが重要な意味をもってくると私考されるので、次のごとく10形式に細分を行なうことにする。

- |                           |                              |
|---------------------------|------------------------------|
| A <sub>1</sub> 圭頭細根斧箭式    | A <sub>2</sub> 有段篋被圭頭細根斧箭式   |
| B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式    | B <sub>2</sub> 有段篋被圭頭広根斧箭式   |
| C <sub>1</sub> 変形圭頭細根斧箭式  | C <sub>2</sub> 有段篋被変形圭頭細根斧箭式 |
| D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式  | D <sub>2</sub> 有段篋被変形圭頭広根斧箭式 |
| E <sub>1</sub> 有孔・透根圭頭斧箭式 | E <sub>2</sub> その他           |



第13図 形式別圭頭斧箭式鉄鏃 (数字は第7表のNoと一致。出典はその該当Noの文献による。)

厳密な意味での細根と広根は区分けが困難であり、やや感覚的なそしりをまぬがれないが、後藤氏分類を参考に、鏃身の長さとの幅の比を0.35より多いものを広根、それより少ないものを細根として区別する。例えば城二号墳No.26の場合は0.39で広根となる。

### ③ 出土例

圭頭斧箭式鉄鏃出土地は文末の地名表(第7表)のごとくであり259遺構648本を数える。

筆者の管見にふれた範囲での集成であるため、かなりの遺漏は免がれないと思われるが、大方の傾向はうかがうことができるものと思う。これを各県ごとの形式分類別出土数で表示すれば次表(第6表)のようになる。

数量的にはB<sub>1</sub>が圧倒的に多く、D<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>がこれに次ぐ。しかも全体の91%は九州に分布し、なかでも鹿児島・宮崎・福岡・熊本に多い。形式的にはB<sub>1</sub>が鹿児島・宮崎・熊本、B<sub>2</sub>が福岡、D<sub>1</sub>が宮崎に集中し地域的偏在がうかがわれる。圭頭斧箭式鉄鏃の残り9%もそのほとんどが西日本地方であり、九州に最も近い山口県が顕著となっている。この偏在性は、古墳の最も集中し鉄器が大量出土する畿内地方では皆無に近い状態であることによって、いっそう明らかであろう。

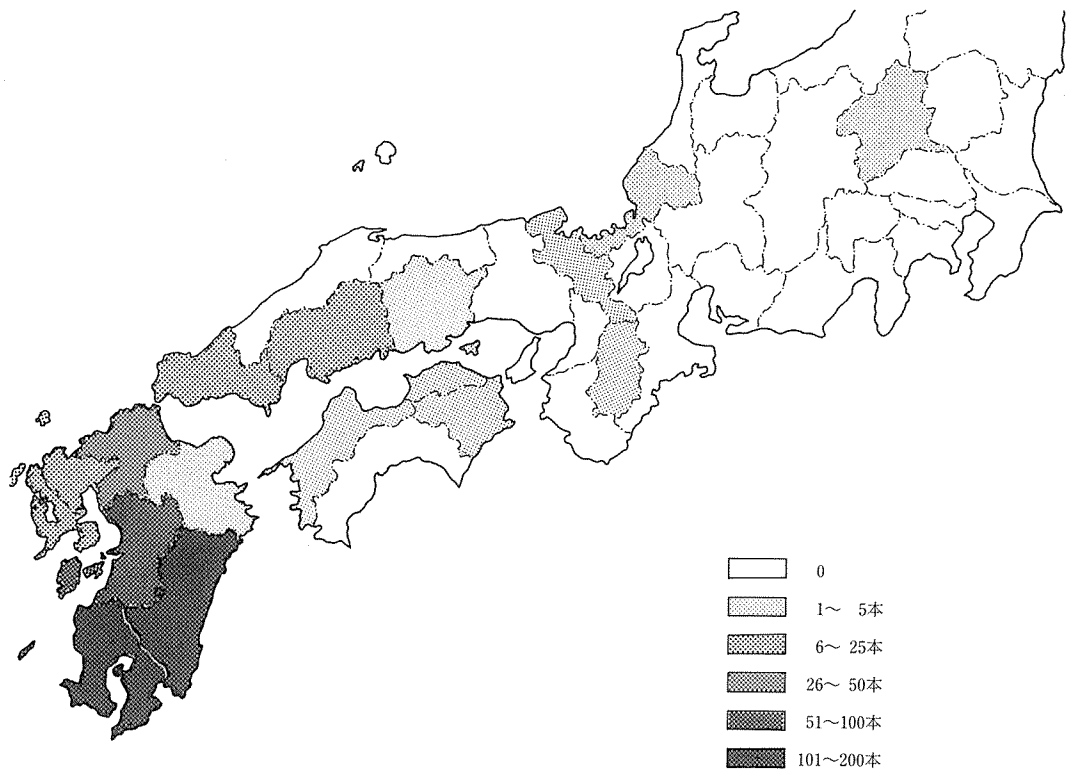
特に、武器を大量埋納した古墳のうち、鉄鏃を500本以上納めていた大阪府野中アリ山古墳・大阪府野中古墳・奈良県五条猫塚古墳にこの種の鉄鏃を1例もみないことは、その傍証とみてよい。

第6表 圭頭斧箭式鉄鏃各県形式別出土一覧表

形式別 県別	A		B		C		D		E		
	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	E <sub>1</sub>	E <sub>2</sub>	
福岡	2		18	25	1	1	5	4	3	2	61
	4		20	42	1	3	7	11	11	2	101
佐賀	2		10	4			2		1		19
	6		13	6			2		1		28
熊本	2		29	3			4	2			40
	2		76	3			5	2			88
長崎			4	1			1				6
			8	9			2				19
大分			1					5		1	7
			1					6		1	8
宮崎	2		45	1			21				69
	2		103	3			59				167
鹿児島	1	1	52				3	1			58
	1	1	173				4	1			180
山口	1		4	2			1	1			9
	3		9	2			1	5			20
広島			1	1							2
			6	2							8
岡山			1	1				1			3
			2	1				1			4
愛媛							1				1
							1				1
香川			1	1							2
			1	1							2
徳島			1								1
			2								2
京都			3				1		1		5
			3				1		1		5
奈良			1	3			3				7
			1	5			3				9
福井			1								1
			2								2
静岡				1							1
				2							2
群馬								1	1		2
								1	1		2
出土遺構数	10	1	172	43	1	1	42	15	6	3	294
出土数	18	1	420	76	1	3	85	27	14	3	648

註 出土遺構数は、本来 259である。しかし同一遺構内より複数の形式の圭頭斧箭式鉄鏃がでた場合、遺構数はその形式ごとに加算され、294となる。

補註 付図・表の作成は、地名表のNo259 の段階のものである。No260 以降はその後の再追加。



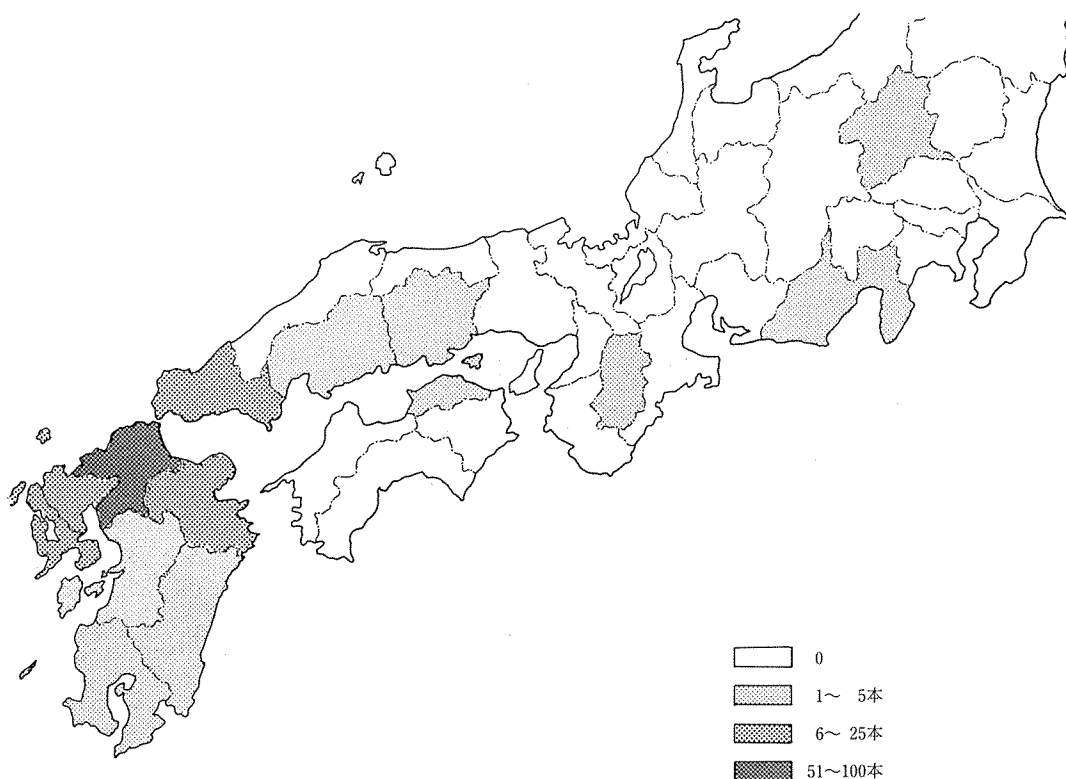
第14図 A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・C<sub>1</sub>・D<sub>1</sub>・E<sub>1</sub>形式鉄鏃の各県別密度

時期的には銚子塚古墳・長光寺山古墳・元稻荷古墳・石不動古墳などの4世紀代までに遡るような例も、若干知られるが、その多くは5世紀から7世紀にまで幅広くみられる。各古墳の年代比定については必ずしも明確にし得ないが、傾向としては5世紀中葉前後にかかるものと、6世紀後半を前後するもののふたつの時期に集中してみられ、大別できる。

この二時期は鉄鏃の筥被ぎの関部分の段の有無によっても分離できる。即ち、5世紀中葉を中心とする時期のものには段はなく、それとは逆に6世紀後半を中心とする時期のものにはほとんどそれがみられる。前者はA<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・C<sub>1</sub>・D<sub>1</sub>の各形式、後者にA<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>・D<sub>2</sub>の形式が該当する。内部主体でいえば前者では地下式板石積石室墓が圧倒的に、次いで地下式横穴・石棺が多い。後者はそのほとんどが横穴式石室となる。

第14図はA<sub>1</sub>～E<sub>1</sub>の各県別出土総数を密度で表わしたものであり、南九州に最も集中し、北に行くに従って減少する。同様に第15図はA<sub>2</sub>～E<sub>2</sub>の密度を示しており、北部九州に最も多く、周辺部では次第に少なくなっている。

伴出する鉄鏃は、前者には無茎長三角形式・柳葉式・腸袂柳葉式・異形腸袂柳葉式（二段逆刺）・変形広根定角式・柳葉広根定角式などの無茎式・広根式系統のものがああり、後者には、椿葉式・飛燕式・方頭斧箭式・鏝箭式・片刃箭式など尖根長茎式のものがある。



第15図 A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>・D<sub>2</sub>・E<sub>2</sub>形式鉄鏃の各県別密度

#### ④ 圭頭広根斧箭式 (B<sub>1</sub> タイプ)

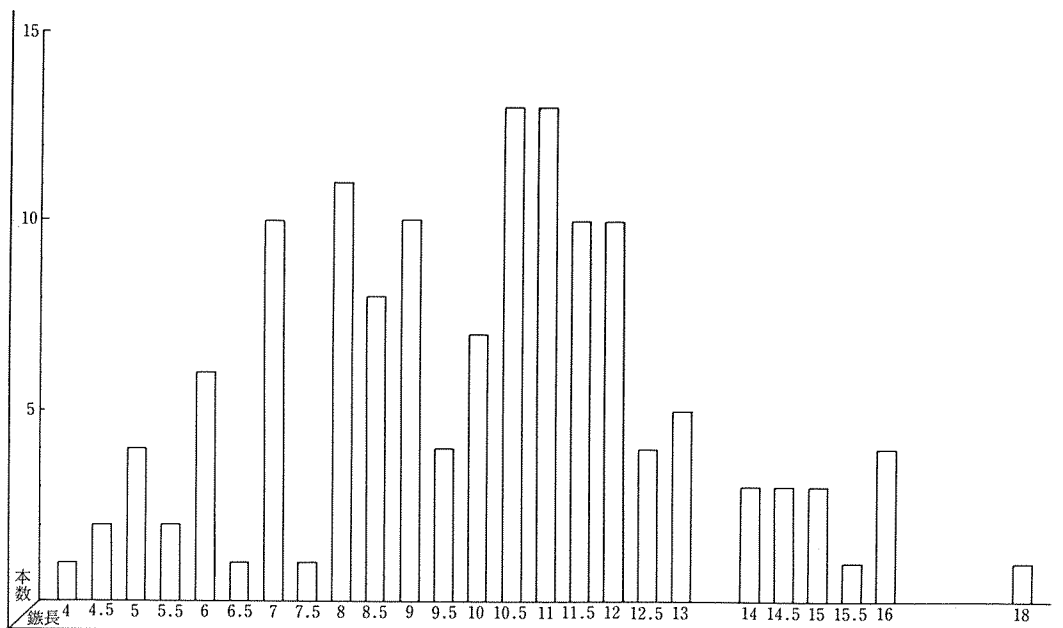
上記の分類では、城2号墳出土鉄鏃をB<sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式としたが、そのタイプの鉄鏃のうちでは、かなり小型に属するということが、次の第16図によって明らかであろう。

これは、B<sub>1</sub> タイプの鉄鏃422本のうち、比較的遺存が良好で、全形を知ることができる137本について、長さの図上計測を行ない、それをグラフ化したものである。

大まかにみれば、7~9 cm (中型) と10~12 cm (大型) に集中してみられ、それ以外では4~6 cm (小型) と14~16 cm (特大型) に若干のまとまりをみる。城2号例は5~6.3 cmであり、この4グループのうちでは最も小型の部類に属する。しかし絶対数からいえば、小型は11%にも満たない。ちなみに中型は30%、大型39%、特大型10%となり、中・大型の7~12 cm で全体の70%を占める。

重量の点からみれば、城2号例が平均5.4 gで、大型に属するマブシ石棺の4例は21~27 gであり、平均23 gである。城2号の例とはかなりの差異であるが、マブシ例がこのタイプの一般の傾向とみてよく、むしろ城2号墳の鉄鏃は例外的といえる。

その意味では、小型の鉄鏃はミニチュアとして扱えないこともないが、推定の域を出ない。



第16図 鉄鏃の長さ別、出土本数

### ⑤ 周辺地域の圭頭斧箭式鉄鏃

B<sub>1</sub>タイプの鉄鏃が5世紀中葉前後の古墳に数多くみられることは既に述べたところである。そこで周辺地域の同タイプの出土例を遺構別に抽出し、今一度、年代的位置づけを示すことにしよう。

箱式石棺では、マブシ2号棺・境目1号棺・平松7号棺などがこのタイプの鉄鏃のみが出土し、わずかにマブシ例に刀子1、平松例が剣2を伴っただけであり、きめ手を欠く。塚原14号棺は、片刃箭式鏃を含み、年代的にやや下降する可能性がある。室の山2号石棺は柳葉三角形式鏃2本のほか、工具類をもち、5世紀前半に位置づけ可能である。遠目塚石棺は広根定角式鏃がみられるほか、内行花文鏡・玉類が豊富で、5世紀前半代の特徴を残す。

地下式板石積石室墓では、妻の鼻1号・同8号・同11号・同13号・同28号墓などに知られ、そのうちの11号墓には腸扶柳葉式鏃を伴っており、28号墓では、かなりの遺物が出土している。宮浦3号墓でも腸扶柳葉式鏃が伴出。初野5号墓では柳葉式鏃を伴っている。

家形石棺として持松1号棺がある。石棺の形状を明らかにし得ないのが残念であるが、柳葉式鏃・銚(註5)（ヤス？）などを伴っており、この種の鉄製漁撈具出土例は4世紀～6世紀まで幅広く知られるものの、4世紀から5世代にかけて特に多い。

石棺系石室として、妙法塚古墳がある。伴出遺物がなく、有力な手がかりに欠けるが、棺の構造は上野精志氏の(註6) 縦穴式石室分類に従えばC-3類に相当する。

横穴式石室としては唯一、小坂大塚古墳がある。鏡のほか、豊富な遺物を伴出しており、“肥

<sup>(註7)</sup><sup>(註8)</sup>  
後型横穴式石室、の最古段階に位置づけられ、5世紀中葉に比定できる。

これまで城2号墳周辺の広い地域の出土例をみて来たが、これをもっと地域的に限定して、城2号墳を含めた熊本平野南沿地域の状況について、関連資料を補足しながらみて行くことにしよう。

小坂大塚古墳では、確認できた36本の鉄鏃のうち B<sub>1</sub> タイプのものは1本だけであり、それ以外は腸扶柳葉式13、柳葉変形定角式22となり、他の鉄鏃が圧倒的に多い。一方この腸扶柳葉式は、城南町將軍塚古墳・宇土市神の山1号墳（ともに5世紀後半代に位置づけられ、小坂大塚古墳に後続しよう。）においては、それぞれ30～20本以上確認されている。

城2号墳で4本みられた圭頭広根斧箭式鉄鏃は、小坂大塚古墳では1本だけ残存し、將軍塚・神の山1号墳の段階では、もはやみられなくなっている。

これとは逆に、腸扶柳葉式鉄鏃は既述のように増加してきており、この地域では圭頭斧箭式が次第に腸扶柳葉式にいかわったとみることができよう。

この変遷が承認されれば、小坂大塚古墳よりやや古い時期に城2号墳を位置づけることは、必ずしも不可能なことではなからう。

## ⑥ 小 結

多種多様な鉄鏃のなかから、圭頭斧箭式鉄鏃のみをとりあげ、上述したような結果をうむにいたった。これを項目別に整理すれば、以下のごとくである。

### 形式分類

篋被ぎの関部分の段の有無や、身の形状・幅によって A<sub>1</sub> から E<sub>2</sub> までの10種に分け、城2号例は B<sub>1</sub> タイプに含めた。さらに、この B<sub>1</sub> タイプの鉄鏃は大きさによって、4つのサイズに分けることができ、城2号例は其中最も小さいグループに属する。

### 出土例

形式分類ごとの出土数を、各県ごとにあげれば、地域的にかなりの片寄りがみられる。特に B<sub>1</sub> タイプの鉄鏃は鹿児島・宮崎・熊本で全体の80%以上に及び、南九州に最も集中し、地下式板石積石室墓・地下式横穴に多い。在地性の強い遺物とみることができ、注目すべき傾向であろう。<sup>(註9)</sup>

### 年 代

B<sub>1</sub> タイプの鉄鏃は5世紀中葉前後に最も多いが、必ずしも全てが、この時期に包括されるわけではない。

城2号墳周辺地域の B<sub>1</sub> タイプの鉄鏃も、5世紀前半から中葉にかけてみられ、伴出鉄鏃との関連で、城2号墳が5世紀中葉の小坂大塚古墳よりやや遡る5世紀前半でも中葉に近い時期に比定できる。<sup>(註10)</sup>

最後に。鉄鏃は、従来、年代比定の重要な手がかりとされてはきたが、必ずしも絶対的メルクマールとなることはなかった。それは、鉄鏃のもつ多様性によって簡単に律しきれないことに起因すると考えられる。

今回、圭頭斧箭式鉄鏃を分類するにあたって、形式ごとの傾向や偏在性を指摘することができたものの、それにそぐわないものがみられ、絶対化することは差し控えなければならないという感が残る。

しかし、これまで述べて来たような分類は基本的に承認されるものと思われ、このような作業は今後も継続されるべきものであろう。

(高木)

#### 註

- (1) 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」人類学雑誌第54巻第4号 1939 東京。
- (2) 末永雅雄『日本上代の武器』弘文堂書房 1941 東京。
- (3) 末永雅雄「日本鉄鏃形式分類図」古代学第16巻第2～4号 1969 京都。
- (4) 註1書に同じ。
- (5) 山中英彦「鉄製漁撈具出土の古墳について」滝口宏先生古稀記念論集 1980 東京。
- (6) 上野精志「七夕池遺跡群」志免町文化財調査報告書第1集 1974 福岡。
- (7) 乙益重隆「石障系石室古墳の成立」国学院大学大学院紀要11輯 1980 東京。
- (8) 柳沢一夫「肥後型横穴式石室考」鏡山猛先生古稀記念古文化論叢 1980 福岡。
- (9) 特にこの種の鉄鏃のうち、比較的古い時期に属すると考えられるものが、畿内地方に多くみられることは注目されてよい。
- (10) 城2号墳の所在する広義の田平丘陵には、城1号墳をはじめ、箱式石棺・石棺系石室などが点在し、近接した時期の墓域であったことが明らかである。とくに1号墳は肥後型横穴式石室であり、小坂大塚古墳と同タイプの石室構造をもつ。マブシ2号石棺はB<sub>1</sub>タイプの鉄鏃をもった例であり、3号棺は石棺系石室で、上野精志氏分類によるC-1類にあたる。

#### (付記)

地名表作成には、熊本県文化財収蔵庫・熊本大学考古学研究室の資料などを参考にし、地下式横穴関係資料については、茂山護氏の教示を得た。また、地下式板石積石室墓出土例については、森山栄一氏の卒業論文資料を通じて乙益重隆先生・西健一郎氏・片岡英二氏などの教示資料を拝見させていただくことができた。上の原遺跡出土例は松本健郎氏の教示による。

得がたい資料が多く、欠を補うことができた。記して深甚の謝意を表すものである。



第7表 圭頭斧箭式鉄鍬地名表 (高木, 1981年)

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鍬	数量	伴出鉄鍬	伴出遺物	年代	文献
1	城2号墳		熊本県宇土市上綱田町字城	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	4		滑石製琴柱形石製品2, 滑石製管玉10, 滑石製小玉10, 鉄剣2, 刀子2, 鉄斧1, 鍬?1	5c前 ~中	本書
2	マブシ2号石棺		熊本県宇土市下綱田町塩屋	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	4		刀子1		富樫卯三郎・卯野木盛二「宇土市下綱田町マブシ出土の石棺」宇土半島 自然と文化 1975
3	境目1号石棺		熊本県宇土市境目町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2				富樫卯三郎「境目西原遺跡」1969
4	平松7号石棺		熊本県宇土郡三角町平松	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	4		剣2		坂本経堯「平松箱式石棺群」1957
5	辺田古墳		熊本県宇土郡三角町戸馳	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2		滑石製管玉4, 金環3, 刀子1, キリ1, カンナ1, 須恵器		富樫卯三郎「三角町辺田古墳調査概報」1968
6	国越古墳		熊本県宇土郡不知火町長崎	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式		片刃箭式, 鑿箭式	鏡3, 勾玉, 管玉, 笄玉, 丸玉, 小玉, 翠玉, 金環, 刀, 石架, 牙, 刀子, 鉄斧, 鉄ノミ, 鉋, 鋤先, 鏃, 銅腕, 香囊, 辻金具, 帯金具, 鍬形鍬斧, 同鋤先, 同刀子, 同鏃, 同鍬先, 須恵器ほか	6c前	乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報 1967
7	妻の鼻地下式石室墓群	1号石室	熊本県本渡市亀場町亀川	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1		銅剣1		乙益重隆氏の指示による。
8	妻の鼻地下式石室墓群	8号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	3				同上
9	妻の鼻地下式石室墓群	11号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	3	脇扶柳葉式3	鏡1, 土師器1		同上
10	妻の鼻地下式石室墓群	13号石室	同上	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1				同上
11	妻の鼻地下式石室墓群	28号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2		鏡片1, 鉄劍片1, 剣, 矛, 土師器		同上
12	小坂大塚古墳		熊本県上益城郡御船町小坂	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	脇扶柳葉式13, 柳葉変形定角式22	鉄文鏡, 短甲, 勾玉, 管玉, 切子玉, ガラス異形玉, 刀3, 剣11, 鍬2, フラヒ字刀子4, 鍬切り様刀子2, 斧3, 直刃鍬2, 鍬先6	5c中	熊本県「上益城郡小坂の大塚古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊 1925
13	塚原14号石棺		熊本県下益城郡城崎町塚原	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式(変形?)	2	阿丸造脇扶柳葉式2, 片小瓜片扶鑿箭式3, 脇扶片刃箭式1	刀子3		野田拓治・松本健郎・島津義昭・江本直「塚原」熊本県文化財調査報告第16集 1975
14	室の山2号箱式石棺		熊本県八代郡宮原町大字今	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	柳葉三角形式2	剣1, 刀子1, 斧1, 鍬2, ひる鍬1, 鍬2	5c前	佐藤伸二「室山古墳調査報告」1976

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
15	西弥鑑免遺跡		熊本県菊池郡大津町大津	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式					原口良之・黒田裕司・瀬丸政二「西弥鑑免遺跡調査概報」1980
16	肥後大津		熊本県菊池郡大津町	D <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式	1?				末永雅雄「日本上代の武器」弘文堂書房 1941
17	塩塚古墳		熊本県阿蘇郡一の宮町宮地	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式 D <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式	1 1	片丸造鑿簡式1ほか	勾玉1, 管玉4, 水晶玉1, 矛1, 杏葉1, 雲珠1, 簪1, 須恵器	6c中	島津義昭・勢田広行「塩塚古墳」熊本県文化財調査報告第46集 1980
18	石川山4号墳		熊本県鹿本郡樋木町石川	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	広鏃平造三角形式1, 片丸造鑿簡式6, 片刃簡式1	石突, 斧3, 刀子1, 簪, 飾金具, 須恵器, 土師器		原口良之ほか「石川山古墳群調査報告」熊本県文化財調査報告第9集 1968
19	石川山6号墳		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 変形広根定角式1, 広根柳葉式2, 細根丸造柳葉式3	ガラス小玉, 土製管玉1, 金環2, 刀子1		同上
20	横山古墳		熊本県鹿本郡樋木町大字有泉	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	寛被変形広根斧簡式3, 寛被変形広根定角式1, 透櫛形三角形式1, 透根変形雁股式1	勾玉3, 管玉2, 丸玉, 小玉200, 金環11, 刀子6, 馬具, 須恵器, 土師器	6c	上野辰男・桑原憲彰「横山古墳」熊本県文化財調査報告第41集 1980
21	持松1号石棺		熊本県鹿本郡鹿央町持松	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	広根丸造柳葉式1	劍, 刀子, 銃1		原口良之「熊本県千田石棺群調査概報」1959
22	白塚古墳		熊本県山鹿市石	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	2	方頭広根斧簡式5, 広鏃三角形式1, 変形広根定角式1, 平造脇杖柳葉式4, 丸造三角形式6, 片丸造鑿簡式1	勾玉, 管玉, 刀子玉, 丸玉, 小玉, 粟玉, 銅環, 刀子6以上, 銃1, 雲珠5, 杏葉1, 簪, 鍬具7, 鈎具5, 須恵器	6c前半	原口良之「白塚古墳調査報告」1956
23	諏訪の原遺跡		熊本県玉名郡菊水町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式					緒方勉「諏訪の原遺跡発掘調査概報」九州総頁自動車道関係埋蔵文化財調査概報 熊本県教育委員会 1971
24	肥後江田		熊本県玉名郡菊水町	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧簡式					後藤守一「上古時代鐵鏃の年代研究」日本古代文化研究 河出書房 1942
25	山下古墳		熊本県玉名市山部田	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧簡式	1				三島格ほか「山下古墳調査概報」熊本史学第50号記念特集号 1977
26	野原9号墳		熊本県荒尾市野原	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	広根定角式4, 無茎広鏃角凹長三角形式1, 広根斧簡式4,	刀2		坂本益義「荒尾野原古墳」1953
27	小島地下式石室墓		熊本県芦北郡田浦町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	3				森山栄一氏資料による

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
28	宮の跡地下式石室墓群	3号石室	熊本県芦北郡芦北町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	2	柳葉式			森山栄一氏資料による
29	宮の跡地下式石室墓群	10号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1				同上
30	初野地下式石室墓群	1号石室	熊本県水俣市初野	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1 1				同上
31	初野地下式石室墓群	4号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	5				同上
32	初野地下式石室墓群	5号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	5	柳葉式3			同上
33	北園地下式石室墓		熊本県水俣市北園	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	5	椿葉式			同上
34	尾園地下式石室墓群	1号石室	熊本県人吉市下原田町荒毛	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	2		剣4, 刀子1		笠置英行『人吉市荒毛遺跡調査報告』人吉高校郷土研究部 1966
35	尾園地下式石室墓群	3号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	3		刀子1		同上
36	尾園地下式石室墓群	4号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	10	柳葉式2, 扇状柳葉式6	剣2		同上
37	尾園地下式石室墓群	0 <sub>2</sub> 号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1		剣1		同上
38	高原地下式石室墓		熊本県球磨郡錦町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	5		剣, 刀子		山田良三・石部正志『人吉盆地の古墳文化』古代学研究第20号 1959
39	杉山古墳		長崎県南高来郡吾妻町杉山	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	3 2	椿葉式3, 鑿簡式2, 方頭広根斧簡式1	素環頭大刀	6c前	古田正隆『杉山古墳調査報告書』吾妻町の文化財3, 1978
40	柿ノ本古墳		長崎県南高来郡瑞穂町古部	B <sub>2</sub> 有段鋭椀圭頭広根斧簡式	9	広根定角式2, 広根五角形式1	勾玉1, 管玉4, 聚玉1, 切子玉3, ガラス小玉5, 貝小玉2, 金環5, 銀環4, 刀子1, 刀子, 鏡3	7c中 ~後	正林護『柿ノ本古墳の調査』長崎県埋蔵文化財調査集報 I 1978
41	高下古墳		長崎県南高来郡国見町多比良	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	飛燕式2, 片丸造鋭椀鑿簡式2, 細根斧簡式1, 円頭広根斧簡式1, 片刃簡式1	勾玉, 管玉, 丸玉, 切子玉, 鑿蓋玉, 四角玉, 小玉, 刀子2, 刀子1, 鉄斧1, 馬具, 須恵器	6c中	小田富士雄『高下古墳調査報告』国見町教育委員会 1959
42	妙法塚古墳		長崎県南高来郡有明町湯江	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	2			5c前	田川・藤田・福島・松下『妙法塚遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報 II 1979
43	遠目塚1号石棺		長崎県南高来郡南串山町尾登名	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	2	広根定角式1	内行花文鏡, 輝玉製勾玉, 滑石製小玉1, 蛇紋岩製小玉62, 刀子2,	5c前	正林護・宮崎晋夫『遠目塚遺跡の調査』長崎県埋蔵文化財調査集報 I 1978
44	千塔山遺跡	U字溝	佐賀県三養基郡基山町宮浦	E <sub>1</sub> 透根圭頭広根斧簡式	1	無蓋広鋒丸凹正三角形式1, 無蓋広鋒丸凹長三角形式1	鉄斧7, 鏡1, 鏃1, 鉄先3, 鎌1, 手鍬2		中牟田賢治『千塔山遺跡』基山町文化財調査報告書第3集 1978

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
45	城ノ上遺跡	4号住居址	佐賀県三養基郡基山町大字小倉	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	無茎広鋒丸凹長三角形式1	刀子1, 石鏃1		松尾吉高「城ノ上遺跡」基山町文化財報告書第1集 1977
46	城ノ上1号墳		同上	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧箭式	3	鏃箭式8	勾玉2, 管玉1, 小玉130, 須恵器, 土師器		同上
47	東十郎4区3号墳		佐賀県鳥栖市柿辺町・袖比町	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧箭式	1		刀子4, 轆, 留金具10, 尾銃,		木下之治「東十郎古墳群」佐賀県教育委員会 1966
48	東十郎4区11号墳		同上	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式		方頭広根斧箭式ほか	刀柄頭1, 刀子1, 轆		同上
49	切通西方古墳		佐賀県三養基郡上峰村大字堤	? A <sub>1</sub> 圭頭細根斧箭式	1		銅環2, 斧, 須恵器環		松尾禎作「日達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯 1950
50	藤附C遺跡	ST 008古墳	佐賀市久保泉町大字川久保	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	広鋒三角形式, 脇扶柳葉式, 雁股式	刀子, 轆	6c前	高瀬哲郎ほか「大門西遺跡」九州儒術自動車道関係施設文化財発掘調査報告書(1) 佐賀県教育委員会 1980
51	大門西遺跡	ST 034古墳	佐賀市金立町大字金立	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1			5c	同上
52	大門西遺跡	ST 038古墳	同上	? D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1			5c	同上
53	六本黒木遺跡	ST 043古墳	佐賀市金立町大字金立	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1 1 1	脇扶柳葉式3, 脇扶三角形式, 変形広根定角式, 寛被圭頭鏃箭式			同上
54	牟田辺11号墳		佐賀県多久市南多久町牟田辺	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2	方頭広根斧箭式1	管玉7, 耳環6, 刀子4, 矛1, 須恵器		服部政昭ほか「牟田辺遺跡第三次」多久市文化財調査報告書 1978
55	龍王崎1号墳		佐賀県杵島郡有明町深浦	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧箭式 B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	5 1	円頭広根斧箭式1, 構葉式3, 片丸先端刃鏃箭式2ほか	勾玉5, 管玉42, 丸玉2, 小玉346, 水晶玉, 耳環17, 銅釧2, 金銅釧2, 刀, 刀子3, 鉄斧1, 須恵器, 土師器		木下之治「龍王崎古墳群」佐賀県文化財調査報告書第17集 1968
56	龍王崎2号墳		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	(尖根鏃) 1	刀, 矛1, 刀子1, 針1, 楔形鉄器, 須恵器, 土師器		同上
57	龍王崎3号墳		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧箭式	2 1	方頭広根斧箭式1, 広鋒脇扶長三角形式1ほか	七轆鏃, 管玉2, 耳環14, 金銅釧1, 小玉10, 土製小玉54, 金銅鏃玉3, 金銅鏃6, 鈴座金1, 桂甲, 刀, 矛, 須恵器, 土師器		同上
58	中の瀬1号墳		佐賀県唐津市佐志町中の瀬	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	寛被鉄鏃三角形式2, 脇扶柳葉式1, 広根定角式1, 鏃箭式6	勾玉3, 管玉8, 刀子玉2, 小玉20, 耳環4, 刀2, 刀子10, 轆, 鋤先, 鎌6, 漁具, 轆2, 鏃1対, 須恵器, 土師器		松岡史ほか「唐津市史」1962

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
59	惣原南1号墳		佐賀県唐津市佐志町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	3	広根定角式1	碧玉製異形玉1, 管玉24, 小玉10, 滑石製小玉41, 剣1, 鉞1, 斧1	5c	松岡史ほか『唐津市史』1962
60	望谷古墳		福岡県大牟田市甘木	B <sub>2</sub> 有段寛椀圭頭広根斧簡式	1	片刃簡式1, 鑿筋式5, 方頭斧簡式6, 円頭斧簡式2, 椿葉式2, 飛燕式1	耳環, 留金具, 刀子, 轡, 須恵器	6c中	馬田弘稔ほか『望谷古墳』大牟田市教育委員会 1973
61	津古内畑1号墳		福岡県小郡市津古	B <sub>2</sub> 有段寛椀圭頭広根斧簡式	1	寛椀方頭広根斧簡式1, 片丸造鑿筋式1	勾玉, 小玉, 耳環, 刀, 釘, 須恵器		柳田康雄ほか『津古内畑遺跡第2次』小郡町教育委員会 1971
62	持丸2号墳		福岡県甘木市安川町大字持丸	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧簡式	3	寛椀方頭広根斧簡式2, 変形広根定角式4, 椿葉式1, 片丸造脇掛柳葉式3, 柳葉式2, 片丸造鑿筋式4ほか	管玉, 銀環, 刀, 鎌, 須恵器		高山明ほか『持丸古墳群』甘木市文化財調査報告書第1集 1974
63	妙見5号墳		福岡県朝倉郡朝倉町妙見	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 椿葉式5, 広縁阿丸造脇掛三角形式1, 雁股式1, 鑿筋式4ほか	管玉, 煮玉2, 切子玉10, 算盤玉2, 金環4, 銀環2, 銅環4, 丸玉, 小玉, 刀子5, 鉞2, 鉄斧, 馬具?, 須恵器		高山明ほか『埋もれていた朝倉文化』朝倉高校史学部 1969
64	妙見7号墳		同上	B <sub>2</sub> 有段寛椀圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 鑿筋式1	刀子		同上
65	栗田谷3号墳		朝倉郡三輪町	B <sub>2</sub> 有段寛椀圭頭広根斧簡式		方頭広根斧簡式2, 鑿筋式1	丸玉, 小玉		同上
66	野田東部8号墳		福岡県甘木市大字柳原字野田	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1		耳環5, 馬具, 須恵器	6c末 ~7C初	馬田弘稔ほか『柳原野田遺跡』1976
67	池の上1号墳	4号主体	福岡県甘木市大字堤字池の上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	変形広根定角式2, 阿丸造鑿筋式1	刀子1, 鉞1, 鋸1		橋口達也『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書第5集 1979
68	虚空蔵11号墳		福岡県朝倉郡朝倉町須川	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	2		剣1, 鉄斧1		高山明ほか『埋もれていた朝倉文化』朝倉高校史学部 1969
69	天皇山1号墳		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	鑿筋式2ほか残欠	銀環1, 刀子2, 須恵器		同上
70	妙見7号墳		福岡県朝倉郡朝倉町妙見	B <sub>2</sub> 有段寛椀圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 鑿筋式1	鎌, 刀子		同上
71	王城山A4号墳		福岡県大野城市乙金	E <sub>2</sub> 縁椀被圭頭広根斧簡式 ? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1 1	方頭広根斧簡式1, 寛椀平造広扶三角形式1 五角形式1, 椿葉式1, 闊無頭丸造縁椀被鑿筋式2, 端片刃簡式2, 鑿筋式2	勾玉, 斧, 刀子, 鉞, 馬具, 須恵器, 土師器	6c後 ~末	酒井仁夫ほか『福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査』九州縦貫自動車道開成埋蔵文化財調査報告書K 福岡県教育委員会 1977
72	杉の谷1号墳		福岡県筑紫野市阿志岐	B <sub>2</sub> 寛椀圭頭広根斧簡式 (縁椀被)	1	寛椀円頭広根斧簡式2, 方頭広根斧簡式1	金環1, 轡, 須恵器, 土師器	6c後 ~末	奥村俊久ほか『杉の谷古墳群』筑紫野市文化財調査報告書第2集 1979

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
73	杉の谷2号墳		福岡県筑野市阿志岐	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根斧箭式	2	透根両丸造腰杖三角形式1, 透根円頭広根斧箭式1, 円頭広根斧箭式1, 変形広根定角式2, 細根両丸造柳葉式1	陶土製丸玉5, 刀子1, 鍬1, 轡1, 鈎具2, 兵車鎖1, 帯先金具2, 須恵器	6c後	奥村俊久ほか「杉の谷古墳群」筑野市文化財調査報告書第2集 1979
74	杉の谷3号墳		同上	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根斧箭式	4		刀1, 轡2, 鈎具	6c後~未	同上
75	唐人塚4号墳		福岡県筑野市杉塚	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根斧箭式	1	片丸造鑿箭式2		6c後	川述・森田・平川内「福岡県筑野市所在遺跡群の調査」九州総質自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVIII福岡県教育委員会 1977
76	唐人塚5号墳		同上	? B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根斧箭式	1			6c後	同上
77	辻田2号墳		福岡県春日市上白水	D <sub>2</sub> 有段莖被変形圭頭広根斧箭式	7		勾玉, 管玉, 小玉, 青銅製丸玉, 刀子	5c後	井上裕弘ほか「春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡・辻田地区墓地群の調査」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第9集 福岡県教育委員会 1978
78	門田2号墳		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	2 1	狭鋒片丸造三角形式2, 片刃箭式5, 腰杖片刃箭式3	小玉, 丸玉, 管玉, 耳環, 銅釧, 直刀, 針, 刀子, 鈎斧, 金鎧, 猪, 轡, 須恵器	6c後	甲元真之ほか「鞆手・粕屋郡所在遺跡群・春日市門田2号墳の調査」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡県教育委員会 1976
79	大岳古墳		福岡市東区志賀島	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1		金環4, 銀環3, 刀, 刀子, 須恵器	7c初	岡崎敬ほか「志賀島」金印遺跡調査団 1975
80	坂元2号墳		福岡県糸島郡前原町大字富	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	3	両丸造鑿箭式1, 片刃箭式6	鉄文鏡1, 碧玉管玉9, ガラス小玉4, 銅釧, 刀子, 曲刃鏃, 須恵器	5c末~6c初	川村博「坂元古墳群」前原町文化財調査報告書第1集 1980
81	銚子塚古墳		福岡県二丈町一貴山	E <sub>1</sub> 透根圭頭広根斧箭式	9	透根柳葉式5	方格規矩鏡1, 内行花文鏡1, 三角縁神獸鏡8, 勾玉, 管玉, 紫環頭大刀3, 刀3, 短刀1, 剣6, 鎧14	400年後	小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」日本考古学協会 1952
82	三雲遺跡 (加賀石地区)		福岡県糸島郡前原町大字三雲	E <sub>1</sub> 有孔圭頭斧箭式	1				柳田康雄ほか「三雲遺跡1」福岡県文化財調査報告書第58集 1980
83	沙井掛遺跡	A地区D79	福岡県鞍手郡若苔町沼口	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	無莖広鏃丸凹長三角形式1	鉄斧1		池辺元明ほか「福岡県鞍手郡若苔町・宮田町所在沙井掛遺跡の調査」九州総質自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVIII福岡県教育委員会 1979

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭弁簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
84	沙井掛遺跡	B地区D14	福岡県鞍手郡若宮町沼口	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁簡式	1		刀		同上
85	サキノノ遺跡	I-1区第3層	福岡県	?	1				
86	高木遺跡	B-1号墳	福岡県鞍手郡鞍手町新北	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	1	片丸造鑿簡式1, 鴨袂片刃簡式1	耳環2, 須惠器, 土師器	6c中	石山勲ほか「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査」九州縦貫自動車道関係歴史文化財調査報告書 福岡県教育委員会 1977
87	飛塚1号墳		福岡県宗像郡福岡町津丸	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	1	方頭広根鑿簡式1, 両丸造圭頭式1, 変形広根定角式3, 鑿簡式11, 方頭細根弁簡式4	小玉21, 土玉19, 石玉4, 鉄玉1, メノワ小玉2, 刀, 石突, 刀子, 須惠器, 土師器	6c後 ~7c初	波多野峻三ほか「津丸・久未古墳群」1974
88	長尾2号墳		同上	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式 ? B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	1 2	方頭弁簡式2, 広縁三角形式3, 端刃鑿簡式7, 片丸造鑿簡式13	勾玉1, 小玉79, 土玉40, 石玉6, ガラス玉33, 耳環6, 刀2以上, 刀子7, 石突3, 馬鈴, 辻金具, 須惠器	6c中 ~7c中	同上
89	久戸1号墳		宗像郡宗像町河東	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	5		須惠器	5c後	酒井仁夫ほか「久戸古墳群」宗像町文化財調査報告書第2集 1979
90	久戸13号墳		同上	E <sub>2</sub> 韓莖被圭頭広根弁簡式	1	鴨袂柳葉式1, 方頭広根弁簡式1, 鑿簡式5ほか	土玉, 耳環, 須惠器	6c初	同上
91	久戸箱式石棺		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁簡式	1		刀子		同上
92	相原15号墳		福岡県宗像郡宗像町大字河東	C <sub>2</sub> 有段莖被圭頭細根弁簡式 D <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	3 1			7c中	酒井仁夫「相原古墳群」宗像町文化財調査報告書第1集 1979
93	狐塚V-5横穴		福岡県田川郡大任町今任原	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁簡式	1		耳環2, 刀子, 須惠器	6c末	樋口達也ほか「狐塚古墳群II」大任町文化財調査報告書第2集 1978
94	狐塚VI-4横穴	墓道	同上	C <sub>1</sub> 変形圭頭細根弁簡式	1		須惠器	6c末	同上
95	勝田山古墳		福岡県粕屋郡粕屋町大隈	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	3		如玉, ソロバン玉, 丸玉4, 小玉, 章玉, 耳環, 面刀2, 短刀2, 硯, 石突, 馬具	6c中 ~7c	松岡史「佐谷・勝田山・古墳調査報告」福岡県教育委員会 1974
96	唐ヶ坪2号墳		福岡県粕屋郡古賀町鹿部	B <sub>2</sub> 有段莖被圭頭広根弁簡式	5	変形広根定角式1, 柳葉平造三角形式1, 韓莖被平造圭頭式1	ガラス玉1, 水晶刀子玉1, 土玉28, 刀1, 刀子1, 須惠器	6c後	高倉洋彰ほか「鹿部山遺跡」1973
97	漆生古墳		福岡県嘉穂郡稲葉町漆生	? B <sub>1</sub> 圭頭広根弁簡式	1	変形広根定角式, 鴨袂柳葉式, 柳葉三角形式	鏡3, 鉄斧, 鋤先, 馬具		島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第13輯 1989

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
98	筑前高倉6号墳		福岡県速賀郡岡垣町高倉	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1ほか	土師器		小田富士雄・黒野肇「筑前・高倉古墳群調査概報」九州考古学17 1963
99	高島古墳		福岡県北九州市小倉南区	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	2	轡被変形根定角式2, 片刃簡式1, 寛被片丸造整箭式10	勾玉5, 管玉9, 切子玉2, 算盤玉2, 小玉15, 丸玉4, 練玉27, 銀環2, 小銅環1, 刀1, 鏢1, 刀子3, 鏃2, 鏢子1, 留金具, 轡, 鍔金具, 須恵器, 埴輪		小田富士雄ほか『高島遺跡』1976
100	貝島1号墳		福岡県北九州市小倉北区貝島	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	両丸造馬伏柳葉式1, 柳葉変形定角式1, 整箭式1, 片刃簡式7	小玉1, 土玉66, 耳環1, 剣1, 刀子5, 鍔4, 鏃2, 釣針1, 須恵器	6c前	山中英彦「貝島古墳群」北九州市文化財調査報告書第28集1978
101	竹並A-23号横穴		福岡県行橋市竹並	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1	無茎重長三角形式2, 馬伏柳葉式1, 変形広根定角式1ほか	渦文鏡1, 管玉13, 丸玉70, 小玉33, 直刀, 鹿角装刀子, 刀子, 土師器	(5c後)	佐田茂ほか『竹並遺跡』東出版學業社 1979
102	竹並A-45号横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 広鋒両丸造三角形式2	須恵器 (円筒埴輪片)	(6c後)	同上
103	竹並A-47号横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	馬伏柳葉式1, 片丸造整箭式1	馬具, 須恵器	(6c後)	同上
104	竹並C-3-10号横穴		同上	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	寛被方頭広根斧簡式	須恵器		同上
105	竹並C-3-墓道		同上	? B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1		刀, 刀子, 轡	(6c後)	同上
106	竹並C-4-2号横穴		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1	変形広根定角式2	轡	(6c後)	同上
107	竹並D-7-3号横穴		同上	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧簡式 B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1 2	馬伏柳葉式5	刀子		同上
108	竹並D-8-4号横穴		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1	轡被片丸造整箭式1	須恵器	(6c後)	同上
109	竹並D-42-墓道		同上	D <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式	1	変形広根定角式1	刀子, 鉄斧, 馬具, 須恵器	(6c後)	同上
110	竹並D-63号横穴		同上	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	片丸造整箭式1	刀子1		同上
111	竹並G-32号横穴		同上	D <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式	2	寛被方頭斧簡式1, 寛被両丸造馬伏柳葉式2, 変形広根定角式3	管玉9, 丸玉3, 鹿角装刀子, 須恵器	6c後	同上
112	竹並G-53-1号横穴		同上	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1		耳環, 須恵器	6c末	同上
113	竹並G-97-1号横穴		同上	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	寛被円頭広根斧簡式1, 寛被方頭広根斧簡式1	滑石製品, 鉄斧1, 須恵器	6c末	同上
114	竹並G-135号横穴		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1	方頭広根斧簡式1, 整箭式1	刀子2, 須恵器	(6c後)	同上
115	竹並G-136号横穴		同上	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1	片刃簡式3	刀子3, 須恵器	(6c前)	同上



No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代 (6c後)	文献	献
116	竹並H-28号横穴		福岡県行橋市竹並	E: 透根圭頭斧簡式	1	重扶広鋒柳式三角形式1	耳環3, 刀子1, 須恵器, 円筒埴輪		佐田茂ほか『竹並遺跡』東出版 学芸社 1979	
117	萩原遺跡		鹿児島県始良郡始良町	D: 有段莖被変形圭頭広根 斧簡式 B: 圭頭広根斧簡式	1 1				平田信若ほか「萩原遺跡(II)」 始良町都市計画事業に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書 始良町 教育委員会 1980	
118	萩原遺跡	10号住居址	同上	B: 圭頭広根斧簡式	1				同上	
119	溝下地下式石室墓群	1号石室	鹿児島県出水市上知歳	A: 圭頭細根斧簡式 B: 圭頭広根斧簡式	1 1	腸扶柳葉式1ほか	剣3, 刀2		寺師見國「鹿児島県の地下式板 石積石室」鹿児島県文化財調査 報告書第5集 1958	
120	溝下地下式石室墓群	5号石室	同上	B: 圭頭広根斧簡式	1	変形広根定角式1, 柳葉式1, 腸扶柳葉式1, 片刃簡式1, 方 頭広根斧簡式4, 両丸造籠簡式1	剣3, 刀3		同上	
121	堂前地下式石室墓群	3号石室	鹿児島県出水郡高尾野町	B: 圭頭広根斧簡式	6	方頭広根斧簡式1, 柳葉式1, 腸扶柳葉式1	刀子1		河口貞徳・上村俊雄「別府原・ 堂前古墳調査」考古学雑誌第57 巻第1号 1971	
122	堂前地下式石室墓群	5号石室	同上	B: 圭頭広根斧簡式	1	柳葉式3, 腸扶柳葉式2, 片刃 簡式1, 狭鋒三角形式1, 広鋒 三角形式1	剣1		同上	
123	小浜崎2号墳		鹿児島県出水郡長島町蔵之元	B: 圭頭広根斧簡式	2		菅玉2, 剣, 刀, 鉄斧, 鏃, 直 刃鎌	5 c	池水寛治「鹿児島県豊島町小浜 崎古墳群I」鹿児島考古第5号 1971	
124	春村1号地下式横穴		鹿児島県大口市小木原	B: 圭頭広根斧簡式	22	柳葉式1, 腸扶柳葉式6, 異形 腸扶柳葉式2			木村幹夫・寺師見國「鹿児島県 伊佐郡内の古墳」考古学雑誌第 26巻第6号 1936	
125	春村2号地下式横穴		同上	B: 圭頭広根斧簡式	23	広根柳葉式1, 柳葉式1			同上	
126	大田地下式石室墓群	8号石室	鹿児島県大口市大田	B: 圭頭広根斧簡式	5				同上	
127	諏訪野地下式石室墓		鹿児島県大口市諏訪野	B: 圭頭広根斧簡式	1	無莖広鋒角凹長三角形式1ほか				
128	諏訪野地下式横穴		同上	B: 圭頭広根斧簡式	5	広根柳葉式1	刀子1		木村幹夫・寺師見國「鹿児島県 伊佐郡内の古墳」考古学雑誌第 26巻第6号 1936	
129	下青木地下式石室墓		鹿児島県大口市下青木	A: 有段莖被圭頭細根斧簡式 B: 圭頭広根斧簡式	1 1	柳葉式2, 腸扶柳葉式1 異形腸扶柳葉式1			寺師見國「鹿児島県の地下式板 石積石室」鹿児島県文化財調査 報告書第5集 1958	

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式数鑑	数量	件出鉄鏃	件出遺物	年代	文献	献
130	焼山地下式石室墓群	1号石室	鹿児島県大口市下段	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	2	脇扶柳葉式1			寺師見國「鹿児島県伊佐郡焼山古墳」日本考古学年報1 1951	
131	焼山地下式石室墓群	2号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	変形広根定角式1, 脇扶柳葉式1			同上	同上
132	焼山地下式石室墓群	3号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	2				同上	同上
133	焼山地下式石室墓群	5号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	6		剣2		寺師見國「鹿児島県大口市大庄焼山石室古墳群」鹿児島県文化財調査報告書第6集 1959	
134	焼山地下式石室墓群	6号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3	柳葉式3, 脇扶柳葉式1, 異形脇扶柳葉式1, 無茎長三角形式1			同上	同上
135	焼山地下式石室墓群	7号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	3 2				同上	同上
136	焼山地下式石室墓群	8号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1				同上	同上
137	焼山地下式石室墓群	9号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	5				同上	同上
138	焼山地下式石室墓群	10号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3				同上	同上
139	焼山地下式石室墓群	11号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	2	脇扶柳葉式1			同上	同上
140	大住地下式石室墓群	9号石室	鹿児島県大口市宮人	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	無茎広鋒角凹長三角形式1			同上	同上
141	大住地下式石室墓群	20号石室	同上	D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	1	無茎広鋒角凹長三角形式1			同上	同上
142	大住地下式石室墓群	24号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1				同上	同上
143	就寺1号地下式穴		鹿児島県大口市里成	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	方頭広根斧箭式2			寺師見國「鹿児島県下の地下式土塚」鹿児島県文化財調査報告書第4集 1957	
144	別府原地下式石室墓群	1号石室	鹿児島県薩摩郡薩摩町別府原	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	17	柳葉式1, 椿葉式1, 方頭広根斧箭式1	剣3		河口貞徳・上村俊雄「別府原・堂前古墳調査」考古学雑誌第57巻第1号 1971	
145	別府原地下式石室墓群	3号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	2	柳葉式5, 脇扶柳葉式2, 椿葉式2	剣1, 刀1		同上	同上
146	別府原地下式石室墓群	4号石室	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	円頭広根斧箭式1, 椿葉式1			同上	同上
147	栗野古墳		鹿児島県始良郡栗野町	D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式		異形脇扶柳葉式, 変形筈被定角式			寺師見國「鹿児島県下の地下式土塚」鹿児島県文化財調査報告書第4集 1959	
148	真中馬場地下式穴		鹿児島県始良郡栗野町北方	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	20	柳葉式1				

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭弁形式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
149	永山地下式石室墓群	2号石室	鹿児島県姶良郡吉松町	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	聯扶柳葉式2			河口貞徳「永山遺跡」鹿児島考古第8号 1927
150	永山地下式石室墓群	3号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	3		鏡1, 剣1		同上
151	永山地下式石室墓群	4号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	3	無茎五角形式1, 柳葉式2, 変形広根定角式1			同上
152	永山地下式石室墓群	5号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	変形広根定角式			同上
153	永山地下式石室墓群	6号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1				同上
154	永山地下式石室墓群	13号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	2				同上
155	永山地下式石室墓群	14号石室	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	2	柳葉式2	剣2		同上
156	下殿地下式板石積石室墓		鹿児島県伊佐郡羽月村	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	3				菅野寿彦・中川盛夫・佐藤達夫「鹿児島県伊佐郡羽月村下殿古墳築墓報告」考古学雑誌第36巻第2号 1950
157	壱の神地下式石室墓		鹿児島県伊佐郡菱刈町壱神	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	聯扶三角形3, 無茎広鋒平底長三角形1			同上
158	辻堂原遺跡	34号住居址	鹿児島県口置郡吹上町下田尻	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1				池畑耕一ほか「辻堂原遺跡」吹上町教育委員会 1977
159	辻堂原遺跡	62号住居址	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1				同上
160	成川遺跡	III L 区	鹿児島県揖保郡山川町	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	聯扶柳葉式1			乙荻重隆ほか「成川遺跡」相模文化財発掘調査報告第7 1974
161	成川遺跡	IV F 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	広根両丸造柳葉式1	剣2		同上
162	成川遺跡	IV I 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	ハート形無茎式1	剣1		同上
163	成川遺跡	IV J 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	柳葉式1	矛1		同上
164	成川遺跡	V F 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	両丸造聯扶三角形1, 両丸造三角形1			同上
165	成川遺跡	V H 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1		刀1		同上
166	成川遺跡	VI J 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1				同上
167	成川遺跡	VII K 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	2	両丸造三角形1	剣		同上
168	成川遺跡	VIII K 区	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1				同上
169	小塚地下式横穴		鹿児島県肝属郡串良町岡崎	B <sub>1</sub> 圭頭広根弁形式	1	片刃箭式2	剣1, 刀子1		瀬戸口傳九郎「九州南部に於ける地下式古墳に就て」考古学雑誌第9巻第8号 1919

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
I70	中の原古墳		大分県北海部郡佐賀町中崎	D <sub>2</sub> : 有段莖被菱形圭頭広根斧簡式	1	莖被方頭広根斧簡式2, 菱形広根定角式2, 柳葉式1, 雁股式1	辻金物, 刀子, 須恵器, 土師器	6c 後半	賀川光夫・小田富士雄「北海部郡佐賀町の古墳調査報告, 大分県文化財調査報告第15輯 1968
I71	飛山1号横穴		大分市大字東上野	D <sub>2</sub> : 有段莖被圭頭広根斧簡式	1	莖被菱形根定角式1, 鉄鏃片丸造莖被柳葉三角形式5, 片丸造莖被三角形式6	勾玉2, 切子玉4, 管玉13, ガラス玉100, 刀子1, 刀子3, 鏃1, 鏃珠1, 帯金具4, 須恵器, 土師器		真野和夫・渋谷忠吾「飛山」大分県文化財調査報告第28輯 1973
I72	飛山8号横穴		同上	D <sub>2</sub> : 有段莖被菱形圭頭斧簡式	1	莖被方頭広根斧簡式1, 莖被菱形広根定角式1, 莖被菱形円頭広根斧簡式1, 異形斧簡式1	刀子7, 須恵器		同上
I73	飛山10号横穴		同上	D <sub>2</sub> : 有段莖被菱形圭頭広根斧簡式 E <sub>2</sub> : 有段莖被丸圭頭広根斧簡式	1 1	莖被丸造五角形式1, 片丸造莖被柳葉三角形式2, 片丸造莖被三角形式1	ガラス玉3, 管玉1, 刀, 刀子2, 須恵器		同上
I74	飛山22号横穴		同上	D <sub>2</sub> : 有段莖被菱形圭頭広根斧簡式	2	方頭広根斧簡式1, 莖被片丸造鏃簡式1	ガラス玉, 管玉, 土玉, 刀, 刀子, 須恵器		同上
I75	飛山23号横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	1		勾玉7, 管玉3, ガラス玉23, 刀, 矢筒金具, 刀子, 鏃, 辻金具, 尾錠, 須恵器		同上
I76	浄土寺山古墳		宮崎県延岡市吉野	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	2	菱形広根五角形式, 柳葉式, 無莖広鏃重扶正三角形式	竹櫛48, 剣, 刀6, 矛, 鉾, 斧, 皮綴短甲, 三角板革綴眉庇付臂		鳥居龍藏「上代の日向延岡」1935
I77	天下東横穴古墳		宮崎県延岡市天下町	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	1		刀, 刀子		同上
I78	椋谷原村地下式A号墳		宮崎県北諸県郡高崎町原村	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	3	広鏃丸造三角形式1, 菱形式1	剣3, 刀子2		日高正晴「椋谷原村地下式墳発掘調査(A・B号)」宮崎県文化財調査報告書第19集 1977
I79	六野原5号墳		宮崎県東諸県郡富町	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式 D <sub>1</sub> : 菱形圭頭広根斧簡式	1 1		内行花文鏡1, 剣1, 刀, 鏃, 鏃斧		瀬戸口稗九郎「六野原古墳調査報告」史蹟名勝天然記念物調査報告(宮崎県)第13集 1944
I80	飯野尾3号地下式横穴		宮崎県北諸県郡高崎町前田	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	9	平造柳葉式3, 異形柳葉式1, 柳葉式2, 菱形広根定角式1	剣1, 刀子6, 鏃2	5c 代	茂山護ほか「日守地下式横穴54-1~4号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集 1980
I81	旭台1号地下式横穴		宮崎県西諸県郡高原町広原	A <sub>1</sub> : 圭頭細根斧簡式 D <sub>1</sub> : 菱形圭頭広根斧簡式	1 1		剣2		石川恒太郎・岩永坂夫「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第19集 1977
I82	旭台3号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧簡式	1		刀子4		同上

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭箭筒式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
183	旭台4号地下式竈穴		宮崎県西諸県郡高原町広原	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	3		剣2, 刀1, 刀子1		同上
184	旭台6号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	2 8		剣2, 刀子4		同上
185	旭台7号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	3 2	変形広相定角式1, 広鋒両丸造三角形式1, 狭鋒両丸造三角形式1	剣1, 刀子2		同上
186	旭台9号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広相箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	1 3	異形脇扶柳葉式2	貝輪8以上, 剣3, 矛1, 刀子1		同上
187	旭台11号地下式竈穴		同上	A <sub>1</sub> 圭頭細根箭筒式 B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	1 2 5	広相両丸造柳葉式1, 変形広根定角式4	剣3, 刀子1		同上
188	日守地下式竈穴	昭54-3号	宮崎県諸県郡高原町後川内	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	1	異形脇扶三角形式1	剣2	6c前半 (以前)	茂山護ほか「日守地下式竈穴54-1~4号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集 1980
189	切畑1号地下式竈穴		宮崎県西諸県郡野尻町大字東麓	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	2 1		剣3, 刀2		石川恒太郎「切畑地下式古墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第20集 1978
190	島の内地地下式竈穴		宮崎県えびの市島の内地	B <sub>2</sub> 有段段被圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	2 1	片丸造鑿箭筒式3	剣3, 刀子1, 斧1, 鈍1, 三角板鋸留短甲		栗原文蔵「えびの町真幸・島の内地地下式竈穴」宮崎県文化財調査報告書第12輯 1967
191	島の内平松地下式竈穴	昭46-2号	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	3	柳葉式1ほか	貝剣4, 刀1		石川恒太郎「えびの市島の内地地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集 1969
192	島の内平松地下式竈穴	昭52-1号	宮崎県えびの市島内字平松	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	11		剣1 (柄のみ)		岩永哲夫「平松地下式古墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第20集 1978
193	島の内平松地下式竈穴	昭54-1号	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式 ? B <sub>2</sub> 有段段被圭頭広根箭筒式	2 1 1	狭鋒三角形式1, 片刃箭筒式2	剣1, 刀2		北郷泰道「平松地下式古墳発掘調査(昭54-1号)」宮崎県文化財調査報告書第22集 1980
194	島の内平松地下式竈穴	昭54-2号	同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	3	片刃箭筒式11以上	剣2, 刀子2, 鈍? 1, 金網製金具6	5c後~6c初	北郷泰道「平松地下式古墳発掘調査(昭54-2号~4号)」宮崎県文化財調査報告書第22集 1980
195	島の内平松地下式竈穴	昭54-3号	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	6	異形脇扶柳葉式1, 脇扶柳葉式1	剣1		同上
196	島の内平松地下式竈穴	昭54-4号	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	2				同上

No.	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭箭筒式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
197	小木根10号地下式竈穴		宮崎県えびの市上江	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根式	1 2	脇扶柳葉式、片刃箭式			『日向の古墳展』宮崎県総合博物館 1979
198	灰塚5号地下式竈穴		宮崎県えびの市西長江浦字西城	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	1	異形脇扶柳葉式 1			石川恒太郎ほか「灰塚遺跡」九州総實自動車道埋蔵文化財調査報告(2) 宮崎県教育委員会 1973
199	灰塚8号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	2 1		剣2	同上	
200	灰塚9号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	3		剣1, 茶臼頭太刀1	同上	
201	灰塚11号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	1		剣1, 刀1	同上	
202	灰塚12号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	3	異形脇扶柳葉式1, 脇扶柳葉式3, 柳葉式2	剣1	同上	
203	灰塚15号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	2		剣1	同上	
204	灰塚17号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	2	異形脇扶柳葉式1, 櫛葉式1	矛1	同上	
205	灰塚18号地下式竈穴		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	3		剣1		岩永哲夫「えびの市灰塚遺跡調査報告」宮崎県文化財調査報告書第18集 1976
206	灰塚3号板石積石室墓		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	3		剣2		石川恒太郎ほか「灰塚遺跡」九州総實自動車道埋蔵文化財調査報告(2) 宮崎県教育委員会 1973
207	馬頭1号地下式竈穴		宮崎県えびの市上江	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	1	狭鋒両丸造三角形式9	勾玉1, 剣2, 刀2, 刀子3, 高髹2, 杏葉2, 蠶株, 轡		石川恒太郎「馬頭遺跡」九州総實自動車道埋蔵文化財調査報告(1) 宮崎県教育委員会 1972
208	久見迫1号地下式竈穴		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	2	方頭広根箭筒式1, 両丸造整箭式, 狭鋒両丸造三角形式3	刀1, 刀子2		石川恒太郎「久見迫遺跡」九州総實自動車道埋蔵文化財調査報告(1) 宮崎県教育委員会 1972
209	久見迫10号地下式竈穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式	1		刀1	同上	
210	松之元地下式竈穴		宮崎県小林市真方	B <sub>1</sub> 圭頭広根箭筒式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根箭筒式	1 5		刀子1, 異形鉄器1	5c後~ 6c初	乙益重隆ほか「成川遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告第7 1974

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
211	新田場地下式横穴		宮崎県小林市真方	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1 2		剣1, 刀子1		岩永哲夫「新田場地下式古墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第20集 1978
212	尾中原遺跡		宮崎県小林市尾中原	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	5	(尖根鏃片) 2	剣3, 刀1		栗原文蔵「小林市尾中原発掘の地下式横穴」宮崎県文化財調査報告書第9輯 1964
213	築池地下式横穴		宮崎県都城市水流町築池	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	片小爪片扶鑿箭式6	剣1, 刀1		北郷泰道「築池地下式古墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第21集 1979
214	牧原5号地下式横穴		宮崎県都城市川東	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2	変形広根定角式1			「日向の古墳展」宮崎県総合博物館 1979
215	牧原15号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2	異形脇扶柳葉式	剣	同上	
216	牧原16号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2			同上	
217	牧原17号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	4		剣	同上	
218	牧原23号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2		刀	同上	
219	牧原24号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1			同上	
220	灰ヶ野地下式横穴		宮崎県宮崎郡田野町灰ヶ野	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1	片刃箭式3, 両丸造鑿箭式1	剣1, 矛1, 刀子1, 鉄斧1		田中茂「灰ヶ野地下式横穴」研究紀要No1 宮崎県総合博物館 1973
221	大塚3号(B-2)地下式横穴		宮崎県西諸県郡野尻町三ヶ野	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	3 2	(骨鏃), 脇扶三角形式2	剣3, 石突5, 刀子6, 斧1, 鋤先1		「日向の古墳展」宮崎県総合博物館 1979
222	城ノ向5号墳		愛媛県伊予郡砥部町上原町	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1	両丸造脇扶柳葉式2, 片刃箭式1	刀, 刀子, 須恵器	6c後	岡田敏彦「城ノ向古墳群発掘調査報告書」1979
223	葛島A-14号石室		香川県香川郡直島町葛島	B <sub>2</sub> 鈍被圭頭広根斧箭式	1	方頭広根斧箭式	須恵器	6c中	松本豊胤ほか「葛島」香川県教育委員会 1974
224	黒島林6号墳		香川県	? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	広縁脇三角形式4, 広縁脇扶長三角形式4+α, 阿丸造脇扶三角形式1, 方頭細根斧箭式1+α, 片丸造鑿箭式5+α, 片刃箭式1	管玉8, 小玉30, 丸玉34, 土玉206, 切子玉4, 琥珀玉1, 耳環9, 刀子1, 矛1, 刀子6+α, 釧1, 斧4, 曲刃鏃2+α, 紡錘車5, 轡1, 鈎具1, 須恵器, 土師器		「黒島林第5・6号墳調査報告」昭和51年度香川県埋蔵文化財調査報告 1977
225	浦山古墳		香川県綾歌郡綾南町小野			鈍被方頭広根斧箭式	刀, 鉄斧, 須恵器		「香川県の遺跡」

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
226	恵解山二号墳	西 棺	徳島県徳島市八万町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2	広鏃脇扶長三角形式5, 脇扶五角形式5, 広鏃脇扶正三角形式3, 変形広根定角式7, 広根丸造柳葉式2, 狭鏃三角形式2, 狭鏃阿丸造三角形式2, 脇扶柳葉式2ほか	琴柱形石製品4, 碧玉製管玉16, 竹櫛2, 鹿角鏃鉄剣1, 鉄剣2, 刀子1, 布片(以上棺内) 刀2以上, 剣5以上, 斧8, 鏃3, 三角板革鏃短甲1, 三角板革鏃短甲付胃1, 肩甲1, 頸甲1, (以上副室内)	5c前半	末永雅雄・森浩一ほか「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」徳島県文化財調査報告第9集 1966
227	長光寺山古墳	東 石室	山口県厚狭郡山陽町大字郡	A <sub>1</sub> 圭頭細根斧箭式	3	? 変形定角式1	剣, 刀	4c後半	中司照世ほか「長光寺山古墳」山陽町教育委員会 1977
228	天神山一号墳		山口市大字吉敷字庄下	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 ? B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	6 1	柳葉式9, 狭鏃造篋被三角形式9, 片刃箭式7, 脇扶五角形式4, 方頭斧箭式4	剣2, 刀2, 斧11, 鏃3, 鍬3 長方板革鏃短甲	5c前半	中村徹也ほか「天神山古墳」山口市埋蔵文化財調査報告第8集 1979
229	王子の森5号石棺		山口市大字朝田	B <sub>2</sub> 有段篋被圭頭広根斧箭式	1				村岡・伊藤「王子の森墳墓群」山口県埋蔵文化財調査報告書第51集 1979
230	朝田墳墓群	14号壘棺墓	山口市大字吉敷	B <sub>2</sub> 有段篋被圭頭広根斧箭式	1				村上忠ほか「朝田墳墓群I 木崎遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告第32集 1976
231	朝田墳墓群	1号横穴	同上	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	阿丸造脇扶柳葉式6, 片丸造柳葉式1	刀子1, 鉄斧, 鏃? 1, 須恵器	6c前	同上
232	白石2号墳		山口市白石二丁目	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧箭式	1	篋被圭頭式1, 篋被平造三角形式1, 棘被阿丸造三角形式1 棘被形片丸造柳葉式2	刀子4, 土師器	6c後 ~未	渡辺一雄・戸成崇和・柴崎文男「しらいし古墳群」山口県埋蔵文化財調査報告第52集 1980
233	湧ノ峰1号墳		山口市白石三丁目	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	1	方頭斧箭式1, 篋被脇扶柳葉式1, 狭鏃三角形式2, 片刃箭式1, 棘被柳葉式1		7c	同上
234	幸崎古墳		山口市秋穂二島	D <sub>2</sub> 篋被変形圭頭広根斧箭式	5	方頭広根斧箭式1, 阿丸造篋被三角形式2, 阿丸造柳葉式1, 片丸造柳葉式1, 片刃箭式2	須恵器	6c後	富士勇ほか「幸崎古墳・松ヶ迫遺跡」山口県埋蔵文化財調査報告第26集 1973
235	真龜1号墳		広島市高陽町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式 B <sub>2</sub> 有段篋被圭頭広根斧箭式	6 2	篋被方頭広根斧箭式1	刀1, 刀子1, 鏃1	5c	金井龜喜ほか「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」広島県教育委員会 1977
236	金蔵山古墳	南 石室	岡山県倉敷市	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧箭式	2	無蓋広鏃脇扶正三角形式2, 狭鏃阿丸造三角形式1	剣3, 刀3, 鏃2, 刀子1, 鏃1	5c初	西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」倉敷考古館研究報告第1冊 1959



No	遺跡名	遺構名	所在地	主頭斧簡式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
227	金浜古墳		岡山県倉敷市児島塩生	D <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式 B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	1	短版方頭広根斧簡式3, 脇扶柳葉式4ほか	ガラス小玉1, 金環1, 刀, 刀子, やす, 須恵器	6c中	間藤忠彦ほか「金浜古墳」倉敷考古館研究集報第14号 1979
228	備中大塚			B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式					後藤守一「上古時代畿道の年代研究」日本古代文化研究書房 1942
229	元稲荷古墳		京都府向日市向神社裏	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	1		剣2, 刀, 矛2, 鎧, 石筥, 銅鏃1, 刀子2, 鈍, 斧, 鉋, 土師器	4c	西谷真治「向日町元稲荷古墳」京都府文化財調査報告第23冊 1964
240	石不動古墳	北粘土床	京都府綴喜郡八幡町八幡石不動	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式 E <sub>1</sub> 透根圭頭斧簡式	1 1	方頭広根斧簡式1, 柳葉変形定角式1, 透根方頭脇扶定角式ほか	ガラス小玉, 碧玉製管玉1, 刀子10以上, 鉄斧3, 鈍2		梅原末治「八幡石不動古墳」京都府文化財調査報告第21冊 1955
241	長岡京惠解山古墳	前方部所在土塚	京都府長岡京市久貝	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式 D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式		変形広根定角式, 無茎重扶三角形式, 脇扶柳葉式, 方頭広根斧簡式, 整箭式, 柳葉変形定角式	剣, 刀, 刀子, ヤス状鉄器	5c	山本輝雄「長岡京市惠解山古墳の発掘調査」考古学ジャーナル No.184 1980
242	宇和奈辺5号墳		奈良市法華寺北町	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式		脇扶柳葉式, (小刀式), (長頸式)			米永雅雄ほか「奈良市史 考古編」吉川弘文館 1968
243	平林古墳		奈良県北葛城郡当麻町	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1	三角形式1, 変形広根定角式1, 整箭式ほか	刀子, 鍔金具, 鏃鏃, 須恵器		伊達宗泰・千賀久「大和考古古資料目録第6集」1978
244	新沢千塚75号墳		奈良県橿原市川西	B <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭斧簡式	3		刀, 鏃, 須恵器		伊達宗泰・千賀久ほか「新沢千塚資料」大和考古古資料目録第4集 1975
245	新沢千塚82号墳		同上	B <sub>2</sub> 有段寛被変形圭頭広根斧簡式	1		斧, 鈍, ノミ, 砥石		同上
246	新沢千塚114号墳		同上	D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1		刀, 土師器		同上
247	新沢千塚117号墳		同上	? D <sub>1</sub> 変形圭頭広根斧簡式	1		鹿角装刀子		同上
248	下笠岡古墳		奈良県宇陀郡釜生村	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式		広鋒両丸造鋭椀三角形式		6c後半	泉森昭ほか「奈良県古墳発掘調査集報1」奈良県文化財調査報告書第28集 1976
249	寶石山古墳		福井市足羽山	B <sub>1</sub> 圭頭広根斧簡式	2	狭鋒三角形式6	櫛6, 剣1, 刀4, 鈍5, 刀子1, 斧頭3	5c後半	斎藤慶「足羽山の古墳」1960
250	宇洞ヶ谷横穴古墳		静岡県掛川市下俣	B <sub>2</sub> 有段寛被圭頭広根斧簡式	2	無茎鉄鏃平底長三角形式26, 平底造鋭椀三角形式4, 端片刃簡式片丸造整箭式193	仿製半田方形帯神懸鏃1, 金環1, 銀製空玉4, ガラス丸玉4, 類トンボ玉6, 師大刀3, 刀1, 鈍1, 刀子5, 鉄, 鏃, 鏃, 馬鈴, 轡, 鏡板, 杏葉, 辻金具, 鏃珠	6c前半	大谷・平野・向坂・山村「掛川市宇洞ヶ谷横穴発掘調査報告」静岡県県文化財調査報告書第10集 1971

No	遺跡名	遺構名	所在地	遺構式鉄鏃	数量	件出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献	献
231	上野総社			E <sub>1</sub> : 有孔圭頭広根斧箭式						後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」日本古代文化研究, 河出書房 1942
232	上野乗附			D <sub>2</sub> : 有段鍔被袋形圭頭広根斧箭式						同上

追加

No	遺跡名	遺構名	所在地	遺構式鉄鏃	数量	件出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献	献
233	六野原6号墳		宮崎県東諸県郡国富町	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3		鏃1, 勾玉2, 管玉5, 劍3, 刀2, 矛2, 三又斧1, 鉄斧, 短甲		瀬戸口傳九郎「六野原古墳調査報告」史蹟名勝天然記念物調査報告(宮崎県)第13集 1944	
234	六野原8号墳		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3	附扶柳葉式, 柳葉式, 変形寛被定角式	劍4, 刀1			同上
235	六野原5号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3		劍4, 刀1, 刀子1, 鉄斧2			同上
236	六野原10号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	4		鏃1, 管玉5, 劍4, 刀7, 鉄斧, 釧, 短甲, 胃, 土師器			同上
237	六野原24号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1		劍, 刀子, 鉄斧			同上
238	飯屋尾1号地下式横穴		宮崎県北諸県郡高輪町前田	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	3				「日向の古墳展」宮崎県総合博物館 1979	
239	飯屋尾2号地下式横穴		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	2	附扶柳葉式1	矛			同上
240	釘崎3号墳		福岡県八女市大字豊福字久保	B <sub>2</sub> : 有段鍔被方頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	3 1	有段鍔被方頭広根斧箭式3, 変形広根定角式2, 附扶片刃箭式3, 柳葉被整箭式3ほか	四孔文鏡1, 環頭大刀1, 直刀2, 刀子, 鉞, 砥石, 釧3, 鏃1, 雲珠1, 辻金物6, 鉄具2 須恵器, 土師器	6c中 ~後	小田富士雄ほか「釘崎第3号古墳」管の谷黨除群-八女古窯跡群調査報告III-八女市教育委員会 1971	
241	竹原古墳		福岡県敏手郡若宮町	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式1		有段鍔被方頭斧箭式3, 片丸造整箭式6ほか	鏃片, 金環2, 銀環2, 勾玉2 小玉13, 丸玉6, 車玉4, 空玉7, 刀子, 目釘2, 刀子3, 銜, 鏃板4, 辻金具6, 雲珠3, 杏葉11, 鉄留金具6		金丸古墳 若宮町教育委員会 1975	
242	城ヶ谷16号墳		福岡県宗像郡宗像町大田原	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	1 4	椿葉式2, 整箭式5	管玉, 丸玉, 平玉, 留金具, 須恵器, 土師器		波多野坑三ほか「城ヶ谷古墳群」クボタハウス・住友不動産 1977	
243	祇園山第2号墳		福岡県久留米市御井町	? B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	類柳葉両丸造三角形式2, 片丸造整箭式1, 両丸造整箭式6ほか	刀, 刀子, 鉞, 鏃, 須恵器, 土師器		石山勘ほか「福岡県久留米市祇園山・七曲山両古墳群の調査」九州縦貫自動車通関係埋蔵文化財調査報告XXVII 福岡県教育委員会 1979	

No	遺跡名	遺構名	所在地	圭頭斧箭式鉄鏃	数量	伴出鉄鏃	伴出遺物	年代	文献
264	古賀町所在古墳		福岡県粕屋郡古賀町	B <sub>2</sub> : 有段莖圭頭広根斧箭式	1	両丸造整箭式1	矛の柄, 刀子, 斧, のみ, 三又 鉄, 馬具, 鉄鉋, 砥石		横田義章「福岡県古賀町発見の古墳時代資料」九州歴史資料館研究論集6 1980
265	奴山34号墳		福岡県宗像郡津島町大字崎浦	?B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1	竊削葉片丸造三角形式1, 片丸造柳葉式	耳環1, 土玉2, 鈴1, 刀, 刀子, 須恵器, 土師器	6c後半	児玉真一・伊崎俊秋「奴山古墳群」津島町文化財調査報告書第3集 1981
266	勇盛山2号墳		佐賀県杵島郡北方町芦原	B <sub>2</sub> : 有段莖圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	1 1	方頭広根斧箭式1	耳環8, 勾玉4, 管玉16, 丸玉3, 小玉136, 刀4, 刀子1, 管, 辻金具, 須恵器, 土師器	6c後半	木下之治「勇盛山古墳群」佐賀県教育委員会 1967
267	勇盛山8号墳		同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式		方頭広根斧箭式1, 変形広根斧箭式1ほか	耳環8, 勾玉1, 管玉7, 小玉28, 刀子2, 斧3, 鈍1, 管, 須恵器, 土師器	7c	同上
268	琵琶原遺跡	SB 033住居址	佐賀市久保泉町	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	1 1		土師器		福田義彦「琵琶原遺跡」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第13集 1981
269	別府縣地下式石室墓群	6号石室	鹿児島県薩摩郡薩摩町別府原	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式 D <sub>1</sub> : 変形圭頭広根斧箭式	2 1	脇扶柳葉式4, 異形脇扶柳葉式1, 両丸造柳葉式1	剣3		河口貞徳・上村俊雄「別府原・室前古墳調査」考古学雑誌第57巻第1号 1971
270	富尾丸山古墳		奈良市大和田町丸山	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	7	無蓋重扶三角形式1ほか	鍬形石片, 鍬形石製品1, 管玉5, 鉄剣76, 刀27, 鍬茎干, 短甲, 斧1, 鈍1, 鍬形鉄製品1, 鍬, 鍬形鉄製品9, 鉄先2, 鍬1, 刀子3, ヤス16, 巴形銅器1, 筒形銅製品1, 銅鏃9, 埴輪		久野邦雄・泉森峻「富尾丸山古墳」奈良県文化財調査報告書第19集 1973
271	上の原遺跡	D-2区4号住居址	熊本県下益城郡城南町塚原	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1				松本健郎氏の教示による
272	上の原遺跡	E-5区3号住居址	同上	A <sub>1</sub> : 圭頭細根斧箭式	1				同上
273	上の原遺跡	E-8区2号住居址	同上	A <sub>1</sub> : 圭頭細根斧箭式	1				同上
274	上の原遺跡	F-0区4号住居址	同上	A <sub>1</sub> : 圭頭細根斧箭式	1				同上
275	上の原遺跡	F-5区4号住居址	同上	B <sub>1</sub> : 圭頭広根斧箭式	1				同上

註 ※本地名表では、弥生時代後期に特有な小形の鉄鏃は収録していない。その意味では片手落ちの感を免がれないが、一応古墳時代の資料に限定している。  
 ※年代は、原則として各報告書に記載してあるものによった。 ※管見例に限ったため多くの脱漏があると思われるが、今後に期したい。御教示願えれば幸いである。

## 5. 貝・石灰藻使用の屍床地名表

### 所 見

下記の地名表は、九州・沖縄地方に地域を限定して、石棺・石室の屍床面に、貝類や石灰藻（付論：菊池泰二氏の論稿参照。以下略して石灰藻という。なお通俗的な解説としては文献①を参照）などを敷く遺跡の集成を試みたものである。地域を限定して第一次作業とした。脱漏が多く杜撰であることは承知している。教示を得て追加をはかりたい。

得られた18遺跡の分布をみると、南は沖縄本島（No 1）に及ぶが、圧倒的に多いのは熊本・佐賀両県であり、比較的有明海灣の沿海部（沿岸の意ではない）に多い。けれども、この現象は2県に限らず、鹿児島・長崎県など隣接沿海県に及び、さらに西北・東九州地方にも検出される筈である。以下、所見を列挙する。

(註1)

1. 時代的にみると、No 1の沖縄本島例が最もさかのぼり、本土編年でいえば弥生時代に相当するが、九州の同時代埋葬に同例があるのか否か、知らない。他のすべては古墳時代である。はるか離れた南島と九州との類似現象は関連するものではなく、時と所を同じくしあるいは異にしても、同現象が生ずる例であることと、その呪的性格については、文献③において既にのべた。
2. 本文の意図するところは、文初に記したごとく、屍床にそれらを敷く（以下貝床と総称）例の検索が目的であるが、当該報文に詳・簡があり、正確には判断できかねるものが多い。九州において明らかに貝床と呼んで差し支えないものは、No 2～No 8・No 11の8遺跡である。貝床とは厳密には貝または石灰藻のみであろうが、砂・礫と併存する場合は現実には多いので、貝床の定義には後者をも含むものとする。
3. 清野謙次氏のNo 9については、同氏のNo 5の文意から推すと、No 12・13（木下之治氏報文）とともに、貝床とみなしてよいと思う。残余のNo 10・14・15・17・18の5遺跡については、積極的な言及はできないが、本文では一応貝床とみなした。No 16は供献のカキともみられるので、地名表にはあげたが、断定はさけない。
4. 以上16遺跡の貝・石灰藻などは、意図的に石室に持ち込まれ敷かれたことは明らかである。1例をあげると、No 2は24～30基からなる石棺群の1基で、そのすべてをわれわれは開棺したのではないが、開棺石棺にはなく、調査当時であっても、特殊例と記録されている。さらにNo 3～8とても、粘土床もしくは礫床で事足りる筈である。機能としては礫床などと同じであつても、それ以外に宗教的な要素が、さらにあつたと考える。<sup>(註2)</sup>
5. ことに石灰藻の産出地は、当代の海況が現在と変わらぬとすれば、ある程度制限された地域の産出であるので、その地を知ったつまり農業とともに海灣に依拠した生活の反映だと、古墳立地条件をも考慮にいれて考える。産出地至近距離にあつても、それを使用しない古墳が

数多くあることを、考えるべきである。城2号の場合、菊池氏によれば、宇土半島では、有明海側は大田尾付近より先端部（宇土半島の）に産出し、八代海側はほとんど分布し得ないと。至近距離ばかりとは限らないが、最短を考える場合に参考となる。さらに局地的に堆積した石灰藻を、効率的に採取したのではないかと、いわれている。

6. 石灰藻を指標にとると、Na 2・3・6は、比較的入手し易い地域にある。これと対照的であるのは、有明海湾奥部の熊本・佐賀両県の古墳であり、貝床の密度は高いが、認められない。これらの海域は石灰藻の産出が困難であり、当代の海況を反映している。
7. 上文において、宗教一呪術的な意義をもつとのべたが、それとともに、とくに貝類にあっては防湿の効果をも併有することが、人骨について認められている（文献11）。究極的には、これも宗教的意義をもつものであろう。
8. 古墳時代17遺跡において、時期が判明するものでは、5世紀代がもっともさかのぼり、以降6世紀末頃まで存続するのであろう。歴史時代以降の木炭などで火葬骨を埋納することとは、異質である。古墳時代における貝床の習俗は、有明海をめぐる地域にも広がりを持つとみなしてもよいのではないか。
9. 千崎第11号（Na 2）、有佐大塚（Na 3）、城2号（Na 6）のいずれもが、5世紀代に属することは、時代性と地域性があるか否か、注目すべきである。以降の時代にも存続するのだろうか、宇土半島・天草群島の対岸佐賀・長崎・鹿児島県の海域にも石灰藻は産出するので、<sup>（註3）</sup>問題点としておきたい。

（三島 格）

#### 註

- (1) ただし、枝状サンゴの碎片であって、貝・石灰藻ではない。けれども古代人が海からの物として採取したものであるので、同等にあつかう。永井昌文「南島覆石墓のサンゴ石」『日本民族と南方文化』P 269～278 1968年 平凡社 東京。
- (2) かなり早く齋藤忠氏によって指摘されている。齋藤『日本全史』1 原史 P239 東京大学出版会 1958年 東京。文献③および⑮参照。
- (3) 石灰藻産出地。
  - (1)長崎県福江市久賀町田之浦郷ヒサカ〈久賀島〉の海辺で採取できる（立平進氏採取・教示）。
  - (2)長崎県南高来郡口之津所在の三軒屋南貝塚（弥生終末期―古墳初期）の貝層中に、石灰藻らしきものを検出したと（未同定）。（下川達弥氏教示）。

#### 追記

上文で長崎県などの分布に言及したが、文献③発表後古田正隆氏から下記の教示を得た。「熊本県のサンゴ（南有馬町から西有家町の沖合にできる一種のサンゴですが）を古墳に使用する」と。付言すると古墳とは、「吾妻町中熊台地調査報告」1979年 吾妻町教委。をさし、執筆時にそれを失念したとの通信で、他にも類例ありと。

第8表 貝・石灰藻使用の屍床地名表（第1次，九州・沖縄地方 三島・木下，1981年）

No	遺 跡 名	主 体	時 代	貝種・石灰藻	備 考	文 献
1	沖縄県，木棉原遺跡	箱式石棺	本土編年では弥生前期末～中期初	サンゴ（サンゴ砂利）	箱式石棺10基中2基に認む。 （第2・3号，2号は♂+♀，3号性別不明1体）	② ③
2	熊本県，千崎古墳群第11号	箱式石棺	古墳時代5c代	サンゴ・石灰藻	箱式石棺，積石箱式石棺計24～30数基中の1基（第11号）4体追葬。	④ ⑤ ⑥
3	熊本県，有佐大塚古墳	竪穴式石室	古墳時代（5c代）	石灰藻+礫	富樫卯三郎氏調査	⑦
4	熊本県，国越古墳	横穴式石室	古墳時代6c前半	貝+砂	石棺床・左右両屍床ともに厚さ30～12.3cmの「海辺の貝まじり砂」遺物の下・上に。三島も実見。	⑧
5	熊本県，金桁古墳	箱式石棺	古墳時代	カキ	「かき殻か」が敷かれてその上に人骨。5体追葬。清野謙次氏調査。	⑨
6	熊本県，城2号墳	竪穴系横口式石室	古墳時代5c前中葉前後	石灰藻+礫		本報告書
7	熊本県，白塚古墳	横穴式石室	古墳時代6c中葉	カキ・アサリ・シオブキ	南・北屍床の板状の石敷の上に「……の貝殻を重ねて屍体をおく」P12，21	⑩
8	熊本県，狐塚2号墳	家形石棺	古墳時代下限6c前半	シオブキ・カキ・ハマグリ	（同墳近くの石棺に貝屍床多し——壊滅）	⑪ ⑯
9	福岡県，下楠田古墳	横穴式石室	古墳時代（6c末）	カキ	（昭和26年，三島実見，6c末ごろの須恵器あり）	⑫
10	佐賀県，龍王崎6号墳	横穴式石室	古墳時代	貝若干	杵島郡有明町深浦	⑬ No10～17森醇一郎氏教示
11	佐賀県，稲佐神社境内4号石棺	箱式石棺	古墳時代	カキ	貝床 杵島郡錦江町	<未報告> ⑪ 永井昌文氏教示
12	佐賀県，勇猛山7号墳	横穴式石室	古墳時代	カキ相当数	杵島郡北方町	⑭
13	佐賀県，城山出土箱式石棺	箱式石棺	古墳時代	貝	神埼郡神埼町城原	⑭
14	佐賀県，金比羅社裏山出土箱式石棺	箱式石棺	古墳時代	貝	佐賀市金竜町	⑭
15	佐賀県，新開出土箱式石棺	箱式石棺	古墳時代	貝	杵島郡白石町湯崎	⑭
16	佐賀県， <small>ヤノウラ</small> 竜宿浦箱式石棺	箱式石棺	古墳時代	（頭部近くにマガキ）	鹿島市七浦町	⑭
17	佐賀県，鷺の巣出土箱式石棺	箱式石棺	古墳時代	貝	鹿島市高津原	⑭
18	山口県，綾羅木古墳南方至近の古墳	箱式石棺	古墳時代	小石+貝	金関恕氏調査・教示	⑮

〈文 献〉

- ① 『沖繩の自然』 P71 平凡社 1975年 東京。
- ② 当真嗣一「遺構」「出土遺物について」『木棉原』 P24, 26, 118 読谷村文化財5 1978年 読谷村。
- ③ 三島「サンゴと貝—南島葬制覚書(南島資料5)」南島考古5 1977年 那覇。
- ④ 「天草郡維和古墳群調査結果について」田辺哲夫 1955年 プリント 玉名高校。
- ⑤ 田辺哲夫「天草郡大矢野町維和古墳群調査概要」1955年 プリント 玉名。
- ⑥ 坂本経堯・経昌「千崎古墳群」『天草の古代』 P65 1971年 熊本。但し同頁の石棺数と④⑤のそれは不一致。④⑤は三島らが数えたものでより正確。
- ⑦ 富樫卯三郎「考古ノート」4 熊本日日新聞 1981・4・10。
- ⑧ 乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』所収 熊本県教委 1967年。
- ⑨ 清野謙次「肥後国宇土郡浦村大字中村小字前田、金桁古墳」『日本原人之研究』増補版 P96, 荻原星文館 1943年 東京。
- ⑩ 原口長之『熊本県山鹿市大字石 臼塚古墳調査報告書』 P12, 21, 1956年。山鹿。
- ⑪ 三島・金関丈夫・永井昌文『熊本県荒尾市下井手 狐塚第2号墳調査報告書』 1954年。荒尾市文化財調査報告4集に収録 1979年 荒尾。
- ⑫ 註⑨書P71。
- ⑬ 木下之治「龍王崎古墳群」佐賀県文化財調査報告17 1968年 佐賀。
- ⑭ 木下之治『勇猛山古墳群』佐賀県教委 1967年 佐賀。
- ⑮ 三島「鏝及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」『貝をめぐる考古学』 P49 学生社 1977年 東京。
- ⑯ 佐田 茂・高倉洋彰ら『筑後古城山古墳』大牟田市教委 1972年 大牟田。

## 第5章 総括

第1章1において、調査の目的をあきらかにしたが、ささやかな調査であったにもかかわらず、予期以上の収穫を得、同時にいくつかの問題点を今後に残すこととなった。以下、第2章以降の要約と若干の私見をのべて、総括としたい。

- ① 本古墳の立地する宇土半島は、その基部地域には12基の前方後円墳を認めるが、その分布は半島部に及ばない。半島部は丘陵上、岬などに多く集中する。本墳の立地も旧岬上の丘陵上で、足下に網田小平野をもち、有明海にのぞむ。<sup>(註1)</sup>
- ② 本墳の規模について。数次の地形変改を受けて、長径約18m・短径約10.5m・高さ北側最高で約3.2mを測る円墳であるが、復原直径は20～25mである。半島部の円墳としては大きい。海拔高22.95m。周溝・埴輪・葺石などは認められない。中世にいたり、墳頂は墓地として利用されている。
- ③ 本墳の主体は、ほぼ東西に主軸長をおく竪穴系横口式石室で、南西に開口。石室の平面形は長さ2.61m（中央部）・幅1.61m（奥壁）で長方形を示すが、羨門部にいたるに従い、僅少ではあるが狭くなる。横口前面に、ラップ状に開く石積側壁とそれにつづく墓道をもつ。この型式の石室は県下には発見例が少なく、わずかに鹿本町朱塚古墳の存在が知られているのみである。調査者は石室構造について二つの新知見を示している。一つは屍床の配置が、図示のごとくL字型の配置をとることと、他は輝石安山岩（大岳熔岩）を石材とする石室の構築について、三段階の工程を確認し、四側壁の作業順序の想定である。<sup>(註2)</sup>
- ④ L字型の屍床配置について。その根拠は羨門部が一側に偏し、かつカマチ石の一端と石障がほぼ同一延長上にあること、カマチ石の他の一端の延長に石障をおけば、形成される屍床は極めて狭小になり、実用に適さぬということにある。さらにそれを支持するものとして、石灰藻の分布と円礫の分布が、その二区に極めて多いという点であり、遺物の出土状況もそれを助けるということなどによる。
- ⑤ 三段階の工程と四側壁の構築順序。墓墳を掘った後、割石を下・中・上（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の順に積み、その目路に、比較的大石を置く場合が多いと観察し、しかも四側壁とも同様の工程現象が確認されるとする。これは肉眼でも正確に観察される。構築順序は、奥壁→（左壁・右壁）→前壁の順序であろうと推察する。なお細部にわたっては、小田富士雄氏による①水平②ジグザグ（煉瓦積）③垂直（重箱積）④斜め（斜め積）の四技法が使用されていることをも指摘。
- ⑥ 本墳の系譜について。報告者は小田富士雄・石山勲・佐田茂・柳沢一男氏ら各氏の所



説を検討・紹介した後、竪穴系横口式石室の概念規定の中で、「石室壁体の基部から割石小口積み」にする技法が、より基本的要素だとの見解をのべ、この要素は老司古墳各石室や丸隈山古墳石室などにも認められるので、その系譜に何らかの関連があったとみている。けれども、本墳の横口前面の石積側壁と墓道については、「より横穴式石室的」であり、「横から入ろうとする強い思想」の具現であると解して、老司古墳より後出だとし、丸隈山・横田下古墳石室に代表される初期横穴式石室の「周辺部への拡散現象」として、その系譜をたどることが可能だと考え、新しく「城2号古墳系」という類型を提唱している。類例の追加を待ちたい。分布および朝鮮半島南部の類例との関係は、付論亀田修一・池田栄史両氏の論稿を参看されたい。

- ⑦ 本墳の年代に関連するものは、先のL字形屍床がある。調査者によれば、本墳は北部九州型の第II類（横田下）に属し、それが肥後に入った段階を本墳の型式であろうと推定している。石室内に石障をもつ点では、「初期の石障配置は（中略一三島）家族単位にまとまった箱式石棺を、一個の石室内に持ち込んだことから始まる」とする乙益重隆氏の所見に留意する必要がある。すなわち本墳の初期という年代と複数埋葬とも適合し、かつ調査者が指摘するごとく、L字形の石障は箱式石棺であった可能性もあるからである。
- ⑧ 開口が古く、かなりの攪乱が予想されたが、L字状屍床を形成する2屍床（奥壁部を第1、他を第2屍床と呼ぶ）に圧倒的に遺物がみられ、他の空間を通路としての機能が大きであったことが推察される。
- ⑨ 遺物の中で、特記すべきことは、二つある。一つは琴柱形石製品・管玉・小玉の三者の材質がすべて滑石片岩であり、かつ穿孔部に糸などによる使用痕がないことを重視した調査者は、亀井正道氏の葬送儀器説を支持する。恵解山型に属する2個の琴柱形石製品は、本墳においては第1屍床の隅部からの一括という出土状況を重視している。さらに同製品の出土が、5世紀前半から中頃にかけて集中している点は、石室などの年代とも一致するとする。所有した被葬者についても、立地と石灰藻（別稿地名表・所見参看）などを根拠にして、被葬者の性格を網田平野の農業生産と併せて慣海的性格を併有していたとし、本製品を有明海を經由した交易による将来品であろうと、調査者は指摘する。他の一つは4本の鉄鏃が、後藤守一氏の分類命名による圭頭斧箭式鉄鏃（B1タイプ）に分類され、かつ現在の出土分布によると、鹿児島・宮崎・熊本の3県が圧倒的に多く、80%を占めるといい、その年代も、5世紀中葉をめぐる前後に最多である傾向を調査者は指摘している。かつその主体が地下式板石積石室・地下式横穴であるという指摘である。二指摘とも当該古墳被葬者の在地的性格の一つの側面を物語るものであろう。
- ⑩ 石室構築の編年上の位置と琴柱形石製品や圭頭斧箭式鉄鏃などの年代は、調査者によりそれぞれ異なる。即ち、琴柱形石製品からは、5世紀前半から中葉。鉄鏃からは、5世紀前半でもやや中葉に近い時期。石室構造からは、5世紀中葉よりやや降る時期と、微細な点では

くい違っているが、本墳については、より適確な遺物を欠く現況では、5世紀中葉前後と、おおまかな年代をあたえておかねばならないのではあるまいか。

- ⑪ 宇土半島における古墳成立とその消長については、かならずしも知識は豊かでないが、城2号を例にとると、既に第2・3章で指摘されたごとく、<sup>(註3)</sup> 竪穴系横口式石室は本墳1基で、<sup>(註3)</sup> 終結しているようである。この点は、児玉真一氏により報告された福岡県汐井掛・都地古墳群などとは、各古墳群の中で複数墳(11基)が竪穴系横口式石室で、かつ6世紀前半代に及ぶ変容と消長がたどられるという点で、異質である。

孤立した1基で終息したということは、肥後型の石障系石室墳(例えば小坂大塚・千金甲1号など)の旺盛な定着がすでにあり、半島においても城2号の系譜の拡大が阻止されたのであろうと考える。事実、本墳と同一岬上の城1号(旧名塩屋1号)は、接続する年代であるが、まさに完成された肥後型の石室である。

- ⑫ 被葬者の社会的地位について。有明海沿岸のいわゆる<sup>サコ</sup> 迫と呼ばれる小平野とその海域を生活基盤とした、在地性の強い小集団の首長であるが、その反面、非在地的な琴柱形石製品をも所有するという、側面をも併有している。この石製品はおそらく竪穴系横口式石室という、北九州的な系譜とともに、その出自を考えるべきであろう。

かかる二面的な現象は、いわば辺境であった沿海地域には、さらに指摘できる。古い報告で現在は見向きもされないが、宇土半島先端部の清水古墳<sup>(註4)</sup>(別名重盛塚)の1基から出土した筒形銅器(角田政治氏旧蔵・現在不明)がそれで、鏡一面を共伴する。主体は砂岩の組合式箱式石棺。筒形銅器は畿内に多く集中し古墳副葬品としては全国的に数少ないものである。経路は両者ともに有明海であろう。九州地中海的な性格をもつ沿岸小首長の、ささやかな権力の誇示であろう。

- ⑬ 竪穴系横口式石室という名称について。城2号調査関係者は調査にあたって、上記の名称を使用し、本報告書においてもそれを使用した。けれどもこの呼称はあくまでも石室本体の構造に関してのみの名称である。発掘の結果、第4章の報告者もしばしば言明しているごとく、当、城2号墳に限定していえば、横口前面の明瞭な施設が示すごとく、遺体を横から搬入した意図はきわめて明白で、横穴式石室と呼ぶことは不適當ではないと考える。断わっておくが、上記の名称を否定するのではなく、本墳に限っていえば、石室と横口前面の前庭部・墓道の施設は唇齒の関係であり、二者を総称すれば、すでに横穴式石室である。初期を冠するか否かの問題は異次元である。

### (三 島)

#### 註

- (1) ①富樫卯三郎・平山・高木「熊本県前方後円墳地名表」肥後考古学会誌 1 肥後考古学会 1980年 熊本。

- ②佐藤伸二「宇土半島をめぐる古墳文化の諸問題」全上誌。
- (2) 富田紘一「古墳時代・朱塚」『鹿本町史』P101 1976年 熊本。但し前庭・墓道部等は不明。
- (3) 児玉真一「竪穴系横口式石室とその消長」『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』3 P98以降  
福岡県教委 1980年 福岡。
- (4) ①角田政治「三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告』1 P21—23・図版9、10 熊本県教育会史蹟調査部 1918年 熊本。
- ②森本六爾「筒形銅器に就て」『日本考古学研究』1944年 P406—413 地名表にNo.1「肥後国宇土郡三角町清水重盛塚 1個 古墳 角田政治蔵」と表示。
- ③乙益重隆「清水の箱式石棺」『肥後上代文化史』P152 日本談義社 1954年 熊本。
- ④坂本経堯「磯山古墳群」『肥後上代文化の研究』P13 肥後上代文化研究所・肥後考古学会 1979年 熊本。

# 付 論



## 付論 1

# 城 1 号墳の発掘概要

— 旧塩屋古墳第 2 号の調査 —

富 樫 卯 三 郎

かつて宇土半島の地理性について興味をもったことがある。<sup>(註1)</sup> 半島北岸長浜の小松から網田のマブシ・城へかけての古墳群には割石平積みの古墳が目立っているのもその一つに数えられる。

城 1 号墳は半島北岸の中辺、宇土市上網田町字城 45 に所在する肥後形の横穴式石室であった。<sup>(註2)</sup> そこから北東 150m ほどの所に城 2 号墳（旧塩屋古墳第 1 号）がある。

昭和 35 年 3 月、下網田町 717 の 1 江藤権蔵氏の子息宇土高生正二君の知らせから筆者ら宇土高社会部は熊大松本雅明教授指導の下に緊急調査を行なった。<sup>(註3)</sup>

発掘箇所は国道 57 号線・国鉄三角線が並行南下し、塩屋へ入る辺、鉄道東側へ突出した小舌状台地の頂上（標高 23m）にあり、有明海が望見される。そこから西方堀切・マブシ・シマヤマへ、東北すぐ田平城跡へ続く。

調査は、歴史メモ（1960、山川出版）を見ると、3 月 22 日はじめ 4 月 17 日後片付け、塩屋古墳第 1 号（改称城 2 号墳）の発掘承諾、下網田堀保氏とあるが、届出には至らなかった。

発掘現場は 4 年ほどへた蜜柑のため暗渠を掘っていた所、地表下 30cm ぐらいで巨石の 1 部を掘り当てたもので、蜜柑栽植の前は畑とのことであった。すでに封土は削平されたのか、見られなかった。

発掘 2 日後、ほぼその全容が明らかとなった。はじめ掘り当った板状の巨石は長さ 2.27m、幅約 75cm、厚さ 25cm、羨門に架上されたものであった。扉石は失われ、羨道付近は崩れていた。板状巨石下に厚目の板状石があり、巨石上にも薄目の板状石が残存していた。

羨道・羨門・玄室の周りは大小さまざまな割石が小口積みとなっている。ほぼ方形の玄室の四隅は直角でなく、斜めに厚目の割石を入れ、組んである。玄室内羨門両袖石の前面辺は礫が敷かれ、その下方が割石積みとなる。そこから高さ 11cm、幅推定 46cm の U 字形削り込みの上面につく障石から床面へ下りる構えとなっている。

玄室の主軸方向西北～東南、羨門は西北へ開口する。方形の割石小口積みの壁面に接し、障石が立ち、障石の囲みの中は 3 枚の低い仕切石で、4 区に仕切られる。いわゆる肥後形の横穴式石室の例に数えられる。

羨門に入って直前の障石は長さ 2.54m、上面幅 5 cm、床面からの高さ 96cm、羨門右手の障石は長さ 70cm と 2.21m 計 2.91m、上面幅 7～6 cm、床面からの高さ 94cm、同左手の障石は長さ 2.95m、上面幅 5 cm、床面からの高さ 87cm、奥壁に沿う障石は長さ 2.57m、上面幅 4 cm、床面からの高さ 95cm、ひびが斜めに入り、上部 2 個所に欠損がある。左右両側の障石で他の障石 2 枚

を挟み、方形プランをなしている。主軸方向で障石間の長さ2.76m、障石間主軸中央直交の幅2.58mある。

仕切石の中、主軸並行2枚の仕切石で羨門右手のものは長さ2m、上面幅6cm、床面からの高さ35cm、同左手のものは長さ1.95m、上面幅8cm、床面からの高さ24cm、2枚の仕切石と直交、奥壁に沿う仕切石は長さ2.58m、上面幅5cm、床面からの高さ30cmある。4区の中、通路は長さ2.30m、幅1.90～1.70m、屍床は羨門右手が長さ2.30m、幅64～70cm、同左手が長さ2.30m、幅67～70cm、奥壁沿いのものが長さ2.62m、幅69～68cmある。

玄室の天井石は1部室内へ落ち込んだもののほかは失われ、また玄室の周りの小口積み割石も羨門架上の板状巨石の高さほど残存したのが良好のところ、かなり欠失していた。残存割石が上方ではせりもちに積まれた形跡がうかがわれる。天井石ほどの程度穹窿形を呈していたか分らない。羨門上の巨石や玄室内1枚物の障石や仕切石などからかなり力を入れた構築であったことが想像される。

玄室の周りの割石小口積みの床面からの残存高は、羨門右手で1.59～1.83m、同左手で1.45～1.68m、奥壁で1.23～1.44mある。羨門直前の障石で、左手の斜めにひび割れの入った分を外した所、下方床面から高さ45cmほどにわずかながら土混り礫石の存在が認められ、或いはその上面から割石積みがなされたのではないかと推測される。すなわち床面上のレベルから平積みしたとは限らない例もあり、参考される。<sup>(註4)</sup>

天井石・割石は安山岩で、障石・仕切石は砂岩が用いられている。床面は丸石の自然石が深さ8cmほど敷かれた礫床である。

玄室内羨門右手（北東側）の屍床に人骨細片が10個ほど出土した。その他に古墳時代に属する遺物は見当らなかった。

石室外、石室西方すぐ近くから径18cmほどの須恵系の皿1枚が出土したが、石室にかかわるものか、田平城跡にかかわるものか明らかでない。玄室内から落ち込みの瓦質土器片などが出土している。

昭和36年3月31日、熊本博物館牛島盛光、東光彦両先生、熊大松本雅明教授方が下網田字城の或る蜜柑園の低斜面で城1号の構造と似た石室残骸の調査をされ、見学の折撮った写真がある。<sup>(註5)</sup> 写真では奥壁沿いの屍床はないようであった。

昭和36年10月、網田中学中村正立校長の御厚意により城の台地同校実習地出土の石室残骸を筆者ら宇土高社会部で調査した。長方形プランで、石室中央を縦に2分した仕切石が中ほどまで残存していた。石室・仕切石とも大小の板状石を立てつなぎ組んであった。<sup>(註6)</sup>

横穴式石室内部に箱式石棺を持ち込んだことからおこつたろうといわれる肥後形について、最近筆者らが調査した長浜町小松2号墳は並行した2基の石棺系石室を割石平積みで覆ったもので、興味があり、付記しておく。<sup>(註7)</sup>

今回、城2号墳が先学、気鋭のメンバーにより進んだ技術で調査されたことを喜び、また拙稿を記させていただき、感謝したい。

#### 註

- (1) 富樫卯三郎「宇土半島の考古学」 熊本日日新聞 昭和47年1月13日 熊本。
- (2) 乙益重隆「九州」 新版考古学講座5 P. 85 昭和45年 東京。
- (3) 「大陸様式の古墳」見出し 熊本日日新聞 昭和35年3月25日 熊本。
- (4) 「宇土半島で初の石棺系石室」見出し 熊本日日新聞 昭和56年4月18日 長浜町小松2号墳未発表。
- (5) 東光彦先生の御教示による。
- (6) 富樫・卯野木「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」に出土状況写真 宇土半島—自然と文化—P. 118 宇土半島研究会 昭和50年 宇土。
- (7) 前掲註(2)P85。  
小田富士雄「九州」日本の考古学Ⅳ P. 147 昭和41年 東京。

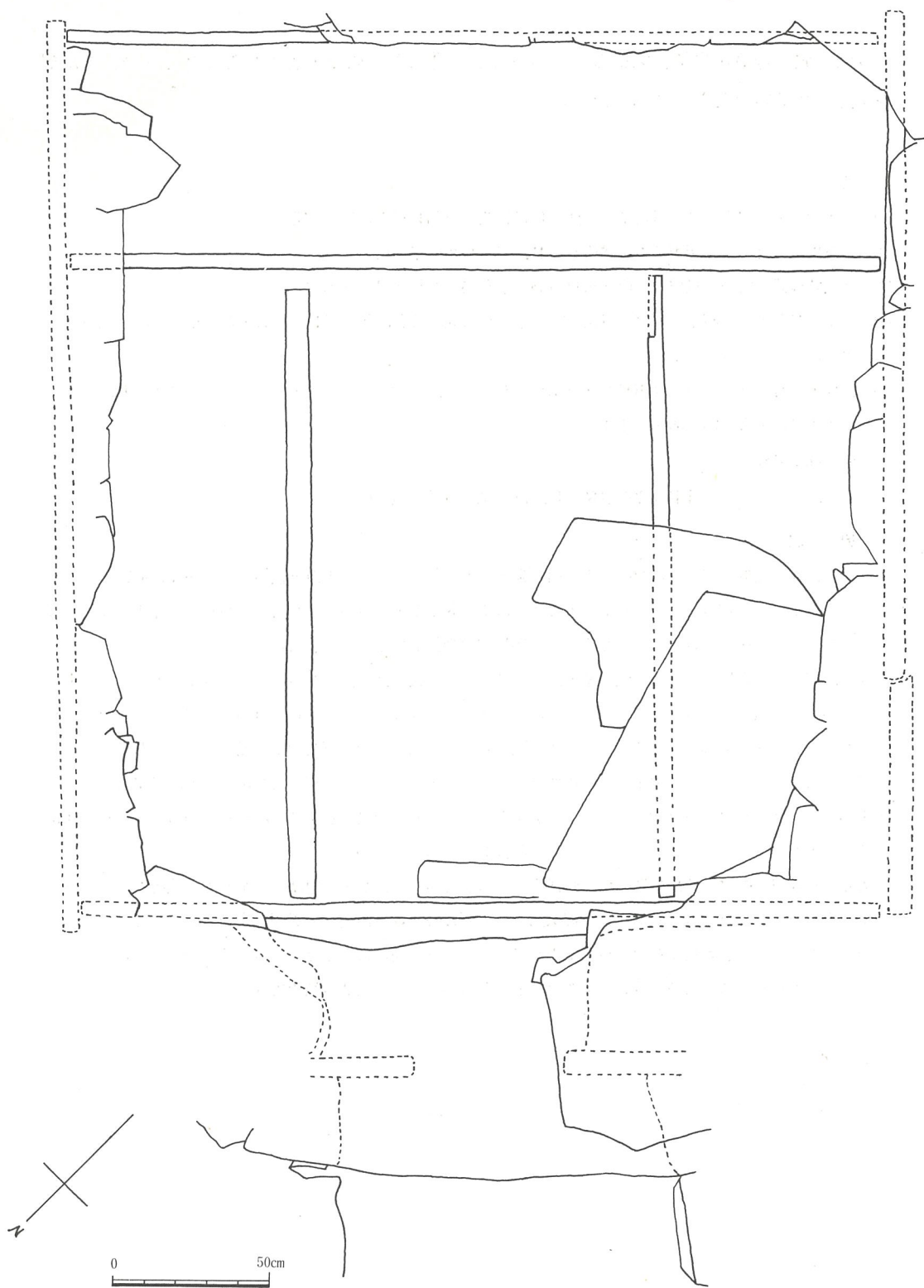
#### 追記

校正後、36年発掘の“或る蜜柑園、主、山本泉氏の御教示により、宇土市下網田町字城 656に遺跡が埋め戻されている由をうかがった。城1号墳屋下に続くわずか6～7米ぐらい離れた所といわれる。礎床の仕切石は2枚が並行し、3区に分けられていたようで、典型的な肥後形ではないが、近似している。

36年調査の“実習地、は、もと陸軍墓地跡で、戦後川口泉氏の蜜柑園となっている。城1号墳の台地北東40mぐらいの所に遺跡があったものと見られる。石室残欠下方部3辺は大小板状石材が立て組んで1段だけ残り、床面からの高さ20～30cmほどある。“或る蜜柑園、の場合と同様、地表下約30cmに見出された。石室主軸方向は西北～東南、北西辺側壁は欠失し、西南側壁残存長1.17m、北東側壁残存長2.40m、この両側壁に挟まれた東南側壁は2個の厚目の石材で組み、長さ1.35mあり、その側壁中央から1列の組んだ仕切石は残存長1.20mある。長方形プランで、仕切石は1列だけで、肥後形の祖型につながろうか。

去る5月26日、中村元校長紹介の植田時任先生のお蔭で山本・江藤・川口諸氏の蜜柑園に遺跡を尋ね、城2号墳へ上った。その折、城2号墳のある堀保氏の蜜柑園に続く森憲治氏の蜜柑園に半身のすぼと入った穴の出たことをうかがい、森氏にその地点へ案内していただいた。同氏によると、かつてその辺から刀が出土したことがあるといわれる。古墳の疑いがあるけれど、明らかでない。城2号墳南方40mぐらいの地点に当たる。





城1号墳石室平面图



城1号墳玄室内羨門直前



同石障左右のコーナー



玄室内奥壁辺



玄室内羨門直前辺

## 付論 2

# 石灰藻ヒライボについて

菊 池 泰 二

調査団の責任者三島格氏を通じ、海産生物起原と思われる少量の石灰質の礫状の物体が筆者のもとへ届けられ鑑定を委嘱された。この石灰質の礫状物は宇土市城二号墳より、石室内の人骨の下に敷き詰められた状態で出土したものである。

礫状物は粒状、円柱状、あるいは鈍頭の小さな突起が数箇結合し共通の肉厚の殻皮上に生じた形の塊をなしている。この形態は明らかに紅藻類さんごも科 *Corallinaceae* のヒライボ *Lithophyllum okamurai* Phoslie の遺骸の破片であることを示している。

さんごも類はすべて水中から吸収した炭酸カルシウムを体に蓄積し石灰藻とも呼ばれる。分節した樹枝状の形態を持つ有節さんごも亜科と、分節せず石や海草表面を被覆する無節さんごも亜科に分かれ、ヒライボは後者のイシゴロモ属に属する。この属の諸種は、基岩、転石、固着性二枚貝の殻などの固い物体に付着し、成長するに従って基質の表面を厚く被覆し種によって特徴ある三次元的形態を示す。ヒライボの場合は小円柱状で先端が扁平または鈍乳頭状の単條の“枝”が多数発達する。枝の直径は2～3mm、長さは5～6mmのものが多い。暖海性の種で「原色日本海藻図鑑」には、本州中部以南の太平洋岸、マレー群島、ポリネシア等に分布すると記されているが、対馬暖流の影響を受ける中部九州の西岸地方にも分布する。

熊本県内の産地として筆者が直接確認したのは天草下島西海岸の通詞島（天草郡五和町二江）とその周辺、富岡半島（天草郡苓北町富岡）周辺に過ぎない。瀬川・吉田（1961）は富岡沿岸の海藻相の目録を作成したが、本種について、低潮帯及び漸深帯（＝潮下帯）上部に多産すると述べている。おそらく鬼池から牛深に及ぶ天草西岸及び天草諸島の八代海沿岸の同様の環境にも広く分布するものであろう。本報告の古墳に近い産地としては、三角附近の海藻相を研究した瀬川・一木（1958）は、大矢野島及び三角周辺の転石地低潮帯にごく普通と記録している。おそらく水流が早い大矢野島周辺の島々の転石地には広く分布するものと思われるが、固着基盤として岩盤、転石を必要とし、基盤表面に微細泥が沈着するところには生育しないので、生息地は波当たりや潮通しのよい環境に限定される。宇土半島における分布の詳細は不明であるが、現在の海岸景観により判断すると、有明海側は大田尾付近より先端部に限られ、八代海側はほとんど分布し得ないであろう。

本種は生時は赤紫色であるが、死ぬと一、二ヶ月のうちに褪色して灰白色となり、基質表面から剥落ち易くなる。送付された出土標本はいずれも転石などに固着せず石灰質の藻体が小片状になったものであった。

産地の海岸では大潮低潮時には生息層まで干出するので生体を採集することも難事ではないが、多量に採集するとなるとかなりの労力を要する。場所によっては白化したヒライボが被覆した小石が打ち上げられたり、剥落した死骸破片が打ち寄せられて珊瑚砂のように局地的に堆積することもあるので、古代人が本種を採集する場合にも、これらを利用すれば効率よく採取することができたかも知れない。

#### 参考文献

岡村金太郎 1956 日本海藻誌 訂正二版 内田老鶴圃。

瀬川宗吉 1956 原色日本海藻図鑑 保育社。

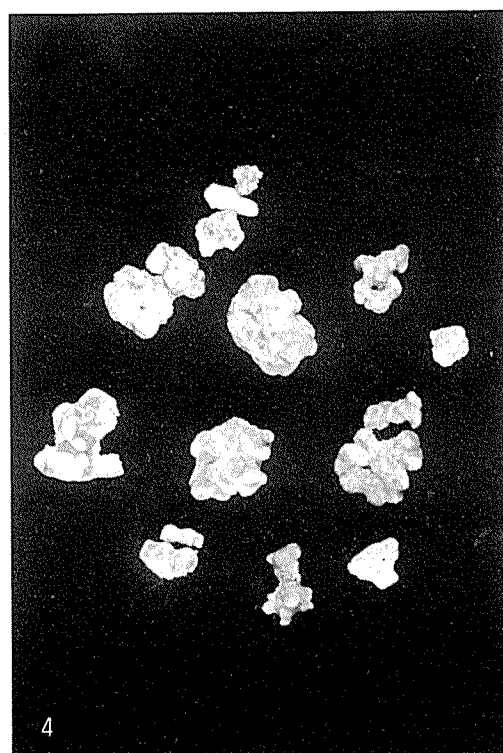
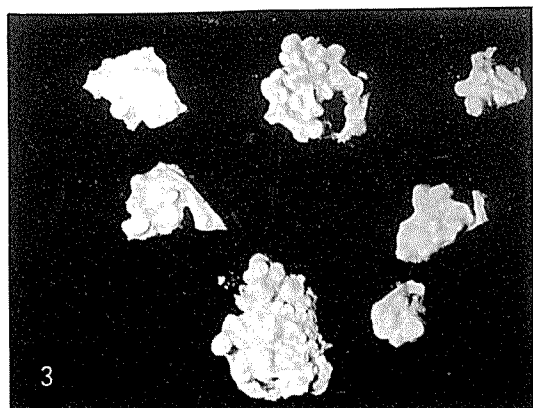
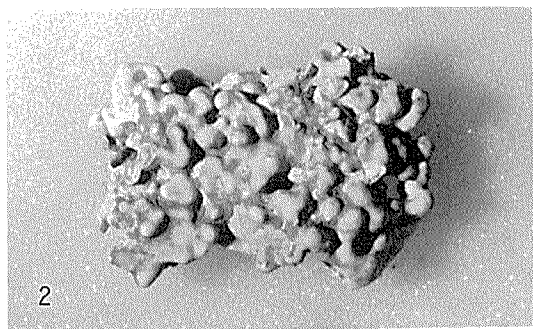
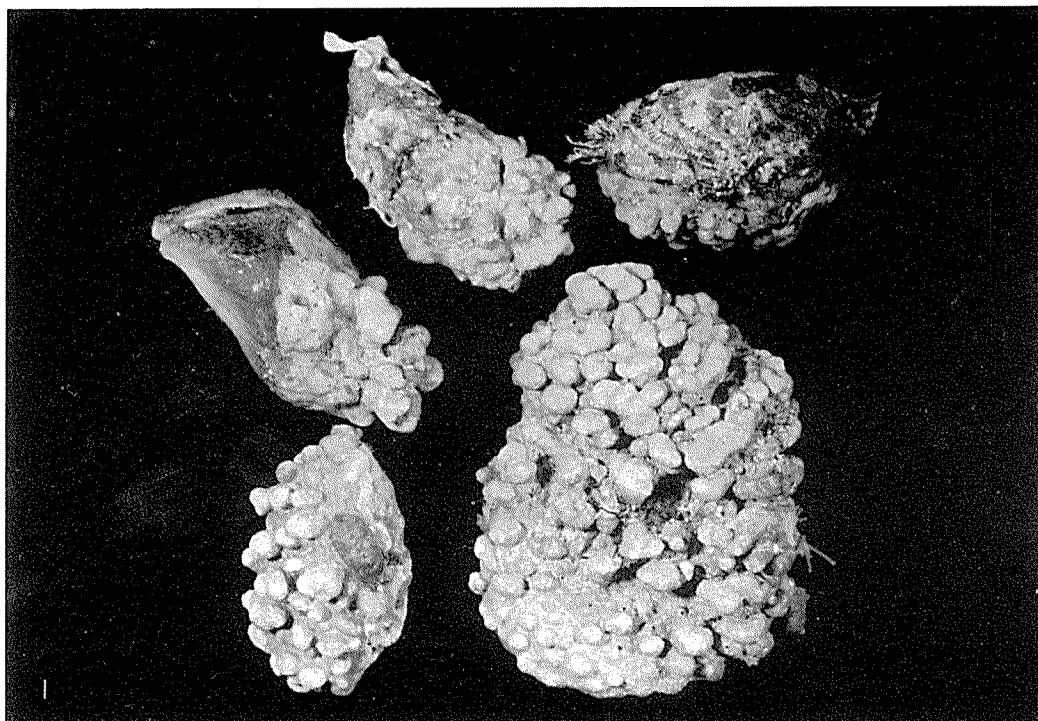
Segawa, S. and M. Ichiki, 1958. Noteworthy algae in the vicinity of the Aitsu Marine Biological Station of Kumamoto University. I. Kumamoto J. Sci., Ser. B, Sec. 2, 4 (1), 5-8.

瀬川宗吉・吉田忠生 1961 天草臨海実験所近海の生物相 第2集 海藻類 九州大学天草臨海実験所刊。

(九州大学理学部)

#### 図版説明

1. ヒライボの生体。小石または固着性二枚貝クジャクガイの殻上に被覆している。
2. 2ヶ月陸上に放置、褪色し基盤から剥落したヒライボ。
3. 剥落したヒライボを砕いた状態。
4. 城二号墳石室より出土した石灰藻の破片。



### 付論 3

## 文献から見た網田平野

板 楠 和 子

はじめに

(1)網田平野と大宅郷

(2)額田部と宇土半島

額田部と湯坐

額田部と馬

額田部と祭祠

(3)肥後国大宅牧

官牧の形態と遺構

大宅牧の位置

官牧の管理・運営

大宅牧の廃止

おわりに

はじめに

宇土半島は肥後国全体から見るとほぼその真中に位置しており、あたかも国内を海・陸両方から二分するような要衝の地に当たっている。大和朝廷が肥後国平定を企図した時、まずその根拠地として宇土半島基部を選んだのは、このためであろう。ここは天然の良港に恵まれると共に、肥後国内を南北、東西に貫通する陸上交通の要であり、さらに半島先端部と周辺の島々は有明海、不知火海への関門であった。

ところが肥後国内の征定が完了し、宇土半島基部の軍事的重要性が減退してしまったためであろうか、6世紀中葉以後は前代までに匹敵するような前方後円墳や顕著な古墳の存在は確認されていない。しかしこの時期以後、半島周辺部には桂原、梅崎、小田良などの装飾文様を有する後期古墳が点々しており、小地域毎に有力者が形成されていたことを物語っている。

さて今回の城2号墳発掘調査によって網田地区の重要性が改めて認識されると共に、大化前代の宇土半島の歴史についても検討してみる時期になったと思われる。従来古式古墳の発見が相次ぎ、その方面からの発言が大勢を占めていたが、その後の宇土半島と大和朝廷との関係は如何なるものであったか、この点を中心として以下考察を加えてみることにする。

## (1)網田平野と大宅郷

『和名抄』によると、律令時代宇土郡内には林原、桜井、諫染、大宅の4郷が置かれているが、その遺称地はいずれも残存していない。従来の研究では江戸時代の村々の石高などにより、郡域内の平野部が集中する半島基部に前掲の3郷が比定され、宇土半島部に最後の大宅郷が比定(註1)されている。同書によると播磨国揖保郡大宅郷については「於保也介」という訓が付されており、宇土郡の場合も「おほやけ郷」と呼ばれたものであろう。

この大宅郷の地名は、おおやけ→おおたか→おおだという呼称変化から、現在半島部に残る「おおだ網田」や半島最高峰の「おおだけ大岳」という地名に関連するものでないかとも考えられる。一方宇土半島の地形について見ると、半島全域にわたって大岳はじめ多教の支峰が東西に横たわり、海岸部まで山塊が迫っているため顕著な平野部の発達を妨げている。わずかに三角町波多地区、郡浦地区、網田地区を除いて、他に見るべきものは無い。そして古墳時代の遺跡もこの3地区に集中している。しかしいずれも箱式石棺を主体とする小円墳が主であり、その被葬者層についても大差はないと考えられていた。

ところが今回の城2号墳の発掘調査によって、網田地区の重要性が再認識されることになった。おそらく律令時代の<sup>(註2)</sup>大宅郷は、この網田平野の集落を中心として編戸されたものであろう。

なお半島先端部の三角町波多地区は、天草郡波多郷に比定(註2)されており、律令時代は郡名を異にしていた。さらに『三代実録』元慶2(878)年9月7日条に見える「宇土郡蒲智比咩神社」は、現在の郡浦神社に比定(註3)されており、律令時代は郡浦地区までが宇土郡の所管であったことが知られる。この郡浦地区と網田地区は山越えのルートによって簡単に往来が出来、中世においては祭祠を同じくするなど、極めて密接な関係が見られる。古代においては郡浦地区も大宅郷の一部として編戸されていたのであろう。

次に大宅郷の起源についてであるが、『播磨風土記』揖保郡条によると、「大家里」とも記(註4)されており、大宅と大家が同じ表現であったことが知られる。この大宅郷は全国に見られるが、<sup>(註5)</sup>その他に紀伊国名草郡大田郷には「大宅直麻呂」、筑前国嶋郡川辺里には「<sup>(註6)</sup>大家部」多数が見えており、これらは幾内豪族大宅臣氏の部民に因むものと考えられる。

大宅氏は大和国添上郡大宅郷を本貫地とするワニ氏後裔氏族の一であり、このワニ氏は4～5世紀にかけて天皇の皇妃を多く輩出したことで著名であり、特に6世紀には安閑天皇后妃となった春日山田皇女があり、これを契機としてワニ氏は春日氏と改名したのではないかと考え(註7)られている。大宅氏は6世紀後半の敏達朝頃に春日氏より分族したとされているが、宇土郡大宅郷の名がもし大宅氏の部民に由来するものであるならば、安閑2年に肥後国に設置された春日部屯倉との関連が考えられる。この屯倉は安閑皇妃春日山田皇女の名に因むものとされており、宇土郡に北接する飽田郡内に設置されたものである。おそらく春日部屯倉が設置された後、



その経営のため春日氏と同族である大宅氏の部民が、隣接する宇土郡内に設置されたことが考えられる。

ところで九州では帰化系集団の居住地と考えられる豊前国下毛郡大家郷の外に、筑前国嶋郡川辺里に大家部が分布し、薩摩国出水郡に大家郷が見えているが、この両地域はいずれも肥君一族の分拠地とされている。まず嶋郡は玄海灘に突き出した半島部であるが、その基部とも言うべき川辺里には、奈良時代に同郡の大領であり戸口百余名を擁する肥君猪手をはじめとして、その一族が居住していたことは著名である。そして川辺里では次のように多数の大家部姓が存在しており、特に肥君一族との結合を示す例が多い。<sup>(註8)</sup>

戸主大家部猪手とその子供、孫

肥君の寄口大家部弩弓とその子供

物部麻呂の寄口卜部阿麻豆賣の子大家部国西

肥君梨麻呂の寄口大家部穂積とその子

肥君の妻大家部泉賣、甥大家部赤麻呂、寄口大家部志許夫

物部牧夫の妻大家部咩豆賣

さらに同里では大家部だけではなく額田部も多く見られるが、この額田部も次節で述べるように宇土郡大宅郷に居住していたのである。

大家部忍鳥の妻額田部乎太賣

卜部恵比の妻額田部赤賣

卜部伊智麻呂の妻額田部泥志賣

己西部直酒手の寄口中臣部駕泥の妻額田部赤賣

物部神山の妻額田部阿久多賣

ただし額田部姓で見えるのはいずれも妻たる女性ばかりであり、隣郡である早良郡内に額田部郷があることから、ここから川辺里へ婚入した者である可能性が強く、嶋郡内に額田部が存在したかどうかは不明であるが、肥君の本貫地に近い宇土郡と、筑前嶋郡の分拠地である川辺里において、肥君一大宅(大家)部一額田部という同様な人的構成が見られるのは偶然であろうか。

さらに薩摩国出水郡は肥後国に最も近い地域であり、そこでも奈良時代に大領は肥君一族が見えており、これに接する薩摩国府の所在地高城郡ではその郷名に、合志、飽田、宇土、託麻という肥後国の郡名に一致するものが多く見られ、これは薩摩隼人の平定支配のため肥君をはじめ肥後国住民が律令時代に移住させられたためだとされている。<sup>(註9)</sup><sup>(註10)</sup>

しかし肥君一族の筑前や薩摩地方への進出はすでにそれ以前から開始されていたとされ、大体筑紫君磐井の乱以後と考えられている。両地域に大家部が共通して見られるところからすると、肥君の他所進出は同族ばかりでなく、本拠地において配下にあつたと思われる住民をも伴

っての、かなり大規模な移住であったと考えられるのではなからうか。

(2)額田部と宇土半島

宇土郡大宅郷に関する史料として、次に掲げる天平勝宝2(750)年4月5日付の「造寺所公文」がある。(『寧楽遺文』中巻)

額田部真嶋 年卅七肥後国大宅郷戸主額田部君得万呂戸口

これによると、奈良時代中頃に宇土郡大宅郷内に額田部姓の者が居住しており、その戸主の中に「額田部君」を名乗る者がいたことが知られる。

さてこの額田部については、従来額田王の歌謡を中心とした谷馨氏の研究<sup>(註11)</sup>ほか2、3の論及は見られるが、大化前代の額田部氏および額田部についての全般的な研究はまだ見られないようである。宇土郡の額田部の考察に当たっては、中央額田部氏の職掌や部民の分布から関連を見出し、行ってみたいと思うので、前記の論考に依りながら、額田部氏の関係伝承をまず見てゆくことにする。

額田部と湯坐

額田部は記・紀その他の古文献にも登場し、その分布も次表のとおりほぼ全国的に見られる

額田部分布表 (『和名類聚抄郷名考證』『日本古代人名辞典』による)

国名	郡名	郷名	人 名	国名	郡名	郷名	人 名
上野	緑野	小 野	戸主額田部馬稻	山城			額田臣、額田部宿彌
〃	甘楽	額 部		摂津			額田部宿彌、額田部
安房	朝夷	健 田	戸主額田部小君	播磨	美芸	横 川	戸主額田部真嶋
上総	周准	額 田	戸主額田部千万呂	〃	揖保		額田部連伊勢、額田部久等等
常盤			仕丁額田部小龍	備中	哲多	額 部	
参河	額田	額 田		備後	三谿	額田部	
美濃	池田	額 田	額田国造	長門	豊浦	額 部	大額額田部直塞守
尾張			尾張国造額田部	石見	美濃		寡人額田部蘇提賣
伊勢	桑名	額 田	額田神社	出雲	大原		少額額田部臣伊去美他
〃	朝明	額 田		〃	出雲	杵 築	戸主額田部堅石
越前	足羽	額 田		〃	秋鹿		匠丁部額使額田部首真咋
〃	〃	野 田	戸主額田国依	筑前	嶋	川辺里	戸口額田部阿久多他多数
加賀	江沼	額 田		〃	早良	額 田	額田駅
大和	平群	額 田		肥後	宇土	大 宅	戸主額田部君得万呂
河内	河内	額 田	額田部湯坐連、額田首				

ところから、太田亮氏は職業的部民で田部の一種であろうとされたが、<sup>(註13)</sup>同氏関係伝承の中には幾つかの職掌が窺われる。その中で最も注目されるのは、同氏の中に「湯坐」を名乗る者があ  
る点である。

この湯坐というのは『神代紀』の乳人起源を述べた段に、「彦火火出見尊婦人を取りて乳母<sup>ちおも</sup>  
・湯母及び飯嚼<sup>ゆおも いひかみ ゆまびと</sup>・湯坐としたまふ。凡て諸部備行りて養<sup>ひた</sup>し奉る。時に権<sup>かり</sup>に他婦を用りて乳を以て皇子を養す。此世に乳母を取りて兒を奉す縁なり」とある如く、元来は生まれたばかりの赤子の養育に当たる役目の婦人を指したものであり、「湯を用意して入浴の準備をする人、ユウエの約」が語源とされている。<sup>(註14)</sup>これが後には大和朝廷において、乳部や壬生部と同じく天皇皇子女の養育、資養を担当する部民として、広く全国的に設置されたものであろう。雄略3年4月紀には「湯人廬城部連武彦」が見えており、また大化2年3月紀には「湯部」とも記される例があり、その区別について湯坐は皇子・皇女の養育者、湯部はその費用を出す部民、湯人は湯部の管理者ではないかとされている。<sup>(註15)</sup>

一方額田部氏について見ると、『新撰姓氏録』左京神別および河内国神別として「額田部湯坐連」が見えており、これ以前には大化5年3月紀において、蘇我倉山田石川麻呂が同族蘇我臣日向に謀反の訴言をされ自殺した事件の時、これに連坐して斬罪となった人物として「額田部湯坐連」が存在している。これら氏族名となる程に湯坐としての活躍が際立ったのは、額田部氏<sup>(註16)</sup>が推古天皇の乳人家となったためであろうとされているが、同感である。

というのは第一に、推古天皇は幼名を「額田部皇女」と言い、欽明天皇の皇女であり、その生母は蘇我稲目の娘堅塩姫であるが、大和における額田部氏の本拠とされている平群郡額田郷内には推古神社が祀られている。第二に『日本書紀』において額田部氏が初めて登場して来るのは欽明朝からであり、同22年紀によると新羅からの貢調使の接待役として「額田部連」が見えている。第三に推古紀には「額田部連比羅夫」なる人物について、隋使裴世清が入京した時<sup>かざりうま</sup>飾騎75匹を率いて海石榴市に出迎え（推古16年8月紀）、新羅・任那の使人が入京した時「迎新羅客莊馬長」<sup>かざりうま</sup>を務め（同18年10月紀）、菟田野の葉獵の時「後部領」を務める（同19年5月紀）など外交、内廷行事両面にわたって活躍が記されており、推古朝において額田部氏が重用されている。第四に前述の大化5年紀によると、額田部湯坐連は蘇我氏と密接な関係にあったことが知られるが、これは推古天皇の生家である蘇我氏と湯坐、乳人家となった額田部氏の間<sup>(註16)</sup>に緊密な主従関係が成立していたためと思われる。

以上のことから、額田部連一族は欽明朝（539～571年）において外国使節接待役として活躍する一方、本拠地の一つである大和国平群郡額田郷において欽明皇女である後の推古天皇の乳人家としてその養育に当たっていたと考えられる。同天皇が幼名を「額田部皇女」と称したのはこのためであり、そして皇女が天皇に即位した推古朝（592～628年）において額田部連比羅夫が各方面において登場する理由であり、さらに推古天皇の生家である蘇我氏と額田部湯坐連一

族が密接な主従関係を結んでいた由縁であったと思われる。

ところが額田部氏の湯坐関係の職掌は、さらに遡って考えられるかもしれない。それは応神2年3月紀に見える額田大中彦をめぐる説話の存在である。この額田大中彦は応神天皇が皇后仲姫の姉高城入姫を召して生まれた皇子とされており、古事記にも「額田大中日子命」と記されている。そして仁徳即位前紀には、応神天皇崩御後太子菟道稚郎子と大鷦鷯命（仁徳）が互いに皇位を譲り合い皇位が定まらないのに乗じて、この額田大中彦皇子は倭の屯倉を掌握しようとしたが、屯田の由来を知る倭直吾子籠の奏言によりその企ては失敗とした、という説話を伝えている。

継体・欽明朝以前の帝記的部分については問題が多いとされ、そのままこの説話を信用することはできないが、『和名抄』によると大和国平群郡額田部郷と共に、河内国河内郡内にも額田郷があり、さらに『新撰姓氏録』によると左京神別と共に河内国神別としても「額田部湯坐連」が見えており、この他河内国皇別として「額田首」が存在した。これからすると大和地方に近い河内国内にも額田部湯坐連が居住していたことは確実であり、河内王朝において額田部一族がすでに湯坐の家柄として仕えていた可能性が考えられよう。

さらに額田部氏の部民の分布状態の中にも、同氏と皇子女養育との関係を示す例があげられる。それは額田部が分布した地域に、湯坐や壬生部、名代部が隣接して設置されていることである。

まず上総国周准郡には額田部郷の他に湯坐郷があり、安房国朝夷郡健田郷には額田部千万呂が見えるが同国長狭郡には壬生郷があり、さらに隣接の夷潛郡内には伊碁国造が安閑皇妃春日山田皇女への謝罪のために献上したという伊碁屯倉が存在した。次に越前国足羽郡には額田郷があり、同郡川合郷内には戸主として湯坐佐加波岐が見えている。美濃国池田郡内には額田郷の他に壬生郷、春日郷があり、大宝2年戸籍に見える安八郡春部里の名も想起される。備中国では哲多郡に額田部郷があり、英賀郡内に刑部郷、丹部郷、私部郷が、備後国では三谿郡内に額田郷、刑部郷、私部郷があり、さらに恵蘇郡には春部郷、刑部郷があり、奴可郡内にも刑部郷が存在した。肥後国では宇土郡に額田部が存在し、これに北接した飽田郡内に安閑皇妃春日皇女のために設置された春日部屯倉があり、その隣郡託麻郡内には私部郷が存在した。（「額田部分布表」参照）

## 額田部と馬

『新撰姓氏録』左京神別「額田部湯坐連」条には次のような同氏の名称由来が伝えられている。

天津彦根命子明立天御影之後也。允恭天皇御世被遣薩摩国平隼人。復奏之日献御馬一匹。額  
有町形廻毛。天皇嘉之賜姓額田部。

これとよく似た説話は大和国神別「額田部河田連」条にも伝えられている。

同神三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世 獻額田馬。天皇勅此馬額如田町 仍賜姓額田連也。

これによると額田部氏は允恭天皇時代、額に特徴ある馬を献上したことにより、この名を名乗ることになったという。この説話について太田亮氏は信じ難いとされたが、推古朝において額田部比羅夫が隋使裴世清の入京に際し「飾騎」を海石榴市に派遣したり、新羅と任那の使人の入京に際し「迎新羅客莊馬長」を務めるなど、馬匹との関係を示す記事があるところから、谷馨氏や佐伯有清氏は両者の関連が強いことを認められた。<sup>(註17)</sup>

さて大化前代畿内における馬匹飼育の中心は大和、河内地方であり、允恭天皇42年紀や履中天皇5年紀に見える倭馬飼部および河内馬飼部の名がよく知られている。特に馬飼の中心地の一つとなっていたのは大和、河内の国境にある生駒山の両山麓であった。<sup>(註18)</sup> まず西麓は河内国讃良郡、河内郡などに当たるが、この地方には天武12年10月紀に見える娑羅羅馬飼造、菟野馬飼造が本貫を有しており、『日本靈異記』によると讃良郡内には馬甘里が存在したといい、継体24年9月紀に見える河内母樹馬飼首御狩は河内郡内に本貫を有する一族であったと思われる。なほ讃良はササラと訓み慣わされているが、古代においてはサララまたはサワラとも呼ばれており、河内郡内に見える早良郷や『新撰姓氏録』に見える早良臣氏と関係深い地方であると思われる。<sup>(註19)</sup>

一方生駒山東麓は大和国平群郡地方であり、『紀氏家牒』によると平群県内に馬牧があつて、駿駒を撰んで飼育し天皇に献じたため、額田早良宿彌の男額田駒宿彌は馬工連の姓を賜つたという。ここに見える平群牧ははじめ大和、河内地方の馬牧は遅くとも雄略朝頃までには成立していたものと思われるが、平群牧に額田部一族が関係していたことは注目される。ここに見える額田部一族は、大和平群郡額田郷に本貫のあつた天津彦根命子明立天御影命の後裔氏族とは別の、河内郡額田郷に分居していた平群木菟宿彌の後裔氏族であろう。というのは河内郡内にも郷名に見える早良臣氏は北接する讃良郡内に本貫を有していた一族と考えられるが、『新撰姓氏録』河内国皇別「額田首」条によると、

早良臣同祖、平群木菟宿彌之後也。不尋父氏負母氏額田首。

とあつて、額田部氏と早良氏の間には婚姻関係を通じて同族関係が結ばれていたことが知られるからである。額田早良宿彌という名称もそのような関係を如実に示すものかもしれない。

さて額田部氏が畿内馬飼の中心である生駒山麓に本拠を有し、平群馬牧やここを本拠地とする平群氏一族と密接な関係があつたとすると、改めて注目されるのは先に見た額田部湯坐連の祖先伝承が薩摩国の隼人征討に懸けて物語られることである。後の日向、大隅、薩摩を含む所謂日向地方の征圧は、5世紀代に葛城襲津彦を中心として進められたが、その葛城氏の没落後隼人征討を推進したのは、平群臣氏であったとされている。<sup>(註21)</sup> 日向の児湯郡内には平群郷が見え

ており、景行紀において同天皇が子湯県の丹裳の小野で歌った国徳歌に平群の名が登場するのは、いずれも平群氏の日向における活躍を示すものであるという。この平群氏の祖と伝えられるのが平群木菟宿弥であり、雄略朝には平群真鳥が葛城氏に代って大臣の地位に任じられており、この時期が平群氏一族の最も勢力を振るった時代であったとされている。

平群氏の本拠地は、先にもふれたように生駒山地東麓の大和国平群郡であるが、同氏の北九州における根拠地と考えられているのが筑前国早良郡である。早良郡内には平群郷、額田郷、早良郷が存在しており、早良の名称自体先にも見た通り、生駒山地西麓の讚良郡やここを本貫とした早良臣氏に関係するものである。さらに筑前早良郡内には、欽明朝頃から額田部氏が主従関係を結んでいた蘇我氏に因むと思われる曾我郷も見えており、筑前国早良郡と畿内生駒山地周辺を本拠地とする氏族との間に、強い関連があったことを想定できよう。一方額田部は筑前早良郡の外に、志麻(嶋)郡にもその一族を分居させていた肥君一族の本拠地肥後国宇土郡にも分布していた。

以上のことからすると、大和・河内において平群氏と極めて近い関係にあった額田部氏は、5世紀後半から6世紀初頭にかけて、平群氏と共に日向地方の単人征討に参加したことが考えられる。九州における両氏の部民の残存状態から見ると、平群氏は筑前から右回りに豊前豊後沿いに日向地方に進行したのに対し、額田部氏は左回りに肥後国を經由して、薩摩日向地方に進行したのではないかと考えられる。

その日向地方は、古代九州において優秀な野生馬の生育地ではなかったかと考えられる。律令時代において日向地方には、その設置場所や規模などについては不明の点が多いが3ヶ所の馬牧が置かれており、さらに大隅国にも貞観年間まで2ヶ所の馬牧が設置されていた。しかしこれに先立って、中央ではすでに大化前代から日向地方の馬匹の優秀さが知られていたと考えられ、推古20年正月紀には次のような歌謡が見えている。

真蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば日向の駒 太刀ならば吳の真刀 諾しかも 蘇我の子らは 大君の 使はすらしき

これは正月の宴において蘇我大臣馬子が推古天皇に献った歌の「返歌」とされているが、ここで大臣馬子の率いる蘇我一族は、馬ならば日向の駒の様だと賞讃されているのである。これは馬子の名前から連想された比喩表現であったかもしれないが、この歌の作者とされる推古天皇は蘇我氏の出身であり、天皇の乳人家は額田部湯坐氏であり、額田部一族は日向駒の産地である日向地方に単人征討軍として参加した経歴を有しており、しかも蘇我家とは欽明朝以来密接な主従関係にあったことを念頭に置いてこの歌を読むと、興味深いものがある。

おそらく日向地方の馬匹は主として額田部一族の日向遠征の結果畿内に持たられ、その優秀さが紹介されたものではなかろうか。それは額田部氏が本拠地の生駒山周辺において平群氏や早良氏などと共に牧の経営に参加し、良馬の選別や飼育法に通じていたためであると考えら

れる。

一方隼人の側にも馬との関連を示す史料が見い出される。まず『肥前風土記』松浦郡値嘉郷条によると「彼白水郎 富於馬牛」と記したのに続けてさらに、

此嶋白水郎 容貌似隼人 恒好騎射 其言語異俗人也。

とあって、五島列島の値嘉島の海人は馬牛に富み、容貌も隼人に似ていると記している。その後の「騎射を好む」という部分も隼人に似ているという意味に解釈できるかどうか問題であるが、『延喜式』兵部省隼人司条によると、以前平城宮址から実物が出土したことで知られる隼人楯について、

長五尺、広一尺八寸、厚一寸 頭編著馬髮 以赤白墨 画鈎形。

という説明が付されており、その頭部に馬髮が編み付けられていたことが知られる。やはり隼人と馬の結びつきが強いことを示すものであろう。

さらに『万葉集』に「肥人の額髮結へる染木綿の 染めにし心吾れ忘れめや」と歌われた「肥人」について、隼人の中で駒の飼育に従事していた者を指す語で「こまひと」と訓むのではないかと指摘されている。<sup>(註27)</sup>そして日向地方に牧が設けられ、駒の飼育が行なわれるようになるのは、朝鮮経営が困難を極め、朝鮮半島の優秀な騎馬戦に対抗するためと説明されたが、隼人の間に何時頃から乗馬の風習や馬匹との関係が強まるかは、今後さらに究明していくべき問題であろう。すなわち大和朝廷など畿内勢力との接触によって隼人地方に急速に乗馬の風が広まるのか、それとも隼人の一部では金属製馬具の使用前からすでに乗馬や騎射の方法が知られていたのか、という問題である。がいずれにしても大和朝廷が朝鮮出兵と平行して日向地方の征討を敢行していたのは、内地における最も優秀な騎馬隊や兵馬の供給地としようとする目的があったことは、充分想定されるであろう。

さて先の万葉集の歌にもどると、肥人は<sup>こまひと</sup>染木綿で額の前髪を結んでいたと記されているが、このような南方系風俗は当時隼人風俗として九州西南部地域だけに残存していたものであり、その中でも特に肥人の染木綿が目立つものであったため歌謡に詠み込まれたものと解<sup>(註28)</sup>されている。隼人の中で馬匹との関係が考えられる肥人には、その額面部に特に際立った装飾があったということは、先の額田部湯坐連の祖先伝承と照らして注目される。

日向地方には日本在来馬の一種とされる御崎馬が現存しているが、林田重幸氏によると体高125~140cm、平均132cmで在来馬のうち中型馬に属し、鹿毛、青毛、<sup>(註29)</sup>栃栗毛が多く、星・流星などの額面部の白徴、四肢下端の白徴が無いのが特徴であるという。これに対し対州馬は体高<sup>(註30)</sup>108~136cm、平均122cmで小型馬に属すとされており、先に見た松浦郡値嘉島の馬もこの対州馬の系統に属するものと思われ、日向地方の馬が九州では最も体格的に大型化したのではないかと考えられる。同氏によると生駒山麓の日下遺跡から発見された5世紀後半と推定される馬骨1体分は、鑑定の結果体高130cm前後、オス、12歳前後であり、しかも埋葬された状態であ

ったことから当時の貴人の馬かまたは種馬とされた名馬であろうと考えられている。<sup>(註31)</sup>この日下遺跡は律令時代の河内郡内に位置するが、前述した様にここは古代における馬飼、馬牧の中心地であり、この馬骨は大化前代における馬の実体を知る上で、最良の基準となるものである。

日向地方の在来馬には顔面の特徴が無いということであるが、隼人の中で馬匹の飼育に関係していたと思われる肥人には、顔面額部に特徴ある装飾が施されていたことからすると、額田部氏の祖先伝承には日向地方の良馬とそれを飼育していた額に染木綿を結んだ肥人の風俗が、混ぜ合わされて反映しているのではないかと考えられる。

さらに加えて額田部氏の部民の中にも馬匹との関係が深かった地方が存在したようである。というのは全国の額田部分布地域を見て行くと、律令時代に入り官牧が設置されることが多いからである。まず上野国では甘楽郡に額田部郷が、緑野郡小野郷に額田部君馬稻が見えているが、同郡内には各々新屋御牧と拝志御牧とが設置されている。次に美濃国では池田郡に額田部郷<sup>(註32)</sup>があり、同郡内には「長保3年6月平惟平施入状案」によると小島牧があったとされている。次に長門国豊浦郡は奈良時代において同郡内の有力者が額田部直一族で占められているが、郡内には宇養牧<sup>うまかい</sup>が設置されている。次に九州では筑前国早良郡内に能古牛牧があったが、肥後国宇土郡内には後述するように大宅牧が設置されていたのである。（「額田部分布表」参照）

これらの例からすると、大化前代において額田部氏の部民が設置された地方には、実際に牧が営なまれたり、あるいは中央額田部氏の牧経営に上・分番を通じて参加していたのではないかと考えられよう。

### 額田部氏と出雲系祭祠

額田部氏の祭祠内容を伝える史料として、『播磨風土記』揖保郡条の次のような説話が知られている。

揖保郡、<sup>おし</sup>意此川条

品太夫是之世 出雲御蔭大神 坐於枚方里神尾山 每遮行人 半死半生。爾時 伯耆人小保豆 因幡布久漏 出雲都伎也 三人相憂 申於朝廷。於是 遣額田部連久等々 令禱。干時 作屋形於屋形田 作酒屋於佐々山 而祭之。安遊甚樂 即櫟山柏 挂帶捶腰 下於此川相歷。故號歷川

揖保郡鼓山条

昔額田部連伊勢 與神人腹太文 相闘之時 打鳴鼓而相闘。故號曰鼓山。

播磨国内には美芸郡横川郷の戸主として「額田部真嶋」が見えており、播磨に額田部が分布していたことは確実であるが、同国内の出雲御蔭大神を鎮め祝うため中央から額田部連が派遣されたとの説話を生じたのは、この出雲御蔭大神が『新撰姓氏録』に見える額田部湯坐連の祖神とされる「明立天御影」と同神であったためと考えられている。<sup>(註33)</sup>すなわち額田部一族が出雲



系祖神を祠っていたため、その荒ぶる神の鎮呪に額田部連が播磨まで派遣されたというのである。

一方額田部氏の部民の分布を見てみると、畿内を中心として東は上野国、西は肥後国までほぼ全国的に及んでいるが、特に出雲地方には多い。まず大原郡内には少領として「額田部臣伊去美」が見える他に、戸主として「額田部宇麻」があり、出雲郡では因佐里戸主として「額田部堅石」、秋鹿郡では匠丁部領使として「額田部首真昨」が見えており、額田部が広く分布していたことが知られる。

したがって中央の管掌者たる額田部氏が出雲系の祭祀を司どっていたのは、出雲地方との接触が行なわれた結果であろうと推定される。そしてこのことから谷馨氏は額田部一族の間には出雲系神話や伝承、歌謡が伝えられていたと考えられ、この額田部氏出身で7世紀後半の近江、飛鳥浄御原両朝廷において活躍する額田王や、その姉で同じく天智天皇皇妃であった鏡王女の文人的教養は、このような環境の中に培われたものとされている。

### (3)肥後国大宅牧

『延喜式』（巻28兵部省）によると平安時代初期における肥後国諸牧として二重馬牧、波良馬牧の2牧が設置されていたが、肥後国内にはこの他に『三代実録』貞観6(864)年11月4日条によると「勅停肥後国大宅牧」とあって、9世紀半ば頃まで大宅牧も設置されていたことがわかる。

この大宅牧については前記の条文の他に関係記事が無く、設置の時期についても正確にはわからないが、律令制下の官牧整備過程から推して、『続日本紀』文武天皇4(700)年3月丙寅条に「令諸国定牧地放牛馬」とある通り、この時期に設置された可能性が強い。孝徳天皇大化2(646)年正月の下 二 一 中 上 厩伝馬制定詔勅より約半世紀あまり、その間畿内を中心として着手された駅路の整備もほぼ全国的に行なわれる一方、中国に倣った律令の制定も進み、これに基づく中央官衙、軍団、厩伝馬の組織も整い、これらへの馬牛供給源として令制官牧の設置となったものであろう。

翌大宝元(701)年、律令政治の基本法典たる大宝律令が發布され、この中にそれ以前の令文には見られなかった「厩牧令」が新たな一篇目として制定された。<sup>(註35)</sup> 続いて『続日本紀』文武天皇慶雲4(707)年3月条によると

給鉄印于撰津伊勢等廿三国 便印牧駒犢。

とあって、厩牧令に規定されていた官牧馬牛校印のための鉄印が、太政官より官牧の設置された23ヶ国に一括頒下されている。この時点において令制諸国牧の制度が確立されたことは確実であり、肥後国では大宅牧も他の2牧と共にこの時期設置されたものと思われる。

## 官牧の形態と遺構

律令時代の官牧について調査、研究が最もよく行なわれているのは長野県を中心とする東国地方であろう。九州地方ではまだ調査が進んでいないので、一志茂樹氏(註36)や土屋長久氏(註37)の論考によりながら、官牧の形態や遺構について少し説明を加えておくと、まず官牧には(1)放牧地帯、(2)繋飼地域、(3)牧司居住地域の諸施設が伴うものとされている。

放牧地は馬一頭につき1～2町前後を必要とし、その土地は幾分傾斜を持った、酸性土壤ではない、乾燥性の肥沃な所で、相当量の清水が得られ、しかも純然たる草原地帯よりも潤葉樹を交へた射陽率50%程度の所が最も条件に合い、それに高度の高い所を併有していれば紫外線が強いため良い牧草を供給できるという。実際の放牧については今日同様「輪牧」が行なわれ、そのためには放牧地域を幾つかに区切り、その間には格くわいや小湟くわいを設けていたのではないかと考えられている。

次に繋飼場であるが、これは主として冬期の飼育に当てるための施設であり、ここには若干の広さを有す馬場と交尾場、厩舎、飼料舎および飼丁の住居などが在ったとされている。これれ放牧、繋飼地域の外圍としては格ほりと湟ほりが繞らされ、馬の逃亡や外部から猪等の危害を防ぐと共に、牧場周辺の田畑を荒すことを防ぐための処置で、その範囲は集落地帯まで及ぶこともあったという。この格は東国では「うませ」と呼ばれ、馬塞、楮、柅、馬柵等の文字を当て、「ませぐち」は格の入口に因む地名である。湟は格の外に設けられるのが普通で、地形によっては二重とされる場合も多く、湟を掘った時の排土を盛った土居と相まって、その効果は大きかったという。しかしその管理と維持には相当の労力と費用を要し、牧場周辺の住民の負担は特に大きかったものと考えられる。なほ牧地については毎年野焼きをして牧草の成長を図ったようであり、『養老令』(牧厩令)にはすでにその規定が見えている。

東国地方の発掘調査例によると、放牧地の遺構と考えられているものに、(1)野馬除け土堤と呼ばれる土塁、(2)柵状柱穴列、(3)駒止め、駒込め施設があり、繋飼地域の遺構としては、(1)段状遺構、(2)鍵曲手状土堤、(3)L字状土堤があり、(1)には夥しい柵状柱穴列が伴うという。

次に牧司の居住地域であるが、古代東国では皇室直轄地たる御牧の専当官として「牧監」が任命されており、その牧監庁の跡と考えられる礎石列が信濃国より発見されているが、国牧の責任者の居住地はこれと同列に見ることはできず、もっと簡単な施設であったと思われる。

以上は九州地方とは気候条件の異なる東国火山地帯の据野や台地に発展した馬牧の調査、研究例であるが、その具体的な立地や規模を考える上で色々な示唆を含んでいると考えられる。

## 大宅牧の位置

さて大宅牧の設置された場所については、『三代実録』には具体的に記されていないが、宇

土郡の郷名と一致し、前項で述べた通り額田部の分布していた地域には後世官牧が設置される例が多いことから、大宅郷を中心として宇土半島の山間地帯に設置されていたものと考えられる。

しかしその具体的範囲については、これまでのところ古代牧址に関係すると思われる遺構、遺物の発見も無く、不明とするより他にない。ただ『延喜式』に見える九州の馬牧のうち、肥前国内には松浦郡の平戸島、および生月島を遺称地とする庇羅牧、生属牧があり、牛牧として筑前国能古島があるところからして、九州では島や半島の狭域にも官牧が設置されていたことが知られる。これらの地域は周囲を海で囲繞され、天然の障壁を成しているばかりでなく、山地と同じく紫外線が強く良好な牧草地に恵まれていたと考えられる。

宇土半島においては、古代ばかりでなく近世においても肥後藩の馬牧が存在したことが知られる。細川家文書の『肥州録』<sup>(註38)</sup>によると宇土郡の牧山について次のような記載が見えている。

壱ヶ所 宇土郡馬数八十八疋

網津長浜両村ニ懸、東西千三百間、南北千貳百三十間、惣廻り四千六百間餘、高サ五拾間

これによって江戸時代宇土牧の位置、面積、馬数が知られるが、その東西南北の間数をm法に換算すると2376m×2255mとなり、その面積は5.36km<sup>2</sup>(540町余)となり、ちょうど網津、長浜を含む地域に相当する。この範囲には、牧の道、旧牧神、馬門、馬立<sup>まかど</sup>などの小字名が残り、網津の字馬門には牧神社も現存している。この牧神社周辺の地形は、集落のある平地より網津川に流れ込む小支流沿いに山腹を中程まで登って行くと、切立った山壁によって袋状に囲まれた緩傾斜地が開けるが、その入口に牧神社が鎮座している。地元の古老によると、江戸時代にはここで細川藩の役人へ引き渡しが行なわれたと伝えられており、以前はその時や祭礼に使われた衣装が残っていたという。しかし『肥後国誌』長浜条によると、牧神社は最初長浜の笠瓜その後山中ツブギノ上に鎮座したとあり、網津の牧神社については記載されていないから、現存の牧神社はその後の鎮座地ということになる。いま笠瓜、および山中に当たると<sup>あざ</sup>思われる宇旧牧神一帯の地形を地図上に見ると、いずれも三方を高い山壁で囲まれた平坦地が存在しており、字馬門の牧神社一帯の地形と酷似している。これからすると江戸時代においては牧神社の存在した一帯に放牧場か繋飼場の中心があったと考えられる。さらに地図上を検すると、上網田、下網田、網津から大岳を経て松合の山間地にも同様の地形が点在しており、古代の大宅牧もこれらの地形を利用して営まれていた可能性が考えられる。今後馬牧の具体的遺跡の発見が望まれるところである。

#### 官牧の管理・運営

『養老牧厩令』を中心として官牧の管理・運営について概観しておく、国牧にはその管理者として牧長、牧帳各1名が置かれ、その地域の有力者や「清幹にして有能者」が任命される

ことになっていた。<sup>(註39)</sup>『類聚三代格』所収太政官符によると、神護景雲年間頃の信濃国牧主當として「伊那郡大領金刺舎人八磨」が見え、郡司層が国牧経営の責任者を兼任していたことが知られる。大宅牧の場合、最も関係ある郡司層は肥君一族であるが、宇土郡に近接する下益城郡豊野村の延暦20年銘浄水寺碑文には「肥公馬長」<sup>(註40)</sup>という氏名が見えており、大宅牧の存続期間であるところからして、やはり肥公一族が大宅牧経営に当たっていたことに因る命名ではないかと考えられる。

牧の馬牛は百頭毎に「群」と称し、群毎に「牧子」2人が付けられ、牝馬は4歳（牝牛は3歳）で遊化（交接）させ、5歳（牛は4歳）より20歳（牛も同様『延喜式』）まで責課の対象となり、その割合は牝百頭に対して駒・犢各60匹であった。もしこの責課をはたせなかったり、牧の馬牛を死・失すれば、牧長以下罰則が科せられた。

牧の駒・犢は2歳になるとその年の9月に国司立合の下に牧長が官印を捺し、齒歳・毛色を記した帳簿を作成した。『左右馬寮式』御牧条によると、この時齒歳4才以上の良馬を選んで調教し、翌年8月に貢上することになっていた。その運送方法は、都までの通過国が順次秣菟と索夫を提供し、逋送するというものであった。『天平六年尾張国正税帳』によると、尾張国を通過する陸奥国からの貢上馬の食料を提供しているので、10世紀の御牧よりの貢上方法は奈良時代より行なわれていたことがわかる。ちなみに馬1頭1日分の食稲は3束となっており、これを「糖米」と称して束別6升（現在の2.4升）に搗いたものを与えていた。さらに同帳によると、中央から上野国に下した父馬1頭1日分食稲として1束2把が記されており、奈良時代地方から貢上される駒がいかに優遇されていたかを窺うことができよう。但し『主税式』「諸国御馬入京秣」条によると10世紀頃にはこの食稲が4把～1束に減少していたことが知られる。

なほ同式「馬皮直」条には、貢上に堪えない駒は死馬牛の皮同様に売却し、当国牧の維持経費に充てることが規定されている。<sup>(註41)</sup>『類聚三代格』によると、国牧の貢上馬は次第に不良馬や規定数に満たないものが多くなったようであり、その解決策として売却が認められたのであろう。

国牧の駒は中央への貢上の他に、乗用に堪えるものは軍団の兵馬や、駅・伝馬として配置することになっていた。しかし軍団の兵馬については関係史料が皆無に近く、そのうえ軍団制そのものが8世紀末に辺要地を除いて廃止されたので、実態は不明である。駅伝馬についても、駅馬は駅起稲によって、伝馬は正税稲によって私馬を購入して用いることが多かったと思われる。現存する『正税帳』には伝馬購入の記事が多く見えている。参考までに『延喜式』に記載されている肥後国の駅馬の値<sup>(註42)</sup>を見ると、上馬400束、中馬350束、下馬300束となっている。（当時上田1反よりの収穫は50束、中田40束、下田30束となっていた。）

## 大宅牧の廃止

では貞観6年に大宅牧が廃止された原因は何であろうか。これについて前記条文は何の説明も記していないが、8世紀の官牧成立からこの頃までに廃止された牧は大宅牧以外にも多く、次のような記事が見えている。

(1)『続日本紀』靈龜2年2月2日条

令<sub>下</sub>撰津国<sub>中</sub>罷大隅<sub>上</sub>媛嶋<sub>二</sub>牧<sub>一</sub> 聽<sub>二</sub>百姓<sub>一</sub>佃食之。

(2)『日本後紀』延暦18年7月20日条

停<sub>二</sub>大和国<sub>一</sub>宇陀<sub>二</sub>肥伊<sub>一</sub>牧<sub>下</sub> 以<sub>二</sub>接<sub>中</sub>民居<sub>上</sub>損<sub>二</sub>田園<sub>一</sub>也。

(3)同大同3年7月4日条

廢<sub>二</sub>撰津国<sub>一</sub>河辺<sub>二</sub>郡<sub>一</sub>畝<sub>二</sub>野<sub>一</sub>牧<sub>三</sub> 為<sub>二</sub>牧馬<sub>一</sub>逸出<sub>二</sub>損害<sub>一</sub>民稼。

(4)『三代実録』貞観2年8月8日条

廢<sub>二</sub>大隅国<sub>一</sub>吉多<sub>二</sub>野<sub>一</sub>神<sub>二</sub>牧<sub>一</sub> 緣<sub>二</sub>馬<sub>三</sub>多<sub>二</sub>蕃<sub>一</sub>息<sub>二</sub>害<sub>一</sub>百姓<sub>二</sub>之<sub>一</sub>作業也。

(5)同貞観7年12月2日

停<sub>二</sub>廢<sub>一</sub>讚岐<sub>二</sub>国<sub>一</sub>二野<sub>二</sub>郡<sub>一</sub>託<sub>二</sub>磨<sub>一</sub>牧

これらによると廃止された官牧は撰津2、大和1、讚岐1、大隅2となっており、その理由は(1)百姓の佃として耕作させるため、(2)民居に近接し田園を損うため、(3)牧馬が逸出し民稼を損うため、(4)牧馬が多く蕃息し百姓の作業を害するため、となっている。したがって廃止された官牧は、その立地が田園や民居に近く、牧から逸出して来た馬が田畑を荒らしたり、あるいは散出した牧馬の搜索に牧周辺の百姓が動員されたりすることが多かったであろう。

肥後大宅牧についても、火山据野の大原野や孤島に設置された牧と異なり、半島基部や半島周辺部には古墳時代以来集落が営まれており、廃止の原因については前記の例が大いに参考になる。その一因は大宅牧周辺の住民の生業や日常生活に対して大きな被害を与えていたためであると考えられる。

しかし肥後国および大隅国牧廃止についてさらに考えられるのは軍団制との関連である。先にもふれたように『養老牧厩令』には

牧馬<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>軍<sub>レ</sub>団<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>當<sub>一</sub>団<sub>二</sub>兵<sub>一</sub>士<sub>二</sub>内<sub>一</sub>簡<sub>二</sub>家<sub>一</sub>富<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>充<sub>レ</sub>。免<sub>二</sub>其<sub>一</sub>上<sub>二</sub>番<sub>一</sub>及<sub>二</sub>雜<sub>一</sub>駟<sub>レ</sub>使<sub>一</sub>とあって、8世紀初頭国牧が全国的に設置された重要な任務の一つに、軍団の兵馬を供給することがあげられている。さらに『軍防令』には1軍団千人の構成について、兵士は10人を「一火」と称し、1火毎に駄馬6匹を充てることが規定されている。この率で計算すると1軍団には騎馬の他に600疋の駄馬を必要としたのである。

しかし軍団自体についてみると、8世紀以降は対外的にも対内的にも大動員をしたことはなく、ただ東北や九州において部分的動員を見たのみであった。すなわち7世紀中葉日本が唐・

新羅連合軍に敗北した後、律令軍団が創設された頃は全国的に正丁の三分の一を徴発する大軍備が必要視されていたが、8世紀以降は次第にその危機感が弱まり、国司などによる私役の弊害が顕著となる一方、軍団組織の縮小や廃止が行なわれるようになった。そして延暦11(792)年には早くも陸奥、出羽、佐渡、太宰府管内など辺要地区を除いて諸国の軍団は廃止され、一定数の建児をもってこれに換えることになった。

さて九州の兵士数は、『続日本紀』天平宝字5(761)年11月17日条によると西海道使吉備真備が筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向、大隅、薩摩9ヶ国の検定を行なった時に1万2500人となっており、その後日向、大隅、薩摩の3ヶ国は除いて、6ヶ国合計1万7100人に増員されたい。それが弘仁4(811)年8月の太政官符<sup>(註44)</sup>によってさらに半減され、6ヶ国合計9000人となっている。その後天長3(825)年には終に軍団制も廃止された<sup>(註43)</sup>という。

肥後国においては、先の弘仁4年官符によって9世紀初頭まで太宰管内の正規軍としては最大の、4軍団4千人が配備されていたことが判る。外敵防衛に備える筑前国と反対に、隼人鎮圧の最前線と考えられていたためである。しかし肥後国内の4軍団については、他に関係史料も無く設置場所もいまだはっきりしていない。ただし国府の置かれた郡内に必備されることから益城郡と託麻郡に1軍ずつ、地理的關係から北部の玉名か菊池郡に1軍、南部の八代郡に1軍が配備されていたと推定されている<sup>(註45)</sup>。最近益城軍団地に想定されていた下益城郡城南町平野の天神原遺跡について再調査が実施されたが、益城軍団地と確証するに足る遺構、遺物の検出にはなっていない<sup>(註46)</sup>。

肥後国最初の国府については、益城<sup>(註47)</sup>、託麻<sup>(註48)</sup>の各郡設置説が発表されているが、その当否は別として宇土郡大宅牧がこの両郡に近接した位置に設置されたことに注目したい。国牧が律令軍団および駅制の整備と密接な関係を持つとするならば、肥後国内では国府や国府付軍団に最も近い場所に国牧の一つが設置されたと見ることができるのではなかろうか。

そして大宅牧は律令軍団が全面的に廃止となった後、9世紀半ばに廃止となっている。その後は専ら『延喜兵部式』に登場する二重牧、波良牧が太宰府への貢上と国内駅傳馬の供給源となっていたものと思われる。同式「諸国牧」条の末尾によると

右諸牧馬五六歳、牛四五歳、毎年進左右馬寮。各備梳・刷・剉。其西海道諸国送太宰府。但帳進省。

とあって、九州諸国の官牧馬牛は太宰府へ貢進することになっていた。なほ同条によると太宰府定額兵馬は「廿疋」となっており、そのうち10疋と牧馬10疋は鴻臚館に分置して「急速之儲」に備えることになっている。さらに九州諸牧のうち、肥後国二重牧は特別な馬牧とされていたらしい。同条によると

肥後国二重牧馬、若有超群者進上。餘充太宰兵馬及當国他国駅伝馬

とあって、群(百疋)を越えた分の馬は中央に進上し、その残りを太宰府兵馬と駅伝馬に充当

するよう規定されている。おそらく二重牧は規模も大きく優秀な駒を産出していたのであろう。

10世紀前半の『延喜式』によると、官牧として(1)諸国牧、(2)御牧、(3)近都牧があり、この他に(4)国飼、(5)長索貢上という名称で各国からの貢馬が規定されている。8世紀初頭全国23ヶ国において発足した令制官牧は、その後各国において幾度か設、廃止を繰り返し、その形態についても機能分化を行いながら、延喜式に見える諸牧へと定着して行ったものと考えられる。いまその変遷は省略し結果から見ると、最終的には西海道、東海道を中心として国牧を配置し、皇室料馬の調達のため特に東国4ヶ国に御牧を集中的に設置し、これら諸国牧から貢上されて来る牛馬の飼育のために畿内周辺4ヶ国に近都牧を配し、さらに五畿内およびその近国からは朝廷の毎年の祭礼・行事のために国毎に5～10匹の国飼馬を貢上させる体制が作られた。この他に13ヶ国より「長索貢上」と称して、その国の索夫、秣料負担で毎年馬牛を貢進させている。これら13ヶ国のうち遠江、讃岐2国以外では国内に国牧か御牧が設置されており、これとは別途の貢進が義務づけられていたものと思われる。

おわりに

肥後国平定後大和朝廷が実施したのは、県や各種部民、屯倉などの設置であったが、宇土半島においても例外ではなかった。それはまず5世紀後半から6世紀にかけて日向地方の隼人征討軍として活躍した額田部氏の勢力の扶植であり、額田部が設置された。その後安閑皇妃春日山田皇女に因む春日部屯倉が隣接の飽田郡内に設置され、6世紀後半には同皇女の出身氏族である春日氏と同族関係にあった大宅氏の部民が宇土郡内に設置されたものと思われる。これが律令時代には大宅郷の名前として定着したものであり、その中心村落は網田平野にあったと思われる。

さて宇土半島に設置された部民のうち、額田部の大和朝廷における職掌としては、(1)湯坐<sup>ゆゑ</sup>として天皇皇子女の養育、(2)外国使節の接待、(3)馬匹の飼育および飭騎長、(4)出雲系祖神を斎き、これに関する神事、呪術の司祭者および伝誦者、などが知られたが、宇土地方の額田部についてもこれらとの関係が見られるようである。

その一は馬匹との関連である。肥後国内においても天草地方を除く全域の後期古墳から馬具の出土を見ており、その点については特に他地域とは変りないが、宇土半島に近い下益城郡の塚原古墳群中、丸山26号、同27号、39号方形周溝墓、および長塚古墳の周溝内より各々馬歯が<sup>(註49)</sup>発見されており、それらはいずれも被葬者の生前乗用していた馬の頭部だけが、副葬されていた可能性が強い。さらに塚原出土の馬骨については、成馬ではあるが頬歯の咬合面が狭く縄文時代の小型馬の体質を保持している、との鑑定結果が報告されており、<sup>(註51)</sup>体格的にはあまり進化していないようであるが、この地方の有力者が乗用馬を重視していたことは考えられよう。そして律令時代に入ると宇土半島に大宅牧が設置されるのである。額田部の分布した地方にはや

はり官牧が設置される例が多いから、額田部の中には中央額田部氏を介して馬匹の飼育などと関係深い者も存在したのではなかろうか。

その二は湯坐や出雲系神事、神話の伝誦など特に女性の役割との関連である。今回の発掘調査により、城2号墳から琴柱型石製品2個が出土したが、九州においては筑前国粕屋郡内に<sup>(註52)</sup>ある七夕池古墳より同種の発見があり、被葬者は熟年の女性で、琴柱型石製品は頭部の両耳の下から1個ずつ出土したという。この他肥前地方では佐賀郡内の森の上古墳が<sup>(註53)</sup>知られており、ここでは箱式石棺内より頭骨に接して1個だけ発見されたという。最近同郡内の丸山古墳群から<sup>(註54)</sup>も発見が報じられたが、その出土状況など詳細はまだ正式に発表されていない。

さて城2号墳においては後世の攪乱のため石室内の遺物について原位置を保っているか否かについて問題は残るが、石室構造よりすれば複数埋葬が考えられ、琴柱型石製品が女性に伴っていた可能性は強い。さらに城2号墳の立地や、石室内に石灰藻を敷いているところから見ても、その被葬者は漁撈生活に依存していた集団の長と考えられ、一族の女性が祭祠を司っていたことは当然予想される。さらに宇土半島基部にはその主体部に女性を単独埋葬した向野田前<sup>(註55)</sup>方後円墳が築造されており、5世紀代宇土地方において女性の司祭者が力を有していたことは疑いない。このような地域に、大和朝廷において湯坐や出雲系神事・神話の伝承者たる女性を一族中より出仕させていたと思われる額田部氏の部民が設置されたのは、偶然であろうか。額田部の分布地区に、共通した祭祠用具や遺構遺物の出土があれば興味の持たれるところであるが、いまは今後の課題として指摘しておくにとどめたい。

さて大宅郷の額田部は、先述した造寺所公文によると「君」姓を名乗っている。これは宇土郡の額田部の管掌者であった伴造の後裔であると思われるが、これと同様の例に『万葉集』に益城郡の人として見える「大伴君熊凝」があり、この地方の国造家であった火君と、非常に近い関係があったことが知られる。そして宇土郡地方において見られる火君、大宅（大家）部、額田部の共存関係は、筑前国嶋郡においても顕著なのである。このことは宇土地方と嶋郡地方との間に、肥君をはじめとして人的関係が非常に緊密であったことを改めて考えさせるものである。ここではこれ以上述べる余裕はないが、肥君の筑前進出について具体的な示唆を与えてくれるものではなかろうか。

#### 註

- (1) 圭室諦成『熊本の歴史』益城と宇土 昭和29年 日本談義社
- (2) 吉田東伍『大日本地名辞典』第4巻 圭室諦成 前掲書
- (3) 宇土郡役所『宇土郡誌』大正10年
- (4) 大宅部の分布（『和名類聚抄郷名考證』『日本古代人名辞典』による）



国	下野	上野	武蔵	越後	大和	河内	山城	播磨	備後	〃	長門	石見	豊前	筑前	肥後	薩摩	紀伊
郡	梁田	多胡	入間	古志	添上	河内	紀伊	揖保	安那	深津		邇摩	下毛	嶋	宇土	出水	名草
郷	大宅	大家	大家	大家	大宅	大宅		大宅(大家)	大家	大宅		大家	大家	川辺	大宅	大家	大田
部							大宅部				大宅首			大家部			大宅直

- (5) 『日本古代人名辞典』第1巻、昭和33年 吉川弘文館
- (6) 同書
- (7) 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」(『日本古代政治史研究』所収) 昭和41年 塙書房
- (8) 「大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍」(『寧楽遺文』上巻所収)
- (9) 「天平八年薩摩国正税帳」(『寧楽遺文』上巻所収)
- (10) 井上辰雄『隼人と大和政権』昭和49年 学生社
- (11) 谷馨『額田姫王』紀伊国屋新書、昭和42年
- (12) 佐伯有清「馬の伝承と馬飼の成立」(『日本古代文化の探求・馬』所収) 昭和49年、社会思想社、井上辰雄 前掲書
- (13) 太田亮『姓氏家系辞典』1057頁
- (14) 『日本古典文学体系・日本書紀』上巻 180頁頭註5
- (15) 同書 466頁頭註4、下巻補註25-20
- (16) 谷馨 前掲書 48~49頁
- (17) 谷馨、佐伯有清、前掲書
- (18) 佐伯有清、前掲書
- (19) 吉田東伍『大日本地名辞書』第2巻
- (20) 佐伯有清、前掲書 130頁
- (21) 井上辰雄、前掲書 61頁
- (22) 『日本書紀』雄略紀、武烈紀
- (23) 岸俊男 前掲書72頁、78頁
- (24) 『延喜式』兵部省諸国牧条
- (25) 『三代実録』貞観2年8月8日条
- (26) 卷11、2496番「物に寄せて思を陳ぶる歌」
- (27) 井上辰雄 前掲書「6、肥人と隼人」108頁
- (28) 同氏 前掲書 104頁
- (29) 林田重幸「日本在来馬の源流」223~224頁(『日本古代文化の探求・馬』所収)
- (30) 同氏 同書 225~226頁
- (31) 同氏 同書 238~239頁
- (32) 池辺彌『和名類聚抄郷名考證』
- (33) 谷馨 前掲書 52~53頁
- (34) 同氏 同書 53頁
- (35) 『日本思想大系3 律令』補註23 厩牧令 673頁 昭和51年 岩波書店

- (36) 一志茂樹「官牧考」(『信濃』2-5、6)
- (37) 土屋長久「信濃長倉牧址にある上代牧場遺構」、「信濃古牧の成立とその性格」(『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』所収)昭和50年 同書刊行会
- (38) 松本寿三郎助教授の御教示によると、これは藩主が領内の事情を知るための覚帳のようなものであったという。
- (39) 巻18「国飼并牧馬牛事」弘仁3年12月8日官符
- (40) 丹辺総次郎・松本雅明「浄水寺天長碑の研究」(『熊本史学』9号)  
松本雅明「浄水寺の四碑」(『熊本県文化財報告第3集』1953年)
- (41) 巻18「国飼并牧馬牛事」延暦15年10月22日官符、弘仁2年5月22日官符
- (42) 巻26「主税上」
- (43) 竹尾幸子「広嗣の乱と筑紫の軍制」(『古代の日本3・九州』所収)昭和45年 角川書店
- (44) 『類聚三代格』巻18 「軍毅兵士鎮兵事」
- (45) 松本雅明『熊本県史』総説篇 181～182頁
- (46) 「益城郡衙」(『熊本県文化財調査報告第32集』)1978年
- (47) 松本雅明「益城国府」(『城南町史』所収)
- (48) 木下良「肥後国府の変遷について」(『古代文化』第27巻9号)
- (49) 「塚原」(『熊本県文化財調査報告第16集』)1975年
- (50) 「久保遺跡」(『熊本県文化財報告第18集』)1975年
- (51) 吉倉真 付論3「塚原古墳群出土の馬歯」(前掲『塚原』所収)
- (52) 「七夕池遺跡群発掘調査概報」(『志免町文化財調査報告書第1集』)1974年
- (53) 『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告18輯』昭和24年
- (54) 「丸山遺跡」(『九州史学会発表資料』)1977年
- (55) 「向野田古墳」(『宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集』)1978年

(付記) この小稿を書くに当たりまして、長野県史編纂室の桐原健氏より古代官牧に関する文献および長野県内の牧遺構につき御教示をいただき、また遺跡の見学、文献の入手などに便宜を計っていただきました。そのご好意に対し深くお礼申し上げます。さらに城2号墳発掘調査団の皆様には、ご多忙中にもかかわらず、私の申し出に対し時間を割いていただきましたこと、感謝致しております。最後に私事にわたりますが、三島格先生の還暦を祝しこの小稿の筆を取りましたこと、申し添えさせていただきます。(1981年2月28日脱稿)

(熊本大学文学部)

## 付論 4

# 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室

亀 田 修 一

### 1

竪穴系横口式石室は、一見、竪穴式石室の形をしながら、一方の短壁より屍体等の搬入を行い、すべて完了後、そこを外部から閉塞した石室である。<sup>(註1)</sup>この形の石室は、朝鮮半島において、伽耶地域を中心に新羅、百濟兩地域でも確認されている。伽耶地域の石室を総括して検討された全吉姫氏は、<sup>(註2)</sup>竪穴系横口式石室は伽耶地域にあった竪穴式石室に百濟の横穴式石室の影響が<sup>(註3)</sup>加わり、発生したものとしている。

三国時代の墓制としては、竪穴式石室、横穴式石室、積石木槨などが主として扱われてきた。しかし、最近の調査によって、竪穴系横口式石室が単に伽耶地域の墓制としてのみ扱われることが不十分であることが明らかにされつつある。

そこで、小稿では朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室を検討することによって、朝鮮の墓制を考える上での、更に、日本の竪穴系横口式石室研究の一助となることを期すものである。

### 2

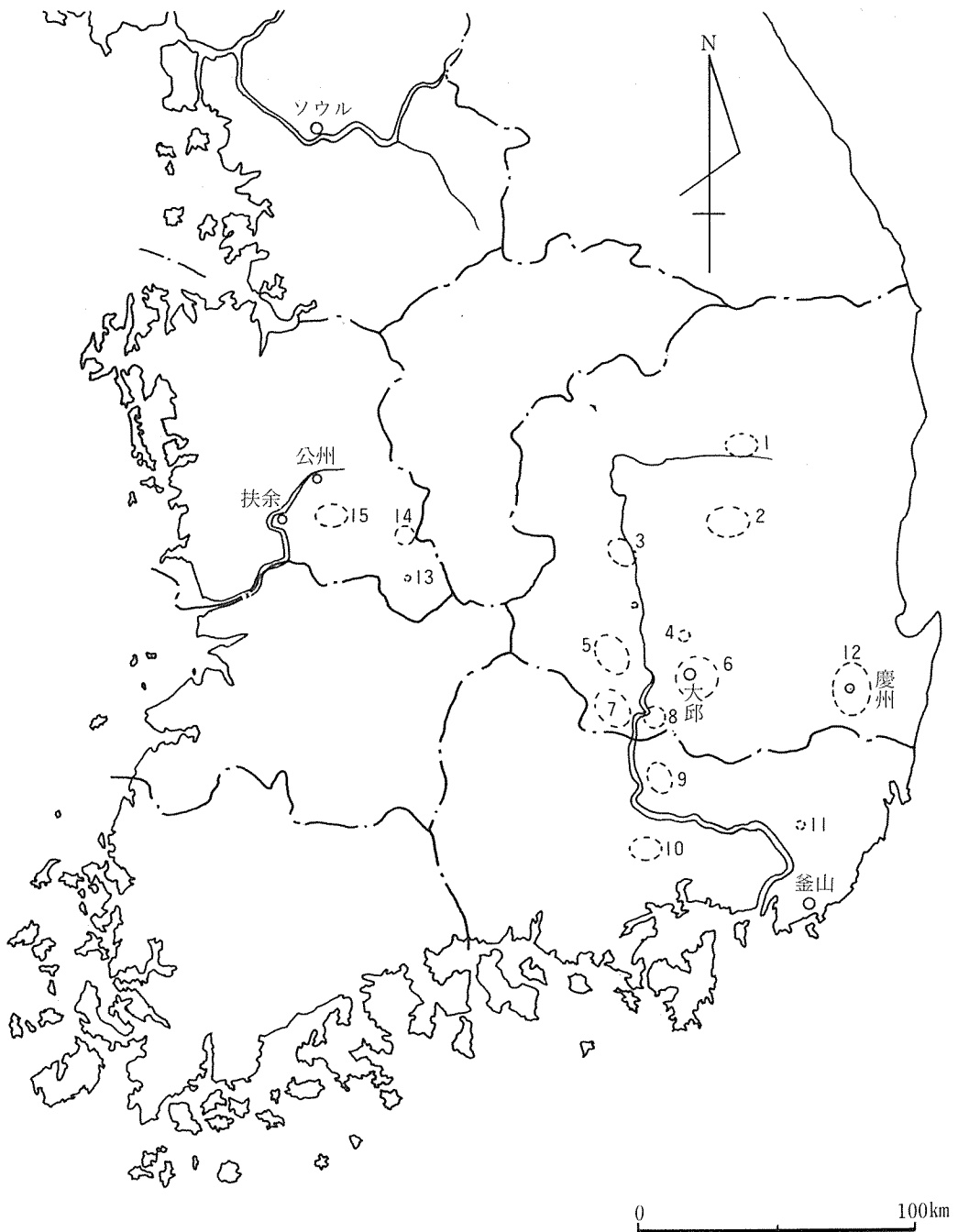
竪穴系横口式石室は、伽耶、新羅、百濟の各地域で確認されているが、以下、地域ごとに見てみよう（第1図、附表）。<sup>(註4)</sup>

1. 安東地域では、造塔洞古墳、中佳邱洞古墳が確認されている。<sup>(註5)</sup>造塔洞古墳は長径21mの円墳で、東、西二石室がある。ともに方形塊石を使用して四壁を構築し、両長壁は上部でやや内傾している。東石室は長さ7.20m、幅1.70～1.84m、西石室は長さ6.22m、幅1.90～2.36mを測り、屍床がそれぞれ奥壁に平行して6個、5個あり、追葬されていることがその屍床の状況からわかる。<sup>(註6)</sup>

中佳邱洞古墳は直径21mの円墳で、主室と副葬品室がある。主室は長さ5.0m、幅2.0mの大ききで、自然石と割石を混用して四壁を構築している。両長壁は上部で内傾する。屍床は長軸にそって品字形に3基つくられているが、屍体は5体ある。追葬がなされている（第2図）。

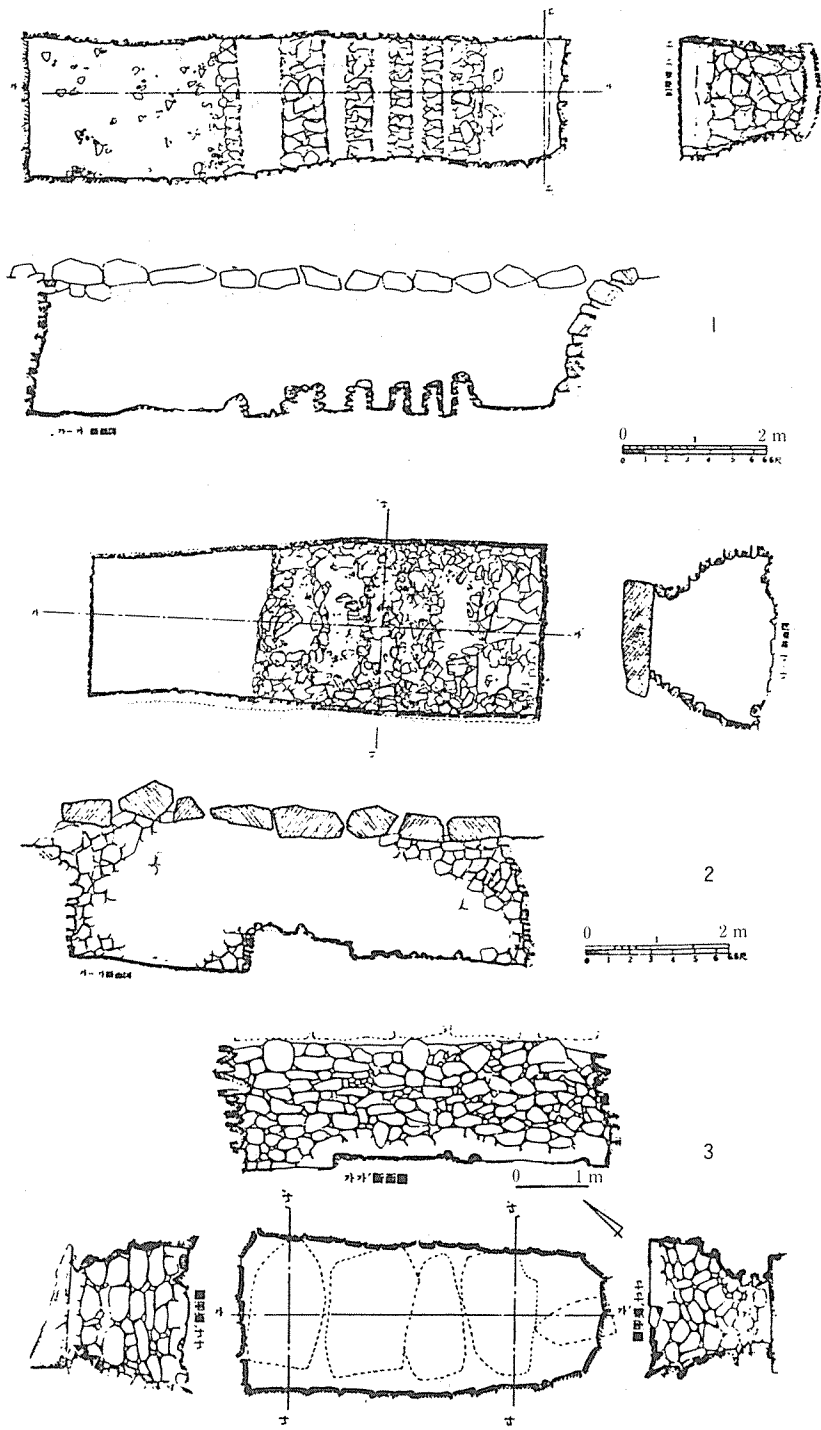
この地域には他に竪穴式石室をもつ古墳も多いようである。

2. 義城地域では、塔里古墳第1墓槨がそうである。<sup>(註7)</sup>封土中に石室は5基あるが、第1墓槨のみが竪穴系横口式石室で、その他は竪穴式石室である。第1墓槨の石室は長さ3.50m、幅1.70m、高さ1.80mで、四壁はすべて方形塊石を用いて構築し、入口となっている南壁を除いてす



第1図 竪穴系横口式石室古墳分布図

- 1、安東地域 2、義城地域 3、善山地域 4、漆谷地域 5、星州地域 6、大邱地域 7、高靈地域 8、玄風地域 9、昌寧地域 10、咸安地域 11、梁山地域 12、慶州地域 13、錦山地域 14、大徳地域 15、論山地域



第2図 安東造塔洞古墳東槨(1)、西槨(2)、中佳邱洞古墳(3)、石室実測図

べて壁は垂直になっている（第3図1）。

3. 善山地域では、善山洛山洞<sup>(註8)</sup>28号墳が<sup>(註9)</sup>そうである。洛山洞28号墳は直径約13mの円墳で長さ約7m、幅1.70mの石室をもっている。四壁はすべて自然石を使用している。石室内には板石を組みあわせた石棺が2列に2つずつ、計4個置かれている。第3石棺には自然石の一部を加工した石枕が2個おかれていた。

4. 漆谷地域では、若木古墳<sup>(註10)</sup>、仁同面黄桑洞1、2号墳<sup>(註11)</sup>がある。若木古墳は直径約21mの円墳で、竪穴系横口式石室と小石槨が1基ずつある。石室は長さ5.80m、幅1.35mの大きさで、四壁は花崗岩質の板石を立て、入口である東短壁は長目の川石を一段つみ、その上に大きな板石を1枚たてて閉塞している。床面は入口側1.5mは小さなジャリを敷き、その奥の方はやや大きな石を敷き、区別している（第3図2）。

仁同面黄桑洞1号墳は長径23mの円墳で、石室の大きさは長さ5.80m、幅1.10mである。東西両長壁は方形塊石状割石を垂直につみあげ、南北両短壁は方形ないし長方形の板石を二、三段つみ、その上に大きな板石をそれぞれ立てている。入口は第3図3にみるように板石の状況からBの側であったと思われる。床面には塊石と板石によってつくられた棺台が長軸にそって1基ある。同2号墳は長径32mの大形の円墳で、石室は長さ5.60m、幅1.0mの大きさである。石室の構造は1号墳と同様であるが、床面は扁平な川原石を敷いただけである。

5. 星州地域では、星山洞1号墳、2号墳<sup>(註12)</sup>、6号墳、月恒面水竹洞古墳<sup>(註13)</sup>がある。星山洞1号墳は直径約13.5mの円墳で、石室は長さ約3.6m、幅1.35mの大きさである。四壁は割石を用いて構築し、南北両長壁及び、西短壁はほぼ垂直につんでいるが、東短壁のみ壁面が凸凹しており、外側から積んだことがわかる。床面は小さな割石を二、三重積んでいる（第4図1）。

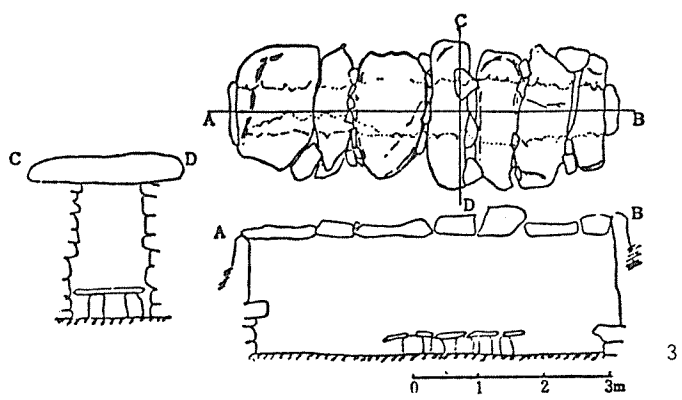
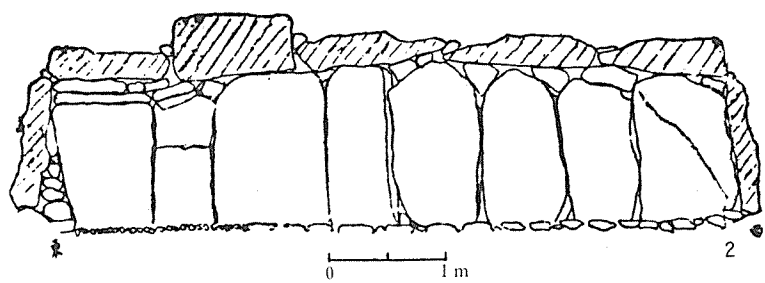
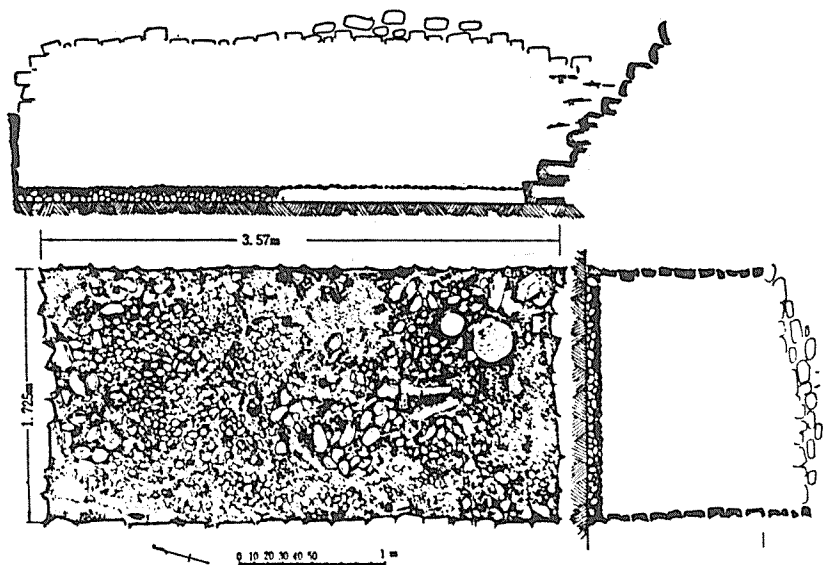
同2号墳は直径約27mのやや大形の円墳で、墳丘内に石室が三つあり、主室が竪穴系横口式石室で、他は竪穴式石室である。主室は長さ約3.42m、幅約1.4mの大きさである。四壁は割石をほぼ垂直に積み上げているが、南短壁のみやや外傾し、ここが入口と思われる。床面は約15cmの厚さに小さな割石を二、三重に敷いている。

同6号墳は直径約9mの円墳で、石室は長さ約3m、幅約0.9mの大きさである。四壁は割石を小口積みになっている。両長壁はやや内傾し、北短壁は垂直に立ち、南短壁は上部がやや外傾し、ここが入口と思われる。床面は栗石を約15～18cmの厚さに敷いている（第4図2）。

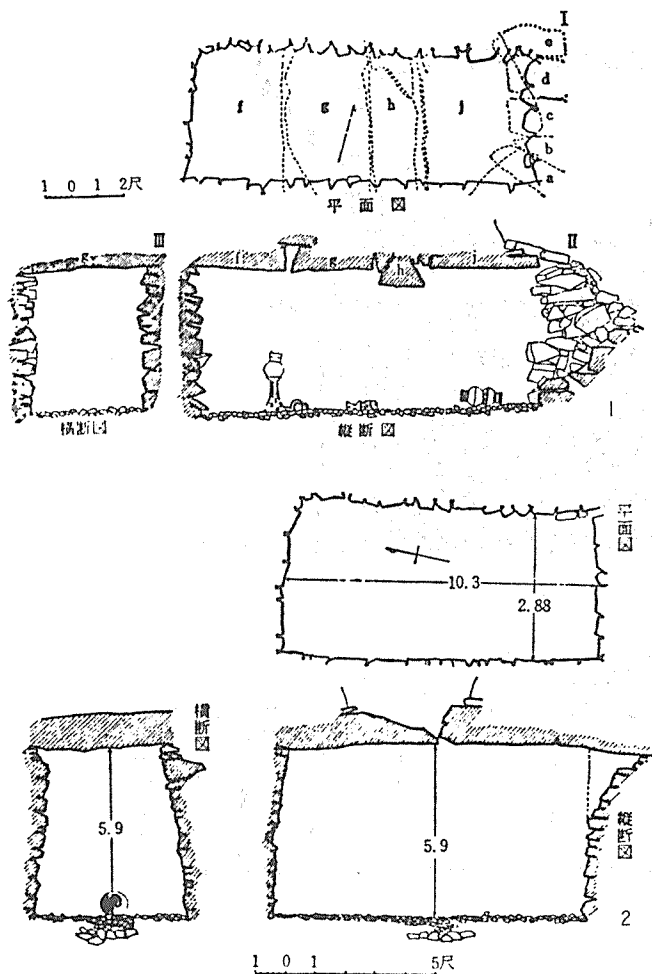
月恒面水竹洞では大正6年度の調査の際、148基の古墳が確認されており、本古墳はそのうちの1基である。しかし、残念なことにその詳細はわからない。

6. 大邱地域では達西34号墳、37号墳、55号墳などがある。<sup>(註14)</sup>

34号墳は直径約10.5mの円墳で、竪穴系横口式石室である主室（第1石槨）と小石槨2基が確認されている。第1石槨は長さ3.9m、幅1.23mの大きさで、奥壁側がやや幅広い。四壁は自然石と割石を混用し、両長壁と奥壁はやや内傾し、西南短壁のみが垂直ないしやや外傾して



第3图 义城塔里古墳第1墓(1)漆谷若木古墳(2)  
同仁同面黄桑洞1号墳(3)石室実測图



第4図 星州星山洞1号墳(1)同6号墳(2)石室実測図

室と同じように河原石を敷きつめている (第5図1、2)。

55号墳は直径約18mの円墳で、石室は長さ約4.5m、幅1.67mの大きさである。石室の構造は、両長壁は大きな板石をそれぞれ三枚ずつ立て、そのすきまに河原石をつめこんでいる。両短壁はともに下部に河原石を二段積み、その上に板石を一枚立てている。そして、入口側はその上部のすきまに河原石をつめ、外から粘土をぬっている。床面は7~8cmくらいの割石を敷きつめている (第5図3)。

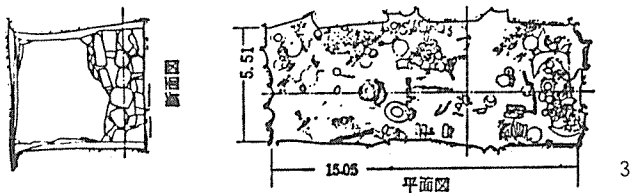
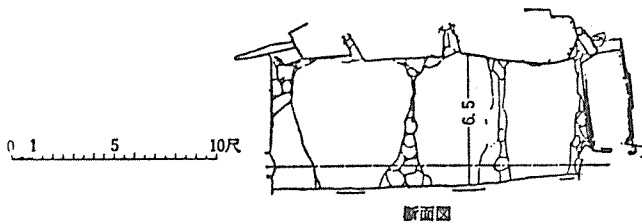
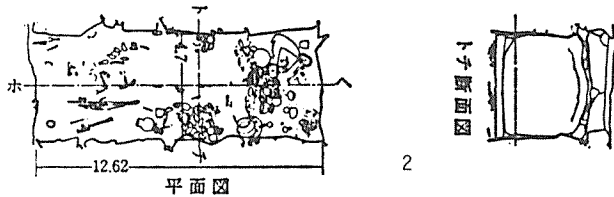
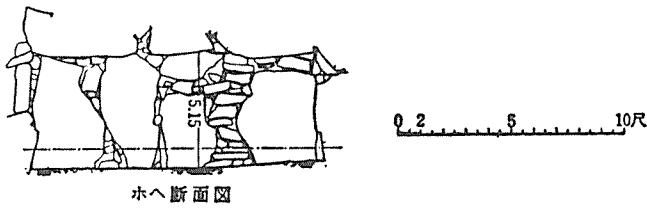
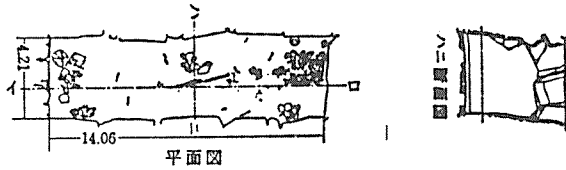
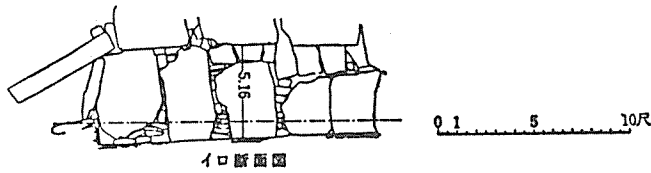
7.高霊地域では確実なものは知らないが、主山39号墳がそのように発表されている。<sup>(註15)</sup>

8.玄風地域では第1群第1号墳<sup>(註16)</sup>がある。円形の封土中に二石室があり、第1石室は長さ約2m、幅2m、高さ1.24mのほぼ方形の平面プランをなす。四壁は自然石を不規則に積みあげて

いる。床面はこぶし大の玉石を約12cmの厚さに敷いている。

37号墳は直径約20mの円墳で、封土内に二つの石室がほぼ平行につくられている。第1石室は長さ4.27m、幅1.27mの大きさで、三壁は花崗岩の板石を立てなれば、その間隙には割石をつめこみ、その上に粘土をぬっている。他の一壁(西短壁)は河原石を三段につみ、その上に大きな板石を立て、更にその上にもう一枚大板石を斜めに立てかけている。床面は7~8cmくらいの大きさの河原石を厚さ10cmほど敷きつめている。第2石室は長さ約3.8m、幅約1.41mの大きさで、その構造は第1石室とほぼ同様であるが、入口の大板石は一枚のみである。床面も第1石





第5図 大邱達西37号墳第1石室(1)第2石室(2)  
同55号墳石室(3)実測図

構築し、その表面に粘土を塗っている。両長壁はやや内傾し、入口ははっきりしないが、北短壁と考えられている。

おり、両側壁の一方は垂直に、他方は上部を内傾させて積んでいる。残りの二壁ははっきりしないが、ほぼ垂直につまれているようである。入口は東北壁と推定されている。第2石室は破壊されており、不明である。

9. 昌寧地域では松峴洞第1群第2号墳、<sup>(註17)</sup>第8号墳、校洞21号墳、<sup>(註18)</sup>31号墳、桂城A地区1号墳、2号墳、4号墳、<sup>(註19)</sup>9号墳、C地区5号墳、<sup>(註20)</sup>9号墳、14号墳、15号<sup>(註21)</sup>墳などがある。

松峴洞第1群第2号墳の石室は長さ約6.39m、幅約1.41mの大きさで、四壁は方形塊石を積みあげ、東西両長壁は上部が内傾している。入口は北短壁で、塊石を天井石の側面に達する高さまで積んでいる。同8号墳の石室は長さ約8.4m、幅1.5mの大きさで、四壁は比較的大形の自然石で

校洞21号墳は直径約11mの円墳である。長さ6.45m、幅1.47mの大ききで、四壁は小形の割石を積みあげて構築し、奥壁上部は少し内傾する。入口は北短壁であるが、破壊されていてよくわからない。床面は礫石を敷いている。

同31号墳は直径16.5mの円墳である。石室は長さ5.55m、幅1.44～1.2mの大ききで、入口を除く三壁は21号墳と同様、花崗岩の割石を積み、両長壁はやや内傾する。入口部は北西の短壁で、他三壁と異なり、2個の大石を上下に置き、そのすきまに小石をつめて閉塞している。床面は石室のほぼ中央に長さ約2.54m、高さ奥壁側で約30cm、入口側で約18cmの礫石による棺台をつくっている。遺物のうち土器類は棺台と奥壁の間の低い部分に主に置かれていた（第6図1）。

桂城A地区では9基の古墳が確認され、そのうち4基が豎穴系横口式石室で、他は豎穴式石室4基、小豎穴式石室1基であった。1号墳は直径約15mの円墳で、A地区の中では最も大きく、その位置等から、その群中の主墳と思われる。石室は長さ5.70m、幅1.93mの大ききで、四壁は割石をつんでいる。両長壁は内傾している。入口は西南短壁で、下から三段は他の三壁と同じように積んでいるが、その上部の積み方が異なる。床面は約25cmの厚さに大小礫石を全面に敷きつめ、棺台は2基ある（第7図）。

同2号墳は直径約8mの円墳である。石室は長さ3.22m、幅1.01mの大ききで、四壁は不ぞろいの礫石を利用して構築している。両長壁は上部が内傾している。床面は入口側約70cmを残して全面厚さ15cm程度に礫石を敷きつめている。

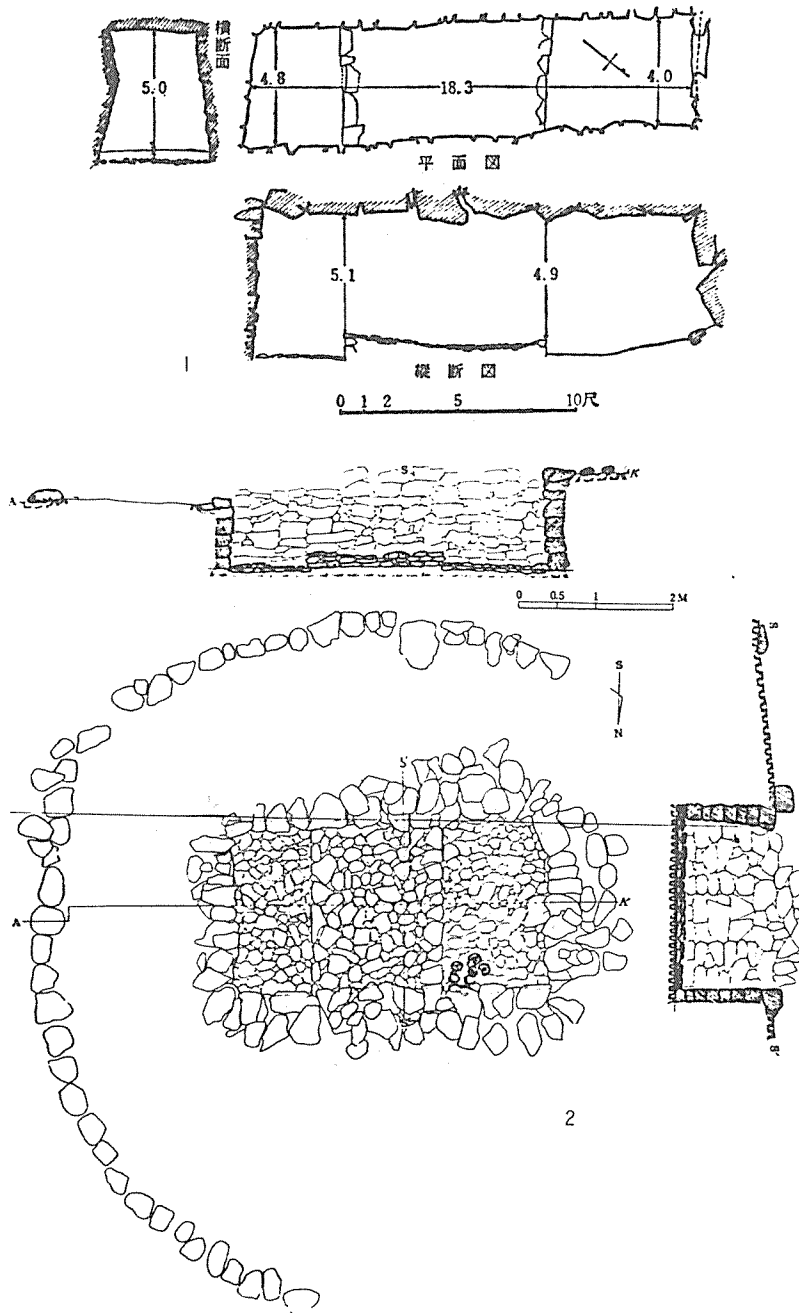
同4号墳は直径8.6mの円墳で、石室は長さ3.56m、幅1.20mの大ききである。四壁は自然石を用いて構築し、両長壁は上部が内傾する。床面は一度全面に割石を敷き、更に、奥壁側65cm、入口側30cmを残して中央部にだけもう二層小石を敷いて棺台としている。

同9号墳は直径約7mの円墳である。石室は長さ3.55m、幅1.55mの大ききで、扁平な自然石を利用して四壁を構築している。かなり破壊されているが、両長壁の上部は内傾するようである。床面は厚さ10cmくらいに平らな礫石をほぼ全面に敷き、奥壁側ではその上に更に大きな板石を置き、棺台としている。

桂城C地区には15基の古墳があり、そのうち4基が豎穴系横口式石室で、他は豎穴式石室である。5号墳の石室は長さ3.25m、幅1.82mのやや幅広い長方形をなし、四壁は礫石と割石を混用して構築している。両長壁は上部において少し内傾している。床面はほぼ全面礫石を敷いているが、東短壁（奥壁）から幅72cmは石が大きく、他より少し高くなっている。入口は片袖状を呈し、南壁側には袖石状のものが立っている。

9号墳の石室は長さ約3.16m、幅1.2mの大ききで、四壁は割石と礫石を混用し、長壁上部は内傾している。入口は南西短壁である。床面は奥壁側に礫石が見られる。

14号墳の石室は長さ3.65m、幅1.35mの大ききで、四壁は割石と礫石を混用して構築してい

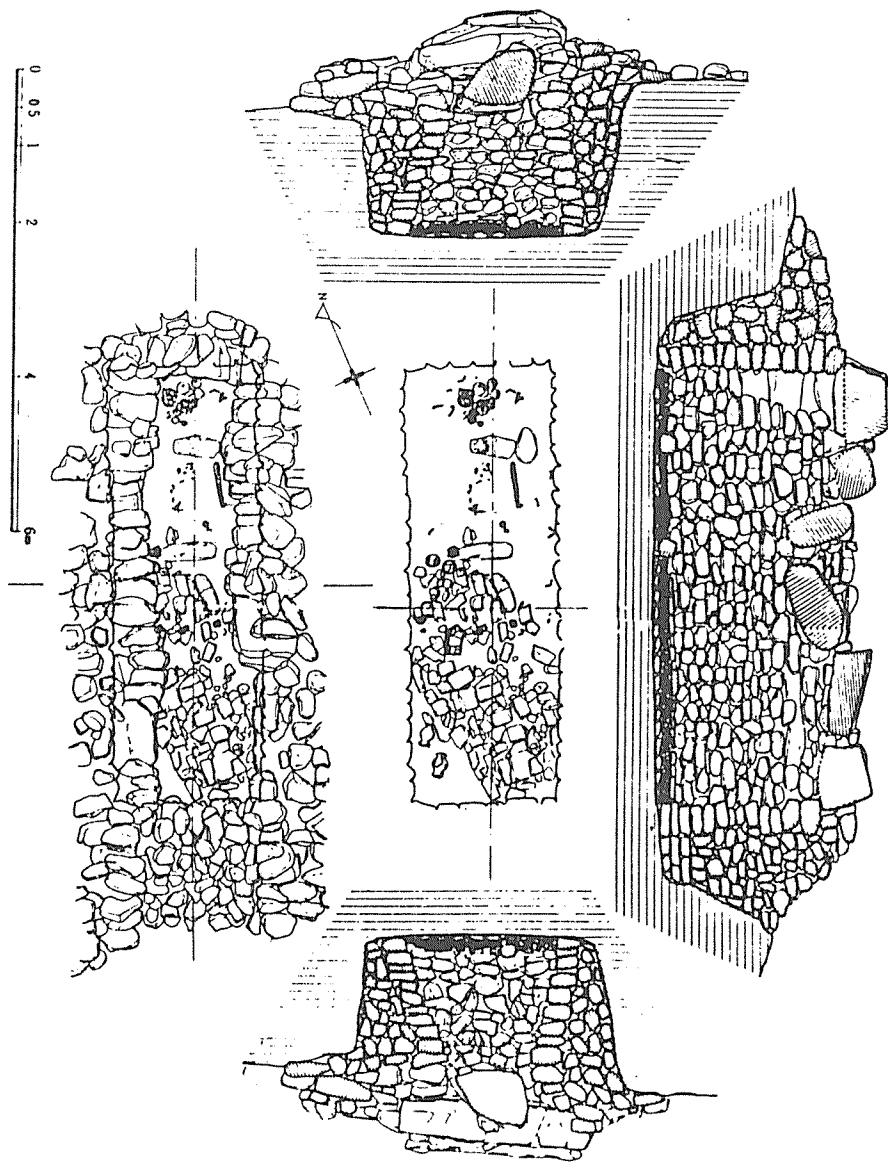


第6図 昌寧校洞31号墳(1)同桂城C地区15号墳(2)石室実測図

利用するのではなく、中央部幅約70cmを入口として構築している。袖石はないが、門状を呈している。床面は全面石敷きであるが、中央部のみ高く、整然と積まれ、棺台としている（第6図2）。

る。床面は割石、河原石を敷いているが、中央部が両短壁側より少し高く、棺台にしているようである。

15号墳は直径約9.5mの円墳で、石室は長さ3.94m、幅2.25mのやや幅広の長方形である。四壁は割石と礫石を混用して構築しており、入口は西短壁である。本古墳の石室は今まで見てきたものとは異なり、短壁全面を入口に



第7図 昌寧桂城A地区1号墳石室実測図

10. 咸安地域では末伊丘や道項丘等に古墳群があるが、そのうち咸安<sup>(註22)</sup>34号墳が竪穴系横口式石室である。直径40m、高さ10mの大円墳で、石室は南北に長軸をおく長さ約9.7m、幅1.71m、高さ1.65mの長方形である。四壁は割石を小口積みにして垂直につみあげ、その表面には粘土を塗った痕跡がある。南短壁が入口らしく、その外部に割石を厚く積み重ねている。また、東西両壁にそれぞれ2個、北短壁に1個、計5個の龕がある。更に注意を要することは壁面上隅に先端が鉤状を呈した鉄釘3～4個が遺存しており、帳幕を垂らしたものと推測されている。

11. 梁山地域では梁山夫婦塚<sup>(註23)</sup>がある。本古墳は直径54m、高さ 8.1mの大円墳である。石室は長さ5.37m、幅2.25m、高さ2.55mの大きさで、四壁は径30cm前後の自然石を積みあげ、両長壁は上部が内傾している。入口は西短壁で、下から約90cmの所に幅約1.56m、高さ約 1.5mの大きさの窓状を呈し、そこを外側から不規則に塊石で閉塞している。床面は全面に玉砂利を敷き、中央部やや奥壁よりに長さ2.76m、高さ0.75mの棺台を作っている。この棺台は本来現存幅の半分程度であったものを改築して第8図1に見られるような形にしたものと思われる。遺体は棺台上に夫婦と思われる2体があり、また、入口側の床面に横位に3体おかれていた。

12. 慶州地域ではこれまで数多くの古墳が調査されているが、<sup>(註25)</sup> 堅穴系横口式石室をもつ古墳は151号墳が知られるのみである。直径40mの円墳で、中央部から長方形の石室、そしてその南東数mの所から積石木槨が1基確認されている。石室は長さ4.34m、幅2mの大きさで、四壁は粘板岩の割石を用いて構築し、両長壁は上部がやや内傾する。入口は南短壁である。また、北壁に接して高さ0.35m、奥行2.21mの横位の割石積み棺台が作られており、その状況から3回の追葬がなされたことがわかる。本古墳内の埋葬順序は、その位置からまず石室が作られ、<sup>(註26)</sup> そのあと積石木槨が作られたものと推定されている(第8図2)。

13. 錦山地域では上佳里古墳<sup>(註27)</sup>がある。石室は長さ3.26m、幅0.9m、高さ1.24mの大きさで、四壁は割石で構築している。両長壁は上部が内傾し、両短壁も上部がやや内傾するが、北西短壁のみ壁面が粗く、外側から閉塞したものと考えられている。床面は地山上に粘土を敷きつめただけである。

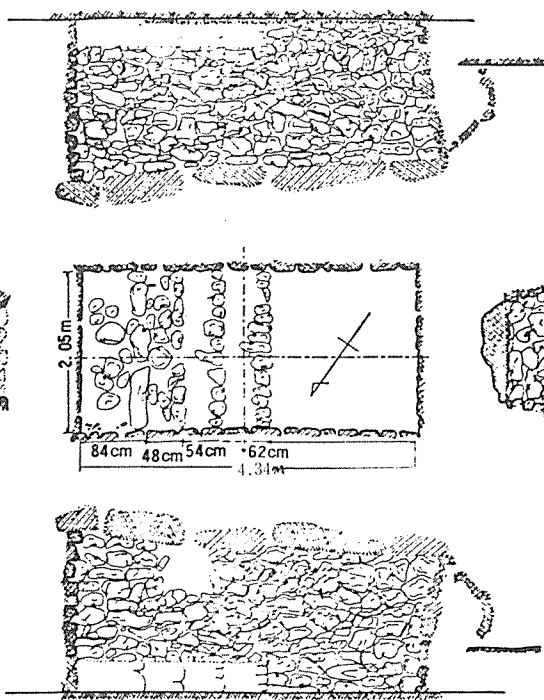
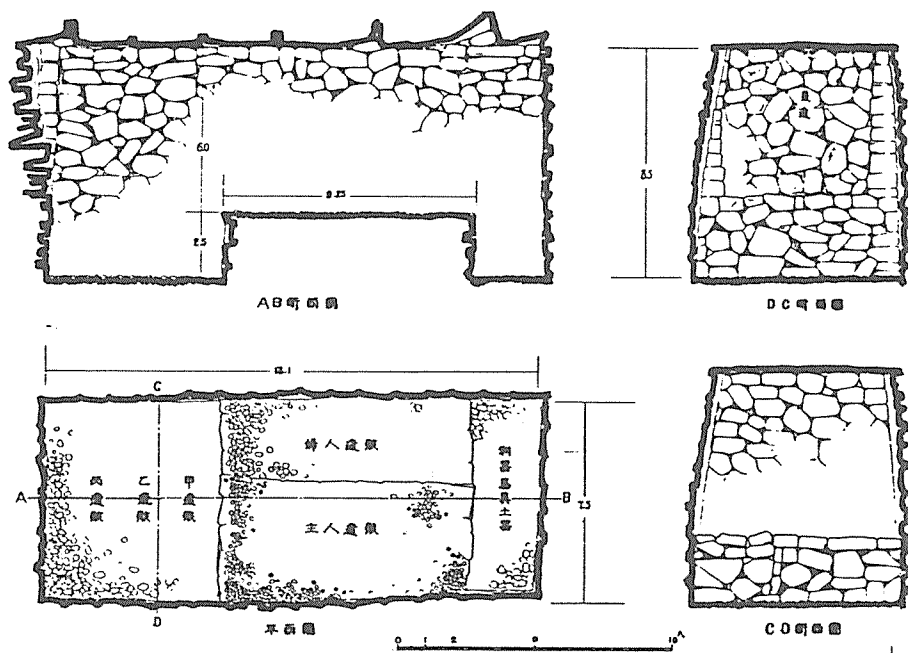
14. 大徳地域では古墳の調査はほとんどなされていなかったが、1977年、78年に注山里において12基の石室墳が発掘調査された。<sup>(註28)</sup> そのうちわけは堅穴系横口式石室6基、<sup>(註29)</sup> 堅穴式石室2基、横穴式石室1基、小堅穴式石室3基である。これらのマウンドはすべて流されてしまっており、その墳形、大きさはわからない。

1号墳の石室は長さ2.80m、幅1.20mの大きさで、自然石をつみあげて四壁を構築している。両長壁は上部でやや内傾し、西短壁は垂直に立ち、東短壁は上部が外傾し、ここが入口であることがわかる。床面は長軸にそって西南部に長さ2.40m、幅0.70mの川原石による石敷きがある(第9図1)。

7号墳の石室は長さ2.20m、幅0.8~0.9mの大きさで、自然石を用いて四壁を構築している。入口は南短壁である。床面は西長壁にそって幅60cm、川原石を敷いている。

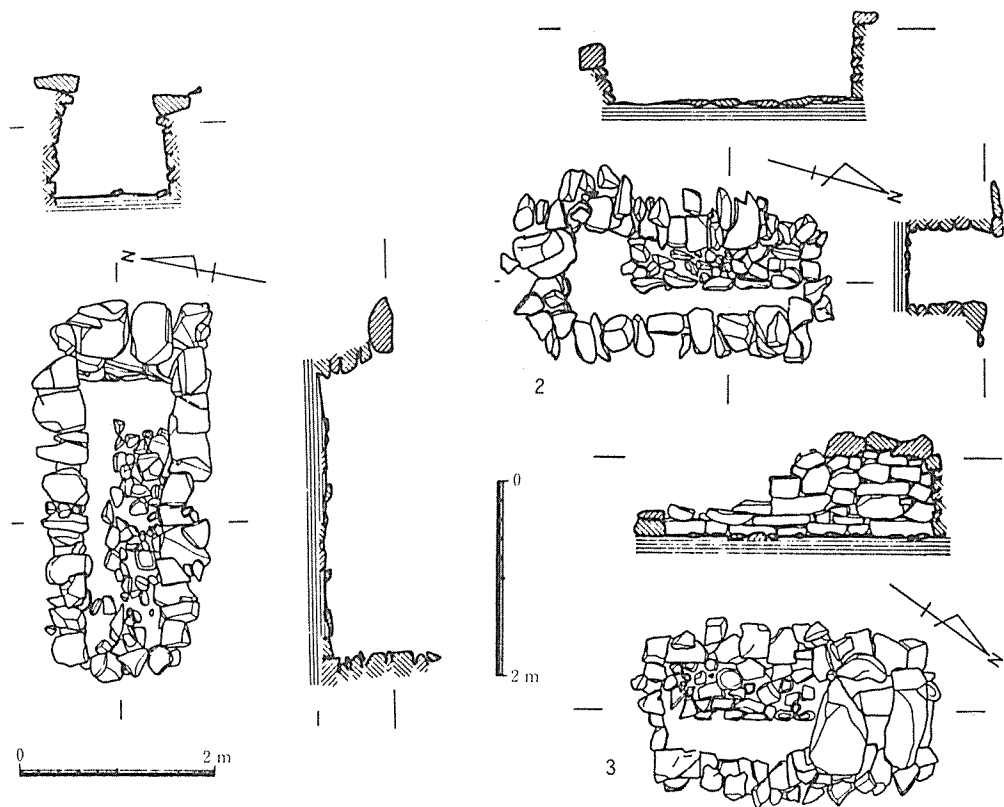
9号墳の石室は長さ2.30m、幅1.10~1.20mの大きさである。四壁は自然石で構築し、両長壁は上部が内傾する。入口は南短壁である。床面は全面に石を敷いている。

10号墳の石室は長さ2.20m、幅0.9m、高さ1.0mの大きさである。四壁は自然石で積みあげ、両長壁は上部が内傾する。入口は南短壁である。床面は西・北壁にそって長さ1.70m、幅0.60mの範囲に石を敷いている(第9図2)。



2

第8图 梁山夫妇塚(1)慶州151号墳(2)石室実測图



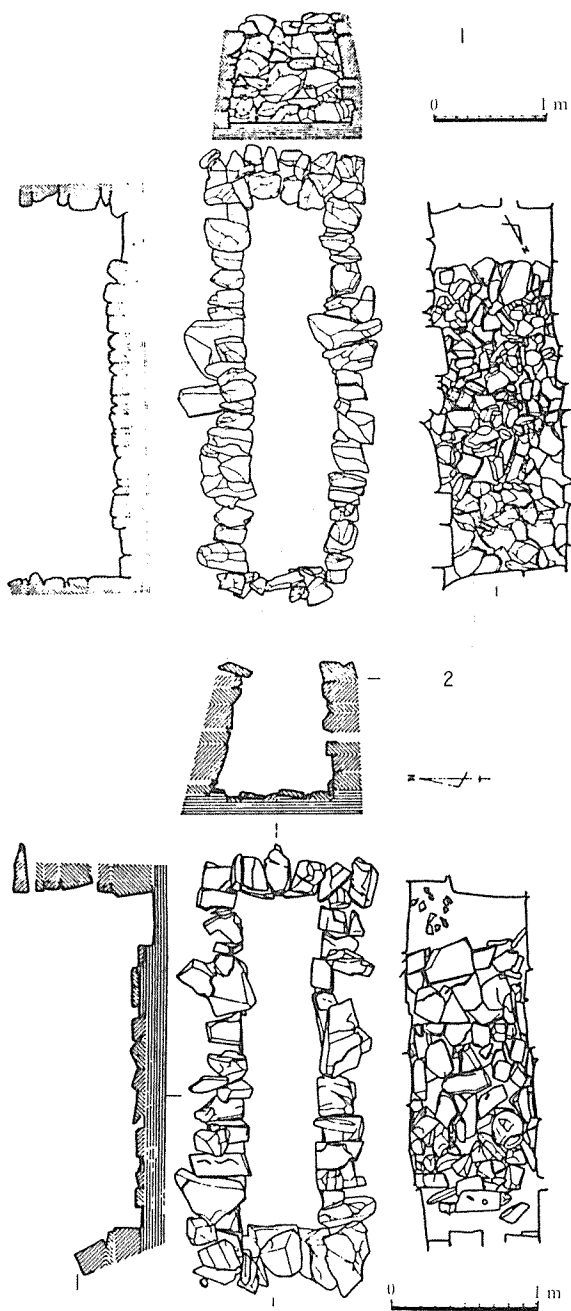
第9図 大徳注山里1号墳(1)10号墳(2)12号墳(3)石室実測図

11号墳の石室は長さ1.60m、幅0.75mの小さなものである。四壁は自然石でつみあげ、両長壁は上部で内傾する。入口は南短壁である。床面は全面に石を敷いている。

12号墳の石室は長さ2.75m、幅 0.9m、高さ 0.9mの大きさである。四壁は自然石で構築し、両長壁上部はやや内傾する。入口は南短壁である。床面は西長壁にそって幅60cm石を敷いている（第9図3）。

注山里古墳群の石室は全般的に小形で、石材は自然石を用い、両長壁は上部で内傾している。入口は古墳群が南斜面にあるためか、南北に長軸がある場合、南短壁である。1号墳のみ東西軸で東短壁が入口になっている。床面は全面ないしは一方の長壁にそって石を敷いている。

15. 論山地域では表井里にみられる。この古墳群は表井里A区古墳群<sup>(註30)</sup>で、山の南斜面につくられており、数十基あるうちの13基が調査された。そのうちわけは竪穴系横口式石室10基、横穴式石室2基、小竪穴式石室1基である。すべてマウンドは流されており、その墳形、大きさなどはわからない。



第10図 論山表井里A区1号墳(1)3号墳(2)  
石室実測図

mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁は内傾している。入口は南短壁で、下にやや大きめの石をおいて閉塞している。床面は入口側30~40cmを除いて全面に石を敷いている。

1号墳の石室は長さ3.50m、幅0.9m、残存高0.85mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は入口側45cmは土で、他は10~20cm大の石を敷き、特に中央部分は奥壁側35cmまでの部分より一段高く、奥壁側の低い部分に土器などの副葬品が置かれていた(第10図1)。

2号墳の石室は長さ2.86m、幅0.95m、残存高0.82mの大きさである。四壁は塊石で構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は中央部分(西短壁から55cm、東短壁から28cm)のみ石を敷き、他は土のままであった。

3号墳の石室は長さ2.25m、幅0.80m、高さ0.85mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は中央部に石を敷き、奥壁側は一段低く、土のままで、そこに副葬品を置いていた(第10図2)。

4号墳の石室は長さ2.40m、幅0.68~0.86m、残存高0.85



5号墳の石室は長さ2.50m、幅0.85m、残存高0.82mの大きさである。四壁は塊石で構築されているが、西短壁のみ下部にやや大きめの石を2個置き、その上に20～30cm大の塊石を乱雑に積んでいる。この西短壁が入口である。床面西側は破壊されており、わからないが、東短壁側約40cm以外は石を敷いていた。

7号墳の石室は長さ2.65m、幅0.84m、高さ1.02mの大きさである。四壁は塊石で構築しているが、西短壁を除く三壁は下部にやや大きめの石（30～50cm）を使用していた。西短壁は下から上まですべてやや小さめの石を使用し、その積み方も他三壁と異なり、ここが入口であると推測できる。しかし、東西両短壁の中央やや上部に龕と思われる小孔が1個ずつあることは注意を要する。両長壁の上部は内傾する。床面は全面石敷きであった。

8号墳の石室は長さ3.40m、幅約1.00m、高0.95mの大きさである。四壁は塊石で構築し、長壁上部は内傾する。入口は石の積み方から西短壁と推測された。床面は西壁側50cmは土で、他は石敷きであるが、1号墳同様東壁側が一段低く、ここに副葬品を置いていた。

9号墳の石室の大きさは長さ2.20m、幅0.64m、高さ0.74mとやや小形である。四壁は塊石を使用し、両長壁はやや内傾する。入口は西短壁である。床面は東壁側20cm、西壁側40cmが土で、中央部が高さ約10cmの石敷きとなっている。

10号墳の石室は長さ3.00m、幅0.92m、残存高0.78mの大きさである。四壁は塊石で構築し、両長壁は上部で内傾する。入口は西短壁である。床面は1号墳、8号墳と同様、西壁側約40cmが土で、他は石敷きであるが、東壁側が中央部より約10cm低い。

11号墳の石室の大きさは長さ2.70m、幅0.85m、残存高0.90mを測る。四壁は塊石で構築し、両長壁は上部でやや内傾する。入口は西壁である。床面は東壁側30cmが土で、西壁側もそのようであるが、東壁側のような中央部石敷きとの明確な区画ラインはない。

以上のごとく、表井里A区古墳群の竪穴系横口式石室は塊石を用い、両長壁上部をやや内傾させて三壁を構築したあと、南または西側の短壁から遺体等を納置し、そしてそこを外側から閉塞したものである。床面はだいたい中央部に石を敷き、棺台とし、あるものは奥壁側にもやや低く石を敷いている。副葬品は主に奥壁側の低い部分に置かれていた。

### 3

以上、朝鮮半島南部の竪穴系横口式石室古墳の石室構造を見てきたが、それらを整理してみると次のようになる。

I. 塊石や割石で三壁を構築し、両長壁が上部で内傾し、入口は短壁全面を使用する。この類の石室は入口の閉塞方法によって次の二つに分かれる。

A. 塊石や割石で閉塞するもの

B. 板石や大石で閉塞するもの

更に、床面の状況によって六つに分けることができる。

- a. 短壁にそって棺台をつくるもの
- b. 長壁にそって片側に棺台をつくるもの
- c. 長壁にそって中央部に棺台をつくるもの
- d. 全面に石を敷くもの
- e. 石を敷かず、土のままのもの
- f. その他

II. 板石を主に用いて四壁を構築するもの

III. 塊石や割石を用いて四壁を構築するが、それらが入口部を除いてほぼ垂直に立つもの

IV. 塊石や割石を用いて四壁を構築するが、入口が短壁全面を使わず、門状を呈するもの

まず、I類の石室は安東、大邱、玄風、昌寧、善山、星州、慶州、錦山、大徳、論山の各地域でみられ、数的には最も多い。そして、その中で閉塞を塊石や割石で行うIA類が最も多い。板石や大石で閉塞するIB類の石室は漆谷黄桑洞1号墳、2号墳、昌寧校洞31号墳であるが、これらはII類と関連があるのかもしれない。

床面の状況から見てみると、慶州 151号墳の石室は安東造塔洞古墳の石室と類似し、百濟地域の大徳、論山の例は昌寧のものに近い。

<sup>(註31)</sup>  
II類は大邱達西、漆谷若木でみられる。

III類はわずか2例で、義城塔里古墳と咸安34号墳である。どちらも他とは趣が異なる。

IV類は竪穴系横口式石室ではあるが、上記I～III類とは入口の構造が違う。梁山夫婦塚は石室床面から高さ約90cmの所に幅約1.5mの入口を作り、また昌寧桂城C地区15号墳は石室床面と明確な段差はないが、石室幅2mに対し、中央部に幅約70cmの入口を作っている。同5号墳は片袖状を呈し、南壁側には袖石状のものが立っている。

次に、全体の分布を見ると、やはり中心は洛東江流域である。それも東岸、西岸の区別はなさそうである。百濟地域では忠清南道の東南部で見られるが、これらと伽耶地域との関係は忠清道、慶尚道、全羅道の百・新・伽三国の境域の古墳の調査をまたなければならないであろう。

慶州の例は、今まで知られている慶州地域の古墳の中に一つしかないもので、特異性が目につく。そして上述したごとく慶州 151号墳の石室の構造は安東造塔洞古墳の石室とよく似ていることも興味あるところである。

#### 4

竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳はどのような古墳であろうか。まず、墳径をみると、漆谷黄桑洞2号墳、星州星山洞2号墳、咸安34号墳、梁山夫婦塚、慶州 151号墳などは約30m、ないしはそれを越える大円墳である。特に咸安34号墳、梁山夫婦塚、慶州 151号墳は直径40m

を越え、卓越した大古墳といえよう。

石室では、安東造塔洞古墳、中佳邱洞古墳、漆谷黄桑洞1、2号墳、若木古墳、昌寧松岷洞第1群第2、8号墳、校洞21、31号墳、桂城A地区1号墳、善山洛山洞28号墳、咸安34号墳、梁山夫婦塚などは長さ5mを越す大形のもので、そのうち昌寧松岷洞第1群第8号墳は8mを越え、咸安34号墳は約9.7mの長大なものである。

遺物では、義城塔里古墳第1墓塚、漆谷黄桑洞1号墳、大邱達西37、55号墳、梁山夫婦塚などで金銅冠が出土し、他のいくつかの古墳でもそれに相応するような金製耳飾等の貴金属製品が出土している。

以上のように、墳径、石室、遺物等からその地域の首長クラスが竪穴系横口式石室を使用していることがわかる。逆に、小古墳ではどうかとみると、百済地域のものはそのほとんどが石室長3m以下で、遺物も土器や鉄器をわずかにもつ程度である。しかし、伽耶、新羅地域のものほとんどが長さ3m以上の石室をもっており、百済地域の例と対照的である。ただ、昌寧桂城地区や善山地域の古墳中には副葬品の乏しいものも見られる。

そこでその古墳群中での竪穴系横口式石室をもつ古墳の位置を見てみたい。しかし、古墳群としてまとめて調査されているものは少ない。

安東地域では造塔洞古墳、中佳邱洞古墳のまわりに小古墳があり、それらは竪穴式石室を内部主体としており、両古墳が竪穴系横口式石室を使用しているのと対照的である。

大邱達西地区では調査された古墳の性格によるのかもしれないが、全般的に良好な副葬品をもち、その地域の首長クラスと考えられる。

昌寧地域では、松岷洞古墳群には上記した竪穴系横口式石室のほか4号墳、6号墳、46号墳が横穴式石室として知られている<sup>(註34)</sup>。校洞古墳群ではかなりの数の古墳が発掘されているが、報告されたものが少なく、不明確である。しかし、校洞12号墳は積石木槨墳であり、他は竪穴系横口式石室墳であったといわれている<sup>(註35)</sup>。

桂城古墳群A地区では9基の古墳が調査され、竪穴系横口式石室4基、竪穴式石室4基、小竪穴式石室1基であった。そして主墳はその大きさ、位置等から1号墳と考えられるが、これは竪穴系横口式石室を内部主体としていた。他の古墳は2、4、9号墳が竪穴系横口式石室、5、6、7、8号墳が竪穴式石室、3号墳が小竪穴式石室で、その大きさは石室の構造にも関係するのかもしれないが、竪穴系横口式石室はすべて長さ3m以上であり、竪穴式石室は長さ1.55m～3.27mとやや小形であった。また、遺物に関しても竪穴系横口式石室から多く出土し、装身具は竪穴系横口式石室からしか出土していない。

このように桂城A地区古墳群では、明らかに意識して竪穴系横口式石室が使われているようである。

桂城C地区古墳群では15基の古墳が調査されており、竪穴系横口式石室4基、竪穴式石室11

(註36)

基であった。石室の大きさは前者が長さ3.16～3.94mであるのに対し、後者は2.15～3.30mとやや小さい。また、立地の上では竪穴系横口式石室を内部主体とする14、15号墳が頂上部にあり、他を見下ろす形になっている。

大徳注山里では12基の石室が調査され、竪穴系横口式石室6基、竪穴式石室2基、小竪穴式石室3基、横穴式石室1基であった。すべて南向きの同一斜面につくられており、位置的な差はなさそうである。石室の大きさは、横穴式石室である2号墳は玄室長2.70m、幅1.70mであり、竪穴系横口式石室は長さ1.60～2.80m、竪穴式石室は長さ2.60～2.70mと三者規模の上では差はない。また、遺物に関しても全般的に乏しく、差はない。

論山表井里A区では13基の古墳が調査され、竪穴系横口式石室10基、横穴式石室2基、小竪穴式石室1基であった。古墳群の主体は竪穴系横口式石室で、それに横穴式石室が数基あるという状況のようである。竪穴系横口式石室の大きさは長さ2.20～3.50m、幅0.64～1.00mで、床面の石敷きが丁寧な1、8、10号は他に比してやや大きいようである。横穴式石室は12号墳と13号墳である。12号墳は扶余陵山里等で見られる板石を用いた両袖式の長方形石室で、長さ2.65m、幅1.30mの大きさである。遺物としては金銅製耳環が他と異なる。13号墳は塊石を用いて構築した横穴式石室で、両側壁と奥壁は上部で内傾している。羨道は東南に片寄ってつき、幅1.05m、長さ1.30mとやや短い。玄室の大きさは長さ3.20m、幅2.15mである。遺物は土器、鉄器以外に銀張銅製鉸具が1点であるが出土しており、注目される。

このように表井里A区古墳群では竪穴系横口式石室墳の数は多いが、遺物は土器、鉄器のみで、横穴式石室墳が金銅製耳環や銀張銅製鉸具などを有することと異なる。

以上、全体を通してみると、昌寧桂城A地区では竪穴式石室より上位のものが竪穴系横口式石室を使用している。これは安東地域でも同じかもしれない。大邱の場合は比較はできないが、少なくとも遺物等からその地域の首長クラスの人が葬られていたことは間違いないであろう。

逆に、百済地域では不確かではあるが、論山表井里で見える限りにおいては横穴式石室の方が良い遺物等を有している。

## 5

次に、追葬及び、一封土内に複数の埋葬施設をもつことについて考えてみよう。

まず、追葬が行なわれたと思われる古墳は安東造塔洞古墳（東槨、西槨）、同中佳邱洞古墳、義城塔里古墳第1墓槨、善山洛山洞28号墳、梁山夫婦塚、昌寧桂城A地区1号墳、慶州151号墳などがある。これらは本来の横口式の機能、つまり、数次の埋葬を可能にする構造であることを利用している。逆に、残りの古墳のうち状況のわからないものは除くとしても、かなりの数の古墳は追葬は可能であっても何故か追葬はしていないことになる。

次に、一封土内に2個以上の埋葬施設をもつものは、安東造塔洞古墳（2）、義城塔里古墳

(5)、大邱達西34号墳(3)、同37号墳(2)、星州星山洞2号墳(3)、玄風第1群第1号墳(2)、慶州151号墳(2)などがある。造塔洞古墳は2基とも竪穴系横口式石室で、そしてどちらも数次の追葬が行われている。義城塔里古墳は第1墓槨が竪穴系横口式石室で追葬がなされており、そのあと順次4基の竪穴式石室が同一封土内に作られている。達西34号墳は主室(第1槨)が竪穴系横口式石室で、他の2基は小石槨であり、第2石槨は主室に直角に位置する。星山洞2号墳は主室が竪穴系横口式石室であり、2基の小竪穴式石室がこれに平行して築かれている。玄風第1群第1号墳は石室が2基あるのはわかっているが、第2石室は破壊されており、その状況はわからない。第1石室が竪穴系横口式石室である。慶州151号墳は竪穴系横口式石室と積石木槨が各1基あり、その位置等から竪穴系横口式石室が先ずつくられ、そのあと積石木槨が作られたと推定されている。

このような一封土内に複数の埋葬施設をもつ古墳については有光教<sup>(註37)</sup>一氏が検討され、家族墓と考えられているが、上記のように、その古墳の中で追葬が行われている例もある。この場合、同一石室内に入る人間と新たに石室等を作って同一封土内に入る人間とはどのような違いがあるのであろうか。家族制度のあり方と関係するのであろうか。一般的に同一石室内に2体あれば夫婦と考えられるが、義城塔里古墳第1墓槨では出土人骨より母子の可能性が考えられている。また、梁山夫婦塚の棺台と入口部の間の床面にある3体の遺体は陪葬の可能性が考えられている。

## 6

最後に竪穴系横口式石室の年代を考えてみよう。年代に関しては、伊藤秋男氏の耳飾による<sup>(註38)</sup>編年が最も安定しているようであるから、ここではそれを基準として見てみる。

まず、I期(4世紀後半～450年頃)に属する耳飾を出土した古墳はない。

II期(450年頃～520年頃)に入るものは、義城塔里古墳第1墓槨、漆谷仁同黄桑洞1号墳、同若木古墳、星州星山洞1号墳、2号墳、大邱達西55号墳、咸安34号墳などがある。

III期(520年頃～634年より以前、およそ600年頃)に入るものは大邱達西34号墳、37号墳、昌寧校洞31号墳、桂城A地区1号墳、梁山夫婦塚、慶州151号墳<sup>(註39)</sup>などがある。

IV期(600年頃～700年頃より以前、7世紀後半のいずれかの時点)に入るものは善山洛山洞28号墳がある。

これらをまとめてみると、竪穴系横口式石室は5世紀後半から7世紀代まで作られつづけていたことがわかる。

## 7

朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室を見てきたが、以下、これらをまとめてみよう。

1. 分布は洛東江を中心とし、東は慶州、西は大徳、錦山、論山まで広がっている。群をなしている所は星州、大邱、昌寧、大徳、論山であるが、昌寧では未調査の古墳を含めてかなりの数の竪穴系横口式石室があるようである。また、慶州 151号墳や高霊の主山39号墳はその地域では現在まで他に竪穴系横口式古墳がなく、要注意の古墳である。
2. 石室構造は大きく4類に分けた。I類が最も多く、次にII類、そしてIII、IV類は少ない。I類は閉塞方法、床面の状況で細分したが、入口を塊石、割石で閉塞するIA類が各地でみられ、最も多い。また、床面の状況をあわせ比較すると、慶州の例は安東造塔洞古墳の石室と類似し、百済地域のもの昌寧のものに近いことがわかった。II類は大邱が顕著であるが、漆谷でも見られる。III類は例が少なく、特異な形である。IV類は入口が門状を呈し、横穴式石室により近いものである。

朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室の多くは塊石や割石で両側壁と奥壁をまず構築し、短壁部全面を使った横口から屍体等を納め、そしてその横口部を塊石や割石で閉塞する。また、この両側壁は上に行くにつれて内傾している。

3. 竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳の位置づけについて見てみると、金銅冠等の支配者を象徴する物品をもち、また、大きな石室や墳丘をもつその地域の首長クラスのものがある一方、やっと土器や鉄器をもつ小古墳がある。

まだ資料的に不十分であるためはっきりしたことはいえないが、伽耶地域、特に昌寧桂城A地区では竪穴式石室墳の副葬品に比べて、竪穴系横口式石室墳の副葬品の方が良かった。逆に、百済地域の論山表井里A区では横穴式石室墳の方が竪穴系横口式石室墳より高価な副葬品を有していた。石室の採用において何らかの意識、力(?)が働いていたのであろうか。

4. 竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳において、追葬と一封土内に複数の埋葬施設をもつことが共存する場合がある。
5. 年代に関しては、伊藤秋男氏の編年によった。それによると、5世紀後半から7世紀にかけて築造されたことがわかる。その中で、5世紀に入るものは、現時点では伽耶地域に限られ、百済、新羅地域のものは6世紀代に入るようである。

(1980.9.26了)

#### 引用図

- 第2図 1、2、註(5)文献 3、註(6)文献  
 第3図 1、註(7)文献 2、註(10)文献 3、註(11)文献  
 第4図 1、2、註(12)文献  
 第5図 1、2、3、註(14)文献  
 第6図 1、註(18)文献 2、註(20)文献  
 第7図 註(19)文献  
 第8図 1、註(23)文献 2、註(25)文献

第9図 1、2、3、註(2)文献

第10図 1、2、註(2)文献

以上の図のうち、第3図1、3、第4図1、2、第5図1、2、3、第6図1は金基雄『伽倻の古墳』1978  
学生社に利用されている図、第8図2は金基雄「古墳の変遷」金廷鶴編『韓国の考古学』1972 河出書房新社  
に利用されている図を再利用させていただいた。

#### 註

- (1) 竪穴系横口式石室については、石山勲他『片山古墳群』1970、柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開—平面図形と尺度について—」『九州考古学の諸問題』1975、小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4 1980などが、日本のものを検討している。
- (2) 全吉姫「伽耶墓制の研究」『梨大史苑』3 1961。
- (3) 全氏論文中では、羨道のない横穴式石室となっている。
- (4) 高句麗地域では、咸鏡道安辺、竜城里古墳、上細洞古墳等が竪穴系横口式石室をもつようである。『朝鮮古蹟図譜』3 1916。
- (5) 秦弘燮『造塔洞古墳発掘調査報告』1975。
- (6) 秦弘燮『中佳邱洞古墳発掘調査報告』1977。
- (7) 金載元、尹武炳『義城塔里古墳』1962。
- (8) 今西竜「洛山洞第二十八号墳調査記」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (9) この他に禿山洞1号墳、同2号墳が横口式石室として報告されているが、これらは百濟扶余陵山里等でみられる長方形の横穴式石室に類似する点もあり、入口部の状況が明らかではないのでここでは一応保留しておく。伊藤秋男「韓国慶尚北道善山古墳群（I）」『南山大学人類学研究所紀要』5 1976。
- (10) 尹容鎮『若木古墳調査報告—大甕塚発掘報告—』1961。
- (11) 金英夏、尹容鎮「漆谷郡仁同面黄桑洞古墳調査報告」『仁洞・不老洞・高靈古街古墳発掘調査報告』1966。
- (12) 浜田耕作、梅原末治「慶尚北道星州郡古墳」『大正七年度古蹟調査報告』1922。
- (13) 今西竜「月恒面水竹洞古墳群」『大正六年度調査報告』1920。
- (14) 小泉顕夫、野守健『大正十二年度古蹟調査報告』第一冊、1931。
- (15) 伊藤秋男「韓国慶州古墳群における石室墳の編年について—慶州皇南洞第151号墳の研究—」『古代文化』25-11 1973。
- (16) 今西竜「達城郡内旧玄風郡地方」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (17) 今西竜「邑内面古墳」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (18) 浜田耕作、梅原末治「慶尚南道昌寧郡古墳」『大正七年度古蹟調査報告』1922。
- (19) 鄭澄元「A地区古墳発掘調査報告」『昌寧桂城古墳群発掘調査報告』1977。
- (20) 沈奉謹「C地区古墳発掘調査報告」『昌寧桂城古墳群発掘調査報告』1977。
- (21) このほか、校洞1、7、10、11号墳も竪穴系横口式石室ではないかと考えられているが、はっきりしない。また、桂城B地区にもあるようであるが、確認できなかった。
- (22) 今西竜「咸安第三十四号墳調査記」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (23) 馬場是一郎、小川敬吉『梁山夫婦塚と其遺物』1927。

- (24) 梁山夫婦塚以外に梁山中部洞においても竪穴系横口式石室または横穴式石室があるとのことである。大韓民国文化公報部『文化財大観』史蹟篇上 1975。
- (25) 朴日薫「皇南里 151号墳」『慶州皇吾里第1・33号、皇南里第151号古墳発掘調査報告』1969。
- (26) 註(15)と同じ。
- (27) 姜仁求「錦山の古墳と土器類」『百濟研究』4 1973。
- (28) 尹武炳「注山里古墳群発掘調査」『大清ダム水没地区遺蹟発掘報告書(忠清南道篇)』1978。
- (29) 竪穴系横口式石室の可能性のあるものもある。
- (30) 尹武炳「連山地方百濟土器の研究」『百濟研究』10 1979。
- (31) このような板石で構築された石室を厳密な意味で竪穴系横口式石室と呼ぶのはやや躊躇するが、他例との関係から小稿では含めた。
- (32) 註(5)、註(6)。
- (33) 註(14)と同じ。
- (34) 斎藤忠『朝鮮古代文化の研究』1943。
- (35) 梅原末治『朝鮮古代の墓制』1947・穴沢味光、馬目順一「昌寧校洞古墳群—「梅原資料」を中心とした谷井濟一氏発掘資料の研究—」『考古学雑誌』60-4 1975。
- (36) 古墳は11基であるが、一封土内に数基石室をもつものがあり、石室数は15基である。ただし、そのうち2基は小竪穴式石室である。また、3号墳は図面で見ると限りに於いて、竪穴系横口式石室の可能性がありそうである。
- (37) 有光教一「南鮮に於ける多櫛式高塚古墳に就て」『史林』28-1 1961。
- (38) 伊藤秋男「耳飾の型式学的研究に基づく韓国古新羅時代古墳の編年に関する一試案」『朝鮮学報』64 1972
- (39) 梁山夫婦塚の年代に関して、藤井和夫氏が「梁山夫婦塚出土陶質土器の編年に就いて—伽耶地域古墳出土陶質土器編年試案 I—」『神奈川考古』3 1978において土器を検討して530年～560年と推定している。

(岡山理科大学人類学教室)



付表 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室古墳集成表(1) (亀田, 1981年)

番号	古墳名	墳丘(径・高)(註1)	石室(長・幅・高)	閉塞(註2)	石室構築材(註2)	床面(註3)	棺台数	墳丘内石室数	追葬(遺体数)	副葬品
1	安東 造塔洞古墳	21×10×5 <sup>m</sup>	東棟: 7.20×1.70~1.84×1.70 <sup>m</sup>	A	A	a	6	2	○	鉄製環・鉄製鉸具・鉄鏃・鉄鎌・鉄刀・鉄斧・土器
			西棟: 6.22×1.90~2.36×1.70	A	A	a	5		○	金製耳飾・銅製環・鉄製環・銀製鉸具・鉄製鉸具・鉄刀
2	中佳邱洞古墳	∅20×2.8	5.0×2.0×1.6	A	A	f	3(品字形)	1	○(5)	金銅耳環・鑄造鉄斧・鉄刀・鉄鋌・鉄釘・土器
3	義城 塔里古墳第1墓塚		3.50×1.70×1.80	A	A	d		5	○(2)	金銅冠・金製・銀製垂飾付耳飾・金銅製帯金具・飾玉・鑿形鉄器・鉄鎌・鉄刀子・鉄鋌・鉄釘
4	善山 洛山洞28号墳	∅12.7×4	7.0×1.70×1.67	A	A		石棺4	1	○	土器
5	漆谷 若木古墳	∅21×5~3	5.80×1.35~1.20×1.40	B	B	d(?)		2		鉄鏃・鉄刀・鉄鏃・刀子・輪鏡・雲珠・土器
6	仁同面黄桑洞1号墳	20×23×7~3.5	5.80×1.10×1.80	A・B	A		1	1		金銅製冠飾・金銅製垂飾付耳飾・鉄地銀張帯金具・金銅製飾履・鉄鏃・二叉鏃・有棘利器・刀子・鉄斧・土器
7	2号墳	32×27×5.70	5.60×1.0×1.80	A・B	A	d		1		大刀残欠・土器
8	星州 星山洞1号墳	∅13.5×3.6	3.6×1.35×1.56	A	A	d		1		銀製冠飾・金製垂飾付耳飾・金環・銀製帯金具・鉄鏃・鑿形鉄器・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・土器
9	2号墳第1石室	∅27×6	3.42×1.4×1.6	A	A	d		3		鉄鏃・鑿形鉄器・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・方形座金・土器
10	6号墳	∅9×3	3×0.9×1.82	A	A	d		1	(複数)	刀子・鉄釘・鉄鋌・土器
11	月恒面水竹洞古墳									
12	大邱 達西34号墳第1石室	∅10.5	3.9×1.23	A	A	d		3		銀製箭状(鳥形)飾付白樺樹皮製冠帽断片・金製耳飾・銀製帯金具・腰佩金具・金銅製臍当・馬具・武器・土器
13	同37号墳第1石室	∅20×2.12	4.27×1.27×1.56	A・B	B	d		2		金銅冠2・鉄地金張垂飾付耳飾・金銅製耳飾・鍔帯金具・ガラス製首飾2連・有棘利器・鉄鎌・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・馬具・鉄製箒台・鋌・土器
	同 第2石室		3.82×1.42×1.56	A・B	B	d			金銅製前立飾付白樺樹皮帽・金製垂飾付耳飾・金銅製耳飾・金銅製飾履・鉄製鍔帯金具・鉄鏃・鉄鏃・鑿形鉄器・有棘利器8・三葉環頭大刀・三環頭大刀・刀子・鉄斧・鉄鎌・馬具・土器	
14	同 第55号墳	∅18×3.9	4.56×1.67×2.0	A・B	B	d		1		金銅冠残欠・金銅製冠帽・金製垂飾付耳飾・瑠璃玉2連・銀製鍔帯金具・銀製腰佩金具・金銅製飾履・鉄鏃・鑿形鉄器・有棘利器・鉄鎌・金銅装三葉環頭二合大刀・金銅透彫鞍橋金具他馬具・鉄製箒台・銀製高坏・青銅製盒・青銅製蓋台・土器
15	高霊 主山39号墳									
16	玄風 第1群第1号墳	?×3.0	2×2×1.24	A	A			2		
17	昌寧 松峴洞第1群2号墳		6.39×1.41×1.5以上	A	A			1		
18	同 8号墳	?×3.30~9.7	8.40×1.51×2.08		A			1		銀装鉄鏃
19	校洞 21号墳	∅11.0×2.43	6.51×1.48×1.64	A・B	A	d		1		
20	同 31号墳	∅16.5×3.0	5.55×14.4~1.2×1.9	B	A	c	1	1		金製耳飾・玉類・鉄鏃・刀子・棺金具・鉄釘・土器
21	桂城A地区1号墳	∅15	5.70×1.93×2.50	A	A	d	2	1	○	金製耳飾・金, 銀製釧・銀製帯金具・素環頭大刀・鉄鏃・鋌・土器



付表 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室古墳集成表(2)

番号	古墳名	墳丘(径・高)(註1)	石室(長・幅・高)	閉塞(註2)	石室構築材(註2)	床面(註3)	棺台数	墳丘内石室数	追葬(遺体数)	副葬品
22	昌寧 桂城A地区2号墳	∅8 m	3.22×1.01×1.30 m	A	A			1		金銅製耳環
23	4号墳	∅8.6	3.56×1.20×1.50	A	A	c	1	1		金銅製耳環・刀子・土器
24	9号墳	∅7	3.55×1.50×1.20	A	A	c	1	1		鉄鎚・刀子・土器
25	同 C地区5号墳		3.25×1.82×0.82以上	(A)	A	a(?)	1	1		金製耳環・鉄鎌・鉄鉞・鉄斧・大刀・刀子・土器
26	9号墳			A	A	a(?)	1	1		鉄製鉸具・紡錘車・鉄鏃・土器
27	14号墳		3.65×1.35×0.99以上	A	A	c	1	1		土器
28	15号墳	∅9.5	3.94×2.25×1.55以上	(A)	A	c	1	1		土器
29	咸安 34号墳	∅40×10	9.67×1.73×1.66	A	A			1		素環頭大刀・圭頭大刀・直弧文鹿角製柄頭小刀・剣身形鉄鉞・鉄鏃・桂甲小札・鉄製眉庇付冑伏鉢・鞍橋覆輪・輪鏝・杏葉・鉄鎚・鉄釘・漆器・土器
30	梁山 夫婦塚	∅54.5×8.24	5.42×2.27×2.57	(A)	A	c	2	1	○(5)	主人 金銅冠・金製垂飾付耳飾・玉類・銀製指輪・銀製鈎帶金具・銀製腰佩金具・金銅製飾履・三葉環頭大刀・円頭大刀 婦人 銀製前立飾付白樹皮製冠帽・金製垂飾付耳飾・金製空玉・金・銀製釧・銀製鈎帶金具・金銀装刀子・玉類 甲 刀子 乙 金銅製垂飾付耳飾・玉首飾・刀子 丙 玉首飾・刀子 その他 馬具・武器・鉄容器・土器
31	慶州 151号墳	∅40	4.34×2	A	A	a	4	2	○	金製耳飾・銀製鈎帶金具・轡・杏葉・鑄造鉄斧・刀子・土器
32	錦山 上佳里古墳		3.26×0.9×1.24	A	A	e				土器
33	大徳 注山里1号墳		2.80×1.20	A	A	b	1			土器
34	7号墳		2.20×0.8~0.9×0.8	A	A	b	1			土器
35	9号墳		2.30×1.10×1.20	A	A	d				土器
36	10号墳		2.20×0.9×1.00	A	A	b	1			土器
37	11号墳		1.60×0.75×0.8	A	A	d				土器
38	12号墳		2.75×0.9×0.9	A	A	b	1			土器
39	論山表井里A区1号墳		3.50×0.9×0.85以上	A	A	c	1			鉄斧・刀子・土器
40	2号墳		2.86×0.95×0.82以上	A	A	c	1			土器
41	3号墳		2.25×0.80×0.85	A	A	c	1			鉄鎌・鉄釘・土器
42	4号墳		2.40×0.68~0.86×0.85以上	A	A	d				土器
43	5号墳		2.50×0.85×0.82以上	A	A	c	1			
44	7号墳		2.65×0.84×1.02	A	A	d				土器
45	8号墳		3.40×1.00×0.95	A	A	c	1			鉄鎌・刀子・鉄斧・鉄釘・土器
46	9号墳		2.20×0.64×0.74	A	A	c	1			鉄鎌・土器
47	10号墳		3.00×0.92×0.78以上	A	A	c	1			土器
48	11号墳		2.70×0.85×0.90以上	A	A	c	1			土器

註 (1)∅は直径を示し、a×b×cのa、bは墳形が楕円形等の場合の長径、短径を示す。  
 (2)Aは塊石・割石などを使用するもの。Bは板石、大石を使用するもの。A・Bは両者を使用するもの。  
 (3)この分類は本文128ページによる。

## 豎穴系横口式石室地名表

池田 栄 史

1965～69年に行なわれた福岡市南区所在の老司古墳の調査によって、特異な構造を持つ4基の石室が確認された。それは、豎穴式石室の一方の短壁に出入り口を設けたものであり、それ以後この種の石室についての関心がにわかにか高まった。なぜならば、それが豎穴式石室と横穴式石室との折衷構造を持つものであり、日本への横穴式石室の伝播期に重要な意味を有するものであったからである。この種の石室については、かつて森貞次郎氏が福岡県浮羽郡吉井町所在の塚堂古墳前方部石室について述べられた際に、注意を促されていた。しかし、今日のような活発な論義が交されるようになったのは、やはり、この老司古墳調査以後のことである。

現在、豎穴系横口式石室に関しては、多くの論考が発表されており、その主なものに石山勲・柳沢一男・佐田茂・児玉真一・小田富士雄氏らによるものがある。これら各氏の論考において、豎穴系横口式石室の年代的位置付けについては、ほぼ共通した見解が見られるものの、その構造・分類等については一致を見ない。それは、この種の石室が一つの石室形態としてのみ把握できるものでなく、他の豎穴式石室・横穴式石室との密接な関わりを持ち、さらに各地域毎の古墳の在り方に深く関係することに起因している。しかしながら、こうした状況にもかかわらず、各地から豎穴系横口式石室として報告される石室は、日毎に増加しつつある。ここに掲載した地名表は、このような中で豎穴系横口式石室の再検討を行なうために作製したものである。

地名表のうち、前半の60基は石山勲・柳沢一男両氏が作製された地名表に、両氏がその後の論考の中で補遺された石室を集成したものである。また、後半の58基は両氏の地名表発表以後、各地で豎穴系横口式石室として報告されたもののうち、管見にふれたものを集成した。したがって、これらの中には石山・柳沢両氏自身が後に豎穴系横口式石室から除外されたものや、研究者次第ではその範疇に入れないものも含まれている。それにもかかわらず、すべて集成したのは、そうした各研究者間の考えの違いを検討する資料とするためである。

集成した石室については、いろいろな分析を行なったが、その項目は先の石山・柳沢両氏の地名表を参考にしながら、新たな項目を附加したものである。ここで、その内容について詳述する余裕はないが、注意すべき点についてのみ述べておきたい。分析項目は12項目にわたり、それに対する結果は、それぞれの参考文献から抽出した。したがって、文献中不詳のものに関しては、空欄もしくは「？」としておいた。個々の項目のうち、「玄室高」その他の項目で、「+α」とあるのは、破壊によって原寸が不明なため現存する部分の計測値を示し、それに

「+ α」としたものである。「袖石」の項目で、記入してある数値は、袖石間の距離を示す。「時期・分類」の項目の中で、分類については石山・柳沢両氏の石室分類法を踏襲した。なお、それに（ ）が施されているものについては、筆者の判別によるものである。また、各項目のそれぞれの計測値に「・」を施したものは、参考文献中に記載が見当らず、文献中の実測図より計り出したものである。

この地名表は、筆者が1980年12月に「竪穴系横口式石室の研究」と題し、國學院大學大学院に提出した修士論文の資料である。したがってその内容には遺漏も多く、発表するにはさらに細かい補足を必要とする。しかし、今度本古墳調査団の御厚意により、発表する場を提供して下さったのに甘えさせていただいた。感謝するとともに、その内容についてはさらに御叱正・御教示を賜りたい。

この不備な地名表が城2号墳理解の一助にでもなれば幸いである。

#### 註

- (1) 岡崎敬・森貞次郎他「福岡市老司古墳調査概報」福岡市教育委員会 1969 のちに『福岡市埋蔵文化財調査報告書』5集となる
- (2) 森貞次郎「北九州古墳の編年的考察」『西日本史学』創刊号 1949
- (3) 石山勲他「片山古墳群」『福岡県文化財調査報告』46集 1970  
西谷正編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅲ 1972
- (4) 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』 1975
- (5) 佐田茂「竪穴系横口式石室の一側面」『史淵』112号 1975
- (6) 児玉真一他「若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」1集 1979
- (7) 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座4 朝鮮三国と倭国』学生社 1980
- (8) 例えば、石山氏が前壁構造を持つものを竪穴系横口式石室から除外するのに対して、柳沢・児玉氏らは含めている。また、分類に関しては、石山・柳沢・佐田氏らの分類があり、小田氏は分類をひかえられている。
- (9) 石山氏は註(3)の二文献にて地名表を作製され、柳沢氏は註(4)文献ののち、「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』（鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会）（1980）にて、近畿地方の類例等を補足・追加されている。
- (10) 石山氏は註(3)後者の報告書にて、番塚古墳（福岡県京都郡苅田町与原所在）を地名表から削除された。また、柳沢氏は先日お会いしてお話をうかがった際（1981年3月7日）に、木塚古墳（福岡県久留米市善導寺町所在）を除外すると述べられていた。
- (11) 註(8)で述べたように、前壁構造の有無をメルクマールとするしないによって、竪穴系横口式石室の範疇に含まれる石室の数が、異なる。また、熊本県下では、鹿本郡菊鹿町所在朱塚古墳、球磨郡相良村所在吉の尾古墳群、天草郡松島町所在上の鼻古墳群等が竪穴系横口式石室とされているが、不詳につき掲載しなかった。

この地名表を作製するにあたっては、論文指導を受けた乙益重隆先生・保坂三郎先生をはじめ、福岡県教育委員会柳田康雄・石山勲・児玉真一、福岡県糸島郡前原町教育委員会川村博、広島市教育委員会石田彰紀、熊本県教育委員会松本健郎・野田拓治の方々に御協力・御助言をいただきました。記して御礼の意を表します。

最後に本報告書に掲載の機会を提供していただいた宇土市教育委員会ならびに城二号墳発掘調査団の皆様に謝意を表します。

(國學院大学文学部)

#### 〈追記〉

本地名表のM.119城2号墳は、本表には未掲載であったが編集委員会で挿入した。

竪穴系横口式石室地名表 (池田, 1981年)

項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 { 径 (m) 高	玄室 (m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長 { 右 中 左	幅 { 奥 中 前	高				割石	塊石	腰石	
1	老司古墳 1号石室	福岡県福岡市南区 大字老司字大谷	前方後円 90	2.1	0.95	0.8	×	○	○	○			○
2	〃 2号石室	〃	〃	1.75	0.6	0.6	×	○	○	○			○
3	〃 3号石室	〃	〃	3.2	2.1	1.4	×	欄状部あり	○	○	○		○
4	〃 4号石室	〃	前方部	2.22	0.79		×		○	○	○		○
5	高崎1号墳	福岡県福岡市西区 大字高崎	円 ?	2.02 2.0	0.75 0.92 0.73						○	○	
6	飛山1号墳	福岡県福岡市東区 大字和白	円 6.0 1.5	2.15 2.2	1.0 0.8	0.95+ $\alpha$	×	×	○		○	○	○
7	阿支岐A群 3号墳	福岡県筑紫野市 大字阿支岐字シメノグチ	円 7.5~12.0 1.3	2.3	1.0 1.0		(下)0.4 ・(上)0.25	○ 前石のみ	○		○	○	○ (一部)
8	白水池1号	福岡県春日市大字下白水											
9	妙見29号	福岡県朝倉郡朝倉町 菱野字妙見	?	?	?	?	?	○			○		
10	塚堂古墳 前方部石室	福岡県浮羽郡吉井町宮田	前方後円 ?	3.12 3.10	1.59 1.70 1.60								
11	真浄寺2号墳	福岡県八女市本	円 ?	2.42 2.42	1.36 1.21 1.21		○						○
12	平原3号墳	福岡県八女郡広川町平原	円 7 1.0	1.75± $\alpha$	1.0± $\alpha$ ?	?	○	×	○	○		○	
13	〃 5号墳	〃	円 8.5 2.3	1.9	1.17 0.86	0.7+ $\alpha$	○ 0.65± $\alpha$	×	○	○		○	
14	〃 7号墳	〃	円	・1.70 ・1.75	・0.55 ・0.65	・0.8+ $\alpha$	○・(下)0.35	×	○	○		○	○
15	石人山古墳	福岡県八女郡広川町 大字一条字人形原	前方後円 全長110	4.0	2.0								
16	木塚古墳	福岡県久留米市善導寺町	前方後円 全長48	2.39 2.25	1.92 1.98 1.92	1.6	○ 0.4	○	○		○	○	
17	浦山古墳	福岡県久留米市上津町 二軒茶屋	前方後円 全長60	2.8	1.5								
18	釜塚古墳	福岡県糸島郡前原町 加布里	円 55	3.77 3.65	2.82 2.55 2.45		○	○	○	○			
19	浦口3号墳	福岡県粕屋郡古賀町	円 12~14 1.5	2.5	1.02 0.88	?	×	?	×	○		○	○
20	〃 4号墳	〃	円 12 2	2.4	1.04 1.05 0.95	1.3+ $\alpha$	×	0.44	×	○		○	○

前庭		墓道			遺体	遺物	時期分類	文献・その他	
長 {右中左	幅 {奥前	長	幅 {奥前	高低差					
—	—	○			1 単次葬	舶載方格規矩鏡・刀・劍・斧・鉋・刀子・砥石・麻手刀子・鋤先・鎌・玉類	5 C前半 I A	森・岡崎その他 『福岡市老司古墳調査概報』 1963・3	
—	—	×			2 (差し違い)	仿製変形文鏡・劍・鉄鏃・尾錠三角板革綴短甲	5 c中葉 I ?	〃	
—	—	9			2 追葬 2 (並行葬)	舶載鏡6・仿製鏡1・刀・劍・矛・鉄鏃・斧・鉋・ノミ・鋸・刀子・麻手刀子・短甲・玉類	5 c初頭 I A	〃	
—	—	○			3 追葬	劍・矛・鉄鏃・斧・鉋・刀子・鎌・鹿角装刀子・錐状鉄器・櫛・玉類	I A	〃	
								浜田信也他「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」I 福岡県教育委員会 1970	
・0.5 ・0.5	・1.05 ・1.15	・0.5	・1.0	・0.2	単次葬	(室内) ガラス玉・滑石製有孔円板・白玉・劍・直刀・刀子・勾玉・須恵器	5 c後半～ 6 c初頭 II-a, c (II-a, c?)	塩屋勝利他「福岡市和白遺跡群発掘調査報告書」(1971) 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』18	
0.7	0.5 0.8	・1.4	0.8	・0.1	追葬の可能性あり	(室内) 鉄劍・鉄鏃・ガラス小玉 (墳丘) 甕・石匙	6 c III-b, c (III-a, c)	赤崎敏男他「阿岐岐シメノグチ遺跡(阿志岐古墳群A群3号墳)」 筑紫野市教育委員会 1972	
								石山勲他「片山古墳群」『福岡県文化財調査報告』46 1970より引用	
あり ?	?	?	?	?	?	?	?	高山明他「埋もれていた朝倉文化」福岡県立朝倉高等学校史学部 1969	
						仿製鏡・刀・刀子・鉄鏃・貝鏃・馬具・横柄板鋌留短甲・横柄板革綴短甲・衝角付冑	III-b, ?	宮崎勇造「筑後国浮州郡千年村徳丸塚堂古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』10 1935	
					2 並行葬	刀・鉄鏃・横柄板鋌留短甲	III-b, ?	岩崎光「八女地方の古墳終末期と副葬」『九州考古学』10 1960 小田富士雄「九州」『日本の考古学』IV 河出書房新社 1966	
?	?	2.4	0.9	?	不明	ガラス玉・須恵器壺	5 c後半 不詳 (III-a, ?)	西谷正編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」III 福岡県教育委員会 1972	
0.6 0.4	?	0.35～ 0.5	0.9	・0.3	追葬あり	骨粉	5 c後半 III-b, c (III-a, c)	〃	
・0.45 ・0.35	・0.5	?	?	?	単次葬1体	ガラス玉・鹿角装刀子	5 c後半 III-a, B (III-a, ?)	〃	
								武藤直治他「筑後一条石人山古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』12 1937	
なし	か?					(玄門前) 滑石製白玉 (墳丘) 円筒埴輪・形象埴輪 (周溝) 須恵器大形壺・大形器台・樽形甕	5c中～後半 III-b, ?	横尾義明他「木塚遺跡」『久留米市文化財調査報告書』14集 1977	
								5 c後半 III-b, ?	森貞次郎「浦山古墳」『装飾古墳』1964
	2.45 2.?	な		し	不明	(周溝) 埴輪片	III-b, ? (III-a, B)	石山勲「県内屈指の円埴「釜塚古墳」」『ふるさとの自然と歴史』24 1973	
?	?	?	?	?	追葬の有無未確認1体	(室内) 直刀・鉄鏃・刀子・ガラス小玉 (墳丘) 須恵器甕・青磁・石包丁・弥生式土器片	6 c前半 II-a, ? (?, ?)	高倉洋彰編「鹿部山遺跡」 日本住宅公団 1973	
0.59	0.7 0.93	な		し	1 体	(室内) 鉄鏃 (墳丘) 須恵器(片蓋・短頸壺・甕)・弥生式土器片・石斧2	6 c初頭 III-a, B (II-a, B)	〃	

項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 { 径 (m) 高	玄室 (m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長	{ 右 中 左	{ 奥 中 前				高	割石	塊石	
21	長谷14号墳	福岡県山門郡瀬高町 大字本吉女山		2.0	1.02 0.92	1.15	○	○				○	
22	〃 16号墳	〃		?	?	?	○	×	○			○	
23	片山9号墳	福岡県遠賀郡岡垣町 大字手野字片山	円 ?	1.9	0.68 0.7	1.05	○ (下) 0.51	○	○		○	○	
24	〃 12号墳	〃	円 ?	1.95 1.95 2.08	0.85~ 0.74	0.85+ $\alpha$	○ (下) 0.4 ○ (上) 0.54	×	○		○	○	
25	下有木1号墳	福岡県鞍手郡宮田町 下有木											
26	剣神社境内 4号墳	福岡県鞍手郡鞍手町 大字新延剣神社	円 15.0 3.0										
27	栗崎山7号墳	福岡県飯塚市 大字下三緒	円 5.5	2.37	0.83 0.9 0.51	1+ $\alpha$	○・(下) 0.5	×	○		○	○	
28	森原1号墳	福岡県嘉穂郡穂波町 楢本	前方後円(全長28) 後円部径19 高35 前方部削平	約2.7	1.3 0.98	?	?	×	?		○	○	○ (敷石)
29	セスドノ古墳	福岡県田川市大字伊田	円 35	3.10 3.08	1.87 1.85 1.73	?	○ 0.5			○	○	○	
30	長迫古墳	福岡県京都郡犀川町長迫	円 ?	2.10 2.20	0.63 0.75 0.75	?		○			○		
31	番塚古墳	福岡県京都郡苅田町与原	前方後円(全長60)	3.40 3.5 3.36	2.0 1.75 1.5	1.8	○		○		○	○	
32	中原8号墳	福岡県京都郡勝山町 箕田字トゥノ木	円 15	2.32	1.20 0.72	?	○	○ 削り込み	?		○	○	
33	稲童8号墳	福岡県行橋市稲童	円 18~19 3.5	2.75 2.63	1.10 0.74 0.82	?	×	×	×	○		○	
34	稲童21号墳	〃	円 22 3.2	2.60 2.57	0.88 0.75 0.81	0.9 1.0 0.83	○ 0.5	×	○	○		○	
35	サコガシラ4号墳	佐賀県唐津市 字木サコガシラ	円	2.0	0.7	0.6	×	○		○			
36	〃 8号墳	〃	円	1.8	1.0	1.0	?	○	○	○			
37	〃 9号墳	〃	円	?	?	?	×	○	○		○	○	
38	〃 10号墳	〃	円	2.0	0.7	1.2	?	×			○		
39	〃 11号墳	〃	円	2.5	1.0	1.0	○	×	○		○		
40	〃 14号墳	〃	円	1.9	1.0	0.6	?	×	○		○		



前	庭	墓 道			遺 体	遺 物	時 期 分 類	文 献 ・ そ の 他
		長	幅 { 奥 前	高低差				
あり 階段状	?	?	?	?	記載なし	なし	詳細不詳 III-b, ?	村山健治「女山長谷古墳群」 邪馬台郷土史会 (1961?)
?	?	?	?	?	人骨3体	なし	〃	〃
1.37	0.74 ┌ 0.87	あり?	?	?	記載なし	(室内) 横刳板銀留式短甲・刀 子残欠	5c後半~ 6c前半 III-a, c (III-a, c)	石山勲他「片山古墳群」『福岡 県文化財調査報告書』46 1970
なし	あり?	?	?	?	1単次葬	(室内) 直刀・鉄鏃・鉄斧・不 明鉄器	5c後半 III-b, ? (III-a, A)	〃
								石山勲「下有木古墳」『宮田町 誌』(未見)
						円筒埴輪片2		渡辺正気「銀冠塚」『福岡県文 化財調査報告書』28 1963 「鞍手町史」1974 同古墳群1号(鏡塚)もそうか?
なし	なし	なし		し	単次葬	(室内) ガラス玉	5c後半~ 6c前半 II-a, ? (III-a, A)	佐田茂他「栗崎山古墳群」 栗崎山古墳群学術調査団 1973
		あり?	・1.3	?	記載なし	(室内) 環鈴・鉸具・辻金具・短 甲小札・刀子片	5c後半 II-b, A (?-?, ?)	浜田信也他『嘉穂地方史・原始 古代編』1973
?	?	?	?	?		珠文鏡・刀・剣・矛・刀子・鉄 鏃・馬具・横刳板銀留短甲・円 衡角付冑・垂飾付耳飾・須恵器	III-a, c	田川市教育委員会発行 「セストノ古墳」
						鏡・刀・鉄鏃・短甲	II-a, ?	小田富士雄「九州」『日本の考 古学』IV 河出書房新社 1966
				2	追 葬 並行葬	画像鏡・刀・剣・矛・斧・鉄鏃 ・桂甲・馬具・袴帯金具・須恵 器その他	III-b, B	〃
1.4	?	?	?	?	2 追葬あり	鉄鏃・鉄斧・鉏・大刀・管玉・ 丸玉 (羨道) 須恵器 <small>付身</small>	5c後半 III-b-B (III-?, ?)	定村貢二「箕田中原古墳群調査 報告」『美夜古文化』19 1969
1.0	?	?	?	?	1 体	(室内) 鉄鏃・鉄矛・鉄剣・鉄刀・草摺 小札・仿製四神四獣鏡・仿製四獣鏡・ 鉸具・辻金具・半球状金銅製品(墳 丘)土器・鉄斧(前庭部)短甲・鉄矛 ・衡角付冑・帶・管・鉄劍	II-b, B (II-b, ?)	山中英彦他『福岡県行橋市稲童 古墳群第1次調査抄報』 蔵内古文化研究所 1964
約1.0	?	?	?	?	1 体	(室内) 鉄鏃・石突・鹿角装刀・ 剣・金銅製飾付横刳板盾形鹿角冑 ・鉄鏃・硬玉製勾玉・管玉・金 銅製三輪玉・鉄刀・鉄劍・金銅 製飾金具・三角板銀留短甲・小 札・帶・馬具・三環鈴・鏡その他	5c中~後半 III-b, c (III-a, ?)	山中英彦他『福岡県行橋市稲童 古墳群第2次調査抄報』 蔵内古文化研究所 1965
?	?	?	?	?	記載なし	鉄刀・鉄環	4c末 不明	松岡史他『唐津市史』 唐津市教育委員会 1962
?	?	?	?	?	差し違い 2体合葬	小形無文鏡・碧玉製白玉・管玉 鉄刀	不明	〃
?	?	?	?	?	2体合葬	碧玉製勾玉・鉄刀子・ガラス小 玉・鉄刀・滑石小白玉・鉄斧・ 鉄鏃・鹿角装刀子	前期末~ 中期初 不明	〃
?	?	?	?	?	合葬は不明	鉄劍・刀子・鉄鏃	中 期 不 明	〃
あり?	?	?	?	?	記載なし	直刀・仿製珠文鏡・滑石製小白 玉・ガラス小玉	不明	〃
?	?	?	?	?	2体合葬	直刀・鉄斧・鉄劍・鉄鏃・ガラ ス小玉	中 期 不 明	〃

項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 { 径 高 } (m)	玄室(m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長 { 右 中 左 }	幅 { 奥 中 前 }	高				割石	塊石	腰石	
41	小長崎1号墳	佐賀県唐津市 長崎山字長崎	円 ?	2.0	0.9	0.7		○	○				
42	大長崎2号墳	佐賀県唐津市 柏崎字長崎山	円 ?					○	○				
43	山本金谷古墳	佐賀県唐津市 山本字金谷	円 ?										
44	勇猛山3号墳	佐賀県杵島郡北方町 芦原	円 7 1.0	2.50 2.62	1.14 0.86	1.63+ $\alpha$	○	×	○	○	○	○	
45	西隈古墳	佐賀県佐賀市金立町 西隈	円 30	3.4	1.4	1.7	○ 0.5	○	仕切り石	○	○	○	
46	大塚古墳	佐賀県三養基郡 上峰村坊所	前方後門(全長55.5) 後門径38.2高7 前方径36.4高3.6	2.82	1.76 1.48	1.39 1.21	○	○	仕切り石?		○	○	
47	塚山古墳		前方後門(180尺) 後門径130 高19.8尺 前方径120 高18尺	12.7尺	6.5尺 5.2尺	8尺 6.5尺	○ 2.1尺	○	なし		○	○	
48	七双子2号墳	大分県杵築市本荘七双子	円 ?	2.0	1.0 0.9	0.9+ $\alpha$	○ 0.55	×	仕切り石		○	○	
49	指江99号墳	鹿児島県出水郡長島町 指江字浜山		1.8	0.6	0.7	×	×					
50	〃 106号墳	〃		2.1	0.6								
51	黄金山古墳	長崎県大村市 今富郷小金山	円 ? 3+ $\alpha$	2.25		0.7+ $\alpha$	○	×	仕切り石	○		○	
52	朝田墳墓群 第1地区2号墳	山口県山口市朝田	円 6.5	2.1	0.95 1.0	0.8	○		○	○	○	○	
53	空長1号墳	広島県広島市祇園町 大字西山本	円 13 1.5	1.95	0.36~ 0.57	約0.4	×	×	×		○		
54	三輪山6号墳	岡山県総社市三輪	円 15 2	2.47	1.0 0.9	1.39	×		○	×		○	○
55	上種東3号墳	島根県東伯郡大栄町上種	円 12 2.7	3.55	1.15	1.6	×		○	○		○	○
56	東宮山古墳	愛媛県川之江市妻島町	円 14	4.33	1.95 1.8	1.7 1.45	○		○	○	○	○	
57	二塚古墳 クビレ部石室												
58	石光山13号墳 1号石室	奈良県御所市元町	円 13.0 1.5	2.45	0.97	1.5	×		○	×		○	○
59	〃 2号石室	〃	円 〃	2.23	0.9	0.65	×		○	×		○	○

前庭		墓道			遺体	遺物	時期分類	文献・その他	
長	右中左	幅	奥前	長					幅
						2体差し違い	小形無文鏡・碧玉製丁字頭勾玉・管玉・刀子・ガラス小玉	前期後葉不明	松岡史他『唐津市史』唐津市教育委員会 1962
						記載なし		小長崎一号と同じか?不明	〃
						記載なし	直刀・珠文鏡・変形文鏡・銅製耳環・碧玉製管玉・ガラス小玉須恵器	サコガシラ11号墳に類似不明	〃
1.56	0.46	?	?	?		記載なし	鉄器片・土師器片	5c後半 III-a, c (III-a, ?)	木下之治他『勇猛山古墳群』佐賀県教育委員会 1967
1.32	1.40								
あり?	?	?	?	?				III-b, c	森貞次郎『西隈古墳』『装飾古墳』1964
あり?	?	?	?	?	記載なし	鏡片・鉄鏃・鈴・須恵器鉄鋤先			松尾禎作『目達原古墳群』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』9 1950
~	5尺 6寸	?	?	?			挂甲・管玉・刀子・石突・鉄鏃・馬具類・鉄斧・須恵器・埴・高坏		〃
1.3	0.7 1.1	2.5+α	0.8 1.1	?	2体合葬? 追葬	管玉・ガラス製丸玉・小玉・銅鍔銅環・鉄剣・鉄鏃・鉄鏃・鉄刀子・(石室外)須恵器蓋・杯・罎・壺・砥石・土師器高坏・滑石製紡錘車		6c前半 III-b, c (III-b, c)	賀川光夫他『七双子古墳群』『大分県文化財調査報告書』8 1962
									池水寛二『指江古墳群』『鹿児島県文化財調査報告書』1964
									〃
0.5	0.8	?	?	?	単葬?	土師器・人骨・鉄刀・鉄鏃		5c中葉~後半 I?	小田富士雄『長崎県大村市黄金山古墳調査報告』『九州考古学』39・40 1970
あり						(周溝内)須恵器・土師器		6c前半	村上忠他『朝田墳墓群 I 木崎遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第32集, 1976
なし		?	?	?		蛇行剣身・ガラス玉・剣・鉄鏃・三輪玉・有孔円板・鉄製カスガイ		5c後半 (II-?, ?)	石田彰紀『空長古墳群発掘調査報告書』『広島市の文化財』13集 1978・3
?	?	?	?	?	2体(追葬)	装身具(銀環・管玉・算盤玉・刀子玉・小玉)武器(大刀・刀子・鏃)農具(鋤・鎌・手鎌)馬具(轡・轡・雲珠・辻金物・留金具・鞍具)工具(斧・のみ・刀子形工具)須恵器		5c末~6c前半 (II-b, ?)	西川宏『備中三輪山6号墳』『古代吉備』5集 1963
1.1	0.95	1.2 +	0.9	?	第一次床4体 第2次床2体+α	(第1次床)珠・坏身・蓋・管玉・勾玉・小玉・刀子・須恵器・壺・提瓶 (第2次床)杯・鹿角装刀子・刀子(墳丘)坏蓋・高杯・甕・小型丸底壺		6c中葉~後半 (II-a, c)	土生田純之他『上種東古墳群第3号墳発掘調査報告』大栄町教育委員会 1975
0.8		1.2							
義道あり		?	?	?	記載なし	長宣子孫内行花文鏡・金銅透彫帯冠・金環・銀平玉・水晶刀子玉・碧玉製管玉・琥珀串玉・銅小鈴・横切板鉾留御式冑・透金銅環頭柄頭・馬鐙・鹿角舌・須恵器広口壺・蓋坏		6c前半~中葉 (III-b, c)	三木文雄『妻島陵墓参考地東宮山古墳の遺物と遺構について』『書陵部紀要』23号 1971
									(未見)
なし		2.50	1.8	0.19	墓道部に掘り込んで割竹形木棺を追葬	須恵器壺片・鉄釘・不明鉄製品		6c中葉~後半 (II-a, A)	白石太郎他『葛城・石光山古墳群』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』31 1976
なし		1.15	0.7	0.14	墓道部に何らの木棺を持ち込んで追葬	須恵器高坏・鉄釘・刀子・鉄鏃		6c中葉~後半 (II-a, A)	〃

項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 径 高 (m)	玄室(m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長 右 左	幅 奥 中 前	高				割石	塊石	腰石	
60	石光山22号 第2埋葬施設	奈良県御所市元町	円 12.0 1.5	1.75	0.6	0.75	×	○	×		○	○	
61	汐井掛12号墳	福岡県鞍手郡 宮田町上有木	円 12.0 2.0	1.95 1.85 1.95	1.0 1.15 1.05	0.7+α	○・0.54	×	○		○	○	
62	〃 13号墳	〃	円 10.7 2.0	2.35 2.40 2.35	1.05 1.10 0.93	1.35+α	○・(下) 0.5 ○・(上) 0.4	〇石のみ	○		○	○	
63	〃 14号墳	〃	円 13.0 2.0	? 2.6 2.5	1.55 1.53 1.52	1.5+α	○(下) 0.5 ○(上) 0.3	〇石のみ	○		○	○	
64	〃 15号墳	〃	円 6.5 ? 0.5 ?	1.80 1.77 1.75	0.8 0.92 0.88	0.85+α	○・(下) 0.65	×	○		○	○	
65	〃 17号墳	〃	円 10 ? 1.75	2.15 2.30 2.30	0.9 0.85 0.65	1.45	○・(下) 0.45)	○	○		○	○	
66	〃 24号墳	福岡県鞍手郡 若宮町沼口	円 8.0 ?	1.92 1.95 2.05	0.90 0.91 0.90	0.8+α	○(下) 0.5	×	○		○	○	
67	〃 25号墳	〃	円 9.0 ?	2.40 2.28 2.18	0.95 1.02 0.95	0.65+α	○・(下) 0.6	×	○		○	○	
68	〃 26号墳	〃	円 5.0 1.0	1.10	0.6	0.25+α	○ ?	×	?		○	○	
69	〃 27号墳	〃	円 7.0 1.5	1.90 1.95 1.90	0.78 0.70 0.56	0.9+α	○・(下) 0.38	×	○		○	○	○
70	〃 28号墳	〃	円 7.0 1.5	2.12 2.16 2.14	0.88	1.28+α	○・(下) 0.6	×	○		○	○	
71	都地西1号墳	〃	円 7.0 1.5~2.0	1.93	0.65 0.7	約1.0	○・(下) 0.6	○	○		○	○	
72	〃 3号墳	〃	円・7.0	・2.15	・0.65 ・0.72 ?	・約1.0	○ ?	〇三枚	?		○	○	
73	竹原八幡塚古墳	福岡県鞍手郡 若宮町大字竹原字塚ノ元	円 35 6.5	3.44 3.43	1.62 1.48	1.3(奥) 1.1(前)	○ 0.55	○	○		○	○	
74	証拠山2号墳	福岡県鞍手郡 鞍手町新北入生											
75	新原奴山10号墳	福岡県宗像郡津屋崎町 勝浦字藤三ヶ浦	前方後円 全長70 後円径37 高7 前方幅37 高	4.2	1.35 0.95	1.3+α	なし	×	○	○	○	○	○
76	清田ヶ浦2号墳	福岡県宗像郡津屋崎町 大字津屋崎字清田ヶ浦	円 10 2	2.50	1.20	(1.30)	○・(下) 0.6	○	○		○	○	○
77	稲元1号墳	福岡県宗像郡宗像町 大字稲元	円 8	2.38	0.75 0.65	1.30	○片袖	×	○		○	○	○
78	〃 2号墳	〃	円 8	1.83	0.61 0.35	0.95	なし	○	○		○	○	○
79	〃 3号墳	〃	円 11.0 2.0	2.30	1.17 0.85	1.35	○ 0.35 片袖	○	○		○	○	○

前庭		墓道			遺体	遺物	時期分類	文献・その他
長 右 中 左	幅 奥 前	長	幅 奥 前	高低差				
なし	なし	なし		明	記載なし	人骨	6c中葉? (II-a, A)	白石木一郎他「葛城石光山古墳群」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』31 1976
0.6	0.80 1.40	3.6	1.30	0.75 階段状	記載なし	(室内) ガラス丸玉1 (墳丘) 須恵器高坏・壺	6c中葉 (III-a, c)	上野精志他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXII」福岡県教育委員会 1978
0.7	0.65 1.05	1.0	・1.5 ・0.8	0.7 階段状	記載なし	(室内) 鉄鏃・鉄刀・刀子・柄元金具 (墳丘) 須恵器甕・坏・坏蓋	6c中葉 (III-a, c)	〃
0.80 0.50	0.9 1.00	2.5	1.5		追葬あり	(室内) 須恵器提瓶・鉄鏃・鉄刀・人骨 (墳丘) 須恵器提瓶・甕・坏・高坏・甕・土師器埴・小形坏セツト・丸玉	6c中葉 ～後半 (III-a, c)	〃
0.45	0.9 1.0	1.05	・1.0	0.5	追葬あり?	(墓道) 須恵器提瓶 (墳丘) 須恵器高坏・甕片 土師器高坏片	6c中葉 (III-a, c)	〃
0.6~ 0.8	0.9(上)	?	?	?	記載なし	(室内) 土師器埴・鉄鏃・人骨 (室外) 須恵器甕・甕・坏蓋	6c中葉 (III-a, ?)	児玉真一他「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」第1集 福岡県教育委員会 1979
0.4	0.85 1.25	1.3	・1.6	・0.45 階段状	追葬 差し違い2体葬	(室内) ②勾玉1・丸玉3・小玉616⑧丸玉87・小玉38 (墳丘) 須恵器高坏・土師器甕	5c末 (III-a, c)	上野精志他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIII」福岡県教育委員会 1978
0.65	1.0? 1.40	・1.2	・1.05	・0.3 階段状	記載なし	(室内) 玉類・鉄鏃 (墓道) 須恵器提瓶・甕片・土師器高坏 (墳丘) 須恵器提瓶・甕	5c末 (III-a, c)	〃
?	?	0.7	0.6	0.2	記載なし	なし	? (III-?, c)	〃
0.45	0.54 0.52	?	?	?	単次葬	(墳丘) 須恵器甕	5c末 (III-a, ?)	〃
0.70	1.0? 1.30?	?	?	?	複次葬	なし	5c末~ 6c初 (III-a, ?)	〃
・0.7 ・0.6	・0.85 ・1.3	・1.4	?	・0.5	追葬?	(室内) ガラス小玉・鉄器 (墳丘) 土師器および須恵器片	5c後半 (III-a, c)	児玉真一他「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」第3集 福岡県教育委員会 1980
・0.5	?	?	?	? 階段状	記載なし	(室内) 碧玉製管玉・ガラス製小玉 (墳丘) 須恵器甕・坏身・蓋・甕	5c後半 (III-?, ?)	〃
・1.5	?	?	?	?	記載なし	(室内) 鉄剣・鉄刀・鞍骨片・鉄鏃・馬具 (室外) 埴輪片・須恵器片	5c後半 (III-a, c)	柳田康雄他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第13集 福岡県教育委員会 1979
		?						「鞍手町誌」(未見)
1.0 0.4	0.9 ?	?	?	?	記載なし	(室内) 鉄鏃11・石突8・挂甲小札3,000・挂甲金銅張小札51・鉄鏃100・鉄斧2・三環鈴1・香袋10・鏡2・鉄留金具22・鈿貝・骨(室外) 須恵器・土師器	5c後半 (II-a, ?)	石山勲他「新原・奴山古墳群」『福岡県文化財調査報告書』54集 1977
・0.85 ?	・1.1 } ・1.4	?	?	?	単次葬	剣・刀子・鉄鏃・鉄鏃 丸玉28・小玉4・管玉6・連玉1	6c前半 (III-a, c)	小池史哲他「浦田ヶ浦古墳群」発掘調査報告 津屋崎町教育委員会 1977
なし	なし	1.40	1.25 }	0.6	単次葬	(室内) 人骨・刀子・鉄鏃・甕	? (III-a, A)	西谷真治他「稲元古墳群第一期調査報告」天理大学博物館学科 1976
なし	なし	なし	なし		単次葬	(墳丘) 土師器高坏破片	? (II-a, ?)	〃
・0.5 ・0.8	・1.1	・0.8	1.55	・0.6	複次葬	(墳丘) 須恵器甕・坏・高坏・甕	5c末 (III-a, c)	〃

清田ヶ浦  
古墳群

項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 { 径 高 (m)	玄室(m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長 { 右中左	幅 { 奥中前	高				割石	塊石	腰石	
80	稲元4号墳	福岡県宗像郡宗像町 大字稲元	円 14.0 1.5	2.15	1.05 0.95	?	○ 0.55	×	○		○	○	○
81	〃 5号墳	〃	円 ?	1.95	0.79 0.45	0.9+ $\alpha$	○・(下) 0.45	×	○		○	○	○
82	久戸1号墳	福岡県宗像郡宗像町 大字河東字久戸	円 8.0	約2.5	約0.8	?	×	×	○		○	○	
83	〃 2号墳	〃	円 9.0	約2.5	約1.0	?	?	?	?		?	○	
84	〃 10号墳	〃	円 10.0	2.08	0.99 0.96	1.35	○ 0.51 0.55	○	○		○	○	○
85	〃 11号墳	〃	円 12.0	2.70 2.9 2.95	1.32 1.15	1.72	○ (下) 0.68 ○ (上) 0.5	○	○	○	○	○	○
86	〃 12号墳	〃	円 13.3	2.25	1.24	1.3+ $\alpha$	×	×	○		○	○	
87	城ヶ谷11号墳	福岡県宗像郡宗像町 大字三郎丸	円 12.0 2.5	?	?	?	○ ?	×	?		○	○	
88	〃 14号墳	〃	円 10.0 1.0	約2.4	約1.5	?	○・(下) 0.5	×	○		○	○	
89	〃 19-1号墳	〃	円 12~13.5	2.55	1.30 1.25 1.14	1.65	○ (下) 0.4 ○ (上) 0.3	○	○		○	○	
90	〃 A号墳	〃	?	2.31	1.2 1.19 1.0	?	○・(下) 0.45	×	○		○	○	
91	〃 B号墳	〃	円 10.0 1.75	2.50	1.21 1.24 1.01	1.3+ $\alpha$ (1.4)	○ (下) 0.6	×	○		○	○	
92	〃 C号墳	〃	?	2.31	0.94	0.8+ $\alpha$	○ (下) 0.5~ 0.6	×	○		○	○	
93	〃 D号墳	〃	円 8.3	2.36	0.96	1+ $\alpha$	○・(下) 0.5	×	○		○	○	
94	〃 H号墳	〃	円 9.0 2.0	2.15	0.98 1.20 1.0	1.5+ $\alpha$	○・(下) 0.5	×	○		○	○	
95	三郎丸7号墳	〃	円 8.0	2.16	0.8 0.82	1.5+ $\alpha$		×			○	○	
96	〃 9号墳	〃											
97	スベットウ古墳	福岡県宗像郡宗像町 大字東郷											
98	野間尻1号墳	福岡県宗像郡福岡町 大字津丸字鷗田	円 約10 約2	約2.1	0.9 1.0	?	○石材なし	×	?		○	○	
99	〃 6号墳	福岡県宗像郡福岡町 大字津丸字野間尻	円 約8 ?	2.3	0.9	1.5± $\alpha$	○ ?	×	○		○	○	

前庭		墓道			遺体	遺物	時期分類	文献・その他	
長 右 中 左	幅 奥 前	長	幅 奥 前	高低差					
1.45	1.0	2.20	1.80	・1.0	単次葬		(III-a, c)	西谷真治他「稲元古墳群第一期調査報告」天理大学博物館学科 1976	
な	し	な		し	単次葬	なし	?	「(III-a, ?)」	〃
× ・0.6	?	・0.6	・0.8	・0.3	記載なし	須恵器甕 鉄鏃	5c末 (II-a, c)	「久戸古墳群」『久戸古墳群II』宗像町教育委員会 1980	
?	?	1.5	・0.8	?	記載なし	須恵器甕・陶質土器甕 鉄鏃・鉄刀	5c末 (?, c)	〃	
0.88 } 1.0	0.96 1.0	3.8	・1.5 1.0	?	記載なし	須恵器甕・刀子	6c初頭 (III-a, c)	〃	
0.56 0.40	1.1	1.15	・1.2	・0.9	記載なし	須恵器甕・器台・陶質土器直口壺・ガラス玉	6c前葉 (III-a, c)	〃	
0.8	・1.2	・0.8	?	・0.8	記載なし	須恵器甕・甕	5c後半 (II-a, c)	〃	
?	?	2.90	・0.9 ・0.8	0.6	記載なし	(墓道) 須恵器甕・坏蓋	5c末 (III-a, c)	波多野院二編「城ヶ谷古墳群」クボタハウス株式会社 住友不動産株式会社 1977	
・0.6 ・0.8	・1.05 ・0.95	1.2	・0.9	・0.3	記載なし	鉄器縁金具・滑石製紡錘車・須恵器甕	(III-a, c)	〃	
0.85	・1.0	2.6	・1.6 ・0.9	・0.4	記載なし	(室内) 鉄刀・くぼみ石 (墳丘) 須恵器坏蓋・坏身・埴 ・高坏・有蓋壺・脚付壺・壺・ 平瓶・甕・提瓶・土師器提瓶・ 高坏	(III-a, c)	〃	
な	し	・0.55	・0.65	・0.2	記載なし	なし	(III-a, A)	〃	
0.4	・0.8 ・1.2	1.6	・1.1	0.5	追葬不明	(室内) 刀子片 (墳丘) 須恵器片・土師器片	(III-a, c)	〃	
0.5	・0.8 ・0.9	?	?	?	追葬不明	(室内) 須恵器片・磨製石斧環片	(III-a, ?)	〃	
?	・0.8 ・0.3	?	・0.8	?	追葬不明	(墳丘) 須恵器坏身	6c前半 (III-a, c)	〃	
0.45	0.55 1.00	1.35	・0.9	・0.5	記載なし	(墳丘) 須恵器坏蓋	6c初 (III-a, c)	〃	
1.2	0.7 } 1.8					(周溝) 須恵器坏・埴蓋坏・ 長頸壺・高坏壺・土師器		「三郎丸古墳群」『福岡教育大学紀要』第21号第2分冊 波多野院二編 1971	
								〃	
								「東郷遺跡群」 (未見)	
な	し	2.0	0.9	?	記載なし	須恵器・土師器少破片 鉄製刀子	?	波多野院二編「津丸・久末古墳群」福岡教育大学歴史研究部考古学班 1974	
な	し	・0.5	・1.0	?	記載なし	(室内) 刀子 (墳丘) 須恵器片	?	(III-a, A)	〃

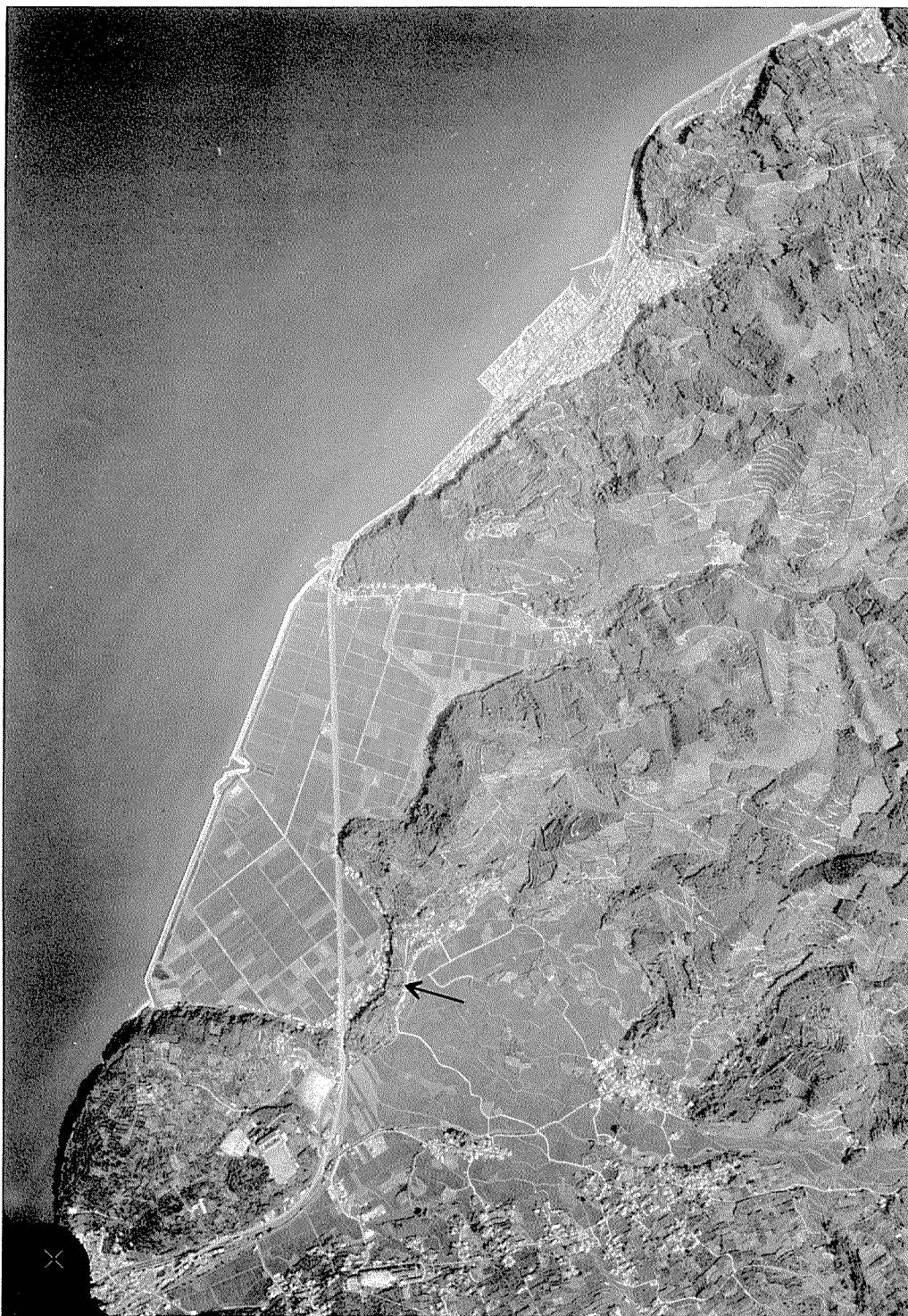
項目 番号	古墳名	所在地	墳形・規模 { 径 高 (m)	玄室(m)			袖石	天井石	框石	構築			丹・朱
				長 { 右 中 左	幅 { 奥 中 前	高				割石	塊石	腰石	
100	乙植木1号墳	福岡県粕屋郡須恵町 乙植木	円 約15.1	2.4 強	1.05 0.8 強	1+ <sup>a</sup>	○ 0.56 0.47 ?	×	○		○	○	
101	片山14号墳	福岡県遠賀郡岡垣町 手野字磯原	円 11~12 約1.5	3.22 3.2 3.33	1.76 1.46	1.88 1.55	○ (下) 0.5	○ 三枚のみ	○		○	○	
102	〃 15号墳	〃	?	3.40	1.35 1.25	1+ <sup>a</sup>	○ (下) 0.65	×	○		○	○	
103	〃 16号墳	〃	円 12.0 2.0	2.35 2.42	0.95 0.79	1.15+ <sup>a</sup>	×	○ 三枚のみ	○		○	○	
104	〃 17号墳	〃	円 7 2.5	2.20 2.30 2.10	1.40 1.43 1.0	1.4+ <sup>a</sup>	○ (下) 0.52	○ 三枚のみ	○		○	○	
105	東田2号墳	福岡県遠賀郡岡垣町 大字高倉字東田	円 10	2.05	1.06 1.25 1.10	?	○ (下) 0.65	○ 三枚のみ	○		○	○	
106	〃 6号墳	〃	?	?	? 1.75	?	○ (下) 0.4	×	○		○	○	
107	〃 9号墳	〃	円 10	2.12	0.82 1.1 ?	?	○ ?	×	○		○	○	
108	福地神社境内 3号墳	福岡県直方市 大字上境字宮浦											
109	川島7号墳	福岡県飯塚市 大字川島字六ッ畝町											
110	〃 8号墳	〃											
111	〃 9号墳	〃											
112	名木野 堅穴系 横口式石室墳	福岡県山門郡瀬高町 小田	なし	1.90 1.90 1.89	0.8 0.75	0.6	×	○	○	○		○	○
113	〃 5号墳	〃	円 (20) 2.1	2.85 3.00 3.00	1.70 1.78 1.37	1.44+ <sup>a</sup>	○ (下) 0.54	○	○	○		○	○
114	〃 9号墳	〃	円 11.5 2.1	2.63 2.56 2.62	1.52 1.54 1.34	1.66	○ (下) 0.53	○	○	○		○	○
115	〃 10号墳	〃	円 10 2.25	2.41 2.21 2.16	1.29 1.31 1.11	1.41	○ (下) 0.42	○	○	○			○
116	辻田2号墳	福岡県春日市上白水	円 約15	3.86	1.85 1.26	?	?	×	?		○	○	
117	〃 3号墳	〃	円 約18	3.0	1.3 1.0	?	×	×	○		○	○	○
118	坂元2号墳	福岡県糸島郡前原町 大字富字坂元	円 15	4.0	1.85 1.5	?	○	×	○		○	○	○
119	城2号墳	熊本県宇土市上網田 町字城	円 約25 約4	2.58 2.61 2.47	1.61 1.55	1.83 1.84	(下) 0.54 (上) 0.44	○	○				○



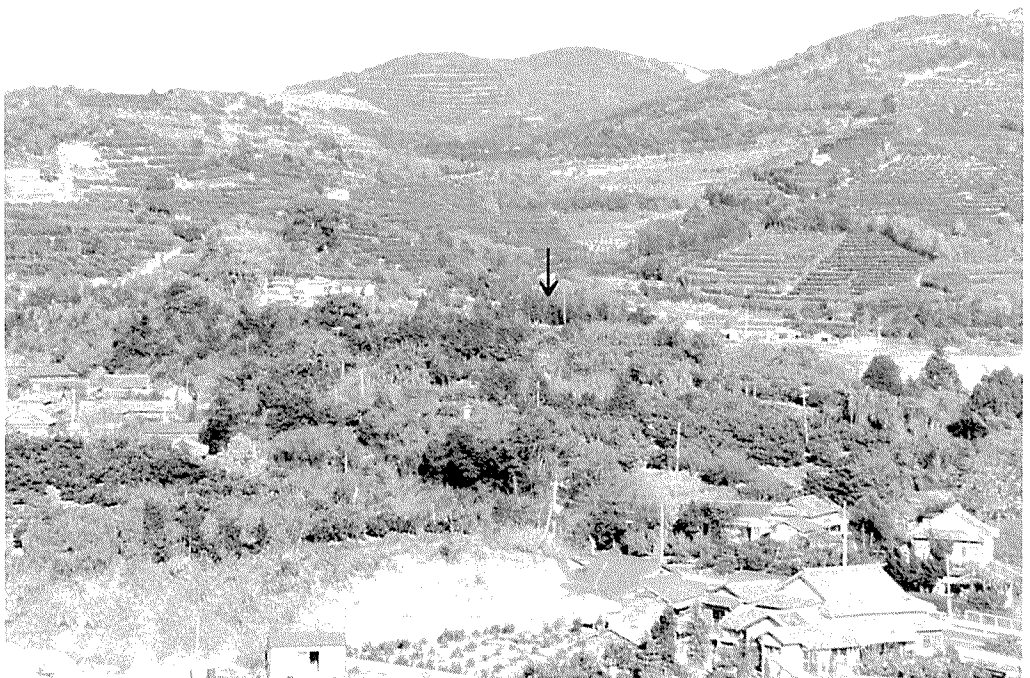
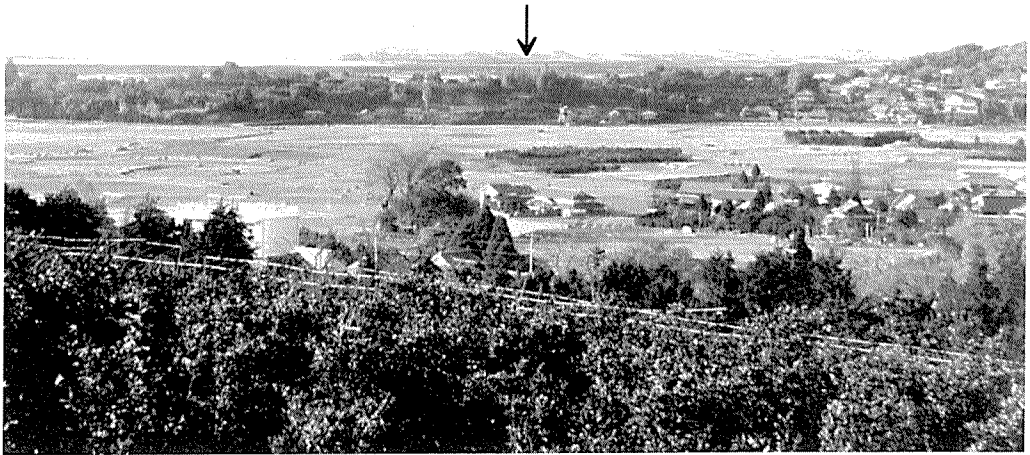
前庭		墓道			遺体	遺物	時期分類	文献・その他
長 { 右中左	幅 { 奥前	長	幅 { 奥前	高低差				
0.6 0.7	・0.6 } 1.0	1.1 ~1.2	1.7	・0.3	単次葬一体	(室内) 須恵器壺・鉄鍬片・人骨片	5 c 後半 (III-a, c)	石山照他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X」福岡県教育委員会 1977
0.9 弱 (左欠損)	?	あり?	?	?	追葬の有無未確認	(室内) 短甲片・鉄鍬片(墳丘) 須恵器・高杯・壺・大甕・甕	5 c 末前後 (III-a, c)	副島邦弘他「片山古墳群」『岡垣町文化財調査報告』3 1978
・0.6 (左欠損)	・1.25	あり?	?	?	〃	なし	(14号に近い) (III-a, c)	〃
・0.7 ・0.8	・1.15 ・1.4	・2.4	・1.7 ・1.4	0.2	単次葬	(石室) 鉄ノミ・鉄鋤先・直刀(墳丘) 須恵器甕・高杯	5 c 後半 (III-a, c)	〃
? 0.3	0.8 ?	2.10	・1.4 ・0.5	・0.3	記載なし	(室内) 切子玉・管玉・丸玉・小玉・鉄鍬・刀子片(墓道) 須恵器匙片・坏片	6 c 初~前半 (III-a, c)	〃
・0.4 ・0.3	・0.5	1.65	0.8 }	0.5	追葬あり	(墓道) 須恵器坏蓋・坏身・壺・甕(表採) 器台	6 c 中葉 (III-a, c)	川述昭人他「東田古墳群」『岡垣町文化財調査報告』2 1977
・0.35 ・0.45	・0.8 ・0.7	2.15+ $\alpha$	0.9	0.1	記載なし	(室内) 鉄鍬・鉄鉈	6 c 中葉 (III-a, c)	〃
なし	なし	1.7	0.9	0.45	記載なし	(表土) 青磁小片	6 c 中葉 (III-a, c)	〃
								「直方市史」(未見)
								詳細不詳 既破壊 「福岡県遺跡分布地図」による
								〃
								〃
?	?	1.6	0.74	0.43	1	(室内) 直刀・刀子片・鉈状鉄器・頭蓋骨・大腿骨	5 c 前半 (II-a, c)	新原正典他「名木野古墳群」『瀬高町文化財調査報告書』1977
2.4	1.09 1.20	?	?	?	記載なし	なし	5 c 後半 (III-a, c)	〃
1.0	1.12 1.45	?	?	?	追葬 4 + $\alpha$ 体	須恵器坏身・蓋・匙 土師器・高杯・脚付埴・椀・甕 鉄鍬・管玉・勾玉・貝鈿・瑠瑠	5 c 後半 (II-a, c)	〃
0.9	0.95 0.85	?	?	?	追葬 6 体	なし	5 c 後半 (III-a, c)	〃
?	?	?	?	?	記載なし	鉄鍬・玉類(勾玉・碧玉製管玉・小玉) 刀子・青銅製丸玉	5 c 後半 (?, ?)	柳田康雄他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第9集 1978
? ・0.6	1.1 1.2	・0.4	・0.95	・0.35	記載なし	(前庭部) 鉄斧	5 c 後半 (II-b, c)	〃
?	?	4.6	1.1 1.3	?	追葬あり	土師器・坏身・高杯・須恵器・坏蓋・高杯・埴蓋・匙・提瓶・壺・甕・鉄鍬・鑿・獸文鏡・鉄鍬・銅鈿・刀子・鉄鍬・玉類	5 c 末 ~ 6 c 初 (III-a, ?)	川村博「坂元古墳群」『前原町文化財調査報告書』1集 1980
1.55 1.25						(室内) 滑石製琴柱形石製品2・管玉10・小玉10・鉄剣2・鉄鍬4・刀子2・鉄斧1・鏃?1	5 c 前半 ~ 中葉	本書

# 图 版





古墳周囲の空中写真(網田平野) 1/20,000



古墳遠景 (上) 南東より  
(下) 南西より



(上) 古墳近景 (南西より)

(下) 墳丘東側崖面露出の石室裏込め石





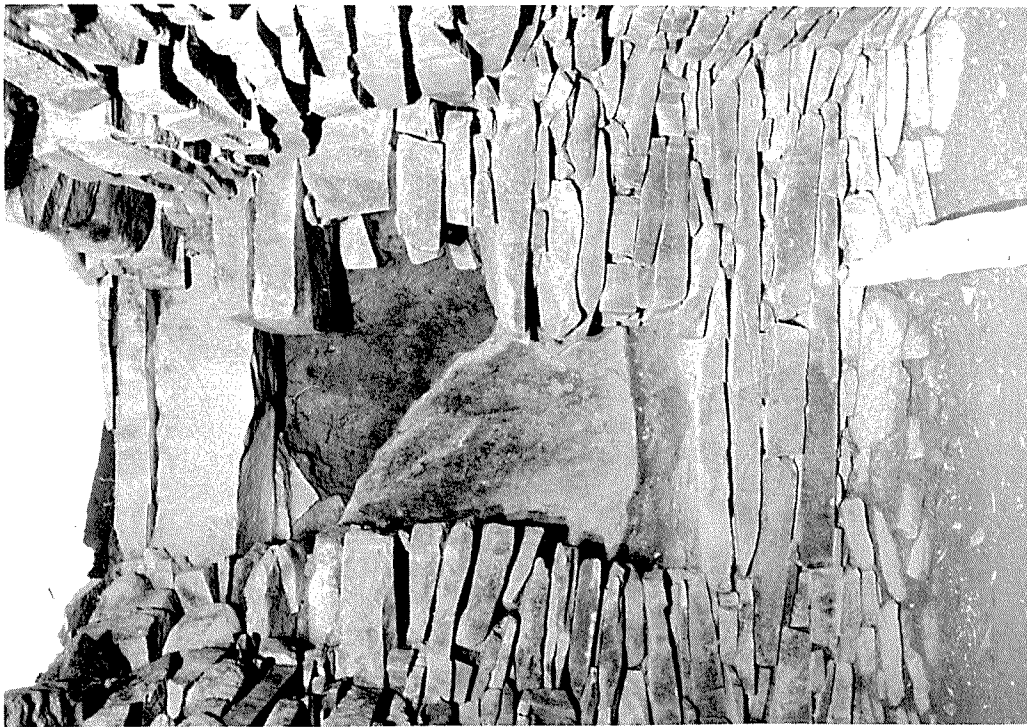
(左) 南側トレンチ検出の石室裏込め石  
(右) 南側トレンチ検出の中世墓壇



(E) 天井石露出状況

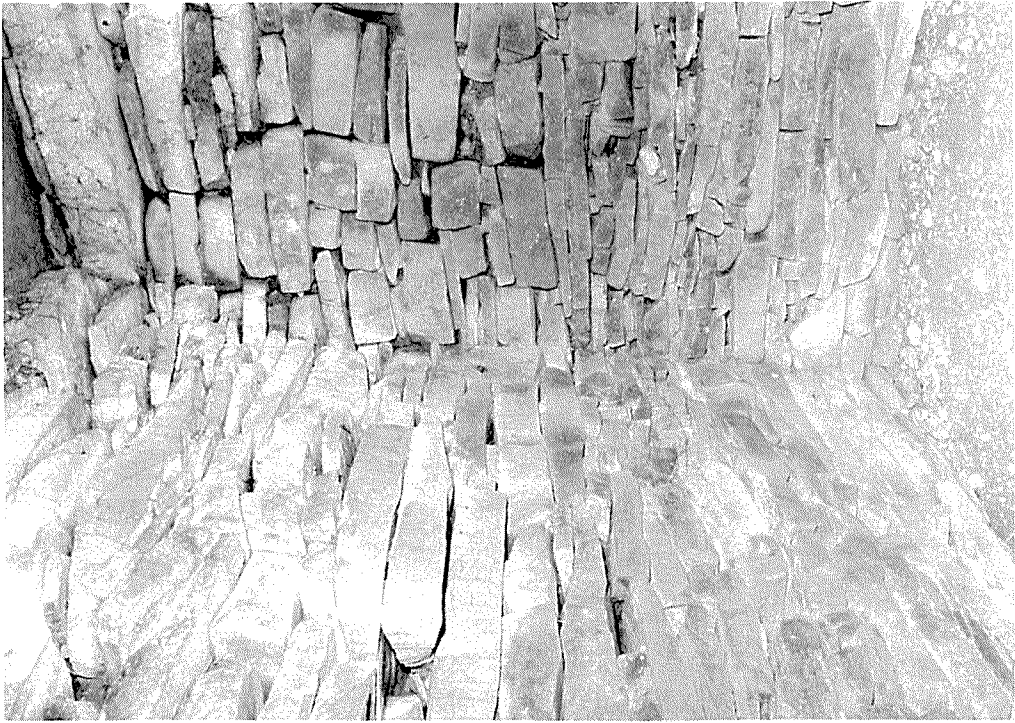
(F) 石室床面状況（奥壁側）



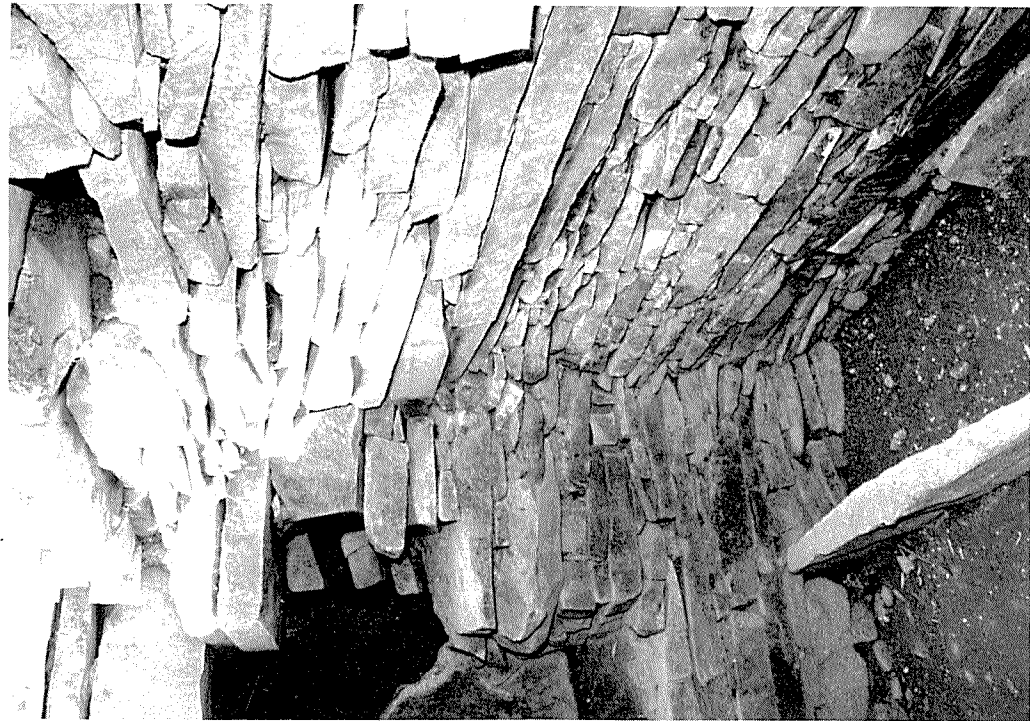


(右) 奥壁  
石室 (右) 石室内より横口部を見る

PL. 7

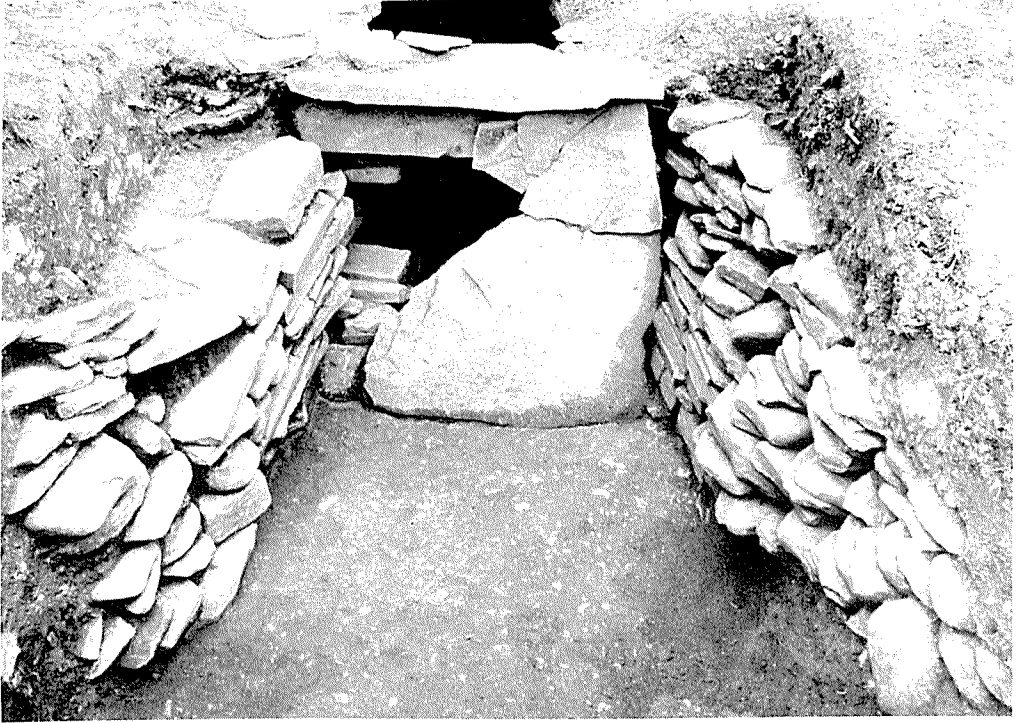


石室  
(右) 奥壁南隅部  
(左) 奥壁北隅部



石室  
(右) 玄室より横口部を見る (北隅部)  
(左) 玄室より横口部を見る (南隅部)





(上) 横口閉塞状況  
(下) 閉塞石除去後

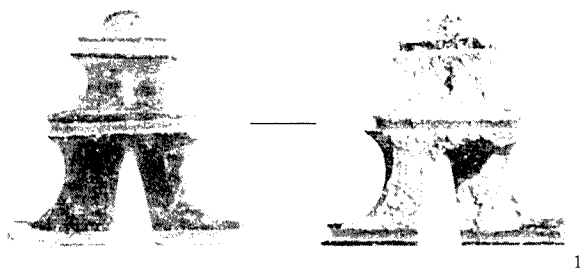


横口前面側壁 (上) 右壁  
(下) 左壁

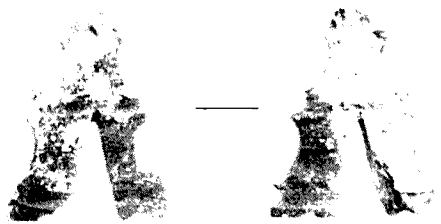


(上) 墓道土層断面

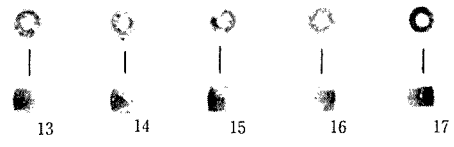
(下) 横口前面 (上から)



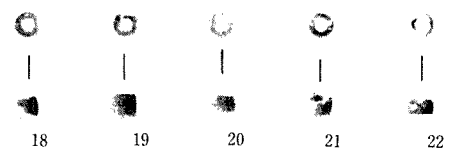
1



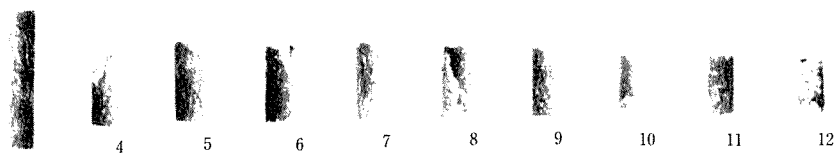
2



13 14 15 16 17

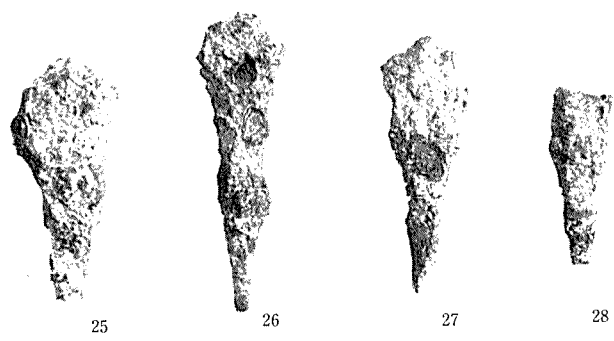


18 19 20 21 22

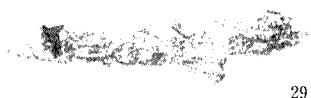


3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

1/1



25 26 27 28



29



30



31



32



23

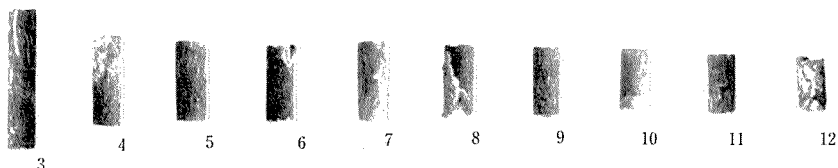
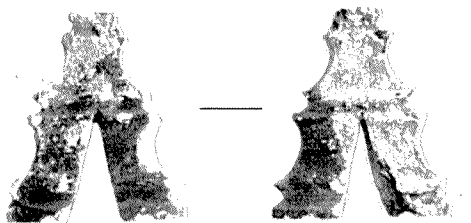
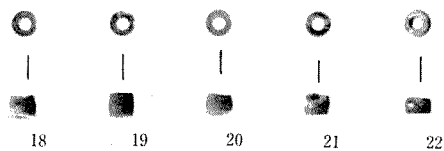
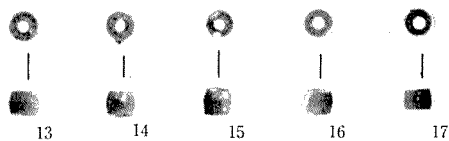
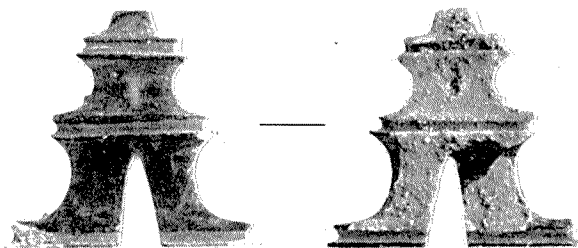
2/3



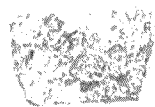
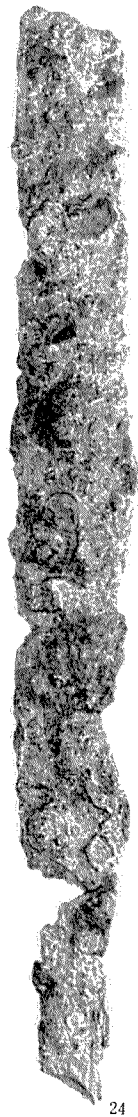
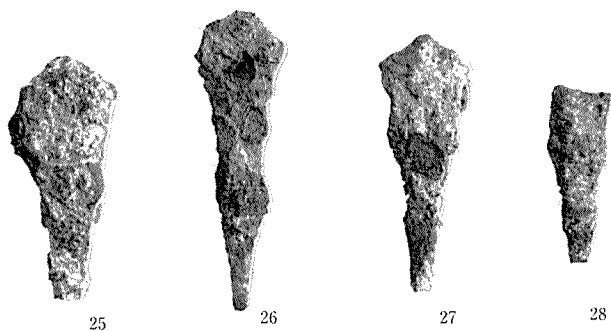
24

1/2

遺物 1・2 琴柱形石製品 3～12 滑石製管玉 13～22 滑石製小玉 23・24 鉄劍  
 25～28 鉄鏃 29・30 刀子 31 鉄斧 32 鉄鎌



1/1



31

32

2/3

2/3

1/2

遺物 1・2 琴柱形石製品 3～12 滑石製管玉 13～22 滑石製小玉 23・24 鉄劍  
25～28 鉄鏃 29・30 刀子 31 鉄斧 32 鉄鎌



**城二号墳** 一字土市上網田町字城所在城二号墳調査報告一

宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集

昭和56年3月31日

編集 城二号墳発掘調査団

発行 宇土市教育委員会  
熊本県宇土市浦田町51番地

印刷 (資) 下田印刷



